



北伊予の生活文化

『北伊予の伝承』30年の軌跡

制作

前編集委員長 高石 勤

『北伊予の伝承』各集の表紙と刊行年

第1集 (S63年)



第2集 (H7年)



第3集 (H8年)



第4集 (H10年)



第5集 (H12年)



第6集 (H14年)



第7集 (H16年)



第8集 (H18年)



第9集 (H20年)



第10集 (H22年)



第11集 (H24年)



第12集 (H26年)



第13集 (H28年)



第14集 (H30年)



『北伊予の伝承』

各集の表紙と発行年

『北伊予の伝承』の歩み

集	主 な 内 容	発行年月	委 員 数	編集委員長 組 長	頁数
1	年中行事／作業帳／わらべうた／参考資料	S63年3月	30	仙波 文治 大黒 宜俊	54
2	徳丸／中川原／出作／神崎／鶴吉／横田／大溝／東古泉／各地区の神社・寺院・地蔵・庚申などの伝承	H7年3月	24	野本 勉 高市 徳	50
3	徳丸／中川原／出作／神崎／鶴吉／横田／大溝／東古泉／各地区の地名の由来や伝承	同8年3月	22	渡川 修 高市 長	45
4	泉(池)について／橋について／地域の伝承	同10年3月	26	中村 文雄 伊達 嘉和	46
5	戦争／子どもの生活／生活／農業／その他	同12年3月	20	中村 文雄 水口 憲三	60
6	戦後の生活／戦後の教育／農業／復員／地方自治／付録	同14年3月	22	田中 義一 水口 憲三	64
7	北伊予にゆかりのある人物／付録	同16年3月	26	水口 憲三 吉田 健勝	29
8	ふるさと北伊予の暮らし 水とくらし／あのころの暮らし(衣食住)	同18年3月	21	水口 憲三 吉田 健勝	28
9	年中行事 正月の行事／春から夏の行事／盆の行事／秋から冬の行事	同20年3月	21	水口 憲三 吉田 健勝	41
10	人の一生(人生儀礼) 産育／婚姻／忌年・年祝い／葬祭	同22年3月	18	水口 憲三 渡邊 英文	51
11	座談会 記憶でたどる北伊予のくらし(衣・食・住)／北伊予の小字(ホノギ)(各地区ごと)	同24年3月	15	高石 勉 得能 広明	61
12	座談会 通った学校の思い出とくらし(戦前の学校とくらし・戦後の学校とくらし)／北伊予の幹線道路沿いの家並みの移り変わり	同26年3月	14	高石 勉 西坂 洋一	66
13	座談会 戦後70年 北伊予のくらしを辿る／御新橋(各地区ごと)	同28年3月	12	高石 勉 門田 博	66
14	座談会 戦後70年 北伊予のくらしを辿るーその2ー／季節を彩る北伊予の祭礼ーまつりー(各地区ごと)	同30年3月	13	高石 勉 北野美由季	68

『北伊予の伝承』の歩み

昭和63年3月発刊の第1集
から平成30年3月発刊の第
14集までの30年の歩み

編集委員は延べ284名
冊子の平均ページ数は52

北伊予の傳承

Ⅰ

松前町東公民館

第1集(創刊号)

発行 昭和30年3月

54ページ

編集委員 仙波文治外

編集委員 30名

館長 大黒宜俊

題字 仙波文治

目次

次

年 中 行 事	1 頁
作 業 唄	28 頁
わ ら べ う た	38 頁
参 考 資 料	41 頁

題 字

松前町東公民

仙 波

各地区の 年中行事の紹介

伝承地 松前町神崎 禪正軒

記録者（徳永秀夫）

慶長五年子九月十七日（約四百年前）、平岡大和守通房入道左近房実（年若き故通称平若左近という）が合戦ののち敗北して討死。このとき主と共に墓前で自刃した家来七名と追手にかゝった馬の霊を共に供養し、平穩を祈願した。

行事内容

日時 八月十二日 十九時―二十一時

大念仏は神崎、出作、鶴吉の三部落が共同で行う。禪正軒での仏事のあと、参加者全員が向き合って二列に並ぶ。先導者の大団扇の音頭に合わせて、全員が団扇をかざして大念仏を唱和する。前庭に提灯を灯し、氷や綿菓子などを接待する。

参加者 三部落の老若男女約二百名が参加

世話役 神崎、出作、鶴吉の区長、社寺係（総代ともいう）

その他 大念仏

左近進様に申し上げます。（左近進様は殺された武士の名）
大南無阿弥ろっぱい（三回）、大南無阿弥ろー（三回）

南無阿弥ろー（三回）

ちから様に申し上げます。（左近進様の息子の名）（三回）

老僧様に申し上げます。（三回）

お薬師様に申し上げます。（禪正軒の本尊）（三回）

南無阿弥陀仏南無阿弥陀（五回）



(百 八 燈 会)

伝 承 地

松前町永田二五〇(同免) 華藏庵

記録者(福島荘司)

由 来 由来などは一切不明。古老は「昔からしておった。」それ故、百八燈会を伝承している大溝、永田、東古泉とも同じではなからうか。もしかすると、享保の飢饉に関係があり
 行事内容 そうな節がある。(死者の数は上部落が少なく下部落ほど多いなど。)

行事内容

日 時 八月十四日 十九時三十分～二十一時

行 事

盆の十四日(迎え火のみ一回)庵の山門趾から共同墓地の入口迄、二手に分かれておこなう。(主に東西)地面に小石等を置きその上に幅十五センチの板を並べ、その板の上にかわらけを置き、種油と灯心を入れて点火する。暗い墓地迄の道を照らす。おわると参加者全員と墓参者の見守る中ではとぼしあげの行事。

参加者

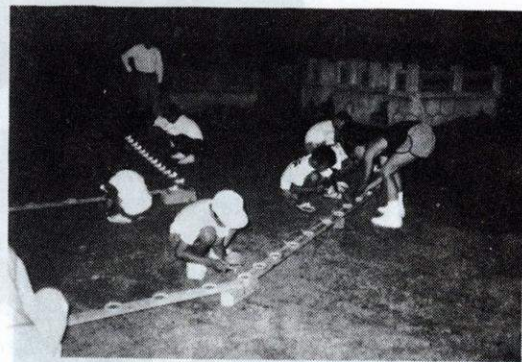
小中学生男女全員。(昔は男子のみ)

世話役

愛護部(昔は高学年生が一切の世話をしており、かわらけの補充には砥部町へ自転車で行き買い出しに行っていた。)

その他

百八燈会の最高潮は「とぼしあげ」にある。東西に分かれて、かわらけの残った油を大皿に集め、小枝などを拾い集めて、油をわかし点火させる。頃を見はからい長柄の杓で水をふりかけると、焰の火の玉が闇空にパッと三つ四つも立ちのぼり消えていく。火の玉の高さを競いあうのは一種の火占いではなからうか。またこれで残った油の始末も完了。油の灯火は人の瞳を引きつける不思議な火。



作業唄や わらべうた の紹介

亥の子唄

(神崎 水口義一 六十七才)

一、亥の子 亥の子 こいさの 亥の子

亥の子 餅ついて祝わんものは

鬼もうけ じゃもうけ

角の生えた子もうけ

えんやらやーと祝いましょ

ヨイシヨ

(〇〇さんを祝いましょ

祝わんものは……以下前と同じ)

二、大黒さん(お亥の子さん)という人は

一に俵ふまえて

二でにっこり笑って

三で酒作って

四つ世の中よいように

五つ何時ものごとくなり

六つ無病息災に

七つ何事ないように

八つ屋敷をひろめたて

九つ小倉を建て並べ
十でとうとう治めた

ヨイシヨ

三、一ぶ二ぶの木三で桜四ぶの木

五葉の松のむくの木、七つ梨の木

八つやなぎ、九つこう木

十で殿様のお城を祝いましょ

ヨイシヨ

四、一やろ／＼ おじゃ市たてん

ばくろなどこそ 市たてまわる

二やろ／＼ あら荷は負わん

牛や馬こそ荷負いまわる

三やろ／＼ おらさおさげん

えさしなどこそ さおさげまわる

四やろ／＼ おら塩売らん

三津の人こそ塩売りまわる

作業唄

田植唄

- 一、おさんばいの神はあらたな神じやヨ
たんばに笹たててお酒をあげて祭ろうヨ
- 二、若い殿様の腰かけ小松ヨ
ふとれよ小松、枝も栄え小松ヨ
- 三、若い殿様のお出むかえお馬ヨ
三才屋の駒にくら打ちきせてヨ
- 四、十七八ちや恋しい殿に、もたれかかるヨ
山田の稲は、あぜにもたれかかるヨ
- 五、日のくれぐれに駒はどこへつないだヨ
うね谷を越えて、とな草につないだヨ
- 六、日ぐれの鳥は、とやのぐるりを回いまわるヨ
歌いとうて舞うか、とまりとうて舞うかヨ

むしろ打ち唄

(徳丸 渡部 国蔵 八十八才)

むしろ打ちとて小馬鹿におしな
足は県庁で役をする

むしろ打ちとて小馬鹿におしな
うちじゃ田もある倉もある

わしが若い時にゃ小田までかよた
小田の川原で夜が明けた

粃すり唄 (横田 金子和太郎 八十五才)

くるりくるりと回るは淀の
淀の川瀬の、水車

色が白ても、うどんはきらい
わたしゃ、あなたのそばが良い

思つて通えば、千里が一里
会わずもどれば、また千里

姉がさすなら、妹もおさし
同じ蛇の目の、からかさを

わたしゃ若い時、灘まで通よった
灘の小網で、夜が明けた

夏まつり（輪越）

字	神社	日	付属行事
徳丸	高忍日売神社	8. 2	
中川原	〃	8. 2	
出作	恵依弥二名神社	8. 1	奉納演芸
神崎	伊予神社	7. 30	奉納演芸（鶴吉と合同）
鶴吉	〃	7. 30	〃（神崎と合同）
横田	素鷲神社	7. 20	
大溝	〃	8. 1	
永田	玉生八幡大神社	8. 1	奉納演芸
東古泉	〃	8. 1	

盆おどり

各地区の奉納行事

字	日	場所その他
徳丸	8月24日	徳丸コミュニティ広場
中川原	〃	中川原コミュニティ広場
出作		
神崎	8月17日	北伊予中学校校庭
鶴吉	8月24日	公民館広場
横田	8月25日	天長寺で松崎新蔵慰霊法要のあと境内で盆おどりをしていた。篠崎広場ができてから移転した。
大溝	8月24日	公民館横の広場
永田	8月24日	天神さんの広場
東古泉	8月24日	東古泉コミュニティ広場

本資料集作成にご協力いただいた方

企画委員

仙波 文治
山本 庫市
西村 榮
徳永 秀夫
松田 茂
松田 勝
橋本 彰
福島 荘司
三好 春夫

校区老人会推進委員

広田 恒三郎
松田 茂
仙波 文治
加藤 善一
西村 榮
水口 豊
町田 司雨三
萩野 彦一
向井 光夫
渡部 善弘
三好 春夫

芸能専門部長

弓立 忠良
門屋 利則
本田 吉幸
加藤 富貴雄
山本 磯秀
神野 悦男
小笠原 寛
水口 賢雄
村上 元良
藤崎 清
栗原 芳樹
豊田 忠義

編集委員

仙波 文治
山本 庫市
井上 八十一
徳永 秀夫
久津那安男

松前町東公民館
館長 大黒

第1集（創刊号）に携わった延べ30名のみなさん

北伊予の傳承 II



松前町東公民館

第2集

発行 平成7年3月

50ページ

編集委員長 野本 勉

編集委員 24名

館長 高市 徳

発行にあたって

物から心の時代へと言われ始めてから、

とする地元学が盛んになって、「伝承」が発刊され、更に「北伊予の歴史を語る会」が結成されましたが、

準備委員会を発足しました。これを契機として、東公民館では先に、松前町誌に載っていない話を収録した「北伊予の歴史を語る会」が結成されましたが、

町の子算化も進み、

具体化、資料の収集と整備、編集、校正を行い、未熟ながらも第二集発行の運びとなりました。ここに皆様方のご批判、ご意見を頂き、更に

伝承を掘り起こし、第三集の作成に取り組み計画です。ここに皆様方のご批判、ご意見を頂き、更に

本誌の発行にあたり、献身的なご尽力を頂いた編集委員各位、地域の方々に深甚の謝意を表します。

松前町東公民館長

高市

徳

目次

〔徳丸〕

① 田中夷子神社	1
② 高忍日売神社	1
③ 七生稲荷神社	2
④ 生目八幡宮	2
⑤ 若宮八幡宮	2
⑥ 高忍日売神社の環濠	3
⑦ 虫千祭	3
⑧ 四季農耕図（絵馬）	4
⑨ 高忍日売神社の大松	4
⑩ 本性寺	5
⑪ お庚申さん（庚申石）	5
〔中川原〕	
⑫ 重信川の旧堤防	6
⑬ 中川原渡し	7
⑭ さいの神泉	8
⑮ 極楽道と庄屋の墓	9
⑯ 戦国時代の墓後群	10
〔出作〕	
⑰ 出作遺跡	11
⑱ 恵依弥二名神社	12
⑲ 恵依弥二名神社境内末社	13
⑳ 恵依弥二名神社御神宝（石剣等）	13

㉑ 二名神社天狗の絵馬の由来	14
㉒ 二名神社と築城御用木の供出	14
㉓ 平岡左近の供養塔	15
㉔ 吉祥寺の由来	15
㉕ 吉祥寺の「胡瓜封じ」の行事	16
㉖ 山郷寺の庚申祭り	16
㉗ 地藏盆（北・西組）	17
〔神崎〕	
㉘ 弁天島が消えた	17
㉙ 安養寺と川柳和尚	18
㉚ 藪神様と宮島さん	18
㉛ 「蔵の元」の由来	19
㉜ 中世の墓石群「青石さん」のこと	19
㉝ ちちぶさん	20
㉞ 伊豫神社国幣社昇格申請	20
〔鶴吉〕	
㉟ 竈神社（へつついさん）	21
㊱ 農業用水施設第一号	21
㊲ 二つの常夜灯	22
㊳ 地藏堂の由来	22
㊴ 鶴吉の六地藏さん	23
㊵ やぶ神さん二題	23
㊶ 屋敷神さん信仰	24

④2	とくじきさん（とくしきさん）	28
④3	庚申信仰	29
④4	石鎚神社信仰	29
④5	鶴吉の三塚	30
〔横 田〕		
④6	ヤクシマさん	30
④7	地藏（南組）	31
④8	素鷲神社	31
④9	横田遺跡	32
⑤0	塚跡4ヵ所とそのたの塚	33
⑤1	郷蔵敷跡地とそのまわり	34
〔大 溝〕		
⑤2	御祈禱	35
⑤3	素鷲社	35
⑤4	庚申堂	36
⑤5	菅谷半之丞の碑	36
⑤6	六地藏	37
⑤7	地藏尊	37
〔永 田〕		
⑤8	三つ川について	38
⑤9	庚申堂跡	38
⑥0	庄屋道と屋敷について	39
⑥1	鎮守神社跡地Ⅰ	39
⑥2	鎮守神社跡地Ⅱ	40
⑥3	華蔵庵と平家落人伝承	40

⑥4	ダイバ神楽	
⑥5	小富士松由来記について	
⑥6	根上がり松	
⑥7	塚三基	
〔東古泉〕		
⑥8	東古泉村の成立と性格	
⑥9	明治初期の東古泉村	
⑦0	ふるさと東古泉の歴史	
⑦1	稲納屋（稲屋）	
⑦2	辰之助信仰	
⑦3	秋祭りの行事	
⑦4	御祈禱	
⑦5	念仏講	
⑦6	亥の子	
⑦7	「ホゴ吊り」の話	
⑦8	「タノモ」さん	
⑦9	明治年間・豊作と不作の記録	
〔参考資料〕		
北伊予の職業（明治から戦前）		

⑦ 虫干祭

・伝承地

大字徳丸

高忍日売神社

松山地方では七月中に夏越祭とか輪越祭とか呼ばれる祭が行われているが、この祭は、茅の輪をくぐることによって身心の邪気を落とし、無病息災を願う祭である。高忍日売神社では、八月二日にこの祭を行い、この日に神衣や神宝等の虫干しを行っていたので、特に虫干祭という名称がある。

・行事内容

七月中に氏子に雛形が配られ、その雛形に名前と年齢を書き、八月一日の夜に自分の布団の下に敷いて寝る。翌朝起きた時、その雛形で体をなで、息を吹きかす。その夜の虫干祭にそれを持って氏神様にくぐり、神社拝殿の蔵所でお祓い。そして、神札をいただき、その神に邪気退散を願う。

八月二日の夜は氏子のみならず近き夜店が立ち並び、また、余興も行われ遅くまで賑わう。

・参加者

氏子（徳丸・中川原・大間）

敬者

・世話役

氏子総代・氏子の有志

⑫ 重信川の旧堤防

・伝承地

大字中川原

豊臣秀吉が天下を統一して、文禄四年（一五九五）に加藤嘉明が松前城に封ぜられると、足立重信に命じて、矢取川付近に大堤防工事を起こさせて、下流一帯を堤防で固め、今日のように、北西の方向に改修させ、松前城を川の氾濫による危険から守ろうとしたのだといわれている。

堤防には松を植え、地固めをし、二〇〇mくらいの間隔をおいて、川の中央に向かって直角に三〇mくらい突き出した鎌投げを造り、水流を中央に向かってはね流すようにしている。これは足立重信の後にできたものである。

大川文蔵の考えた工法であるといわれている。一番鎌は中川原の堤防には五か所の鎌投げがあつて、次は徳丸との境に近く、井門泉からの用水樋の上にあり、次はねだれ鎌といって、渡瀬の西にあり、三五度くらい傾いた大松が鎌投げの先端に植えられていた。その上に松山藩の水防小

屋があり、次いで半三郎鎌といわれ、一番しもは尻切れ鎌といつて、大間との境にあつた。

以上五つの鎌の先端は何れも大石で石垣が積まれ、その先端周囲は木枠を組み、それを蛇籠で覆い、大水が出

各地区の伝承が
記載された。

何時でも揚水が出来、夏の稲作の水には欠かせない。
 やっぱり神崎の立派な水源地なのである。
 星人
 弁天島このあたりかや銀杏散る

是人

供物をし参拝

れている。

福や健康
山郷寺組も約四〇余戸
にわたっている。
日時 毎年田植終了後の日曜日

・伝承地　大字出作二丁目
郷寺の庚申祭は、その起源はさだかでないが、相当歴史をもち、現在に至っている。最初は六軒で存在行っており、場所も現農協Aコープ玄関あたりに存在していたが現在安置されていゝ場所に移轉された。
後諸種の事情により現在地に移動された。これは地域の幸守護神は猿田彦命が祭られ又昭和三〇年時代宮司高市慶史さんが遷移、現在にいたつてゐる。これは地域の幸福や健康、豊作等を祈願し祭りは賑々として伝承され行われ、組合員も約四〇余戸に増加し毎年盛大にお祭りが行われ、その後の日曜日

26 山郷寺の庚申祭り

郷寺の奥
大字出作二一五番地
伝承地

山郷寺の庚申祭は、その起源に。最初は大
長い歴史をもち、現在に至っている。最初は六
つており、場所も現農協Aコープ玄関あたりに存在
置かれていた場所の西側に移轉、其の

近代宮司高

長い間、場町を
を行つており、場町を
してゐたが現在安置されてゐる。これは地域の幸
後諸種の事情により現在地に移動された。これは地域の幸
後諸種の事情により現在地に移動された。これは地域の幸
後諸種の事情により現在地に移動された。これは地域の幸

守護神が遷移、現在、新願し祭りは順天年盛大にお祭り

豊作等を新

福や健康
主組も約四〇余戸
後の日曜日

山郷寺

内容・日時

行事中が

行事



御祈禱

・伝承地 大字大溝 本村南原
原田東

御祈禱の記録帳によると、安政
統いている。

- ・内容・睦月の二二日に白米と餅米を持つて、
- ・組宿（宿は加入者宅が願番）に集まり、買物・餅つき、
- ・料理等手分けして作業に当たる。
- ・北黒田宗通寺の僧侶を迎え、組内の無病息災を祈禱す
- る。（僧侶は各組をまわる）
- ・各戸へお札を頂き組の境界へは辻札を立て悪病等が入
- らないよう折る。
- ・自分達で作った料理で会食し親睦を図っている。



記録帳（買物帳）

・時代の移り変り
により昭和の後期
からは会食や餅つ
きをとりやめたり、
料理を仕出しにす
る組もある。
・北組は今も従来
通り行っている。
（栗原弘氏談）

65 小富士松由来記について

・所在地 大字水田 天神前

「由来記」は字に保管されていたのだろうが、今はな
また松に関する資料として、町内の個人宅にはある。
「北伊豫郷土誌」によると、明治四二年頃に編集された
九州太宰府ヨリ持ち帰りシモノヲ神告ニヨリテウツシ
タルモノニシテ此ノ地ハ岩鋪原ト云ヒシ所ナリ、地稍高
ク松ノ生ヒ立チ近江ノ国唐崎ノソレニ似テ風情アリ其ノ
大サ等ニ於テモ実地見タラベタル所ニテハ余リ劣ルマシ
ト考フ。（原文まま）
現今の筒井の住人某上京し尾ノ上の松の下にてまどろむ



小富士松（天明四年の木版）

内当松を自国へ持帰べきこ
とを神夢に見せたり依て持
ち帰り自宅に之を成長せし
つつありしに又再び成夜夢
見るに此の松を南東の原（目
下の処は其昔一面の大の原
なりきと）に移し成長せし
むべしとの神告あり再び此
の地に移したるものなりと。
（中村文雄記）

[illegible]

付録（資料）

北伊予地区の 職業・店（小売）

今回から編集委員は各地区から選出された。

松前町東公民館長
松前町東公民館主事



第3集

発行 平成8年3月

45ページ

編集委員長 済川 裕

編集委員 22名

館長 高市 長

北
伊
下

が高まりました。昨年、平成七年を

月

町東公民館長

高市

14

目次

〔徳丸〕	
① くすどいげ（杵）	1
② 三輪田米山の書の額と社碑	1
③ 椿銘「徳丸」	2
④ 恵美須神社の神護石	2
⑤ 加藤精神大僧正	3
⑥ 「徳丸」の字の由来について	3
〔中川原〕	
⑦ 「中川原」の由来	4
⑧ 土壇の塚神	5
⑨ 横井手	5
⑩ 耕地の変遷	9
⑪ 昭和一八年水害	11
〔出作〕	
⑫ 吉祥寺の手水鉢	13
⑬ 田心様	14
⑭ 伏持の灯	
⑮ 八股のお袖狸と吉祥寺	
⑯ 荒霊大権現	
⑰ 「出作」の地名の由来	
⑱ 大形弥生式土器	
〔神崎〕	
⑲ 昔の神崎の街並み	
⑳ 山王原と北伊予駅周辺の今昔	
㉑ 神崎青年畑の歴史	
㉒ 北伊予農業協同組合の歩み	
㉓ 「地蔵」の由来	
㉔ 棕の大木（旧北伊予村役場）	
㉕ 「神崎」の由来	
㉖ 神崎の小字名について（小字名を推理する）	
〔鶴吉〕	
㉗ 伊予神社の森	

②8 「おどろ」～福德泉公園～	28
②9 「鶴吉」と言う名称の由来について	28
③0 七・八ヶ寺参り	29
③1 伊予神社内竈神社	30
③2 伊予神社内厳島社	30
③3 伊予神社内猿田彦神社	31
③4 草田池の思い出	31
③5 角泉開さくについて	33
〔横 田〕	
③6 「横田」の由来	34
〔大 溝〕	
③7 大溝の由来	35
〔永 田〕	
③8 上、中、下の「フカリ」があった	35
③9 「前田の長者」伝承	36
④0 「カワソ」目撃談	36
④1 鎮守には中殿があった	37
④2 消防ポンプと久藏さん	37

④3 殿蔵（倉）	
④4 小豆洗い（妖怪伝承）	
④5 井戸底にある埋没材	
〔東古泉〕	
④6 「古泉」と言う地名の起源について	
④7 大師粥	
④8 明治大正時代のお四国参り	
〔付 録〕	
○ 年中行事一覧表	
○ 北伊予地区の民俗調査	

②三輪田米山の書の額と社碑

・伝承地 高忍日売神社境内

高忍日売神社正面鳥居の横にある青石の高さ2mに及ぶ碑は、三輪田米山の力強い書である。

また、「素鶯社」の扁額も、やや若い「明治十九年」頃の書である。

書家米山は、文政四年に生れ、明治四一年に死去された日尾・八幡神社の宮司「三輪田清敏の長男である。

はじめ日下伯嚴に教えを受け後に明月上人自筆の唐詩選草書本二冊を手本として寝食を忘れて字を習った。

その後乃万家の門外不出の法帖（王羲之書）を二五年間一日も怠ることなく毎日かよって書を練習した話は有名である。建立は明治三三年である。

（田中義和記）



(高須賀孫平氏撮影)



鉄道が宙ぶらり



下本多の門前の水



民家へ進入の水



⑪昭和一八年水害

・伝承地 大字中川原

昭和一八年の大東亜戦争のさなか、青壮年の大部分は戦地へ、或いは軍需工場へ動員されて、村には老人や婦人子供、病人が残っていました。これら残留者は、田耕から田植まで共に助け合って食糧の増産に精出していました。この年は七月に入って雨が多く、地盤はゆるみ、田んぼに水があふれるくらいになりました。

九四〇ミリバールの大型台風が二一日に四国の南方八〇〇キロの洋上にあり、二二日の夕刻には、室戸岬の南方五〇〇キロの洋上に北上してきたが、二三日にはここに停滞して動かず、多くの雨を降らせた後、愛媛県を北上し、記録的な大雨となり松山では五〇〇ミリという大雨量となりました。そのため重信川をはじめ、他の小さい川も増水し、みるみる堤防の上まで水があふれ出しました。警防団は連日巡視し警戒を重ねていたが、水は増すばかりです。

徳丸と中川原の境八東氏の栽培している柿畑の堤防が水でえぐられ、鐘を鳴らして住民を集め、両村の者が土のうを積み上げて補強にかかったが、水の勢いは強く土手に直角に当たり一瞬の間に上手の方がくずれました。仕方なく、避難せよという警防団の命令を村中へ知

③④ 草田池の思い出

・ 伝承地 大字鶴吉一一七東池

大字鶴吉一一八西池

草田池がなくなって久しい（昭和四〇年）。池が近いので、子供の頃はよく遊びに行った。

ツクシ（土筆）とり。ツバナ（チガヤの若芽）とり。菱の実採り。鮒釣り。土手の傾面滑り。水泳は菱の藻蔓が絡みつくので、親から固く禁止された。お節句（雛祭）の翌日には手作りの折詰を持って「オナグサミ」に。学校の自然観察をかねた運動散歩など。

稲穂が傾きかける頃、池がからぐと、菱藻をたぐりよせて、税打ちを行い、鮒鯉鯰鰻など沢山とれた。恒例の大人の楽しみ行事であった。

昭和三八年西池の樋が閉塞した。たまたま、新川地区に建設予定地により、急転、草田池に置き、賛成でモメ（混乱）た。昭和三八年内容に基づいて、契約書を取り、先進地（門真 美陵）視察を行い、地からも、何ら難点あるものとして相当の条件さえ受け入れてくれないも差支えなきもの」との意見で

昭和39年撮影（済川）



三軒屋より東池を写す



西池埋立造成開始時



西池南西より北東を写す



三軒屋より西池を写す

年中行事一覧表（主なものだけ）（改定） 1

行 事 名	徳 丸	中川原	出 作	神 崎	鶴 吉	横 田	大 溝	永 田	東古泉
元旦・初詣	○	○	○	○	○		○	○	○
正月様		×							
門松	○	○	○	○		○		○	○
年木・新木		×		○				○	
拝み松		×	△						
年棚		○	○	○				○	
鏡餅	○	○	○	○	○	○	○	○	○
正月柱連	○	○	○	○	○	○		○	
幸木・懸の魚		×						○	
年男	○		○						
若水	○	○	○	○	○	○			
道具の年取り		○						○	
雑煮	○	○	○	○	○	○	○	○	○
年始	○	○	○	○			○	○	○
お手かけ・蓬菜		×							
初夢		○	△	○					
鋤始め	○	○	○	○	○	○		○	
初山入り									
書初め・縫い初め	○	○	○	○	○		○	○	○
七日正月	○	○	○	○				○	
七草	○	○	○	○	○	○		○	○
鬼火・ほけんぎょ		×							
正月遊び（外）	○	○	○	○		○		○	
正月遊び（内）	○	○	○	○		○		○	
歩射		×							
達磨市		○							
節分	○	○	○	○	○	○	○	○	○
やいかがし		×	○	○				○	○
小正月	○	○	○					○	
削り花		○							
餅花・粟穂稗穂		○							
繭玉		○						○	
庭田植え		○						○	
祝い棒		△							
粥だめし		△							

付録 資料

北伊予地区の民俗調査

調 査 項 目	徳 丸	中川原	出 作	神 崎	鶴 吉	横 田	大 溝	永 田	東古泉
部屋の名称 (台所) ①ダイドコロ ②オチマ ③カマヤ	③	①	① ② ③	① ③	① ③	① ③	① ③	① ③	① ③
かまど神の名称 ①クド、オクドサン ②クドバ ③チャメシ	①	①	①	① ③	① ③ ④	①	① ③	①	②
中間食の名称 (午後2時頃) ①オチャ ②チャヅケ ③チャメシ	②	①	① ②	① ②	①	②	① ②	① ②	①
男の仕事着 (冬用、上) ①デンチ ②ソデナシ ③ハンテン ④ワタイレ ⑤ドンザ ⑥チャンチャンコ	① ③ ④ ⑤	①	① ② ③ ⑤ ⑥	① ② ③ ⑤	① ② ⑤	① ⑤ ⑥	① ② ③ ④ ⑤	① ④ ⑤	① ⑤
日よけ、雨笠 (バチとカサ系統がある) ①タクラバチ ②タクロバチ ③タコログサ ④タケノコガサ	① ②		①	①	①	①	①	① ②	①
はきもの ①ゾウリ ②アシナカ ③トンボゾウリ ④ヤマゾウリ ⑤ワラジ	① ② ⑤	①	① ② ⑤	① ② ⑤	① ② ⑤	① ② ⑤	① ② ⑤	① ② ⑤	① ②
湿田の名称 (一毛田) ①ハリタ ②ハルタ ③フケダ ④フカタ ⑤シブケ ⑥ヌマタ ⑦ドブタ ⑧ミズタ	②	②	② ③ ④ ⑤	② ③ ④ ⑤	② ④ ⑤	② ⑤	② ③ ⑤	② ⑤	② ⑤
稲の干し方 ①イナギ干し ②タナ干し ③ジカ干し ④ベタ干し ⑤カリ干し ⑥ホンガケ	① ⑤	⑤	① ③ ⑤	① ③ ⑤	① ⑤	⑤	① ⑤	① ⑤	① ⑤
田植え (植え手の性別) ①女100% ②女91% ③女70% ④女50% ⑤男が多い ⑥不足	②	③	③ ⑥	③ ⑥	④ ⑥	① ③	②	① ③	③
田の神の名称と祭り日 ①オサンバイサン ②オサイワイサン ③コウジンサン ④苗代を作った時 ⑤田植え始め ⑥田植えじまい	① ③ ④	①	① ④	① ④	① ⑥	① ④	① ④	① ④	① ④
人力スキの名称 ①スキ ②ナマカズキ ③ナマズキ ④ノラ ⑤ナマクラスキ ⑥ノラスキ ⑦マエヒキ	① ⑥	①	① ⑥	② ⑥	① ② マゲワ	② ④	② ④	② ④	②
カマの名称 (農具用) ①クサカリガマ ②カリカマ ③イネカリガマ ④アイガマ									

付録 北伊予地区の民俗調査

第3集 企画・編集
委員のみなさん
(22名)

東公民館主事

北伊予の伝承
IV



松前町東公民館

第4集

発行 平成10年3月

46ページ

編集委員長 中村 文雄

編集委員 26名

館長 伊達 嘉和

題字 松田 茂

(第4集から)

発刊にあたって

一 三集に引き続き今年度第四集を発刊する運びと

いるので、

とで、大字から推薦されていないのではなかとの所もありました。既にかなりの伝承の掘り起しと輯を中心に掲載するところではないかとの所もありました。水が見られたことにより、協議の結果、大字の伝承と、字によつてはまだまだ残っている状態となりました。また、戦後半世紀を経過した現在、清純した所や彩を愛した所など多く見られる現

を表現して、また、戦後半世紀を経過した現在、清純した所や彩を愛した所など多く見られる現地域や家庭での生活文化の向上に役立てていただくことを目的とし、本紙の発刊にあたり、ご提供をよろしくお願い申し上げます。なお、次集も予定しておりますので参考に

平城十年三月、中村文雄編集委員長はじめ委員各位には、戦身的なご尽力を頂戴しました。また、

松前町東公民館長

伊達 嘉和

目次

一 泉(池)について……………1

○徳丸……………2

○中川原……………3

○出作……………4

○神崎……………5

○鶴吉……………6

○横田……………7

○大溝……………8

○永田……………9

○東古泉……………10

二 幟について……………

○徳丸……………

○中川原……………

○出作……………

○神崎……………

○鶴吉……………

○横田……………

○大溝……………

○永田……………

○東古泉……………

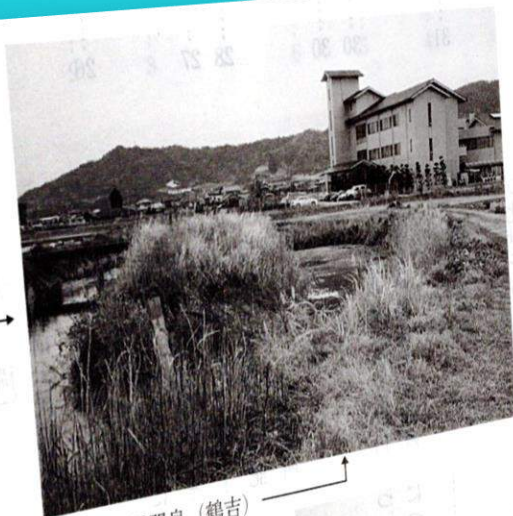
三 地域の伝承

〔徳丸〕	
①徳丸の教育の沿革について……………	26
〔中川原〕	
①小字について（ホノギ）……………	27
②横井手（その二）……………	28
〔出作〕	
①楠神社（楠さん）……………	30
②出作の虫送り……………	30
〔神崎〕	
①伊予神社と伊予川流路考……………	31
〔鶴吉〕	
①伊予神社の絵馬……………	33
〔横田〕	
①横田と水について（飲料水）……………	35
②生活用水……………	36
③横田の泉（七反地北泉）について……………	36

四 参考資料

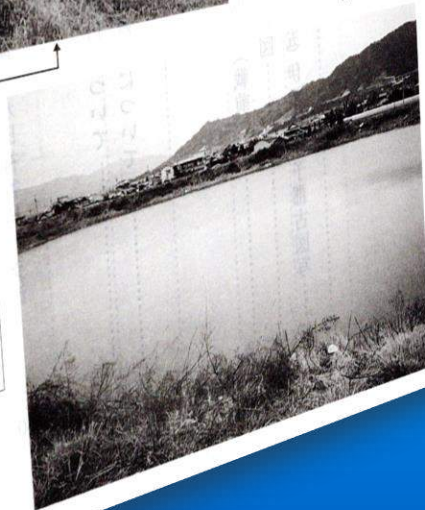
〔大溝〕	
①大溝公民館の移り変わり……………	38
〔永田〕	
①小富士松の伐採に至るまで……………	39
②カワソ目撃談（その二）……………	39
③一字（石）講と平家の落人……………	40
④タウナギの捕獲記……………	40
——捕獲場所 永田神寄川の支流——……………	40
〔東古泉〕	
①五反地区個人井戸について……………	41
②共同墓地の移転統一について……………	42
○北伊予の子どもの遊び（戦前）……………	43
○泉（池）の位置の全体図……………	44
○正徳年間（七二―七五）伊予国伊予郡古図写……………	45
○幟の立つ位置の全体図……………	46

長尾谷川 →



新開泉 (鶴吉)

楠池 (横田)

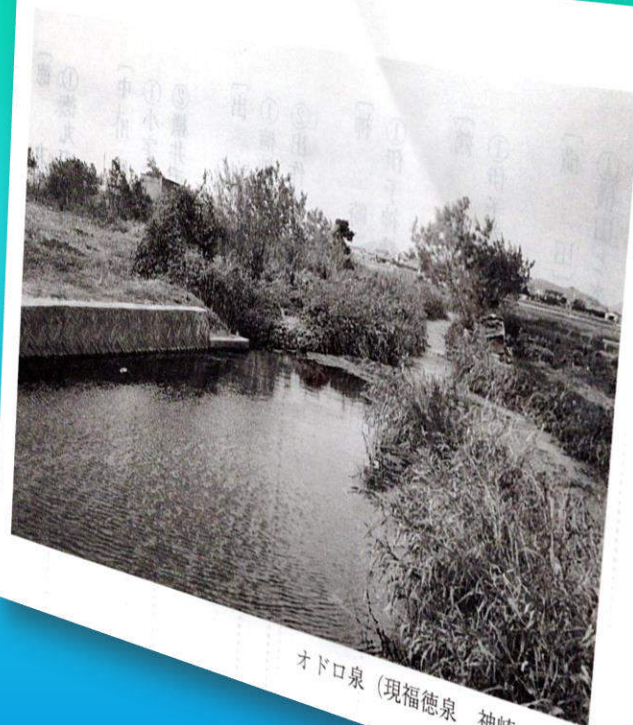


横田の一番地である楠池。池の北西部に
条里遺構が認められる。

〈記号〉

- ...現存する泉(池)
- ▲...消滅した泉(池)

一 泉(池) について



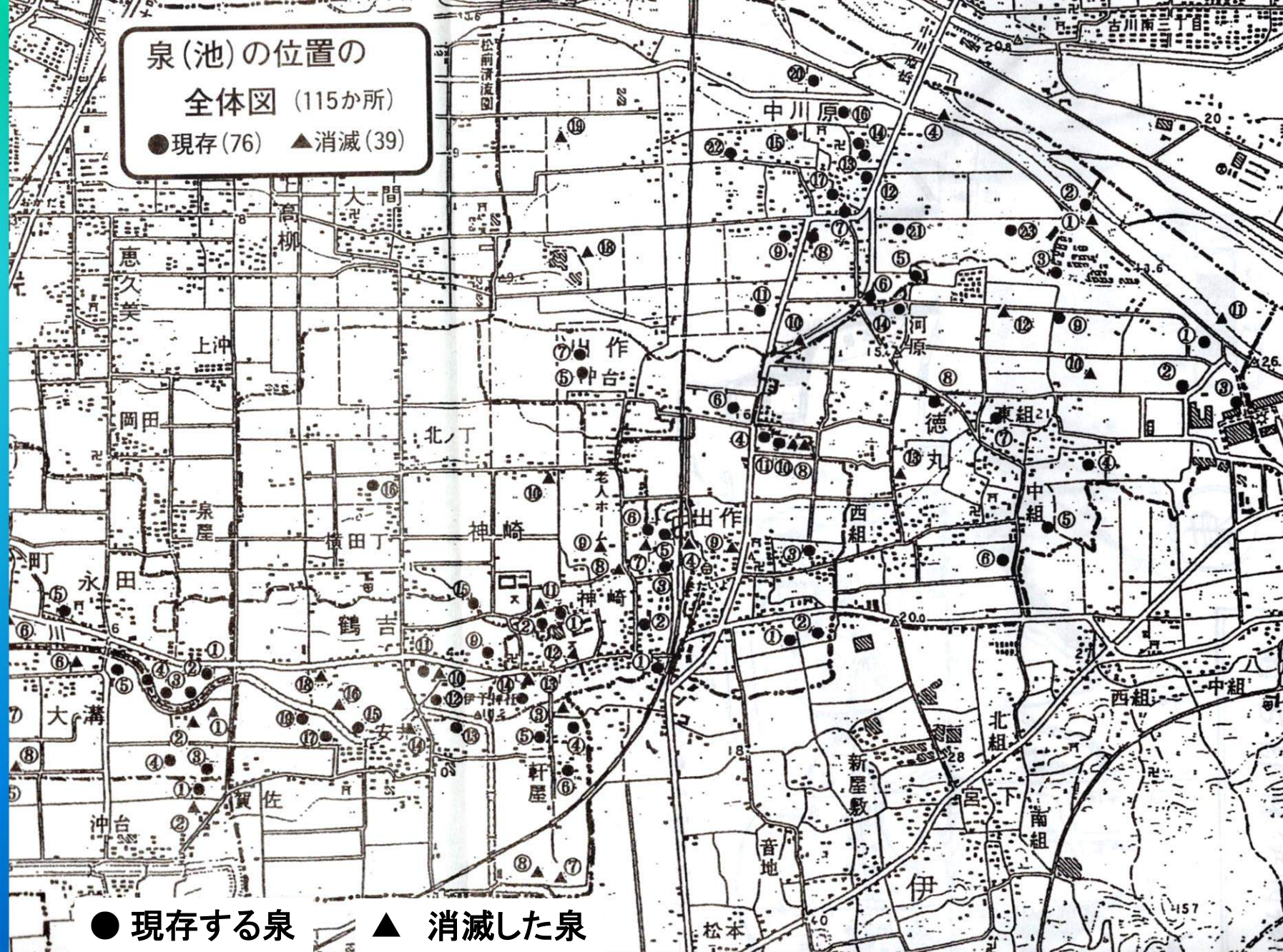
オドロ泉 (現福德泉 神崎・鶴吉)

北伊予各地区の
泉・池について

●現存(76) ▲消滅(39)

●現存(76)

▲消滅(39)



徳丸

徳丸地区

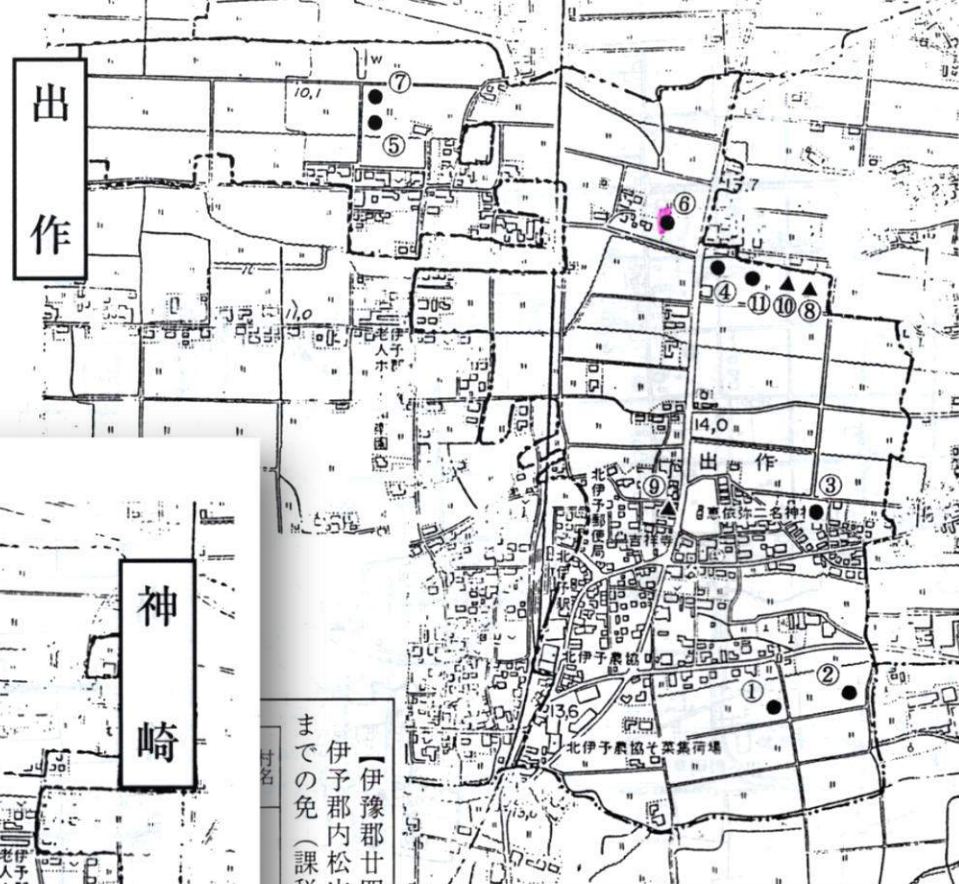
中川原地区

中川原

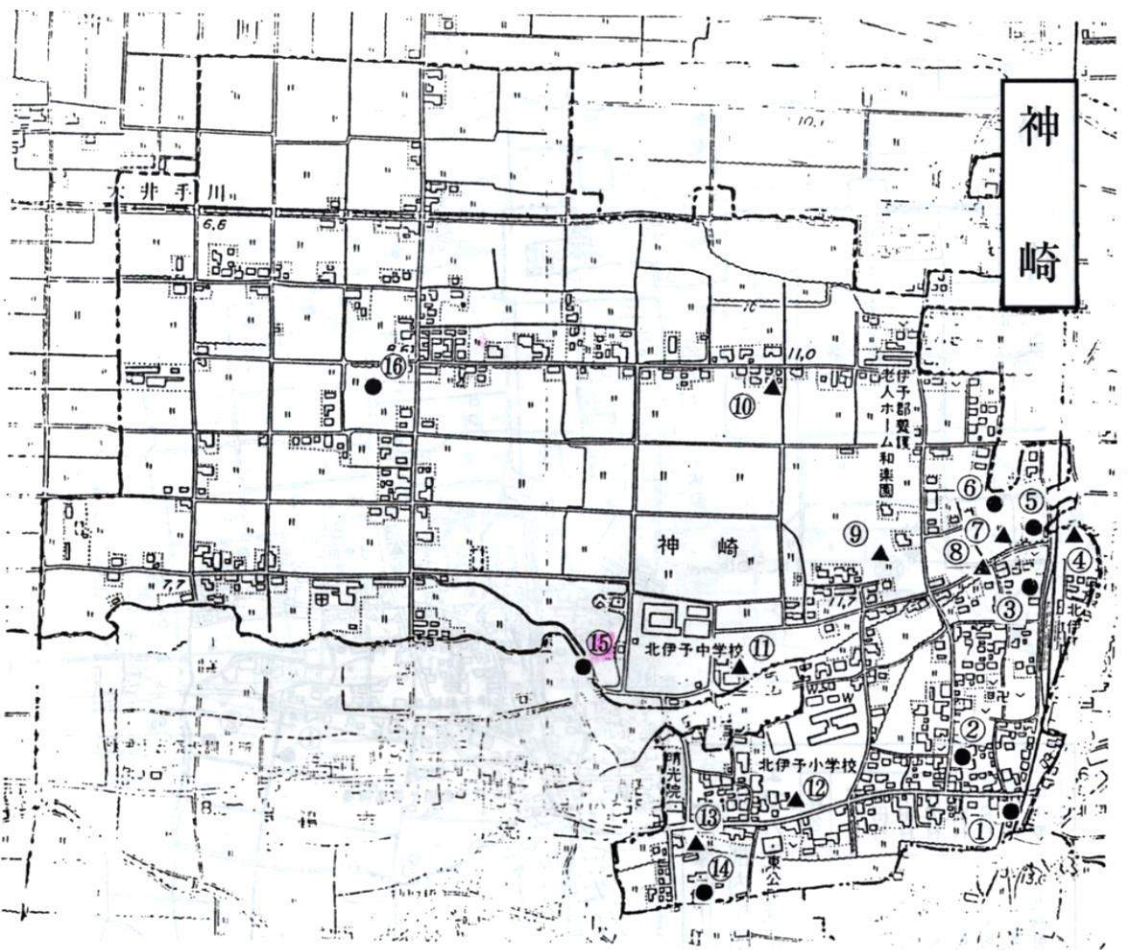
各地区の泉・池



出
作

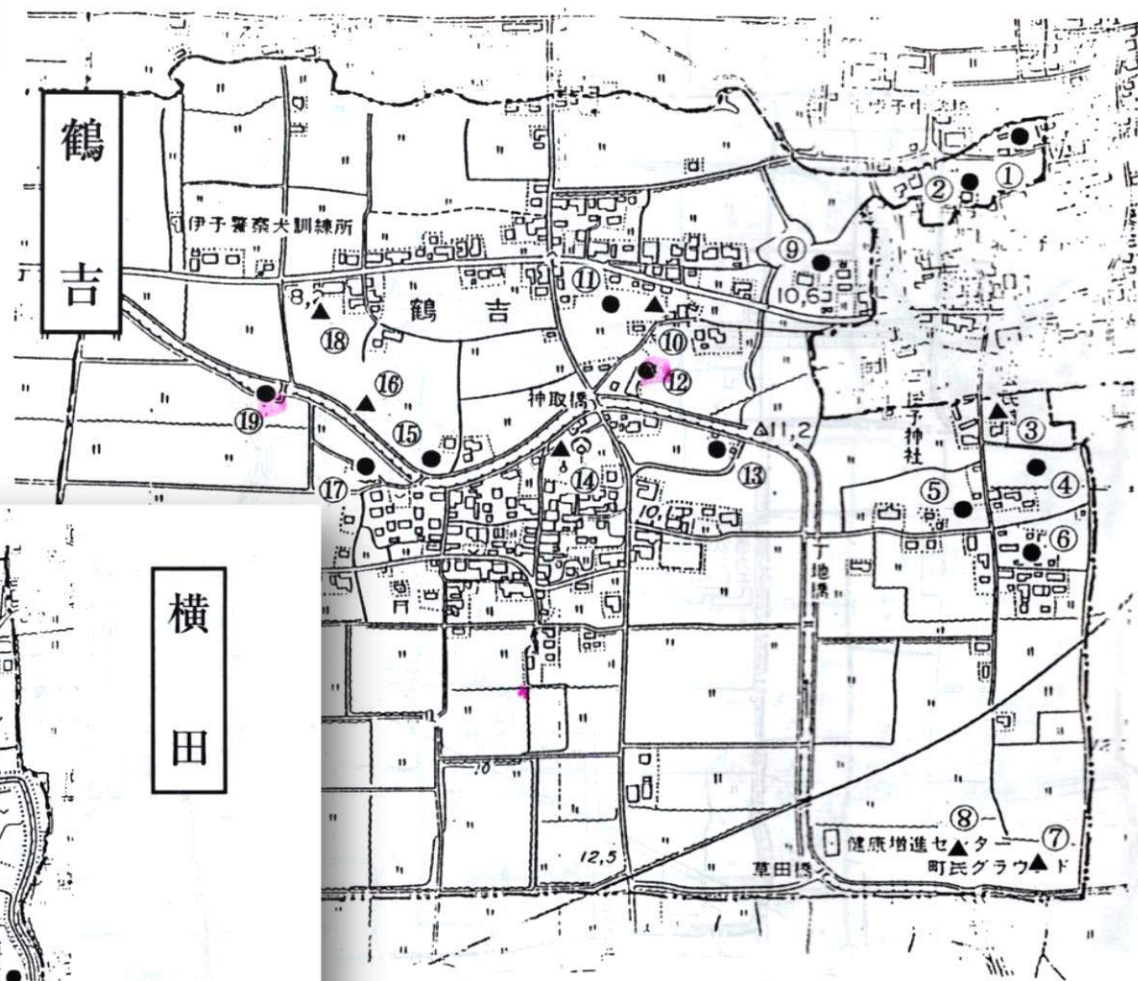


神
崎

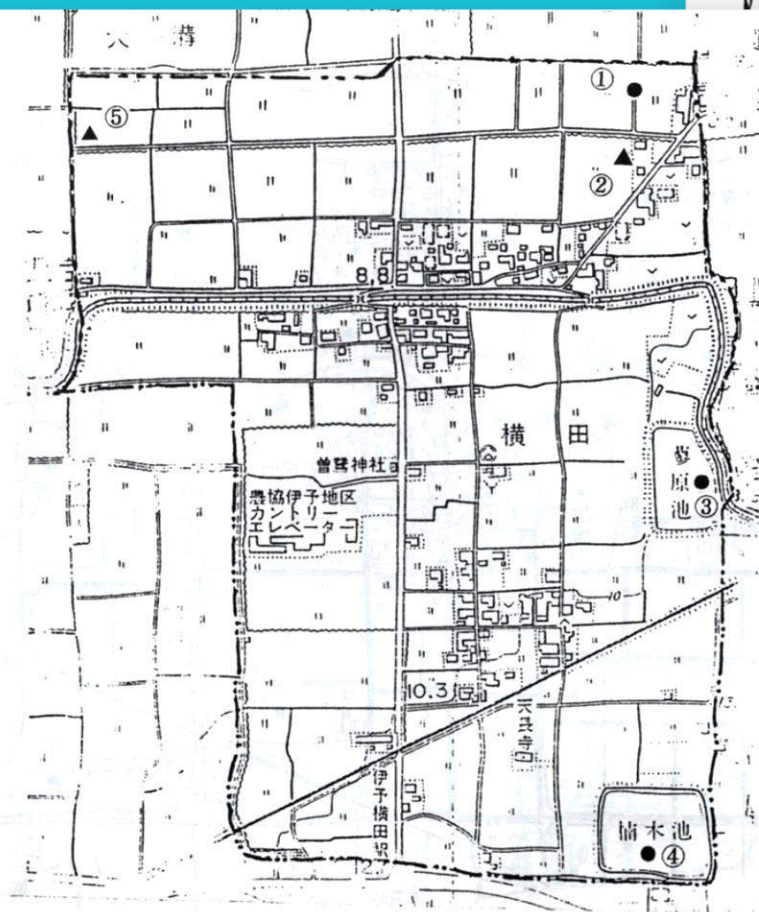


出作地区

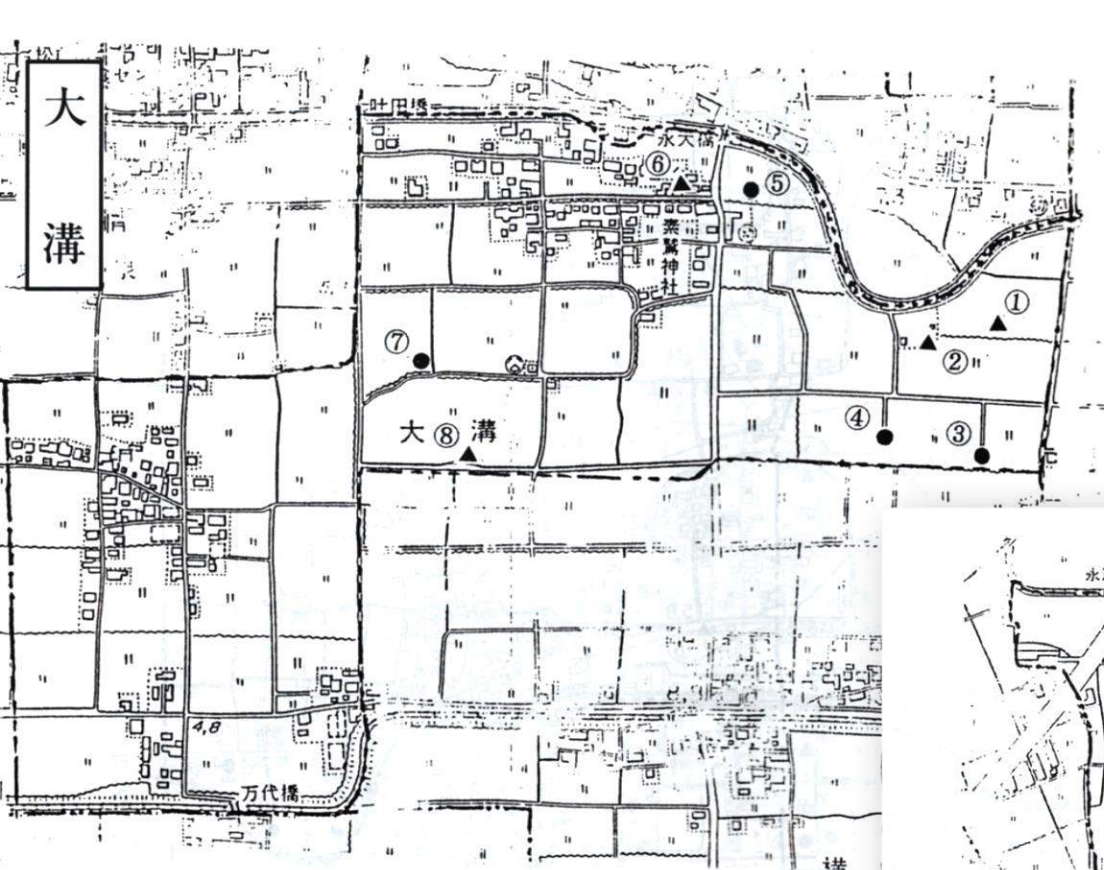
神崎地区



鶴吉地区

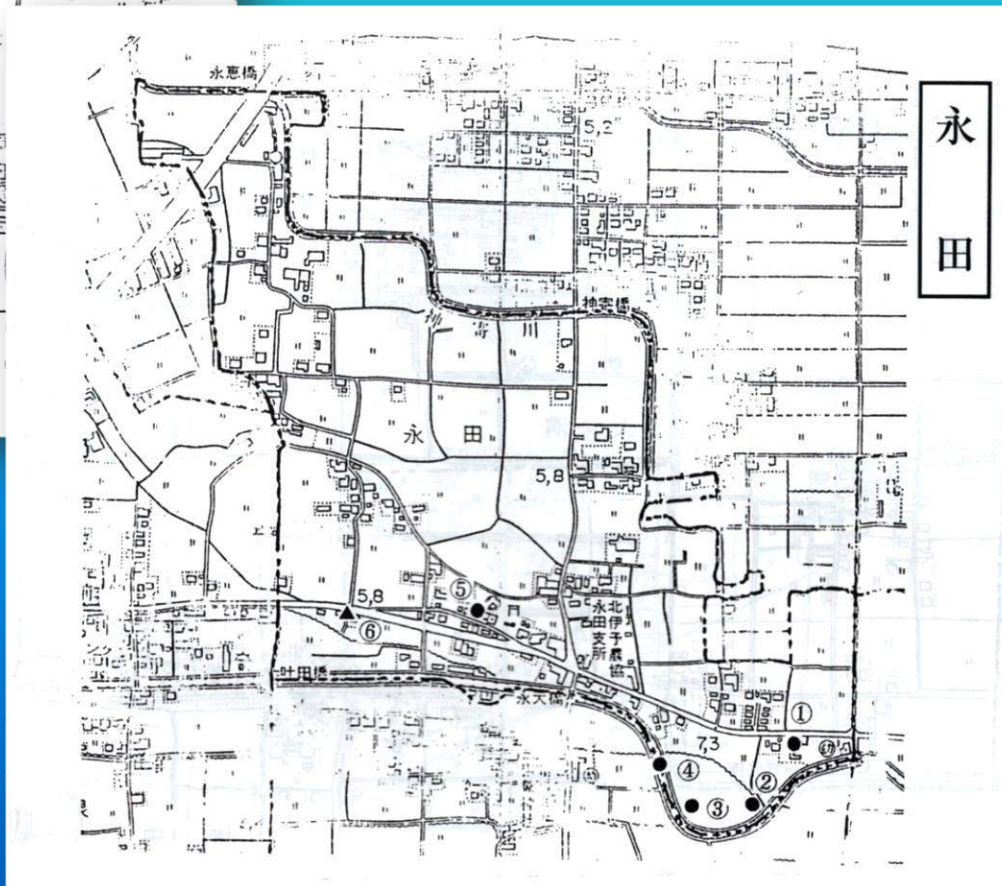


横田地区

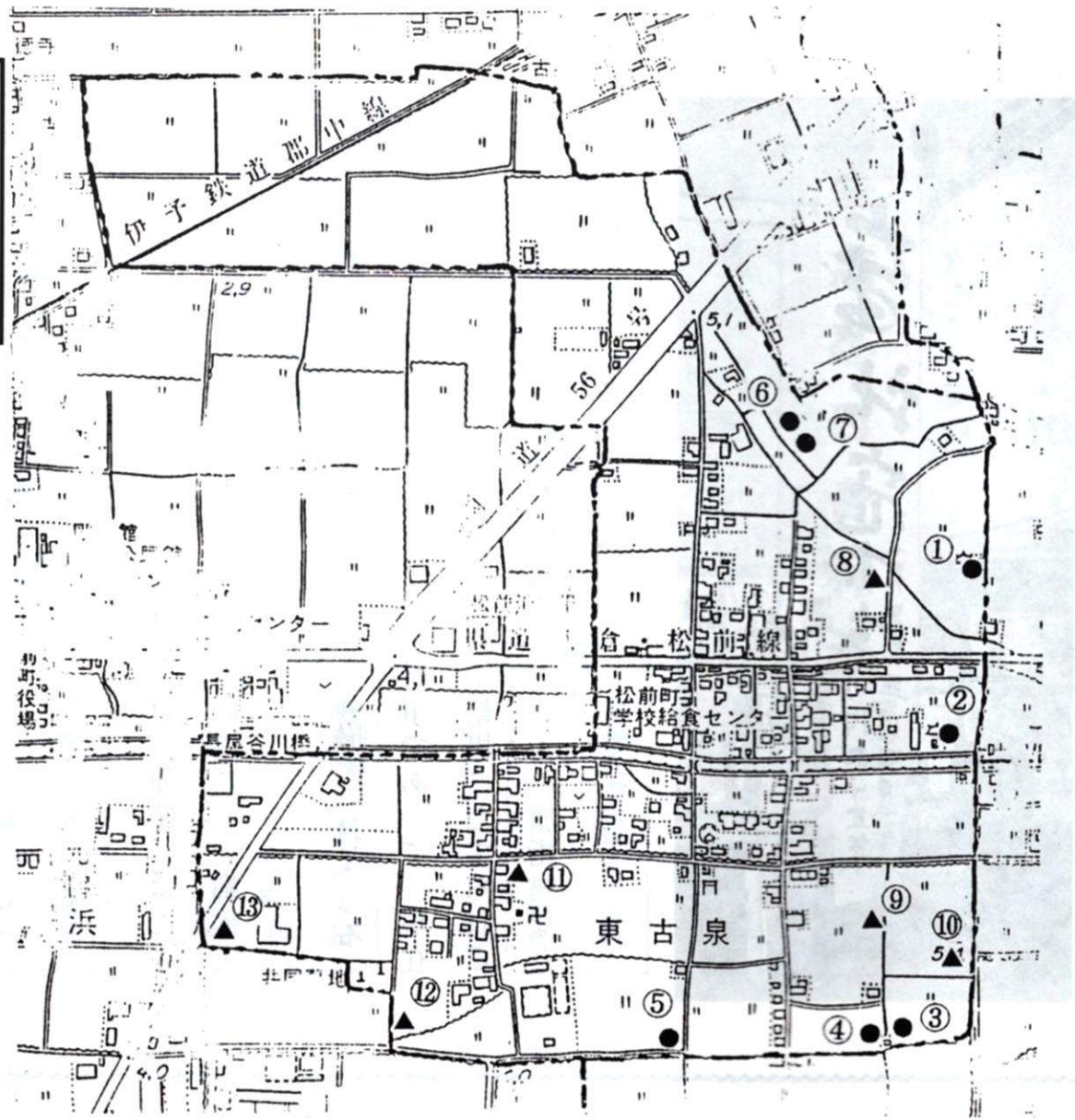


大溝地区

永田地区



東古泉



東古泉地区

二 幟について

幟のいわれ

幟・細長い旗の二辺に乳（ち）をつけ、旗竿（はたぎ）をさしのぼらせるよう仕立てたもの、これを幟旗とお）を略して（幟）と呼んでいる。

いい、略して（幟）と呼んでいる。幟は本来祭りにさいして、神を迎える招代（おぎしろ）として、古来より伝承された神聖な行事であって、現在でも（奉納〇〇神社）などとかかれて祭場にたてられる。これが変化して一般的に標識として武士の旗指物などと同じに用いられることとなった。



三輪田米山書 済川弥 庵（へ）

奉金刀比羅宮

昭和四十九年

東古泉字中

（北組）



⑤ 長尾谷川の土手

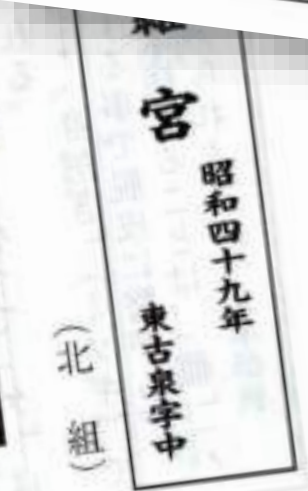
幟（のぼり）について

全体図 (55か所)





⑤ 長尾谷川の土手



東古泉地区の幟

〔鶴吉〕

① 伊予神社の絵馬
 絵馬は願いがかなった感謝の心から、また奉納の意味

で社寺に納める馬の絵。本来は幣帛へいしやくの代りに生きた馬を奉納したのを絵馬に代えたことがはじまりである。平安中期から始まり室町、江戸時代に盛んになり満願の祈念、家内安全、商売繁盛としての祈願も含まれるようになったのではないか。伊予神社の絵馬は赤穂浪士（四七士）のものから俳句、絵等もあったがほとんど剝落して残っているものはわずかである。

① 楠木正成 桜井の駅の別れ



楠木正成桜井の駅で正行と別れる。

楠木正成は河内の豪族、後醍醐天皇より鎌倉幕府、倒幕の命を受け出陣、千早城、赤坂城の戦いは有名である。足利尊氏が敗れ九州に逃れたが勢を得て都に攻め上る時これを湊川にて迎え戦う。桜井の駅にて子、正行と別れをして大

出陣するも湊川にて死す。絵馬には「君がため散れとおしへておのれまずあらしにむかふ桜井の里」とある。大

正六年十一月。

② 菅原道真

恩賜の御衣を拝す。

改修以前の大谷川



改修以後の大谷川



横田橋より東を望む

横田橋より西を望む



横田地区の大谷川

〔永田〕

① 小富士松の伐採に至るまで
夏井一譽氏の日記より関係部分を抜粋

・昭和二五年九月一七日 小富士松の駆虫は不能、松は
近日中県の林産課が来て呉れる由、なお村費を以って

維持、之を天然記念物に指定して貰うよう、運動に着手しているとは……。但し、一三日夜の風で幹の中央上部に大ひびが入って、上体が東へ傾いている。何れ上体……となる恐れあり。惜しい事。

・昭和二八年三月一五日 小富士松はほとんど赤葉になつたが、午前中虫取りの役に出る。

・昭和二八年九月二〇日 小富士松今夏全く枯死危険につき枝を下（おと）すこと。

・昭和二八年一〇月一日 小富士松を伐るために全員

出る。協議の結果、売り渡し
て、伐り取りにしてもらうこ
とに決す。危険のない幹の第
一の股の下より伐り、一股ぐ
らいは残しておきたい。

・昭和二八年一〇月二三日 六
人で約千円、小富士松は昨日
中に伐り倒さる。ほとんど
腐っている。

（中村忠夫記）



枯死前の小富士松 写真提供 村上省三氏

四 参考資料

○北伊予の子どもの遊び（戦前）

◎新年（一二三）			
・凧あげ	・羽根突き	・絵双六	・銭こ
・いろはかるた	・手鞠つき	・独楽まわし	・家族
◎春（四五）			
・花いちもんめ	・土手すべり	・ままごと	・金輪
・人形遊び	・わらび摘	・つんばなぬき	・木の
・うりやごと	・しゃご	・甘茶もらい	・豆の
・摘草	・土筆つき	・いたんぼとり	・蛇つ
・川原あそび	・風車	・紙ヒコーキ	・紙鉄
・すもうとり草	・手ぬぐい引き	・首引き	・笹舟
・ギツコンパッタン	・すいばとばらの芽とり		・あん
◎夏（五〇）			
・てるてる坊主	・鬼ごと	・かくれんぼ	・草矢
・草履かくし	・まいまい	・目高すくい	・松葉
・豆の笛	・草のわな	・麦笛	・一が
・麦藁細工	・水鉄砲	・水うつし絵	・蟹釣
・七夕まつり	・百八燈会	・おしろい花の輪	・お手
・お盆飯	・ふり駒	・将棋倒し	・子供
・水車遊び	・蟬採り	・もんどり	・ひし
・ほうずき（うみほうずき）			
◎秋（二七）			
・肩車	・影ふみ	・竹とんぼ	・雨か
・蜻蛉とり	・でんでん虫取り	・藁鉄砲	・ぶん
・紅葉土俵	・鬼ごと遊び	・たのめさん	・しつ
・木の実ころがし	・折り紙	・竹トンボ	・風車
◎冬（三九）			
・竹馬	・足角力	・馬とび	・鞠あ
・こうばね	・字あて	・手たたき遊び	・ぬく
・縄とび	・石けり	・なぞなぞ	・投げ
・釘立て	・物まね遊び	・あぶりだし	・ハン
・ランコン	・草焼き	・亥の子	・真綿
・正月を待つ唄	・にらみっこ遊び	・オイヨンとり	・雪達

正徳年間伊豫國伊豫郡古図



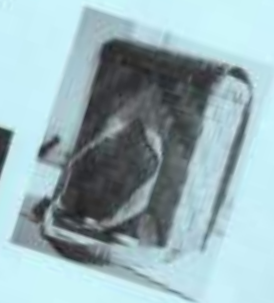
正徳年間の「重信川」
の水路と北伊予地区の
泉と水路

第4集 企画・編集委員 のみなさん（26名）

...

松前町東公民館長
松前町東公民館主事

北伊予の伝承 V



松前町東公民館

第5集

発行 平成12年3月

60ページ

編集委員長 中村 文雄

編集委員 20名

館長 水口 憲三

卷五

今年にはちようとして
一次世界大戦を終戦、

早い機会に早くも互に語り合

早い戦から早くも五十五年の、十九世紀最後の年になりましては「戦争」をテーマについての記録【を渡れ去り、意義深いものになりました。】

昭和二十年八月十五日、終戦の日が流れ去り、意義深いものになりました。

「戦争」五十五年の伝説として、九世紀最後の年に成る。昭和二十年八月十五日に取り上げました。戦争についての記録を残し伝えていきました。我が国に於ける戦争について、戦争についていきました。我が国に於ける戦争について、戦争についていきました。

今世可

[illegible]

平成十二年三月

内容は既述の如く、前記の如く、

[illegible]

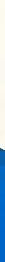
記帳が薄れたこと、

5807/1336

集

水

三三三



157

口
遊

美

松府町東公

目次

一 戦争

1	太平洋戦争従軍者名簿	1
①	天皇制下の軍人精神の基本	1
②	兵役制の概要	1
③	北伊予村からの出兵状況	2
④	太平洋戦争従軍者名簿(地域別)	2
2	地区の災害	8
①	松山空襲の余波災害	8
②	被害調査図	9
③	空襲の思い出	10
3	銃後の守り	11
①	国防婦人会	11
②	愛国婦人会	12
③	在郷軍人会	14
④	開拓団と義勇軍	15
⑤	学徒動員	17
⑥	戦争を省みて	18

二 子供の生活

1	子供の遊び	1
2	子供の唄と衣服や服装	2
3	学業について	3
①	学校生活	3
②	子どもたちの戦い	3
③	不自由な生活	3

三 生活

1	終戦前までの動植物の生態について	1
①	当時の自然環境	1
②	鳥類について	1
③	川に生息する虫や魚介類等について	1
④	虫類等について	1
⑤	その他の小動物について	1

2	物質の統制	34
①	『ほしがりません勝までは』	34
②	戦中・戦後の食生活	34
③	戦争末期の食料事情について	35

3	農家の生活（大正と昭和の初期）	37
①	伊予絣の機織り	37
②	農村労働者	38
③	農村の燃料	38
④	隣つき合いと日常生活	39
⑤	冠婚葬祭	39

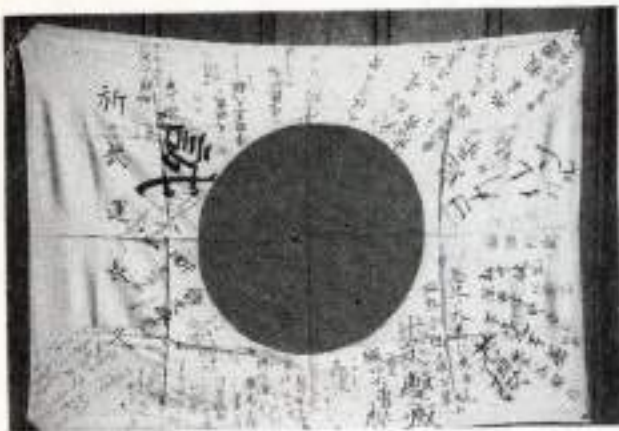
四 農業

1	営農上の習慣	41
①	単位	41
②	奉納額「農耕図」	43
2	農耕作業（戦前）	44
3	農業住宅	48
4	農家の家計	51

五 その他

1	忠魂碑の修復	
2	出征風景	
3	特攻隊員の手記（部分） ※臨時召集令状	
4	年表（昭和初期～終戦まで）	
5	戦時唱歌（軍歌）	
6	北伊予村区画図	

太平洋戦争



を開き出征の準備にかかる。
前庭には幟竿に大きな日の丸を揚げ、頂上から日の丸の小旗をつけた綱を四方八方に張りめぐらす。(これは



一 戦争

1. 太平洋戦争従軍者名簿

北伊予村からの戦争参加者名簿

① 天皇制下の軍人精神の基本

軍人勅諭(M十五年)……中の一部……

○ 我国の軍隊は世々天皇の統率し給う所にぞある……

登録され後日の召集令状を待つ身となる。

しかし、日中戦争突入後の戦線は拡がるばかりで、膨大な兵員投入が必要となり、無限界に近い増徴に逼られるに至り、数次に渡る関係法の改正で、遂には丙種合格者、年齢も四十五才まで更に検査前の十七才の若者まで召集範囲が拡げられるに至った。

③ 北伊予村からの出兵状況

その結果、総計七百十五名（一軒に一人）もの兵隊が当農業村から徴集されていた。各人戦った場所や時期はそれぞれ違っていたけれど、彼等は皆「軍人は男子の名譽」と心に誓い、祖国の勝利を信じて精一杯戦ってきたのでした。ただ現実には残念な敗戦となってしまった。その上二百二十九名もの多くの方を遺骨でお迎えせねばならぬ運命と共に……。

後に残された者たちは、今この英霊の前に跪き「今後は戦没者の墓碑を建増するような過ちは絶対二度と繰返さない、これがためには、私たちのこれからの生き方を変革してゆかねばならない決意でいることをここにお誓い申し上げる次第です。」

太平洋戦争従軍者名簿（平成十一年十二月現在）

印は戦没者氏名を示す

【徳丸】二三八名

◎伊賀上喜孝	◎伊賀上信良	◎遠藤貞行
◎加藤朝一	◎加藤幹三	◎加藤春五郎
◎門屋友春	◎川端政一	◎門屋正善
◎木下哲郎	◎木下君造	◎後藤王男
◎佐藤義朝	◎末岡清三	◎関谷正彰
◎仙波正三	◎田中秀雄	◎佃野正春
◎佃利春	◎豊島先男	◎徳野正春
◎水井開作	◎水井寅之助	◎林憲正
◎松本清	◎八束裕隆	◎八束熊次
◎八束保	◎八束資	◎八束雄
◎八束正英	◎八束幸	◎八束兵藤
◎弓立薰	◎弓立茂	◎弓立正巳
◎渡部勝経	◎遠藤頼賢	◎遠藤正之

※以上三十九名

伊賀上勝正	伊賀上忠清
伊賀上多市	伊賀上精彦
伊賀上正夫	伊賀上基行
遠藤賢爾	遠藤基行
大西正雄	小野末雄
加藤栄次	加藤八郎
門屋岩次	門屋八郎

伊賀上勝正 伊賀上忠清 伊賀上多市 伊賀上精彦 遠藤賢爾 遠藤基行 大西正雄 小野末雄 加藤栄次 加藤八郎 門屋岩次 門屋八郎

徳丸地区の戦没者 39名

門屋繁雄	門屋信雄	門屋末繁	川端正稔	木下海勇	木下胤	木下下	後藤健夫	関谷茂夫	田中芳邦	豊島源慶	永井鬼之助	永井貞男	野本貞義	本田貞義	松本義登	八城萬男	八城一男	八束玉男	八束直矢	弓立達	弓立則	弓立正雄	渡部正雄
門屋庄太郎	門屋常五郎	門屋義明	川端千一	木下博信	木下恒夫	小池正史	後藤文治	仙波文治	田中義和	永井茂成	永井末広	林一正	松本吉幸	松本義一	八束繁直	八束正徳	八束鉄平	弓立美正	弓立直夫	弓立悦夫	渡部良信	渡部良信	
門屋丈作	門屋昇	川端稔	木下悦太郎	木下貴	木下泰雄	後藤静雄	篠崎正明	田中勝一	嶋本繁一	永井多聞	永井吉美	林章正	松本好男	安永福夫	八束兼福	八束進明	八束勝智	弓立恭三	弓立兵藏	弓立善夫	渡部浪夫	渡部浪夫	

武智正憲	武智正清	武智通有	藤田重雄
本田正明	本田義夫	本田好男	本田忠藏
本田利八郎	三好三郎	三好進	大政百合夫
山本覺	中村正一	大政百合夫	山本庫一
本多良光	山本一夫	山本庫一	大西恒和
井ノ口照一	井ノ口俊平	大西恒和	加藤貞男
加藤清一	加藤善一	加藤貞男	加藤萬藏
加藤良久	加藤猶也	加藤萬藏	加藤伴次
加藤幸晴	加藤文雄	加藤伴次	窪田靜男
加納信光	窪田高明	窪田靜男	高田千春
合田正	合田光夫	高田千春	藤田三敏
武智明	藤田林	藤田三敏	本田一馬
堀内良謨	本田智	本田一馬	本田義高
本田忠平	本田幸男	本田義高	宮脇謙
松嶋清一	水本俊雄	宮脇謙	
山本磯秀	弓達隆一		

※以上六二名

【出作】四九名

水口坂義	二神米市	塩崎晴美
松岡千太郎	松岡數馬	土居久德
土居繁隆	安東次郎	土居芳卓
宇都宮茂	伊賀上貞男	中野昇
弓達友三郎	津本享	中野樂
中野傳	弓達延昭	

※以上一七名

好	脇	田	多	田	田	田	戸	藤	藤	藤	政	口
	一	利	重	五		克	正	敏		國	助	平
正	郎	雄	忠	郎	卓	巳	行	一	雄	直	勝	義

弓立明	閔谷耕一
八東貞常	八東含
白石四郎	篠崎正明

中川原地区の戦没者47名

【東土百泉】六〇名
○池内 徳英 ○池内 義徳 ○稲垣 久次郎

澤田明利	夏井三千介	村上義和	池田正武	中村英武	向井正男	渡部正男	澤田信重	藤野庫重	夏井一正	中村正男	古谷保男	楠本良平	大西守	松野安吉	池原一市	大政正信	村上邦男	向井惠	渡部義孝
三好照尾	澤田勇雄	大政利雄	小笠原順一	中村文雄	大西善弘	渡部善弘	池原熊市	澤田章	夏井繁政	夏井繁政	村上福一	池田進	中村保	渡部光馬	池原太郎	福嶋森夫	二宮源吉	大西達明	渡部宗雄
池原信二	澤田清一	福嶋正利	村上重雄	中村重已	夏井憲	水口清	池原英一	澤田豐武	澤田清	夏井清	福嶋貞三郎	中村重一	中村一夫	崇以上一四名	池原力松	藤野德重	古岡春雄	村上壽馬	崇以上二九名

※以上四二名

[illegible]

寮以上一九名



住友化学硫酸安工場での学徒隊の面々

しかし飛行場では、本物ばかりやられて囃機は被害がなかったと言う。
「昭和十一年までの生徒の服装は黒服（夏は霜降）黒帽であったが十二年以降はカーキ色（国防色）一色となり巻脚絆（ゲートル）、女子は十七年からモンペであった。男子帽子も十六年からは戦闘帽に変わっていた。」

学徒動員

の東洋紡績・倉敷紡績で飛行機的主要製造していた。

特に悲惨であったのは、予告して和二十年八月五・六日の大空襲で高山高女の学徒が銃撃と火災で二十四であった。

また、変わったところでは松山工動員で東洋レーヨに行つた学徒もあの伊予航空工業株式会社で木製飛行で作つたとのことであった。プロペラ・車輪・翼・胴体を組立てて塗装をする。上から見て飛行機に見えればよいのである。それは囃機であったのだ。

⑤ 学徒動員

昭和十八年六月二十五日、戦争学徒動員体制確立要綱決定。

昭和十九年二月二十五日、決戦非常措置要綱が閣議決定（学徒勤労動員の強化、女子挺身隊の強化）を受けて相川知事は二月二十九日国民勤労動員を設置した。

昭和十八年四月学徒勤労動員令・女子挺身隊令を公布実施する。

七月十七日松山商業学徒三〇〇人・宇和島商業学徒一〇〇人が神戸製鋼へ、八幡浜商業学徒一〇〇人が日本製鋼へ、通年動員で県外へ出動したのが最初で、この月中に中学校三年生以上の学徒が新居浜市の住友化学・住友機械へ、今治市の東洋紡航空工場・倉敷紡績へ女子学徒隊は出発をし通年動員は開始され終戦まで続行された。

その頃合唱した歌「ああ紅の血は燃ゆる」にどれ程慰められたことであろうか。

「ああ紅の血は燃ゆる」

一、花も蕾の若桜 五尺の生命ひっさげて
国の大事に殉ずるは我等学徒の本分ぞ
ああ 紅の血は燃ゆる

二、後に続けと兄の声 今こそ筆をなげうちて
勝利ゆるがぬ生産に勇み立ちたるつわものぞ
ああ紅の血は燃ゆる

3 銃後の守り（国防婦人会を中心としての活動）

村では村長、地区では区長が責任者となり実行組合長（現在の組長）を係りの要として諸活動の実践に取り組んだ。情報伝達は隣組を作り回覧板を廻していた。

そのころ昭和十五年に作られた歌に、

「隣組」

とんとんとんからりと隣組

格子を開ければ顔なじみ

廻してちょうだい回覧板

知らせられたり知らせたり

① 国防婦人会

昭和十一年に国防婦人会が発足し各支部を中心に諸活動をして来た。

一、 勤労奉仕団として、陸軍病院（現在の松山城二



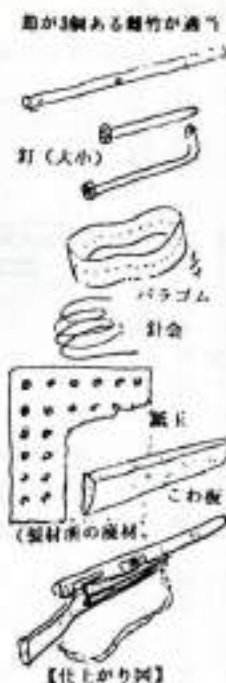
二 子供の生活

1 子供の遊び

① 兵隊遊び（戦争ごっこ）の主要な要素は次の三項）

ア、鉄砲作り イ、刀作り（鞘つき、柳の木） ウ、肝試し

ア、鉄砲作りは戦争ごっここの基本的な持ち物であり、各自がそれぞれに特色のある木製の鉄砲等を作っていた。材料は適当な太さの雌竹（オナゴ竹）、三〜四寸（九〜十二cm）の釘、ゴム紐（バラゴム）、木片では銃床を作る。



イ、刀作りが一番困難だった。適当な太さのネコヤナギを選び、鞘の部分を木槌で叩くと、木質部と皮の部分が分離するので、皮の鞘を作っていた。



③ 鉄輪廻し（カネワンまわし）個人や集団での遊び用具だった。遊びは鉄輪につけている数個のリングを出す独特な音が印象的と言えよう。鉄輪は有り合わせのものを利用していた。（自転車のリム等）、永田では鍛屋で作ったものが多かった。

※初心者用の鉄輪

上級者の鉄輪

鉄輪は電柱工事の際にも使われていた



鉄輪と柄が一体



鉄輪と柄は分離

子どもの遊び

児童の衣服や服装 服装は世相に敏感に反応していたが、反

面経済的な理由で比較的に自由であったとも言えよう。だが次第に制約のあるものと変容していった。戦況の不利と共に資源や資材の不足によって、自給自足の耐乏生活に追いやられて行った。児童の服装は、家にあるありあわせの物を着用していた。学校は冬季に足袋を履かなかった児童を表彰していた。

【戦前の学習袋】



・別に無し ・用止

昭和前期は両方が多い

セヘラー型

・肩紐は両側に着けられる

スカート

通学履
または
草履(市販品)

・履きは滑いた

(夏は、白の日傘)

ねーさん型
品

中

オカッパ

低

(おくどさん)

・結髪(イガダ)

夏は「浴巾着」



夏は「浴巾着」



浴巾着

夏は「浴巾着」

半てん (綿入れ)

ヒキマキ(ラシヤ製)

冬季の防寒具

防寒づきん

デニム

(綿入れ)

寒い日は友人の頭上で手を温める

紅白ハチマキ

手裏の保護は手袋を縫って履く

キャップは下駄で履いていた

ほとんど足袋

寸法 六文 六下 七文 七下 八文 八下

高等科は小型のインク瓶

カバン (キャンパス) 男女兼用

ボタ靴 (ドク履や靴ゴム製)

冬季には毒を入れた防寒

布製で底はゴム質

雨天時は下駄で登校

暴風がよく切れた (応急処置に道路の小石を利用)

雪下駄

日下駄

学校で講習会

降雪時には危険であった 自給自足の生活態勢

児童の服装は、家にあるありあわせの物を着用していた。

学校は冬季に足袋を履かなかった児童を表彰していた

型パンフ

(ブルーム)

履下はめったにない

風呂敷

ボタ靴

ゴムの履

フキタビ

(地下足袋)

高等科が多い

(ゴム履はほとんど無し)

雪下駄

日下駄

学校で講習会

降雪時には危険であった 自給自足の生活態勢

児童の服装は、家にあるありあわせの物を着用していた。

学校は冬季に足袋を履かなかった児童を表彰していた

2 物資の統制

① ほしがりません勝までは

戦争が長期化するに従って、生活必需品も不足するなか、政府は国民精神総動員運動によって国民の戦意高揚と挙国一致による「尽忠報国」を強要し、経済面における統制も強化していった。

○食糧政策

昭和一四年「米穀増産奨励規程」

一五年「米穀増産要領」「米穀集荷配給統制」

生産には「供出」、消費者には「配給」強制

一六年 生産者単位の戸別割当、米通帳制の配給

一七年「食糧管理法」食糧営団発足

一八年 米の配給量一日二合四勺と決められた。

二〇年 一日二合二勺（豆類、雑穀、イモ類代替）

○その他の物資の統制（配給）

昭和一四年 主要商品に公定価格

一五年 米、味噌、醤油、砂糖、マッチ等

一六年 清酒、木炭、食料油、雑穀、菓子、麦等

一七年 衣料品、水産物、油脂、食肉等

生活物資の配給は「隣組」を通して行われ、ノート、運動靴等は、学校を通して児童に輪番に割り当てられた。

重油、ガソリン等は早く
回ることはごく少なかった

物資の統制

戦後はインフレと食糧難に苦しめられ人々の多くは食
うや食わずの生活となり、学童も昼食弁当を机の中にか
くして食べ、校庭の隅では弁当を持たない子どもの姿も
見られた。甘藷の弁当、雑炊の弁当を持って来る者もあ
ったり、飢えの為盗みが増えたり、栄養失調児も出たり
するようになった。米はおろか麦があればよい方で甘藷、
南瓜の蔓あげ後の赤黄色のものまで買い出しに出て食べ
られるものは何でも食べた。当時「モク拾い」といって
煙草のすい殻を拾い、それを煙草に巻き直して売り、間
の食物にありつく姿も見られるようになった。また靴磨
き少年が町に見られるようになったのもこの頃である。

米価も昭和二〇年には六〇円、次年度より一二〇円、
七二〇円、一四七八円とはね上がっていった。間物資と
進駐軍からの物資で品物、食糧品は町に出廻り、金と米
さえあれば何でも手に入るようになった。

昭和	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
年	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
米価/俵	11円85銭	10円60銭	10円40銭	6円28銭	6円50銭	8円20銭	10円80銭	14円80銭	10円90銭	11円80銭	12円90銭	13円42銭	16円15銭	16円30銭
内閣	○金融恐慌勃発 田中義一内閣	○関東軍張作霖事件 ○内務省に特高警察設置	○浜口雄幸内閣 ○世界恐慌となり就職難	○農作物大暴落農村深刻化	○若槻礼次郎内閣 ○満州事変勃発 犬養毅内閣	○上海事変勃発 ○満州国建国 ○五・一五事件（首相射殺） ○警視庁に特高警察設置	○日本国際連盟脱退 ○米穀統制法公布 ○関東軍日支停戦協定	○満州開拓政策展開 岡田啓内閣	○政府国体明徴の声明発表	○二・二六事件（蔵相等殺害） 広田弘毅内閣	○林銑十郎内閣 ○近衛文麿内閣 ○蘆溝橋事件で日中戦争開始 ○国民精神総動員実施 ○日独伊防共協定調印	○国家総動員法公布 ○スポーツ界で横文字追放	○平沼騏一郎内閣 ○ノモンハン事件 ○阿部信行内閣 ○第二次世界大戦勃発	○米内光政内閣 ○第二次近衛文麿内閣 ○紀元二千六百年記念行事 ○大政翼賛会発足
←ハナハトマメマス・テンノウヘイカバンザイ→大正7→														
←ススススヘイタイスス→														
県内	○松山―西条列車開通	○松山連隊天津派遣 ○愛媛県庁舎落成	○松山―南郡中列車開通 ○早魁	○高浜線電化	○大谷池二期工事完了	○今出銀行倒産 ○松山城小天主・櫓焼失 ○松山大雪（三十糎） ○大旱魃 ○室戸台風	○大谷川内壁改修	○松山連隊出征 ○郡中線軌道拡幅 ○東レ誘致松前港大改修 ○軍需工業活発化	○東レ愛媛工場開設 ○出合コンクリート橋竣工	○石油統制強化で木炭自動車 出始る	○県護国神社竣工			
村長	○遠藤良貞村長 ○鶴吉電力による湯水開始 ○北小高等科3年→2年制に改む	○ラジオ体操開始 ○北伊予駐在所新築	○本田 欽村長 ○県道松前―森松線3・9米幅拡張工事完了 ○北小二階建校舎増築	○北伊予駅落成 ○永田―横田道拡幅	○大谷川大溝側へ決壊 ○地価↓賃賃価格に改訂 ○コンクリート製中川原橋落成・散餅	○大谷川（棚川）補修完了 ○人絹の「アッパッパ」一部の婦人間に流行 ○出征兵を北伊予駅で歓送	○明治36年創設の愛国婦人会北伊予支部結成 ○北伊予消防団昨年に続き第4条金馬簾授与 ○各字共泉の改修など旱魃対策の支出激増	○軍友会北伊予支部発足	○家庭婦人の総力戦体制組織である国防婦人会 ○北小校新講堂竣工（旧建物は北農協の前身）	○北伊予忠魂碑建立 ○国防婦人会戦地兵用真綿講習会開催（65名） ○寺院団と婦人会で某大佐を招聘し皇軍戦勝	○北伊予村役場落成 ○防空訓練開始さる	○銃後奉公会結成 ○消防団↓警防団と改変 ○貸金・地代・家賃統制令公布 ○5月より月の一日を興亜奉公日として廃品	○大字区長が行政の一部を代行できる内務省 ○衣食品（米・砂糖・マッチ・衣料）の切符 ○隣組（総動員法の最下部組織）発足 ○各字に家庭警防組合設立さる ○駅前や医者らが抱えていた人力車が消えた	○北小校↓北伊予

昭				和																				
15				14						13				12			11	7			6	2	43	38
1940				1939						1938				1937			1936	1932			1931	1927	1910	1905
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
晩	空	燃	隣	紀	出	太	兵	父	愛	麦	荒	日	上	愛	海	露	あ	走	討	爆	ラ	朝	水	戦
に	の	ゆる	組	元	征	平	隊	あ	馬	と	鷲	の	海	国	行	営	あ	れ	匪	弾	ジ	鮮	師	
折	勇	る		二	兵	洋	さん	なた	進	兵	の	丸	だ	行	か	の	わ	！	行	三	オ	北	營	
る	士	大		千	士	行	あり	は	軍	隊	歌	進	よ	進	ば	歌	が	大		勇	境	の	友	
		空		六	送	進	が	強	歌			曲		曲			戦	地	士	警	会			
		組		百	る	曲	と	か									友	を	行	備	見			
				年	歌			つ												の	歌			

が何かの理由で消されている範囲

表のように改訂

明治以後：B図

今日

10間×50間=3000坪

≠ 1ha = 100000 m²

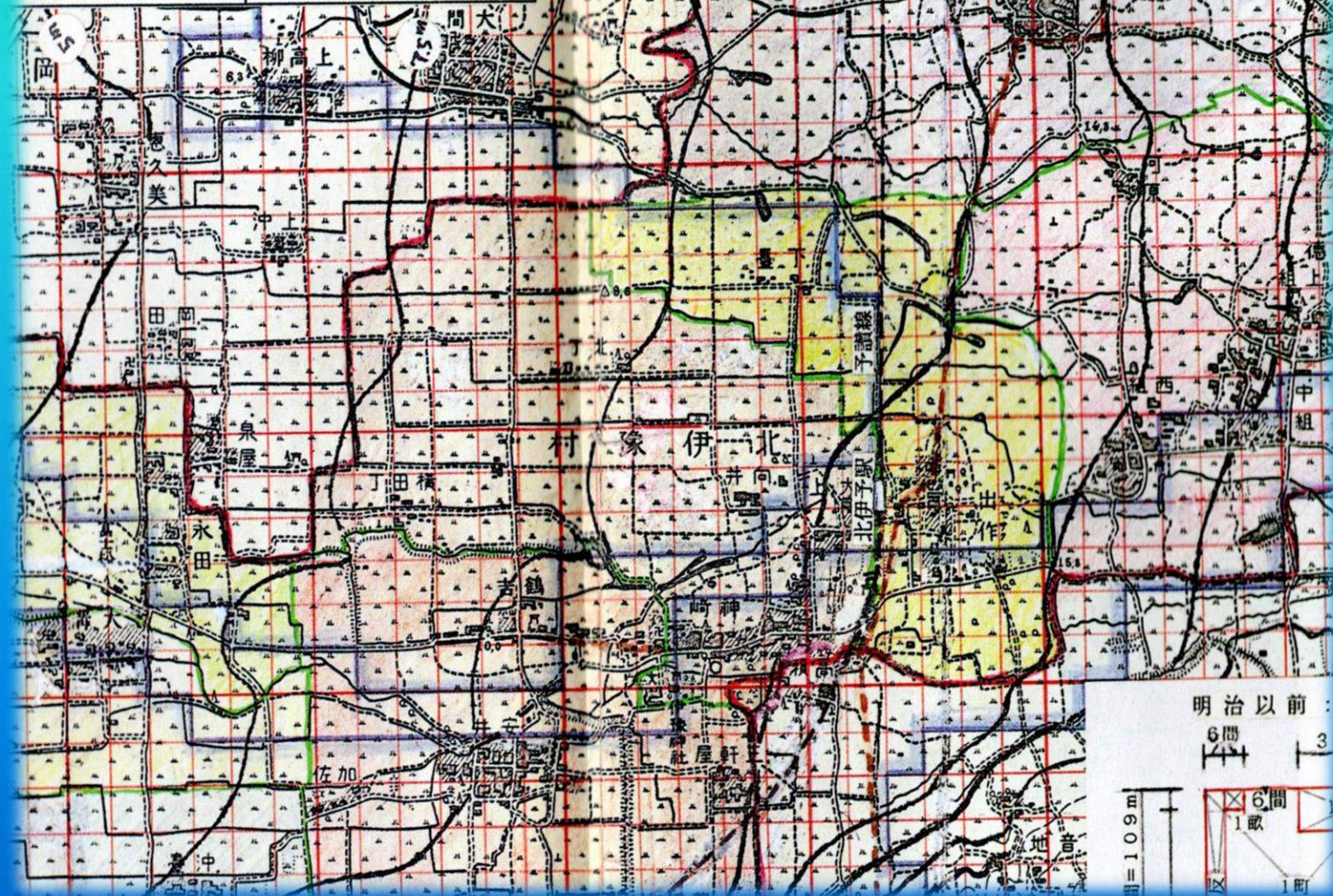
10間× 5間=300坪

≠ 10a = 10000 m²

10間×10間=300坪

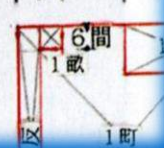
3間× 5間= 30坪

≠ 1a = 100 m²



明治以前：

6間 30



「北伊予の伝承・V」企画・編集委員会名簿

委員	長	水田	中村文雄
副委員	長	出作	神野弘隆
副委員	長	鶴吉	相原中義
委員	員	大津	田中東兼
委員	員	徳丸	八木康一
委員	員	徳丸	山本俊夫
委員	員	中川原	本田博明
委員	員	中川原	本村義一
委員	員	出作	西口好雄
委員	員	崎崎	水口稲男
委員	員	神崎	河野山田
委員	員	神崎	松川
委員	員	吉田	濱野佳夫
委員	員	横田	日村正秀
委員	員	水田	中田秀明
委員	員	東古泉	沢田光夫
委員	員	東古泉	竹垣憲三
委員	員	出作	稲口浩和
委員	員	北黒田	水智嘉
委員	員	上高柳	武達
委員	員	徳丸	伊中

第5集 企画・編集委員
のみなさん（20名）

北伊予の伝承

Ⅵ



松前町東公民館

第6集

発行 平成14年3月

64ページ

編集委員長 田中 義一

編集委員 22名

館長 水口 憲三

発刊にあたって

先の「北伊予の伝承」
たことは実に大変な仕事でした。

また、愛媛新聞で紹介された。しかし、『戦争』をテーマに取り上げました。

在佳)は大変感激して下さいました。しかし、『戦争』をテーマに取り上げました。

この「北伊予の伝承」を見て、涙があふれてどうにもならない。従軍者名簿にも思い出すお名前がたくさん書いたとい

てみました。北伊予の伝承、第VI集、では、昭和二十年から三十数年までを特集しました。すなわち、終戦の混乱期から

子供の学校生活等は、今の若い人々には極度の食糧難であり、「衣」も「住」も大変な時代であり、特にお名前がたくさんある

す。なせなら、あの「北伊予の伝承」は、戦後について身近なことがよく分かるといつて、各小中学校でよく活用していただきたいもの

しで、北伊予の伝承、第V集、は、戦後について身近なことがよく分かるといつて、各小中学校でよく活用していただきたいもの

貴重な学芸資料として、戦後の物々自由な時代から、復興の途程、経済的大国への歩み等、先人の苦勞や努力を少

平蔵十四年三月

協力下さった方々、田中義一編集委員長はじめ編集委員の方々、関係各位

松前町東公民館長 水口 憲三

松前町東公民館長 水口 憲三

水口 憲三

水口 憲三

目次

一 戦後の生活

1	混乱期	1
①	進駐軍（占領軍と駐留軍）と夏時刻	1
②	戦災者・引揚家族の受け入れ	1
③	極度の食糧難	2
④	生活物資の不足	5
⑤	南海地震の発生	7
2	一筋の光明	8
①	放送の変遷	8
②	娯楽行事	9
3	革新時代の到来	10
①	簡易水道の普及	10
②	神武景気	11
③	生活改善や合理化運動	12
4	交通機関	13

二 戦後の教育

1	戦後教育の変遷	1
①	学校教育（小・中学校）	1
②	教育内容	1
③	教育委員会の発足	1
④	学校給食の開始	1
⑤	松前町合併	1
⑥	社会教育・家庭教育の変遷	1
2	戦後の小・中学生の学業生活	1
①	北伊予小学校の学業生活の状況	1
②	北伊予中学校の学業生活の状況	1
3	戦後の子供の生活と遊び	1
①	子供の生活	1
②	子供の遊び	1
4	戦後の就学前教育	1
①	二名保育所	1
②	小富士保育所	1
③	青葉幼稚園	1

三 農 業

1	農地改革と財産税	28
①	農地改革法創設の経緯	28
②	農地改革法の概要	28
③	農地改革の影響	28
④	財産税	29
2	戦後の稲作	30
3	戦後農家の耕耘機の普及	33
4	戦後の農家住宅	36
①	戦後の住宅事情	36
②	昭和二十五年建築基準法制定さる	36
③	戸建住宅競技設計入選作品の要点紹介	36

四 復 員

1	思い出の手記	38
2	命永らえて	40
3	軍隊十ヶ月捕虜二年半の いやなシベリヤの思ひ出	43
4	幽霊で帰った	45
5	終戦から復員まで	47
6	開拓団の思い出	50

五 地方自治

1	民主主義理解と徹底のために	
2	戦後誕生した青年団とその活動	
①	誕生の背景	
②	主な活動の足跡	
③	青年団活動の回想	
④	青年団と演劇(芝居)	
⑤	青年団よ再び	
3	大字公民館の変遷	
①	明治・大正・昭和初期	
②	新公民館の建設	
③	公民館改築	
4	戦後の消防団	
5	字場という端末自治組織の 戦後の問題点	

付 録

略年表	
-----	--

①	区長を中心とする字場の生いたち
②	戦後における区長制のあり方
③	国営道前道後水利開発事業の反省
④	村内に散在する社寺と字場のかかわり方

一 戦後の生活

1 混乱期

① 進駐軍（占領軍、駐留軍）と夏時刻
ア、アメリカ軍の進駐

駐留軍の中心はアメリカ軍であった、戦後の一〇月六日に吉田浜（飛行場）に上陸した。そして旧日赤病院の焼け跡の整地をブルドーザーが稼働した、国内で見るのは初見。またコンプレッサーや製材鋸の動力源にジープが用いられていた。設営された何

条ものテントの列と、暖房の煙突が印象的だった。軍政の本部は、当時の県立図書館が充当され、そこから県全域に軍政が敷かれた。当時の旧北伊予村で

の状況について。（旧日赤跡は、
・ 婦女子の暴行被害を未然に防
い。

・ 終戦時の秋頃、アメリカ軍の
〇〇名程度が松前から東進し
ちにガムやチョコレート配
・ 村内の一部の家庭（蔵持ち）
宅捜査をして、猟銃や刀剣類、

1 戦後の生活

④ 生活物資の不足

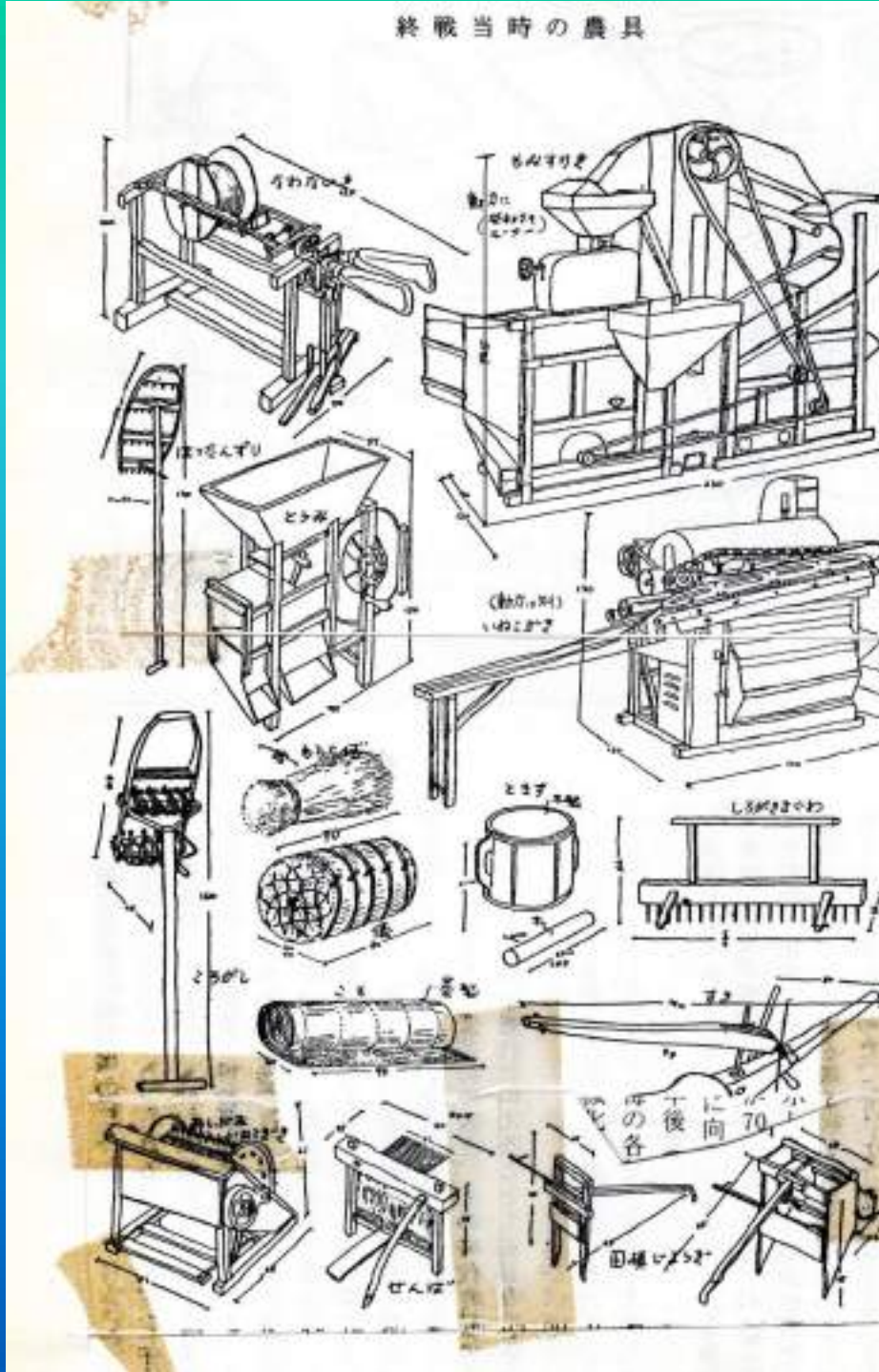
ア、物々交換

戦後の生活物資の不足は、戦中よりも増していたようである。生活物資の総てが統制下におかれており、総てが切符と行列で順番の来るのを待ってあった。マツチ・清酒・砂糖・木炭・飼料・肥料までも切符が無ければ入手が出来ない状態だった。

物品の移動は物々交換が主流で幅をきかせていた。「新しいラジオ買ったぞ」「なんぼしたん」、「米と替えてくれと言うた」。松山の電器店が来て米との交換交渉の会話である。現金収入の少ない農家と、米が欲しい商店とが妥当とし、物々交換で物品は移動していた。その後、ラジオは永らく両親に親しまれていた、外観は局型であったが中身は改造されて、精度の高い機器が組み込まれてれていた。（一般には「タケノコ生活」）



終戦当時の農具



終戦当時の農具

二 戦後の教育

1 戦後教育の変遷

昭和二十年八月十五日の終戦を機に、教育制度や教育内容は、大きく変革をした。北伊予小・中学校の教育も例外ではない。ここでは昭和三十年過ぎまでの教育の変遷について述べる。

① 学校教育（小・中学校）

ア、小学校

○ 北伊予国民学校から北伊予小学校と名称が変わる。国民学校は初等科六年、高等科二年に区分され八カ年の義務教育であった。

○ 新しい小学校は六年間で、初

イ、中学校

○ 昭和二十三年度より村立北伊れた。三カ年で義務教育年限は年間となった。

○ 北伊予小学校を卒業した児童校へ進学していた。

○ 当初の中学校は今までの小

3 戦後の子供の生活と遊び

① 子供の生活

ア、農業の手伝い

終戦、物資の不足は一段と厳しくなり、統制が強化された。とりわけ食糧の確保は、国民が生きながらえるための至上命題だった。主食の増産に対する指導は供出の強化というかたちで一層厳しくなった。農家は懸命に増産に励んだ。子供達も年齢相応に役割を課せられ、四、五年生ともなれば一家の重要な労働力として頼りにされた。

○ 稲の中耕、除草など

炎天下熱湯の中、ころがし、はりたんずり、株の元掻きなど中耕・除草の作業が続いた。農家間で「縦横何回やった」などといって競い合った。この時期の仕事の苦しさは例えようがなかった。人海戦術で、子供達も駆り出されたが、想えば楽しいはずの夏休みのことである。

○ 牛や鶏の世話

平均的な農家には、牛一頭と鶏十羽前後が飼われていた。飼料の草刈り、藁切り、餌やりなど、子供に分担させている家も多かった。九、十月頃の、鶏の餌にするイナゴ獲りも子供達の日課であった。

○ 麦作りの作業

2 戦後の教育

3 戦後の子供の生活と遊び

① 子供の生活

ア、農業の手伝い

終戦、物資の不足は一段と厳しくなり、統制が強化された。とりわけ食糧の確保は、国民が生きながらえるための至上命題だった。主食の増産に対する指導は供出の強化というかたちで一層厳しくなった。農家は懸命に増産に励んだ。子供達も年齢相応に役割を課せられ、四、五年生ともなれば一家の重要な労働力として頼りにされた。

○ 稲の中耕、除草など

炎天下熱湯の中、ころがし、はりたんずり、株の元掻きなど中耕・除草の作業が続いた。農家間で「縦横何回やった」などといって競い合った。この時期の仕事の苦しさは例えようがなかった。人海戦術で、

子供達も駆り出されたが、

○ 牛や鶏の世話

平均的な農家には、牛一頭、鶏一羽飼っていた。飼料の草刈り、藁の束ね、糞の処理に分担させている家も多かった。餌にするイナゴ獲りも子供達の仕事だった。

○ 麦作りの作業

3 戦後の子どもの生活と遊び

2 戦後誕生した青年団とその活動

① 誕生の背景

苦しくて暗いそして悲しい戦争であった。昭和二十年八月十五日！その日より多くの若者は、それぞれに複雑な感慨を胸に秘め祖国日本へ復員し茫然たる日々を過ごしていた。そのころ復員した若者、土居和臣（出作）氏により次の歌が発表された。

（一） ああ弓折れて矢弾尽き 山川影は変わらねど
散りにし桜の心は如何に 光求めて幾春秋
立てり北伊予青年団

（二） 省略 ——— 作詞作曲 土居和臣

（昭和二十一年五月十日 北伊予青年団団歌として採用することを役員常会にて決定する。）

右の歌でも感じられるように「何かをしなければ……」と自らの行く手を模索する若者の切なる心情があらわれているのではないか。

このような情勢の下で、土居和臣氏は、多くの若者達と語り合い議論し合いながら新しい北伊予青年団出版のため日夜努力されたのである。以下は筆者の記録ノートの中から主な活動を抜粋した。

四 参考資料

○北伊予の子どもの遊び（戦前）

◎新年（一三）			・羽根突き	・絵双六	・銭ころがし
・風あげ			・手鞠つき	・独楽まわし	・家族あわせ
・いろはかるた					
◎春（四五）			・土手すべり	・ままごと	・金輪まわし
・花いちもんめ			・わらび摘	・つんばなぬき	・木のほり
・人形遊び			・しゃご	・甘茶もらい	・豆うち
・うりやごと			・土筆つき	・いたんぼとり	・蛇つかみ
・摘草			・風車	・紙ヒコーキ	・紙鉄砲
・川原あそび			・手ぬぐい引き	・首引き	・笹舟
・すもうとり草			・すいばとばらの芽とり		・あんたがたどこさ
・ギッコンパッタン					
◎夏（五〇）			・鬼ごと	・かくれんぼ	・草矢とばし
・てるてる坊主			・まいまい	・目高すくい	・松葉角力
・草履かくし			・草のわな	・麦笛	・一が刺した
・豆の笛			・水鉄砲	・水うつし絵	・蟹釣り
・麦藁細工			・百八燈会	・おしろい花の輪	・お手玉
・七夕まつり			・ふり駒	・将棋倒し	・子供将棋
・お盆飯			・蟬採り	・もんどり	・ひし採り
・水車遊び					
・ほうずき（うみほうずき）					
◎秋（二七）			・影ふみ	・竹とんぼ	・雨か日和か
・肩車			・でんでん虫取り	・藁鉄砲	・ぶんまわし
・蜻蛉とり			・鬼ごと遊び	・たのもさん	・しつぺい
・紅葉土俵			・折り紙	・竹トンボ	・風車
・木の実ころがし					
◎冬（三九）			・足角力	・馬とび	・鞠あて
・竹馬			・字あて	・手たたき遊び	・ぬくもれい
・こうばね			・石けり	・なぞなぞ	・投げ玉
・縄とび			・物まね遊び	・あぶりだし	・ハンカチ落とし
・釘立て			・草焼き	・亥の子	・真綿飛ばし
・ランコン			・にらみっこ遊び	・オイヨンとり	・雪達磨と雪合戦
・正月を待つ唄					

略年表

年	1945	1946	1947	1948
米価表	120円	220円	691円20銭	0銭
国内の動き	・8月9日ソ連対日宣戦・14日ポツダム宣言受諾・15日天皇による終戦の詔書放送 ○東久邇内閣成立 ・GHQ・マッカーサー元帥日本管理方針発表 ○9月舞原内閣成立 ・GHQ人権の五大改革（男女同権・労働者団結権・学校教育の自由化・専制の廃止・経済の民主化）・教育の四大指令（軍国主義の排除・軍国主義の追放・行政の宗教的行事の禁止・修身・地理歴史授業の中止）を要求 ・総司令部・財閥解体・農地改革指令	・元旦、天皇の人権宣言 ・軍国主義・国家主義者の公職追放 ・第一次米国教育使節団来日（教育民主化を要望） ・極東の軍事裁判開始 ・戦後初の総選挙（婦人代議士誕生） ・メーデー復活（食糧メーデー） ○第一次吉田内閣 ・第二次農地改革指令（農地委員会） ・日本国憲法公布（平和・国民主権・国際協調）	・教育基本法・学校教育法公布（平和と民主主義教育方針）（六・三・三・四教育制度発表）（教科書、教材の小中学校社会科授業新設） ・小中学校社会科授業新設 ・財産税の徴収（10万円以上の財産所有者） ○片山内閣成立 ・国家公務員法公布 ・農業共済組合法発足 ・米消費基準2合5勺に増量 ・GHQの占領政策変換 ○片山内閣成立	・旧制中学校は一斉に新制高等学校・48高校誕生（総合制、男女共学単位制をめざす）
県内の動き	・戦災校も借用教室で授業再開 ・連合国の進駐開始 ・文部省新日本建設の教育方針 ・大凶作（半作、外食券制へ）	・御真影奉安殿の撤去通達 ・中国からの引揚げ開始 ・小作料金納制となる ・県内各労働運動が展開し始める ・南海地震で道後温泉の湯が3ヶ月停止	・地方自治法公布 ○青木重臣知事当選	
北伊予村内の動き	○伊賀上武村長 ・北伊予国民学校校舎の一部を松山工業高校が借用（21年10月迄5クラス） ・松山等戦災者の受け入れ ・国内の復員開始労働員等解除	・第一回農地委員選挙 ・町村制改正 ・消防団発足（団長は村長） ・北伊予婦人会結成 ・衣・食・住等生活物資の不足	・新制北伊予小中学校発足（男女共学） ○三好嘉三郎村長 ・4月占領軍により区長制改革 ・北伊予小中学校PTA結成 ・小学校ミルック給食開始 ・農地開放実施 ・地方自治法公布	・小学区制に（北伊予は松山第二十四校区下に入る） ・農業組合法により北伊予農協発足（自作農創設を目標に）
摘要	・大谷池完成 ・市駅前築市 ・DDT散布の普及 ・枕崎・阿久根台風	・道後温泉祭復活 ・中の川ホテル（パルク飲食店） ・南海地震海岸線沈下 ・リンゴの歌	・ロスオリンピック古橋優勝 ・戦後の捕鯨開始 ・赤い羽根共同募金開始 ・開物資・隠匿物資	・戦災校窓紙障子 ・道後温泉、新温泉開
総括				

「北伊予の伝承VI」企画・編集委員名簿

委員長	田中 義一	大 溝	委員	山口 稲男	神 崎
副委員長	本多 俊夫	中川原	委員	友沢 篤子	神 崎
副委員長	神野 弘良	出 作	委員	松田 茂	鶴 吉
副委員長	相原 隆志	鶴 吉	委員	済川 裕	鶴 吉
副委員長	中村 文雄	永 田	委員	伊賀上洋子	鶴 吉
副委員長	田中 義和	徳 丸	委員	徳本 忠司	横 田
委員	山本 庫市	中川原	委員	松田 一正	横 田
委員	加藤 修	中川原	委員	澤田 正輝	永 田
委員	西村 博明	出 作	委員	早瀬 辰郎	東古泉
委員	神野 昌孝	出 作	事務局	早瀬 義明	東古泉
委員	水口 義一	神 崎	事務局	水口 憲三	出 作
委員	河野 好雄	神 崎		武智 浩二	北黒田

第6集 企画・編集委員のみなさん (22名)

北伊予の伝承

VII



(北伊予十津院神社の境内に建立された石碑)

松前町東公民館

第7集

発行 平成16年3月

29ページ

編集委員長 水口 憲三

編集委員 26名

館長 吉田 健勝

目次

1 徳丸	遠藤良貞	1
	後藤光太郎	1
	林實正	2
	後藤正利	2
	八束可海	3
	加藤精神	3
	木下樂次郎	4
	林憲正	4
2 中川原	本多 欽	5
	本多儀市郎	5
	松浦狂亮	6
	加藤敏之	6
3 出作	神山諱鏖	
	野本儀一	
	西村喜代一	
	西村博明	
4 神崎	水口佐重郎	
	高石文明	
	小笠原宗利	
	武市通佳	
	野本 颯	
	橘 貴志榮	
	高市 格	
	加藤龍雄	

5 鶴 吉

阿部 萬佐衛門 13

相原 賢 13

相原 修 14

伊賀上 武 14

伊賀上 上季 15

6 横 田

町田 勇 15

松田 春義 16

篠崎 圭介 16

7 大 溝

高市 四郎 17

田中 萬次郎 17

田中 團四郎 18

高市 喜慶 18

栗原 安貞
橋本 彰

8 永 田

中村 久藏

武市 庫太

中村 重一

9 東古泉

稲垣 茂

早瀬 政夫

10 付 録

略 年 表

【徳丸】 林 實 正（二八八二—一九五九）

北伊予村八代目村長 地域医療に貢献



林先生は大阪大学医科専門学校（今の大阪医大）で医学を学び卒業後京都大学においてお医者さんの研究をなされた後明治四十一年三月徳丸部落の西端で医業開設されました。その間実に五十年半世紀に亘り良きお医者さんとして広く世の中の人々のため働き続けられました。

特に先生は非常に良心的なお人柄であり常に患者に対しては親切丁寧な診察されたそうです。又自分の診断が明確でないとか或いはうたがわしいと思う患者に対しては直ちに専門医の治療をすすめる少しもえらそうなくことなく医者としての良心によって患者が完全にかつ速やかに全快されることを祈られたとのこと。大正八年には県会議員に当選し愛媛県の発展につくされました。又村会議員も十二か年の任期を満了とめられ更に推されて北伊予消防組頭として活動され、消防組の充実とその本来の使命達成につくされ、消防組の賞である内務大臣表彰による功績章が贈られました。林先生はこのように郷土につくされました。そして公務は伊予郡医師会長、愛媛県医師会副会長、又北伊予校医村医として四十年間その職分を担われました。その後公選制第一回の村長に当選づくりの第一歩を示されたのであります。

【徳丸】 加藤 精神（二八七二—一九五六）

文学博士 偉大な佛教学者



加藤僧正は徳丸の農家、加藤平七氏（現加藤八郎家）の二男として誕生され十六歳に「精神」と改名されるまでは常太郎と呼ばれていました。十一歳の時石手寺の松尾章純和尚の弟子となり、得度して「精神」と改名された。

東京遊学が許され上京、音羽の護国寺へ入門、その後哲学館（東洋大学の前身）、さらに真言宗新義派大学林（大正大学の源流）を卒業された。二十三歳で真言宗豊山派特学生となり、長谷寺で仏教の研究に専念、数多くの学術論文や著書を発表し宗教の粋を究められました。五十四歳で豊山派管長に就任、大司教大僧正に任命され、長谷寺の僧化となりました。大正大学名誉教授、東洋大学教授、東京帝国大学講師を歴任された。六十三歳で大正大学長、八十一歳で東洋大学長に就任された。昭和三十一年（八十四歳）でなくなられるまで佛敎の研究を一心にされ中国にまで知られ佛敎学者としては我国第一人者となられた。加藤精神大僧正は学者だけでなくお寺の経営の面でもすぐれた手腕を発揮されました。出身地徳丸を十一歳で出られたので郷土と親しみは薄いけれど徳丸の生んだ偉大な佛敎学者として、没後四十年目に徳丸の人々によって本性寺境内に胸像・顕彰碑が建立されました。

北伊予にゆかりのある人たち — 43名 —

各地区から1名選びここに掲載した

〔出作〕西村 喜代一（一八九五—一九八七）

地域の教育の振興に尽力



先生は、明治二十八年七月二日、出作に生まれた。

幼少の頃より才知にたけ、向学心に燃えた少年であった。愛媛師範学校へ進学し、大正五年卒業と同時に北宇和郡畑地尋常高等小学校訓導を拝命し、希望躍し多くの有能な人材を育てられた。

昭和四年佐礼谷尋常高等小学校校長を拝命し、校長として学校経営に手腕を発揮された。同十一年三月より、伊予尋常高等小学校校長に就任し、翌年から愛媛県視学に任命され地方教育行政官として教員の任免等教育行政に敏腕を振るわれた。同十六年三月より北伊予尋常高等小学校校長に就任。戦時色一

色の教育に全力を傾注し、同十九年三月従七位、戦後、新教育の推進にも尽力され、昭和二十日付で教職を勇退された。退職後、同二十八年北伊予村教育長、同三十年四月一日より初代松して温かい人柄と高邁な識見、教育に対する卓発揮され、地域の教育の発展に多大の貢献をした先生は、詩吟にも大変興味を持たれ、「伊予吟」、漢風流宗家として多くの吟友会員を育て、愛媛県吟詠舞踊総連盟の創立にも多大の貢献を、「人生すべて途中なり」の言葉を生活信条とし

〔神崎〕小笠原 宗 利（一九〇三—一九九〇）

北伊予村十代目村長



東公民館一階和室に、北伊予村歴代村長の写真が掲げられている。第十代村長が小笠原宗利氏である。氏は北伊予村最後の村長として、後に遺恨を残さないよう岡田村・田松前町との対等合併に尽力された。合併後は、

新生松前町の初代助役として、難関山積の中、町政の中心となり手腕を振るわれた。（長兄武則氏も石井村村長）

略 歴

- ・明治三十六年 石井村和泉（現松山市）生れ
- ・昭和二十二年 宇摩郡地方事務所長
- ・二十三年 愛媛県農業協同組合本部課長
- ・二十四年 伊予地方事務所長
- ・二十六年 愛媛県統計課長
- ・二十七年 愛媛県建築課長 同年九月愛媛県庁退職
- ・二十八年五月—三十年三月 北伊予村第十代村長
- ・三十年五月—三十三年五月 松前町助役
- ・三十八年 松山地方裁判所調停委員
- ・四十一年 北伊予土地改良区理事
- ・四十二年 道後平野土地改良区理事
- ・四十四年 松山家庭裁判所調停委員 同年五月北伊予土地改良区理事長
- ・四十九年 勲六等旭日章受章

〔鶴吉〕相原 賢（一八二一―一八八九）

永遠に垂れ給う先生の訓へ（頌徳碑）

〔賢〕先生略歴

文政 四年（一八二一） 鶴吉村安井に生る
 十一年（一八二八） 井上桂庵について読書
 天保 六年（一八三五） 陶惟貞に経学を学ぶ
 十年（一八三九） 僧顯光について経学を学ぶ
 嘉永 元年（一八四八） 鷺野南村に師事
 小松式部に天文数学を学ぶ
 日下伯巖に詩書を学ぶ

〔安井稻荷神社近くに私塾を開く〕

安政 六年（一八五九） 芸芸の人、有田タケと結婚
 明治 五年（一八七二） 学制令発布 私塾廃止
 六年（一八七三） 四等教官（上三谷日進校）
 七年（一八七四） 長男修生る。墨本交遊
 九年（一八七六） 神崎義方小学校
 十二年（一八七九） 検定合格、一等
 二十二年（一八八九） 九月十四日没



大正十二年五
 生頌徳碑建立
 定。費用は門人
 金とする。碑文
 高木武氏に依頼
 月十八日完成。

〔横田〕篠崎 圭介（一九三四―二〇〇四）

愛媛を代表する俳人



終えられた。未だに涙が乾かない。

父 俳人篠崎可志久、母 幸枝の四男として誕生、松山中学、

立教大学文学部卒業後、俳句の道へ進まれた。富安風生に師
 事、弱冠二十歳で「若葉賞」受賞。森薫花壇なきあと「糸瓜」
 の主宰となられ、その指導運営と愛媛俳句の発展に尽力され
 た。俳句は愛媛より、愛媛に根ざした詩的純度の高い作品を、
 モットーに指導された。又、「子規百年祭」の行事など、功
 績は大きい。

松山戦災後、郷里横田に帰られ、北伊予小学校卒業、一、
 三年の在住。三冊の句集「知命」「旅信」「花」と共に、篠崎
 圭介先生は永遠である。横田の偉大な先人である。厳しい中
 にも温和な先生、句会での先生の伊予弁とあの笑顔。墓所は
 横田天長寺にある。

愛媛出版文化賞。文部科学大臣より地域文化功労賞。NH
 K四国ふれあい文化賞。愛媛県教育文化賞。愛媛新聞賞。
 句碑 正直や一つ咲いたる山椿

涛音の月日のしだれざくらかな 今治河野記念館

〔永田〕 武市 庫 太（一八六三—一九二四）

文化人の政治家



武市庫太氏は文久三年（一八六三）愛媛県伊予郡永田村（現松前町永田）の庄屋武市元衛氏の長男として生まれた。

明治十年愛媛県立松山中学校に入学、松山中学校時代正岡子規の住居近くの叔父武市英俊氏の家で寄宿していたことから正岡子規の良友として、漢詩仲間として深い交遊をもっていた。その後、二人は詩作のみならずお互いに気が合ったらしく、子規は永田村の武市邸を訪問した。

明治十五年松山中学を卒業後、向学の志にもえる庫太氏は父の許しを得て、京都同志社英学校に進んだ。三年のとき父の病のため帰郷し、家督を相続し、以後独学に励んだ。

その後、村役場の村用係になり、神崎村外八十一歳の若さで県会議員となり、衆議院議員もこの間、地域のため、莫大な私財を投げだして

晩年は東京へ転居し、芝に住居を構え病床の子鳴雪、虚子、碧梧桐等とよく句会を開くことも郷里を訪問し、故郷の人々と親しく交わり、故郷とはなかった。

〔大溝〕 高 市 喜 慶（一九〇八—二〇〇二）

若くして養鶏に志し、その普及に尽力



- ① 先進地愛知県に養鶏技術、経営取得のため国内留学。
- ② 習熟後大規模養鶏に取り組む。「愛媛県認定種鶏場」と大きく標示した鶏舎が並んでいたことを思い出す。
- ③ 各家庭の養鶏熱が高まる。高市氏を中心に同志が集い養鶏組合を設立、飼育数は実に一万羽に及んだ。

郷土史の調査研究、普及発展に生涯を捧げる。

- ① 松前史談会の発足に尽力。会の発展と会員拡大に貢献。
 - ② 郷土史の研究と普及発展に活躍した。
 - ③ 松前っ子道中（当時の扮装での親・子・孫による歴史探訪）の企画・運営活動への貢献。
 - ④ 原田地区ゆかりの赤穂浪士「菅谷半之丞」の調査及び昭和五十五年の墓碑再建と管理者としての日常活動。
 - ⑤ 重信川流域の水利、地下水や水質等の調査とその活用。
 - ⑥ 伊予高等学校への協力（——高市喜慶さんからは学校所在地の昔からの写真、水の研究資料等のご提供を、また科学部員が地域のことを教えて頂いております。略）当時の石丸校長の「龍灯」寄稿の謝辞の一部）
 - ⑦ 松前町誌の編集後記には、高市喜慶氏の諸種のお力添えに感謝を捧げるとの謝意をいただいている。
- なお同氏は、本誌Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの編集者でもあった。

〔東古泉〕 稲垣 茂 (一九〇八―一九八六)

学校教育・社会教育や歌人として尽力



先生は、村議を長く勤められた稲垣重太郎氏の長男として、明治四十一年に東古泉で誕生された。

先生は、昭和二年から小学校教員をされ、昭和三十九年松前小学校校長を最後に定年退職を

された。当時、松前町は町再建という困難期であり、教育の町宣言も発表されていた。町より懇願されて教育長に就任されたのが昭和四十三年であった。就任以来、町内学校教育はもとより、社会教育行政に敏腕をふるわれ、その卓越した識見と実践力は町内のみならず県下でも高く評価されており、その熱情と行動力は人々の尊敬の的となっていた。北伊予中学校が現在地に移転、校舎が新築されたのは、先生の教育長在任中のことである。

学校在職中より短歌の道にいそまれ、退職と同時に短歌結社「若鮎」に入会された。昭和四十一年に松前町短歌会を結成、会長として会の発展に尽力された。また、昭和五十五年に東古泉短歌会いずみを創設され、指導に当たられた。

先生の業績により、昭和五十七年に「勲五等双光旭日章」を受章された。

先生の数多く詠まれた歌の中から、一首挙げたい。

伊予鉄の線路に五平太拾ひしは
筒袖きたる童の目な



旧北伊予村役場 (昭和13年新築記念)

懐かしき哉 北伊予村役場

年 代		村 長	氏 名	外 業	特 記 事 項
1688	元禄 1	元禄16年	↑ 阿部萬左衛門		伊予郡24箇村手鑑
1689	〃 2				
1697	〃 10				
1704	宝永 11	松山大洲両藩の境界で水争いは万年化 享保9年	(大洲藩上野村庄屋阿部萬左衛門の支配下)		
1714	正徳 4				四国遍路日記
1722	享保 7				質流れ禁止布達・富豪の土地集積化
1723	〃 8				神取泉間寸畝付
1732	〃 17				作兵衛餓死
1738	元文 3				古泉村→西古泉・東古泉に分かれる
1741	寛保 1				上三谷一字一石塔
1744	延享 1				
1751	宝暦 1				

付録 年表(部分)

北伊予の伝承

VIII



松前町東公民館

第8集

発行 平成18年3月

28ページ

編集委員長 水口 憲三

編集委員 28名

館長 吉田 健勝

目次

一 水とくらし

1 重信川水系の水源

(1) 北伊予と重信川

田中 義一

1

(2) 徳丸の水とくらし

田中 孝

3

2 水の恵み

(1) 水に親しむ

① 中川原の水とくらし

山本 庫市

5

② 横田の生活用水について

山崎 健三

6

③ 魚とり

三好 安明

7

④ 鶴吉の水車

相原 隆志

9

(2) 農業とくらし

① 苗代づくり、田植え

水口 憲三

10

② 米作り

山口 稲男

11

③ 農繁期のくらし

大政 邦和

12

④ 農閑期のくらし

渡部 朝明

13

二 あのことろのくらし

1 装いとくらし

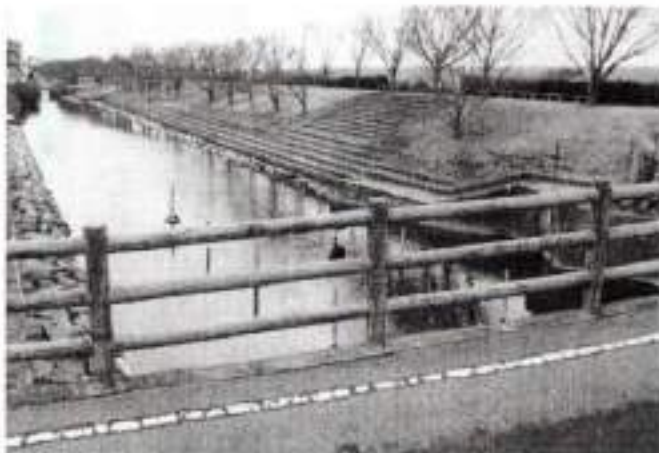
(1)	戦中の装い	済川 裕	14
(2)	昭和の装いとくらし	山本 庫市	15
(3)	平常着と仕事着	高石 勤	16
(4)	寝具と暖房	渡部 喜代隆	17
(5)	ふるさと北伊予の履物	升田 守	18

2 食とくらし

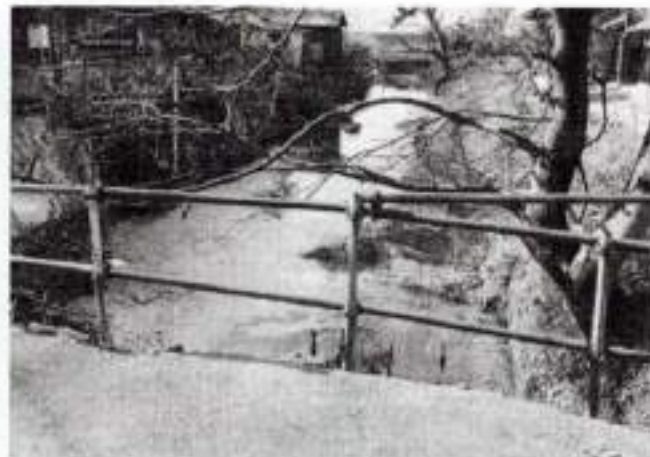
(1)	かまどと箱膳	夏井 武	19
(2)	雛節句とおなぐさみ	高石 勤	20
(3)	にわとりと卵	日野 勇	21
(4)	終戦直後の食料難のころ	神野 弘良	22
(5)	空腹のころ	渡部 喜代隆	23

3 住まいとくらし

(1)	かやぶき屋根の母屋	水口 憲三	24
(2)	建前の行事	三好 安明	25
(3)	涼を求めて	野本 和伯	26
(4)	伊予万歳と住まい	本田 眞一	27
付図	水系・道路系における北伊予の環境	田中 義一	



赤坂泉



夫婦泉北池



赤坂泉水路
水論発祥の地



夫婦泉南池

水とくらし

－赤坂泉と夫婦泉－

③ 魚とり

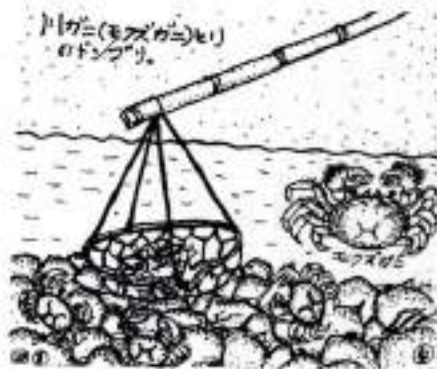
東古泉 三好 安明 (昭和8)

昭和30年代の子供の遊びは野外を走り廻って過ごすことが多く、川や泉の魚とりは夢中になって日暮れになってしまいうこともあった。東古泉の三好健二さん(昭和14)に川漁について話を聞いた。

「東古泉を流れる長尾谷川と灌漑用水路は草土手でメダケのブッシュ、柳の木、川面にはヨシが茂りコイ、フナ、ウグイ、ザリガニ、カワエビ、シジミ、ドブカイ、ナマズ、ウナギ、モクズカニなど淡水生物の宝庫でした。

● 川ガニ(モクズカニ)とり

直径35cmくらいの太い針金の輪をつくり、四隅をひもでつり輪には荒めの網をとりつけます。輪の中央に針金を通し、これにカエルや魚の頭を串刺しにして四隅のひもを竹さおに固定します。夏の夕方深みのある川に沈めます。時間をおいてひき上げると川ガニ(ガニツといった)



図① 川ガニとりのドンブリ

● 夜がわ

夏の季節になると、ガキ大将を中心に四、五人が集まり自然と話はまとまる。夜がわである。風のない新月のころを選ぶ。月あかりがあると魚が逃げやすいためである。持参するものは各自で分組する。夕方よりも夜ふけがよい。魚の動きがにぶいからである。わらそうりをはく、石の上を歩いてもすべりにくいからである。(長ぐつのある者はすくなかった。)川下から川面をあかりを照らしてゆっくり進む。あかりは懐中電燈かガスランプをつかう。ガスランプは固形のカーバイドを容器に入れ、上部から水を滴下し、発生するアセチレンガスに点火するのである。流れのゆるいところのフナ、コイ、ウグイ、そしてナマズやウナギをヤスや手あみで捕るのである。(図④)



図④ 夜がわ

水の恵み



衣料切符

また、そのころは、丈夫な木綿の衣料の配給がないので、古い衣料の縫い直しや、模様替をして、適切に利用しておりました。男性の服装は緑がかった草色(国防色)の国民服が制服でゲートルを巻いて、人工皮革の靴か、ズック靴で通勤通学、勤労作業もしておりました。

国民服も婦人標準服も学生服も、スフ混紡で、洗濯すると縮んで型が崩れる粗末なものでした。

あの頃の装いとくらし

—衣料切符—

2 食とくらし

(1) かまどと箱膳

永田 夏井 武(昭和10)

● かまどと燃料

かまどはこの地域ではクドと言っていた。その家の経済力でクドの数が違っていた。普通は2個のクドで一つは、ご飯、おかず、ホーロク用。一つは大量の煮物用(牛の飼料の麦等)で、左官さんが漆喰塗りで作っていた。また、クドの他に焼魚やお茶を沸かすのに練炭を使用する七輪があった。

● 燃料はまき(しば、割木)

で風呂には麦わら、豆殻、特に小麦わらは火力が強いで重宝がられていた。炊事用のまきは砥部町や伊予市で雑木、くぬぎを買い受け、冬分の農閑期を利用して伐採し、丸太はころ合の長さに切って、まさかりで割り、乾燥させて使用していた。しばは焚きつけ、火の調節をする場合に多く使っていた。

● 食材と台所

主食は麦飯が主で、米が2〜3割のご飯であった。現在のよう



かまど



箱膳

食とくらしーかまどと箱膳ー

3 住まいとくらし

(1) かやぶき屋根の母屋

出作 水口 憲三(昭和12)



かやぶき屋根の母屋 (東温市にて)

終戦までわらぶ
き屋根の家がまだ
残っていました。
出作の中野美津子
さん(大正13)に聞
いた。

「わらぶき屋根の
家は、夏は涼しく
冬は温かくてとて
も住みやすいので
すよ。嫁入りして
来たときはかやぶ
き屋根でしたが、
材料のかやが手に
入らないため小麦
わらでふきかえま
した。(昭和25ま
で)」とのことでした。

日本の四季(梅雨を含め)を考えて造った先人のすばらしい知恵
に敬服いたします。

さらに近所の弓達武明さん(昭和12)は「屋根のふきかえに使
うため小麦を手分けして作っていました。」と言う。しかし、

住まいとくらしーかやぶき屋根ー

(2) 建前の行事

東古泉 三好 安明（昭和8）

家を新築することは、一生のうち何度とあるものではない。財力を貯え長い準備期間と間取りを決め、建築材の選定など先人の援助を受け、棟梁の采配（さいはい）を仰ぎながら取り組む。建築一筋40余年の実績を持つ東古泉の池内巖さん（昭和8）に昭和30年代の建前の行事について聞いた。



図① 地鎮祭

● 地鎮祭

敷地を整地して図①のように四方に4本の笹竹を立て、紙垂（しで）をつけた結界（けっかい）で囲みます。中央に盛り砂をし、紙垂をつけたサカキを立てます。正面に台を置き白米、魚、野菜、海藻、清酒を並べます。準備ができたら世帯主とその家族、親戚、工事関係者が参列し、氏神社の宮司を招きます。宮司は祝詞、お祓い（はらい）をし諸緒（しよしよ）の邪悪（よこしま）をとりのぞいて清らかにし、工事の安全を祈願して終了します。

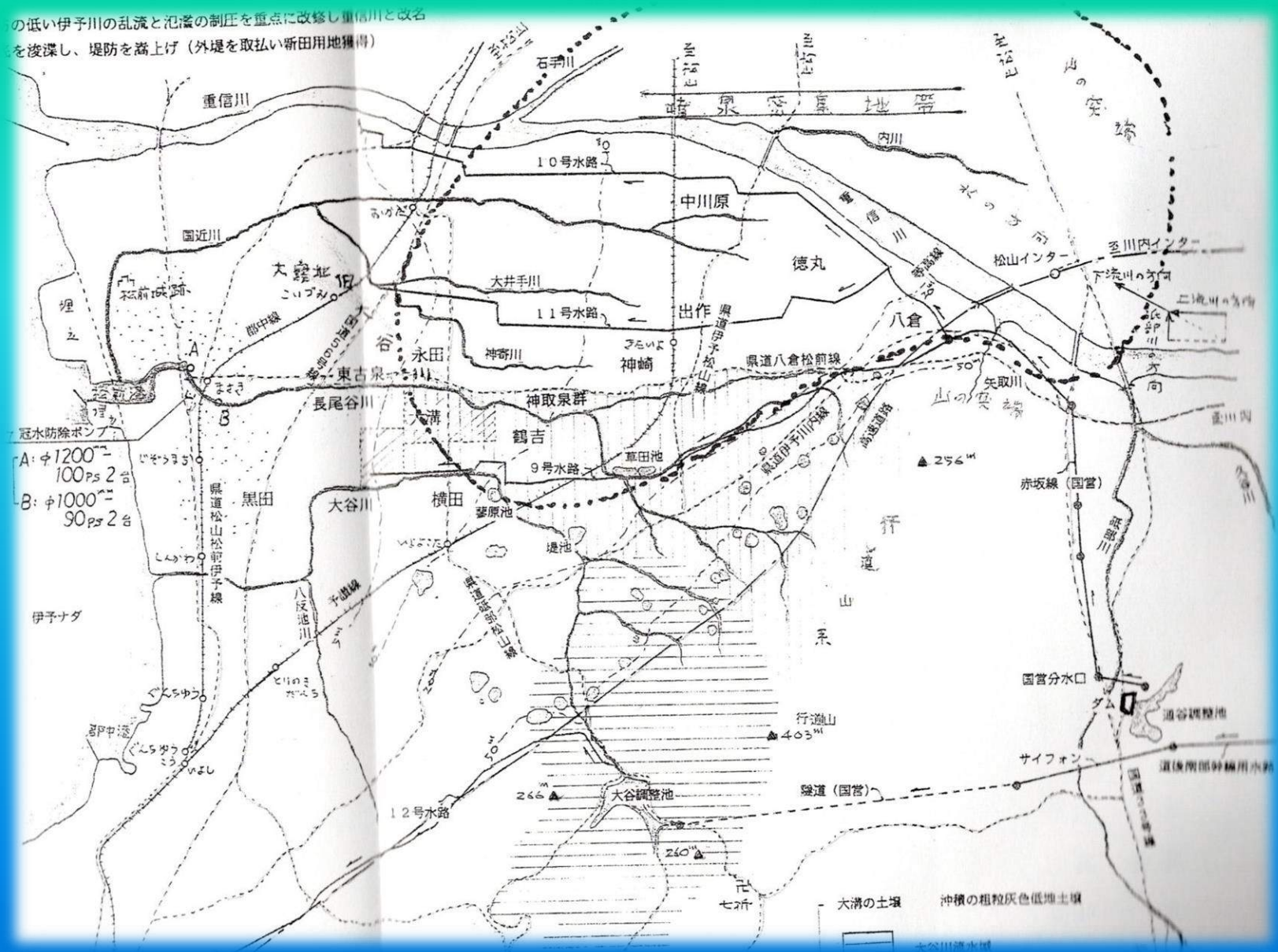
● 地搗き

整地したところの柱の並ぶ個所に溝を掘ります。すべて人力です。溝には小児頭大のぐり石を並べ櫓（やぐら）を組み四方に4個の動滑車（どうくわ）をつけ麻網（あし）を通し、4人の搗き（うつき）手が持ち、丸太をつり上げては落下させます。もう一人は丸太の根元の綱を引き、搗く場所をかえ、ぐり石を固めコンクリートを流します。

● 棟上

大安吉日を選び、レッカー車などないころのため、すべて人

の低い伊予川の乱流と氾濫の制圧を重点に改修し重信川と改名
を浚深し、堤防を嵩上げ（外堤を取払い新田用地獲得）



付録 水系・道路系における北伊予の環境

「北伊予の伝承」企画・編集委員名簿

委員長	出作	水口 三
委員	大津	田中 義一
委員	鶴吉	相原 隆志
委員	出作	神野 弘良
委員	崎 九	高石 勲
委員	徳 九	田中 孝
委員	中川原	渡部喜代隆
委員	中川原	山本 康市
委員	神 崎	本田 眞一
委員	神 崎	山口 稲男
委員	鶴 吉	野本 和伯
委員	鶴 吉	菅 祐
委員	鶴 吉	伊賀上 洋子
委員	横 田	大段 邦和
委員	大 津	日野 守
委員	永 田	升田 静喜
委員	永 田	二宮 武
委員	永 田	夏井 朝明
委員	東古泉	渡部 健二
委員	東古泉	三好 安明
委員	筒 井	三好 健勝
委員	北黒田	吉田 武智

松前町東公民館長
松前町東公民館主事

第8集 企画・編集委員 のみなさん（21名）

北伊予の伝承
IX



龍前町東公民館

第9集

発行 平成20年3月
41ページ

編集委員長 水口 憲三

編集委員 21名

館長 吉田 健勝

発行にあたって

今回「年中行事」の所を掲載「九集」を出版するにあたって、現在「年中行事」を出版して、本誌が北信市で行なっている。

最後の「年中行事」の所を掲載「九集」を出版するにあたって、現在「年中行事」を出版して、本誌が北信市で行なっている。

平成20年3月

吉田健勝

松田健勝



中村文雄氏制作の木版画集「**年中行事絵図**」の表紙

第9集のいたるところに木版画を使用させて頂いた。

目次

一 正月の行事

1 正月の準備

- (1) 門松
- (2) 東古泉の餅つき
- (3) 徳丸の餅つき
- (4) しめ飾り
- (5) すす払い

2 大正月の行事

- (1) 初詣
- (2) 若水・屠蘇・雑煮
- (3) 若水・雑煮・屠蘇
- (4) おたなさん(歳徳神)

3 小正月の行事

- (1) 御祈祷
- (2) 組祈祷
- (3) 七草と小正月
- (4) 小正月
- (5) 旧正月
- (6) 旧正月の行事と餅つき

三好 安明
三好 安明
田中 孝
水口 憲三
日野 勇

水口 憲三
二宮 静喜
三好 安明
高石 勤

金子 忠行
水口 憲三
藤野 玉男
小松 ヒトミ
野本 和伯
済川 裕

二 春から夏の行事

- (1) 安井稻荷神社「初午祭」
- (2) 春祭り
- (3) なぐさみ・灌仏会
- (4) お薬師さんの虫念仏
- (5) 川ざらえ・井手そうじ
- (6) 輪越し (玉生神社)
- (7) 夏祭り (夏祈祷)
- (8) お大師さん
- (9) 山郷寺東・西組の庚申さん

大政 邦和
三好 健二
渡部 朝明
松田 雅子
田中 孝
日野 勇
加藤 招賞
水口 憲三
小松 ヒトミ

三 盆の行事

- (1) 迎え火・餓飢棚 (精霊棚)
- (2) 盂蘭盆・盆棚・精霊棚
- (3) 出作の盆踊り
- (4) 中川原の盆踊り
- (5) 大念仏
- (6) 百八燈

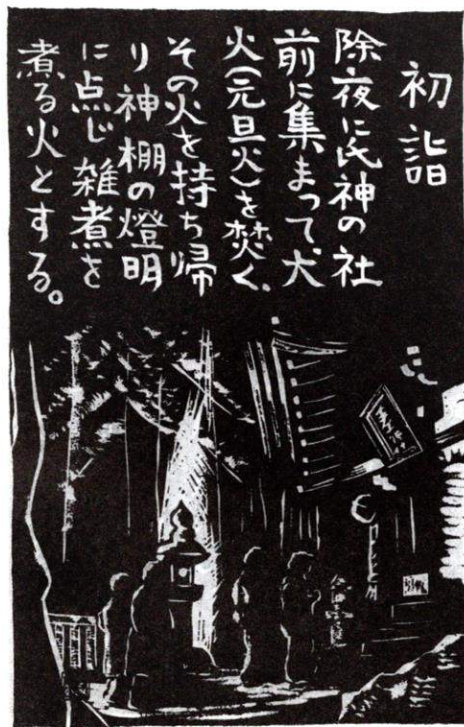
渡部 朝明
渡部喜代隆
小松 ヒトミ
本田 眞一
鎌倉 啓典
三好 健二

四 秋から冬の行事

- (1) お月見
- (2) 秋祭り
- (3) 獅子舞と仁輪加
- (4) 亥の子
- (5) 安井「亥の子」今昔ものがたり

渡部喜代隆
本田 眞一
金子 忠行
野本 和伯
相原 隆志

一
正月の行事



(4) しめ飾り

出作 水口 憲三 (昭和12)

しめ飾りとは、正月や祭りのときに、神聖な場所や神を迎えるしるしとしてしめ縄を張って飾ること。またその縄で作った

飾りもののことから父親に教えられてしめ飾りを作るようになった。しめ飾りと一口にいてもその形は千差万別でずいぶんと多い。

愛媛県の中予地方でもっとも多いのは写真①のような形のものである。丸い中は2本一組が3組、合計6本ある。これには深い意味がある。それは3夫婦（おじいちゃん・おばあちゃん、お父さん・お母さん、私たちのそれぞれ夫婦）がそろっている。中央の2本はすなわち、先祖代々繁栄することを願っている。中央の2本は



しめ飾り ①

しめ飾り ②



恵比寿様の神棚しめ飾り ③

二
春から夏の行事



印月八日灌仏会
四月八日を釈迦の誕生
日とし、寺や墓参りさ
して生誕仏に甘茶の
灌頂をしたり、甘茶を
飲むならわしがある。
甘茶にはふしぎな力
がひそんでいる。(ヤケド
の妙薬、豆類の発芽促進)

(1) 安井稲荷神社「初午祭」

鶴吉 大政 邦和 (昭和16)

初午祭は、2月最初の午の日(夜)に行われる安井の稲荷神社の祭礼で、火を焚き、黄な粉むすびやお菓子などを食べながら、おつやとも呼ばれます。宮司さんによると火を焚く安井初

帰っている「田の神」を「お火焚き神事」迎え火」でお迎えして、お祀りし、豊作を祈願する農耕を中心とした儀礼ではないかと考えられます。

現在の初午祭は、戦中・戦後中断されていたものを、昭和50年代に子どもの伝承行事として、松前町東公民館鶴吉分館活動の一環で復活したもので、稲荷神社世話人・愛護部・婦人部・消防団の協力で行われています。



初午祭の神事

昔の様子を鶴吉の久津那安男(大正15)さんに聞いた。「この日は、子ども大将の采配で昼ごろから小学生の高校生がリヤカーをひき、各戸から割木(本来は門松の元の割木)二本と白米一合を集めて廻りました。その割木は稲荷神社境内に火祭り用に積み上げておきます。割木が少ない

(6) 輪越し(玉生神社)

横田 日野 勇 (昭和9)

玉生神社は、新立・本村・筒井・西古泉・北川原・恵久美・東古泉・永田・大溝・横田の住民が氏神さんとして信仰し、2万人にちかい氏子がいる。

玉生神社の高市宮司さんと横田の山崎健三さん(大正13)から聞いた。

「輪越しの『人型のお札』のおかげで、横田の人は、大谷川にいる鯉こいの災いから免れている。」とのいい伝えをよく聞かされた。8月1日の輪越しには、どの家の子どもたちも、名前を書き込んだお札をもつて、3kmの道をいそいだ。大きな茅の輪をくぐり、これで災いから逃れると安堵した。茅の輪は、かやくさで作られた大きな輪で、罪けがれを祓う夏越しの大祓いに使用され、それをくぐるにより、疫病や罪けがれが祓われるといわれている。玉生神社では、茅の輪が置かれている場所の関係



「年中行事絵図」中村文雄 著「夏祭り」

輪越しの入口付近(玉生神社)



出店のにぎわい(玉生神社)

二
春から夏の行事



印月八日灌頂仏会
四月八日と釈迦の誕生
日とし、寺や墓参りを
して生誕仏に甘茶の
灌頂をしたり、甘茶を
飲むならわしがある。
甘茶にはふしぎな力
がひそんでいる。(ヤケド
の妙薬、豆類の発芽促進)

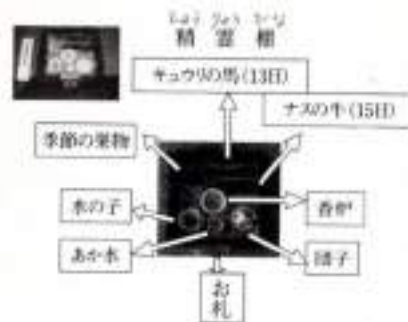
(1) 市瀬盆会・盆棚・精霊棚

徳丸 西郷 喜代隆 (昭和14)

今でも徳丸で行われている盆行事、盆棚・精霊棚・お霊供膳などについて、本性寺の住職・大黒俊「さん(昭和24)に聞いた。

8月は盆月ともいう。盆とは、梵語の「ウランバナ(盂蘭盆)」の略語で、「さかさに吊るされる」「苦しみ」という意味であり、漢字では「倒懸」と書く。

お釈迦様の弟子の目連さんが、餓鬼道に落ちていた母を救うため、お釈迦様の教えに従い、8月15日に長い修行の終わった僧たちを供養したという故事「仏説盂蘭盆経」からお盆の行事が始まった。



8月13日には墓前で迎え火をたく、店で買った麻木をもやす。先祖の霊が家に戻ってくると考えられ、門先(玄關の横等)に精霊棚をつくり、霊を迎える。僧は家々を廻ってお経をあげる。これを棚経という。

15日(16日のところもある)には門先(精霊棚の下)で送り火。盆をすすす。迎え火は早

で早く戻り、ナスの牛に乗って、ゆつくりとお墓へ帰って行くと考えられる。

新仏さんのある家では8月1日から出仏壇をまつり、盆灯籠をともし、24日には「とほしあげ」をする。夕食のあと、百八のろうそくを門先から墓までともし、盆灯籠を焼く。そして出仏壇を片づける。こうして盆経は終わる。

○精霊棚の作り方

水の子・キュウリやナスを縦切りして水に浮かべる。あか水・湯のみにきれいな水を入れる。

団子 13日は迎え団子

15日は送り団子

○お霊供膳の作り方

お霊供膳とは、仏壇に供える小型の本膳のこと。肉類や魚類をさけた精進料理で、法事や命日のときにお供えする。お盆やお彼岸にもお供えする。



仏前

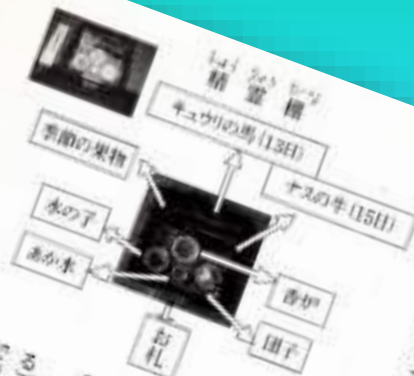
(2) 市瀬盆会・盆棚・精霊棚

徳丸 西郷 喜代隆 (昭和14)

今でも徳丸で行われている盆行事、盆棚・精霊棚などについて、本性寺の住職・大黒俊「さん(昭和24)に聞いた。

8月は盆月ともいう。盆とは、梵語の「ウランバナ(盂蘭盆)」の略語で、「さかさに吊るされる」「苦しみ」という意味であり、漢字では「倒懸」と書く。

お釈迦様の弟子の目連さんが、餓鬼道に落ちていた母を救うため、お釈迦様の教えに従い、8月15日に長い修行の終わった僧たちを供養したという故事「仏説盂蘭盆経」からお盆の行事が始まった。



8月13日には墓前で迎え火をたく、店で買った麻木をもやす。先祖の霊が家に戻ってくると考えられ、門先(玄關の横等)に精霊棚をつくり、霊を迎える。僧は家々を廻ってお経をあげる。これを棚経という。

15日(16日のところもある)には門先(精霊棚の下)で送り火をたきます。盆をすすす。迎え火は早

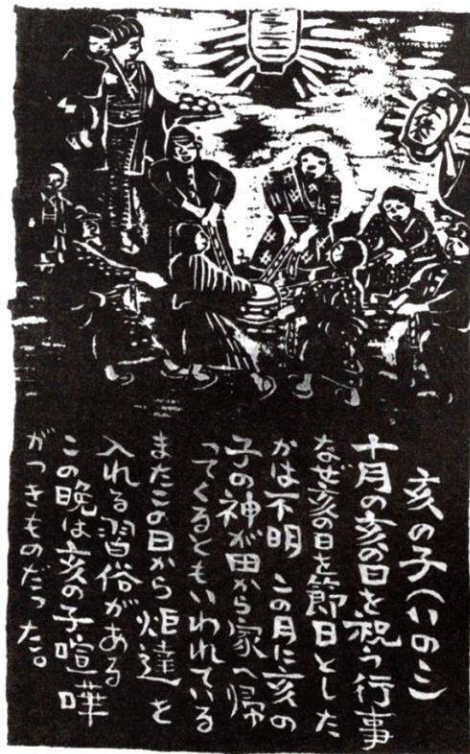
(9) 山郷寺東・西組の賽り

現在、出作

掲載の西村博明氏の「山郷寺の庚申祭り」によると、「守護神は狼田彦命であり、地域の幸福や健康、豊作等を祈願したものである。最初は六軒で祭祀を行い、場所は今現在の松山生協きたいなが二度目の遷移を行ったが、昭和30年代に二名神社高市宮司さる。二軒くらい前までは、お参りに来て手を合はすことである。深い姿をよく見た。現在、河のくわいに来て手を合はすことである。」



四
秋から冬の行事



(3) 獅子舞と仁輪加

横田 金子 忠行

一年を通じて、色々な祭りがあるが、秋祭りが一番盛大な祭りに合併して一つになったのか、古老の人も亡くなり、調べてみた。かまんのじゃきん。」等と言って、戦前には早くから練習して

後に、荒れる獅子をホーデンで叩き鎮めて連れ帰るのと、鉄砲子舞は前獅子、後獅子共に、左右の足に、白足袋と黒足袋を交互に履いていた。

（親爺）と言ったと思うが、子ども（親爺）がある。昔は何か正式な呼残り、親爺が足をきすたり、叩いたりすると、親爺と猿が

負って帰る。その度に親爺に石を投げられて「ろりと転ぶ。猿を親爺が背

の「おつや」(火祭り)、中でも一番よろこびの
であろう。これらの年中行事は大人が口をは
世界である。計画・運営会計まですべて高等科
の中学1・2年生の男子が仕切っていく。

1、伝承される「亥の子」プログラム

○暦で亥の子を確認し、一番亥の子、二番亥の子

○宿の依頼と決定。今年男の子が生まれた家。

高二の家、または希望の家

○喜拾を集めてまわる。お亥の子さんのお金ください、とね
だる。おこころまかせ。

○おかし、みかんを買いに行く。祭壇に供えた後で各戸へく
ばる。子どもに分ける。直会のしきたり

○当日、宿の主人といっしょに祭壇をつくる。

○亥の子を掲ぐ準備、高張提灯2、手さげ提灯2

○宿の主人 しめなわ。力もちなど。

○子ども集合(男も女も)座敷へ上がって礼拝

○小さい子と女の子にミカンやおかしをくばる。

○宿の主人が「亥の子」を庭におろしてくれる。

○5年生以上の男子は自分の綱を胴環にとりつける。

○元氣よく宿を祝って道に出る。

各戸巡回に出発。



床の間の亥の子



亥の子をつく子どもたち(平成19年11月)

ずも双方が出会うと、両方から亥の子石を振り子のようにしてあ
れあわせの喧嘩をした。亥の子には鉄製の帯状の環が巻いてあ
り、少々欠けたりはしたが割れることはなかった。亥の子の大
きさは、組により違っていたが、かなり重かった。
亥の子は男子の出生を祝い、豊作に感謝し、各戸の家を巡
念し、寒い冬を乗り切ろうと元氣づける行事ではなかったのだ
ろうか。

(5) 亥の子

神崎 野本 和伯 (昭和11)

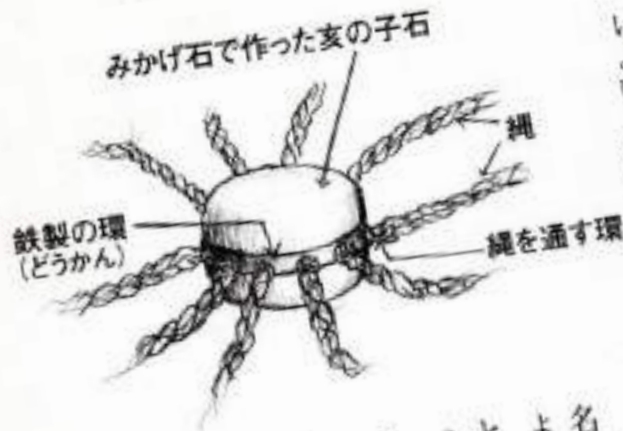
亥の子は、旧暦10月の亥の日に行われる行事。近畿地方以西の各地に盛ん。関東、東北地方では全く見られない。亥の子について、神崎の水口義一さん(大正9)に聞いた。

10月中に、亥の日は、二度もしくは三度あり、1回目を一番亥の子、そして二番亥の子、三番亥の子と言っていた。各組内で宿となる家を決め、男の子が集まって亥の子石を祀り、祝いの膳を囲んだ。

亥の子石の環に、各自が持ち寄った荒縄を結びつける。一部の子どもは、高張りちようちにローソクを灯す。

その家の男子の一番下の子の名前をとり「○○さんを祝いますよ 祝わん者は鬼生め蛇生め…」と亥の子歌をうたって祝って回った。(亥の子歌は『北伊予の伝承』、『松前町誌』を参照)

I、「松前町誌」を参照
地区の境へ来れば、隣の組や地区に挑戦するような内容の歌をうたい、亥の子をつき氣勢をあげていた。「○○のホロケ わら3本持ってこい ツべのはた焼いちやろ…」などとうたっていた。隣の組の連中も元気いっぱい、計ら



第9集 企画・編集
委員のみなさん（21名）

松前町東公民館長
松前町東公民館主事

北園田

古

次

夫

目

員



1

2



100

720



北伊予の伝承

X



龍前町東公民館

第10集

発行 平成22年3月

51ページ

編集委員長 水口 憲三

編集委員 18名

館長 義農 英文

目次

一 産育

1 妊娠と出産前の儀礼

- (1) 帯祝い
- (2) 産神・子宝祈願・祈祷

2 出産の儀礼

- (1) 出産
- (2) 産婆(助産婦)
- (3) 産婆さん
- (4) 戦前の暮らしと産着

3 成長過程の儀礼

- (1) 出生後のお祝い
- (2) 箸揃え
- (3) 雛祭り
- (4) 七五三
- (5) 少年式

二 婚姻

1 婚姻成立まで

- (1) 見合い
- (2) 恋愛(好き合い)結婚
- (3) 結納

2 婚姻成立後の儀礼

- (1) 結婚式
- (2) 昔の結婚式

済川 裕
稲垣 昂規

藤野 玉男
高石 勤
大政 邦夫
加野 清一

鎌倉 啓典
八束 和秀
小松 ヒトミ
萩野 正三
萩野 正三

本田 昭一
大政 邦和
水口 憲三

八束 和秀
鎌倉 啓典

- (3) 結婚式・披露宴
 - (4) 花嫁・花婿の服装
 - (5) 嫁の組内へのあいさつまわり
- 3 婚姻後の嫁と実家との関係

- (1) 里帰り
- (2) やぶ入り（里帰り）

三 厄年・年祝い

1 厄落とし

- (1) 厄落とし
- (2) 農家の暮らしと厄落とし

2 年祝い

- (1) 百寿（百祝い）
- (2) 米寿

四 葬祭

1 仏教の葬儀

- (1) 仏教の葬儀
- (2) 枕直し・枕飯・通夜など
- (3) 仏教の葬儀
- (4) 葬祭における組内の役割
- (5) 仏教の葬儀・土葬・火葬など
- (6) 土葬について

2 神道の葬儀

- (1) 神道の葬儀
- (2) 神道の葬儀

3 年忌供養

- (1) 仏の供養

『北伊予の伝承X』企画・編集委員名簿

萩野 正三
浅井 勝彦
小松 ヒトミ

野本 和伯
本田 昭一

仙波 康宏
田中 安男

高石 勤
済川 裕

大政 邦和
藤野 玉男
田中 安男
稲垣 昂規
仙波 康宏
大政 邦夫

野本 和伯
水口 憲三

浅井 勝彦

人の一生（人生儀礼）

一 産 育

一 産 育



(2) 産神・子室祈願・祈祷

東古泉 稲垣 昂規 (昭和17)

医療が発達していなかった時代は、お産は母子ともに死の危険をともなった一大事でした。

東古泉の早瀬辰郎さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、森下富子さん(大正14)、三好サツ子さん(昭和2)に聞いた。さらに詳しくは、四国霊場第51番札所石手寺において、加藤住職さん(昭和33)にお伺いした。

●産神 広義には出産・育児に関与する神。狭義には出産に立ち会う神。

「子授け神」 子どもがほしいのに生まれにくい。産めないということは、いつの時代にも不幸なことと考えられたので、あらゆる手段を講じ、あちこちの神仏に祈願したものである。子どもは授かりものだと考えられ、温泉につかる程度しか有効な手段はなかった。各地に「子授けの湯」と称する温泉が数多くある。

「子安神」 安産を祈願すれば、働き届けてくださると信じられている神である。お産は女の大厄、といわれるように、場合によっては生命の危険を伴うものであったから、もっぱら早く早く安産できることを祈念する。子安神・子育て観音・子安地藏などが、村や集落の近くにある。

「出産に立ち会う神」 子授け神や子安神が、一歩社殿や仏像という形をもっているのに対して、出産に立ち会う神には何の偶像もない。産神様は出産の部屋の障子の棧に腰かけ

ておられるとか、鴨居のうえにとまっているとして、身近に産神の加護を信じている伝承がある。

●子室の石 石手寺の重文阿婆母天堂(写真1)には鬼子母神様(インドの鬼女神)をお祀りしている。鬼子母神は、本は長生きをするために人の子どもをさらっては食べていた鬼で、困り果てた村人がお釈迦様に相談すると、お釈迦様が鬼の末子をお隠した。すると鬼は泣き悲しんだ。お釈迦様は「子を失った母の悲しみは深い」と惜すと、鬼は「今後は人々の子どもを助けたい」と言い、子授け、安産、子ども健康やかな成長を守る優しい神となった。願いをかける御堂の玉石を一つ頂いて帰ると子室に恵まれるという言い伝えがある(写真2)。持ち帰る際に優しく健やかな子どもに恵まれますよう、よくお願いすると同時に「お守り、絵馬によって願いを深める。持ち帰った石を塩水で清め、不浄がからぬ場所」に安置してお願いを続ける。願いがかない、子が授かる。と安産を念じ、お守り・寺院などの安産祈願によってさらに祈りを深める。無事出産したら、頂いた石に子どもの名前、生年月日を書き、もう一つ、海辺、河原で拾った玉石(角のない丸い石)を添えてお返しする。



写真1 石手寺・阿婆母天堂(鬼子母神)



写真2 石手寺・阿婆母天堂(子室の石)

最後に、お母さんに対する率直な感想を聞いた。

「収入は多くはなかったと思うのに、教育を受けさせてもらい、ありがたかったです。」「母が家にいないのが当たり前と思っていましたから、特に淋しいと思うことはありませんでした。」「今思うとよく頑張って育ててくれたと思います。」という（写真1）。



写真1 生後1か月半の孫を抱く
深沼ミチコさん（72才）
（昭和56年6月14日）

日夜を問わず過酷な産婆という仕事を辞めたあと、花作りや俳句を趣味とした。趣味を通して多くの仲間と交流し、一生で一番幸せなときを過ごしたという。

昭和60年には、国子さんの編集で、句集『顔の花』を発売した。

深沼ミチコさんにお世話になった、神崎の高石コズエさん（昭和8）に、お子さんの出産について聞いた。

「帯とり（帯祝い）から産婆さんにお世話になりました。」

帯は里（実家）が安産の神様、高忍日売神社（徳丸）で拝んでもらい、産婆さんの介添えで身に着けました。その後は月に一度くらいの間合で訪問してもらいました。後は産気付いたら呼びにいくのです。長女（昭和27）のときは、産婆さんの留守中に破水し、緊急を要するので、姉さんが裏のおトラ婆さんに介添えを頼みに行き戻って見ると、既に元気な赤ん坊が生まれていたと言います。後産は他の産婆さんをお願いしたのです（写真2）。

「二女（昭和31）のときも、深沼さんをお願いしていましたが、破水が断続的に続き、仕方なく国立病院へ入院し出産しましたが、一週間後に亡くなりました。三女（昭和32）は大阪で出産し、四女（昭和35）だけは、深沼さんに取り上げてもらいました。このころが家でお産する最後だったと思います。」

お七夜（名付け）は、里から産着やお餅など戴き、お祝いをしました。産婆さんとの関係は、お産が終われば一応お仕舞いです。」という。



写真2 たらいで入浴する元気な
杏ちゃん（昭和30年代）

11月15日に3歳の男女、5歳の男の子、7歳の女の子が成長段階の節目に晴れ着を着て「氏神社」に参拝して子どものすこやかな成長を願ってお祝いをする儀式。

「七五三」について東古泉の三好サツ子さん(昭和?)、森下富子さん(大正14)に聞いた。

このころの田舎(農村、漁村)では、あまりなじみが薄かったけんな。ほんでも「七五三」を避える家ではお嫁さんの里から「一ツ身」「二ツ身」「四ツ身」の着物、または女の子にはあついで「結び帯」、男の子には「兵児帯」が贈られてきよったわい。それを着て氏神さんにお参りして、折願してもらいよったという。

そもそも「七五三」の起源としては、平安時代の中ごろ公家の間で行われていたお祝いの儀式であり、今のような七五三詣で行われるようになったのは江戸時代になってから。また、この言葉が使われだしたり行事が庶民の間で行われるようになったのは明治時代になってからで、おもに都市部で盛んになり、それから全国的になったのは戦後になってからのようである。

「髪置」3歳になるとそれまで髪を剃っていたが髪を伸ばし始める儀式。「袴着」5歳になると初めて袴をはいて男の仲間入りをする儀式。「帯解」7歳になると女の子が初めて帯をして着物を着る儀式に由来するそうである。

古い日本の社会では「七つ前は神さま」といわれた7歳までは一人前の人間ではなく、神様のようだとされてきました。七歳のお祝いをさかいとして人間として周囲に認められたい村の行事にも参加するようになります。それが「七つの子祝い」という風習で、童歌の「とうりゃんせ」に歌われている「この子の七つのお祝いにー行きはよいよい帰りはこわい。こわいながらもとおりゃんせ」という歌詞も、この「七つ前は神さま」に由来していると言われている。



写真1 揺そでとぞうり姿 (昭和5年ころ)



写真2 現在の七五三 (平成21年)



二
婚
姻



二 婚 姻

(2) 恋愛(好き合い) 結婚

鶴吉 大政 邦和(昭和16)

年ごろの男女が特定の異性に特別な愛情を感じて、恋い慕うようになり、二人だけで交際することを恋愛といい、結婚に至ると恋愛結婚という。二人の好き合いが先で親の気持ちに後になる結婚である。昔からこの地域にもみられたが、見合い結婚に比べて非常に少なかったようである。

年ごろの男女には親類・知人・行商人や有力者の紹介や世間話等いろいろな形で縁談が持ち込まれた。「あそこは別嬪の娘が居るが遊びにいったらいいか」、「うちの子はもう嫁にやらいやいかんがええ子は居らんかのう、世話してくれんかのう」、「あんた、それ下度ええがな、いい子が居るから私について」と、家庭事情をよく知った人を介して見合いに持ち込んでいた。見合いして男が嫌にとる言ええば、結婚、結婚へとトントン拍子に話が進むようなことは多かったと言ふ。

恋愛結婚の場合はどうか、鶴吉の数名の男女(大正10-昭和4)に聞いた。

当時の結婚は家柄(格)とか、つり合いとかが重んじられ、それに合わない、妙な噂が立ったり、特別な目で見られたりした。親も子もそうした世間体を気にして、恋愛するのは「わがまま」みたいに言われた。だから、若者は勇気がないと恋愛はできにくかったし、親は身内などの紹介で両家の様子が分かった、安心できる結婚を望むなど、恋愛には消極的な

態度がみられた。

親は世間体や娘の破談を恐れたし、若者は後ろめたい気持ちなどがあって人目を避けて交際していたが、それでもいつのまにか周りには気づかれていた。

学校、病院、農協など男女の多い職場では、当たり前のように恋愛がみられ、仕事などを通して相互に相手を理解し合い、何の抵抗もなく恋愛結婚していた。親の目に適うなら最良の結婚であった(写真1)。

地域では、芝居、行事、青年学校、青年団活動などの交流がきっかけで恋愛し、恋愛結婚に至った。最初は友人(「ちようちん持ち」)に頼んでラブレターを渡して気持ちを伝え、通じ合うと松山などでデート(映画、公園、海木浴、食事など)、「写真」を重ね、お互いに理解し合えるよう努めた。地域ではデートは人目を避け、神社や建物の影などでさりげなく行われていた。大半は勇気がなくて片想いに終わった人が多いのではないだろうか。

また、男数人が集まって村外の娘の家を訪ね、家にも入って遊んだりするのも親は黙認してくれていたようだ。(断りたい場合には代わって祖母などが応対したようなこともあった。)そのうちの誰かが、その娘と恋愛になるようなケースも結構多かった。(逆に、他村からも同じように来ていた。)また、同様に古くは村内で機織りしている娘の所へ男数人が遊びに行き、そのうちの誰かが次第に親しくなり恋愛結婚していった。一時期、男が娘の家へ夜遊びに行つて恋愛結婚する(夜這い)もみられた。

さらに、大衆誌、恋愛小説が出回り、映画が普及すると、それをまねて、個人で相手を探してラブレターなどで自分の



写真1 恋愛結婚のお二人(昭和22年)



写真2 デート 香川の公園にて(昭和20年)

(3) 結婚式・披露宴

東古泉 萩野 正三(昭和15)

結婚式や披露宴について、東古泉の早瀬辰彦さん(昭和3)、早瀬哲夫さん(昭和5)、三好サツ子さん(昭和2)、森下富子さん(大正14)に聞いた。

今のような専門の式場でなく、それぞれの家でしよりましたよ。それも夜が多かったようじゃった。当日になるとまづ仲人さんがお婿さんを迎れてお嫁さんを迎えに行つてあいさつをしてから婿さんだけ先に帰るんよ。

それから仲人さん。お嫁さん、お婿さんの両親、親戚の代表人足さん(嫁入り道具を運ぶ人たちが)が揃つてお婿さんの家へきよつたなあ。お嫁さんが来るとお婿さんが迎えに出て家の中へと案内しよつた。

お婿さん、お嫁さんを上座にしていよいよ式が始まつて仲人さんがあいさつして三三九度の盃じやつた(写真1)。たしもしとつたかなア。三三九度の盃が終わると謡になりよつた。謡は「高砂の……」じやつたと思うがな。式が始まり謡が終わつて約20分から30分ぐらいじやつたように思う。

謡が終わるといよいよ宴会になるんよ。出席者はお婿さんの親族とお嫁さんの側で来た人たちで今のようによくはなつたと思う。宴会の料理は近所の人たちが朝早ようから

いに來て、おいおいにぎやかに作りよつた。

式が始まる前になると近所の人たちがそれはもう持ちどおしく「もうまあ嫁さん來よるころじやろか」「まだ早いどな」「早よいかんとう見れんがな」と講い合いながら庭先から遠まきにお祝いの見物をしよつたなあ。

お婿さんは羽織、袴。お嫁さんは紋付すそもよう、「高島田に角隠し」じやつたろうかな(写真2)。また花嫁が「もどつてこないように」という願いをこめて、門の前で火を焚いたりもしとつたかなア。



写真1 昔の披露宴(年代不明)



写真2 花婿・花嫁(昭和8年ころ)
花嫁は黒地に紋付き、すそもようの花嫁衣装で飾には角隠しをつけています。



写真1 嫁入り(昭和10年代)



写真1 自宅での結婚式

三 厄年・年祝い

三
厄年・年祝い



1 厄落とし

(1) 厄落とし

徳丸 拙波 康宏 (昭和12)

「厄年に災いを招かぬよう厄を落とす儀礼を『厄落とし』といい、厄年というのは、災難や不幸に出会うことが多いとされる男女の年齢を指す。現在、最も一般的な厄年は、男子が25歳、42歳、61歳、女子が19歳、33歳、37歳であり、このうち男子の42歳は、死に、女子の33歳は、散々に通じるとして、一生のうち最も大きな厄年とされている。厄年の前年を前厄、厄年の後年のはね厄（後厄）と合わせて三年間（年齢は数え年で計算する）を厄年とするのが普通である。もともとは平安時代の陰陽道の考えにもとづいて広まったようである。厄年には厄落とし、厄払いとして、昔から種々の風習があった。年の数だけ銭を包み、物乞いに与えたり。また櫛や銭など身に着けているものを辻に捨てたり。節分の時、豆を自分の年の数だけ紙に包んで辻に捨てるといふ風習があった。厄年の年頭に年祝いをする例は多く、親類縁者を招いて宴を張り、これをもって厄払いとした。またその年だけ正月を二回行って厄年をやり過こしてしまうということも行われた。

徳丸においては80歳前後の複数の方々にお聞きしたところ、古くはお籠りといって神社、寺院に「辻夜籠り」して祈り続けたことともあった。また神社、寺院にて祈禱を受け、親族、友人を家に招き酒宴を設けて振舞い、女盛り男盛りとして一大喧嘩するよう祝った。そして女性の場合は、帯など贈り長寿を願った（長い物を贈ることにより長生きに願った）。その後、

厄年に当たる人々が集まって祈禱を受け、酒宴に明け暮ることを決め毎年交替で女性たちが軽い食事を作り、全員で食べながら世間話などし厄払いをした。また厄年に当たる年に同朋会を行い、揃って神社等で祈禱を受け厄払いをしていた時期もあった。いずれにしても、厄年に当たる年齢になった男女は厄から逃れるために、神仏に祈ったりお祓いをしてもらった。できるだけ外出を控えたり、善根を施すようにしたりしたようである。

現在でも厄年に対する信仰は強く、神社や寺院などで厄払いや厄除けの祈願をしてもらう人も多い。

前厄の年の節分以降（女子なら数え年で32歳になる年の節分以降の節分をもって年変わりするため）にお祓いを受け、後厄の終わった後でお礼参りをするというのが正式のようである。

厄年は人間が生理的、肉体的に転期を迎える時期にあり警戒心を強めるといふ意識から生じたものであると考えられる。



厄落としにお参りしていた徳丸の高野日売神社



厄落としの祈禱に訪れていた徳丸の本願寺

2 年祝い

(1) 百寿(百祝い)

神崎 高石 勤(昭和14)

高齢の「年祝い」の名称と年齢(教元年)を挙げると、古稀(70歳)、喜寿(77歳)、米寿(88歳)、卒寿(90歳)、白寿(99歳)、百寿、百祝い(百歳)、茶寿(百8歳)がある。平成20年1月、百5歳で亡くなられた神崎の高石友春さんの事績や生き方、白寿や百祝いの「年祝い」について、長男の淑人さん(昭和5)と三男の健一さん(昭和13)に聞いた。

父は明治35年、六郎の次男として神崎で生まれました。大正15年県立松山農学校を卒業後、農業指導員として越智郡島上を振り出しに郡農会に勤め、昭和29年県農協連中央会伊予支所長を最後に退職しました。その間、昭和25年から松前町への合併まで、北伊予村議会議員(副議長も歴任)にも就いていました。

退職後は、専門である農業技術を生かし、生業の米麦や野菜等を栽培しながら、地元神崎の区長や杜寺総代、北伊予地区老人会長などの公職も数多く歴任しました。また、庭木の剪定や雨の日など習字や俳句をたしなむなど趣味を伸ばし、生きがいのある毎日を送っていたように思います。

若いころの父・友春さんの生き方について。

「一言で言うとなんか使いが荒かった。田んぼの手云々、それよりも、もたちに、「せい」使っていました。という記憶はありま



写真1 百寿のお祝い 百歳の友春さんは前列左より4人目
(平成14年3月17日、伊予市のウエルサンピアにて)



写真2 百歳のお祝い 白石町長(右)や三好議長(左)と元気に談笑する高石友春さん(中央)(平成14年9月10日、自宅にて)

(2) 米寿

鶴吉 清川 裕 (大正12)

「祝賀祭明細帳」と、「父の日記」を参考にし、祖母の米寿について書いてみました。

今から76年も昔のことです。そのころは短命時代で、米寿祝いは珍しいことでした。昭和7年9月24日、清川ムメ(弘化2年生れ)の米寿祝がありました。

その内容は、次のとおりです。

当日は、早朝より、近隣親戚に手伝ってもらい、餅をつき親戚へ配っている。記念祝賀会に贈られた品物は、餅召、銘仙、錦紗羽織、袴一着、真綿二五匁(紅白餅形)、草履、毛糸の襦袢、江山笠置物、その他22名のお慶び、清酒、砂糖菓子等々。家では祖母を囲み和やかな宴席があった。

3日後の27日、曾祖母の写真を写真屋に撮ってもらう(写真1)。米寿の奉祝額(図1)を、伊予神社拝殿天井へ掲載。紋付羽織を着た、小さいおばあさんに、母と私(当時小学4年)が連れ添うて、お宮参りをしました。丁度その時、高市豊愛様の神馬の献納式(写真2)があり、父招待される。高市様は神崎出身で、広島県呉市で、呉服商で成功された方で、神馬の価格は御影石の台座共に、当時、新築家屋一戸分(1千円)と言われた。

年が明けて、昭和8年5月28日、米寿の祝いとして「三軒屋(8戸)、高瀬(7戸)へ酒肴料と記念の徳利20本、贈呈」とあります。

三軒屋と高瀬は藩政、町村政と行政上は違っていました、が、



写真2 高市豊愛氏が奉納した神馬(伊予神社)

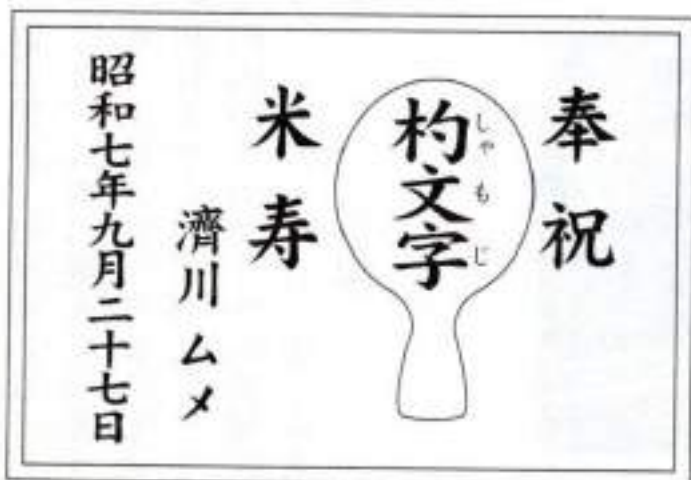


図1 伊予神社拝殿天井に掲載された奉祝額



写真2 高市豊愛氏が奉納した神馬(伊予神社)



図1 伊予神社拝殿天井に掲載された奉祝額



写真1 米寿の濟川ムメさん(昭和7年)

四
葬
祭



四 葬 祭

1 仏教の葬儀

(1) 仏教の葬儀

鶴吉 大政 邦和 (昭和16)

昭和30年代までの葬儀について、鶴吉の数名の方々 (大正10・昭和10) に聞いた。

当時は、人が家で養生しているのを、組内の者は知っていた。亡くなるとすぐに誰かが近所に知らせた。遺族は友引を避けて通夜、葬儀等の日取りを決めていた。組内は手分けして寺院や葬儀社、役場、親戚等へ連絡して廻った。男性は恐れ紙を玄関と神棚に貼った。組内のおなごし (女性) 二人が遺族の家へ行き、水練りの枯団子と二餅を作った。

葬儀は突然発生し、急がないといけないし、その内容は多く人手を要した。にもかかわらず組内の軒数 (人数) は少なかった。用件を果たすには、必ず二人が徒歩または自転車で行かねばならなかった。二人とれないときは人形を携えて、重宿・双海・中山などまで行った。家をやつと探し当てても、山仕事等に出ていて連絡がつくまでには大変苦労した。早く帰りたいのに帰れず、二晩走を頂いて帰宅しなければならなかった。遠方へは電報を打った。

土葬 (葬棺) 用の大きな墓穴掘りも重作業であった。その場で酒・竹輪・湯豆腐等で精進落としをした。物事を手際よく遂行するには世話役の采配が大きかった。遺族は大抵のことは世話役の判断に任せ、仕切ってもらった。分からない者に発言の余地はなかった。

大方の家は物不足や貧乏で、葬式にお金をかける余裕はほ

んどなかった。米を煮めたり、会葬に持参したりした。通夜に枕経はなかった。組には什器 (食器類) があつたところもあったが、座布団、大銅釜等は貸し借りし、調理材料、数本の包丁等も持ち寄った。

遺体を座敷へ北枕に寝かせたら、脇の板机に白布を掛けた。板机を置き、その上に枕飾りとして水、一盃飯、枕団子、線香立て、ろうそく立てに一本ずつの線香と燈明を供えた。遺族や身内の者はそれを囲んで座り、その火を絶やさないようにして遺体を見守り一夜を明かした。これが通夜であった。

組内は、喪主から明日一日葬儀で世話になる旨のあいさつを受けると、すぐ葬儀の打合せに入り、昼夜のあいさつ、組内参加人数等確認して内容を分担した。葬儀料理の献立や予算、死亡診断書 (徳丸の林医院) の受取り、役場への手続き (死亡届、火葬許可や埋葬許可書の受理)、料理材料の買い出し、住職の送迎、埋葬や納骨用の墓準備、たすき用左縄、紐の用意と叩く人、会葬者の受付・香典の整理、出棺手伝い、愛用の茶碗割り、火葬場での接待等内容は多かった。

葬儀の日、組内は地味な服装で朝の時には集まり、打ち合わせどおり役目を果たしていった。左縄締め、買い出し、墓の穴掘り (葬棺が土葬できる大きさ) などにあたつた。葬儀料理用材の調理は、献立メモにより、豆腐・かまぼこ・菓子等は神崎の小店近くで、魚等は郡中 (瀬戸内近の行きつけの店) で買った。店員は手馴れたもので、同種類、同じ大きさの魚等人数分揃えてくれた。時にはお得意先で精進落としだからといって酒をよばれて帰ることもあった。帰ると器用な男性は調理を手伝うような人もいた。

一方、女性も落し団子、お霊貝飾を作り、台所から海苔、

作つたか購入した経帷子 (左前)。

白足袋 (左右逆)、わらじを身、ずた袋を首から掛けた。ずた (し賃や小遣い銭) を入れた。整を胸上で合掌させて顔に白布を顔を向け腹上に置いた。

その際、団子や弁当の他に、トウモロコシ等、故人が好んで酒等、遺言していた着物等

から順次昼食をとった。黒豆飯



写真1 鶴吉三軒屋・伊予市上野郷高瀬共同 (現在も使用中)



写真2 自宅での葬儀 (昭和14年)

出棺は組内が概を担いで行い、家を出る際に、十能 (炭火をすくう器) で炒った白大豆入り茶碗が割られた。時には概を身の近い人が優先して担ぎ3回廻るようなこともあった。うだ。

(4) 葬祭における組内の役割

東古泉 福垣 品規（昭和17）

現在、葬儀は葬祭業者に依頼し、式場で行うことがほとんどであるが、「昭和35」1960年当時は、自宅葬であり、組内の人が中心になって、心のふれあいのある、気持ちの通った葬儀が営まれていた。喪家は組内の人に全面的にお任せし、頼りきっていたのである。

当時の組内の葬儀での役割分担について、東古泉の早瀬辰郎さん（昭和3）、早瀬哲夫さん（昭和5）、森下富子さん（大正14）、三好サツ子さん（昭和2）に聞いた。



仏式の枕飾り

長は各組長に、組長は組内各家に知らせる。東古泉は地区全体で葬儀に参列しているからである。死亡届、火葬許可申請書等のそれぞれの届け出は必ず2人で行動する。すべての行動は決して1人ではしなかった。

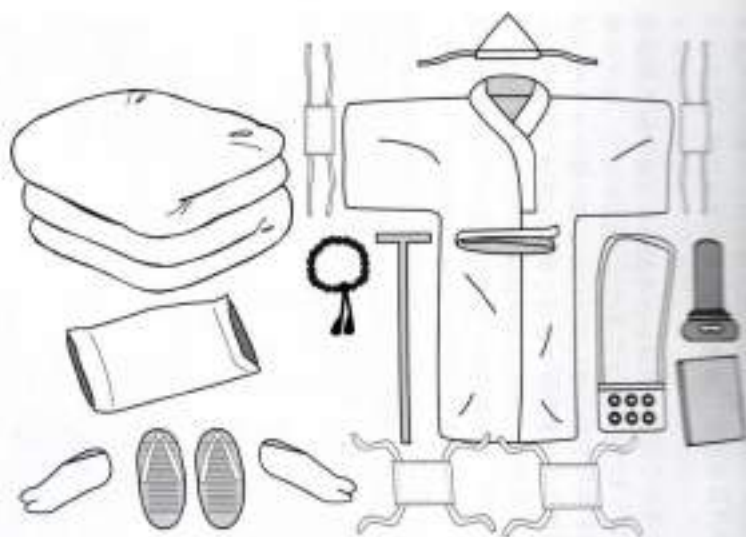
納棺の時に親族が掛ける、左胸の隅のたすきを作っておく。併せて、出棺時、近親者が釘を打ち、棺の蓋をするときに使う石も準備しておく。棺の蓋を開けると、死者が迷わず眠立つことを願い、喪主から順に、2回ずつ、小石で軽く釘をたたいて釘打ちをする。

葬儀（仏教では死者の成仏を祈る儀式）・告別式（故人に別れを告げる儀式）の時間が近づいてくると、受付係は、弔問客の受付と案内にあたり、また、香典や供物の記録簿を用意し、漏れのないように記録する。当地域では、生活改善運動を展開（昭和30年町村合併、昭和33年3校区の公民館が統合され、当時の公民館活動の目標の一つに冠婚葬祭の簡素合理化がうたわれていた）しており、花輪の受け取りは、丁重にお断りした。更に、祭壇なども、申し合わせにより、最低の価格に決めていた。

鐘を鳴らす係は、田んぼに行っていた人にも知らせるために、葬儀の30分前、始まる時、焼香の始まる時の合計3回、2人で鳴らしながら地区内を回る。

女性係は、食事の用意をする。湯豆腐、酢物、煮付けなどを作る。水晶昆布はよく使ったものである。

出棺の時、棺を運ぶのも組内の人で行っていた。棺は、玄關口から出し、その時に、生前使っていた茶碗を割る。茶碗の中には、煎った大豆を入れてあった。生は、生きて帰るなどと言われ、よく煎ったものである。



仏教の死装束。僧尼の跪立ちの姿に似せるために、経かたびらやわらじなどを用意する



写真3 神道の祭壇

神道の葬儀



写真1 霊主 左カバーをはずしたものの
カバーには白木に装飾布をはったもの
もある(平成21年9月24日撮影)



図1 霊主
霊主には木製(白木)
のカバーがつく



写真2 手前神道の墓石(平成21年10月2日撮影)



第10集 企画・編集 委員のみなさん（18名）

北伊予の伝承

第11集



松前町東公民館

第11集

発行 平成24年3月

61ページ

編集委員長 高石 勤

編集委員 15名

館長 得能 広明

発行にあたって

現代に生きる文化が失われつつある人々の暮らしに、
 活・文化・今回があります。

また、北伊予校区は、激動の昭和を背景に作られた、
 本誌が、少々の位置を地図に示す、北伊予の歴史を、
 最後、大勢、本誌の発行に、北伊予の歴史を、
 平成十四年三月、

その地区の歴史を、
 各地区、
 特色、
 特色、
 特色、

松前町東公民館長
 得能 廣明

目次

I 記憶でたどる北伊予のくらし

- 一 「装い」について……………2
- 二 「食」について……………13
- 三 「住まい」について……………22

II 北伊予の小字（ホノギ）

- 一 徳丸の小字（ホノギ）……………34
- 二 中川原の小字（ホノギ）……………37
- 三 出作の小字（ホノギ）……………40
- 四 神崎の小字（ホノギ）……………43
- 五 鶴吉の小字（ホノギ）……………47
- 六 横田の小字（ホノギ）……………50
- 七 大溝の小字（ホノギ）……………53
- 八 永田の小字（ホノギ）……………56
- 九 東古泉の小字（ホノギ）……………59

I 記憶でたどる北伊予のくらし

長い伝統を受け継ぎ、激動の昭和を生き抜いた北伊予の人たちの高度成長期以前の「くらしと生活・文化」に焦点をあて、各地区から選出された貴重な経験の持ち主である高齢者の方々の座談会を開催しました。

高度成長期以降、生活環境の変化や核家族化の進行など、社会の変化に伴い人々のくらしや生活・文化が大きく変化した。伝統的な地域のくらしや文化が失われつつある現在、かつての「北伊予のくらし」を振り返り、原風景を記録し残すことを目的として企画しました。

盛夏の七月二六日の午前、一四名（男性七名、女性七名）にお集まりいただき「装い」、「食」、「住まい」の三分野に分かれ、東公民館で貴重なお話を伺いました。それをまとめたものが、この「記憶でたどる北伊予のくらし」です。

座談会に出席された方々は

八東兼福（徳丸）、本田智・合田テルコ（中川原）、神野典子（出作）、水口義一・合田ミユキ（神崎）、清川裕・相原隆志（鶴吉）、徳本カナエ・町田京子（横田）、栗原キミコ（大満）、中村文雄（永田）、早瀬辰郎・森下富子（東古里）の皆さんです。

なお、今回聞きできなかった「北伊予の生業・交通・教育・生活文化」など、衣食住以外の項目については、後年座談会を実施したいと考えています。



後列左から 徳本 神野 合田（子） 八東 相原 森下 町田
前列左から 清川 水口 本田 中村 早瀬 合田（女） 栗原

座談会に出席された方々
・日時 平成二十三年七月二六日 午前九時より一二時まで
・場所 松前町東公民館



後列左から	徳本	神野	合田（テ）	八束	相原	森下	町田
前列左から	濱川	水口	本田	中村	早瀬	合田（ミ）	栗原

「装い」について

出席者の皆さん

鶴吉 済川 裕（大正一二年生）

東古泉 森下 富子（大正一四年生）

神崎 合田ミユキ（昭和三年生）

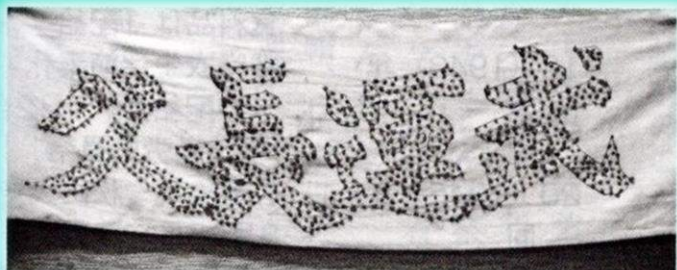
徳丸 八束 兼福（昭和四年生）



座談会出席者の皆さん



座談会スナッフ



「武運長久」の千人針

「装い」について



再製した服を着る若い女性

再生衣料



男子の国民服と女子の標準服

戦時中の服装



国民服での結婚式



伸子張り

二「食」について

出席者の皆さん

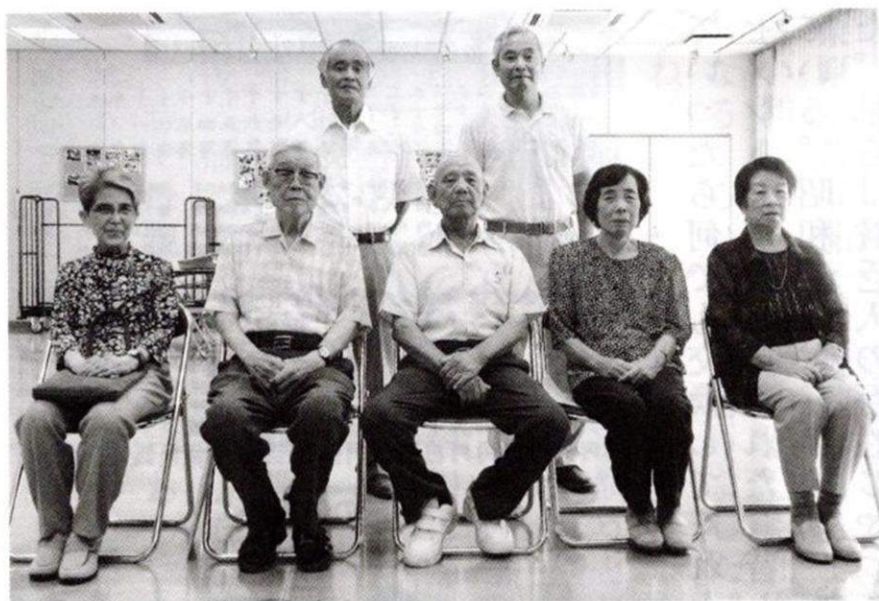
神崎 水口 義一 (大正 九年生)

横田 町田 京子 (大正一一年生)

中川原 本田 智 (大正一五年生)

出作 神野 典子 (昭和 六年生)

大溝 栗原キミ子 (昭和 八年生)



座談会出席者の皆さん



座談会スナップ



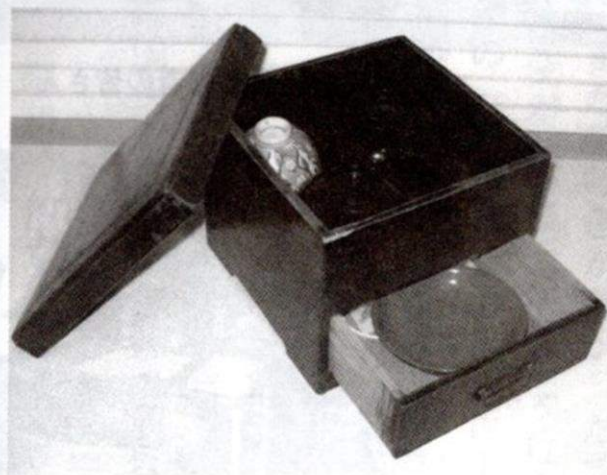
駄菓子屋の陳列

「食」について

米(1俵・60kg)の値段の推移

三十九年	二十八年	二十七年	二十六年	二十五年	二十四年	二十三年	二十二年	二十一年	二十年	十九年	十八年	十七年	十六年	十五年	十四年	十三年	十二年	十一年	十年	九年	八年	七年	六年	五年	四年	三年	二年	一年
越山内	香田内	芦田内	月田内	吉田内	小田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内	鈴田内
金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円	金三十三百八十八円

米の値段表



膳箱

三「住まい」について

出席者の皆さん

永田 中村 文雄（大正一四年生）

中川原 合田テルコ（大正一五年生）

横田 徳本カナエ（大正一五年生）

鶴吉 相原 隆志（昭和三年生）

東古泉 早瀬 辰郎（昭和三年生）



座談会出席者の皆さん



座談会スナップ



大戸と玄関先（高石修氏宅）



茅葺屋根をトタンで覆った屋根

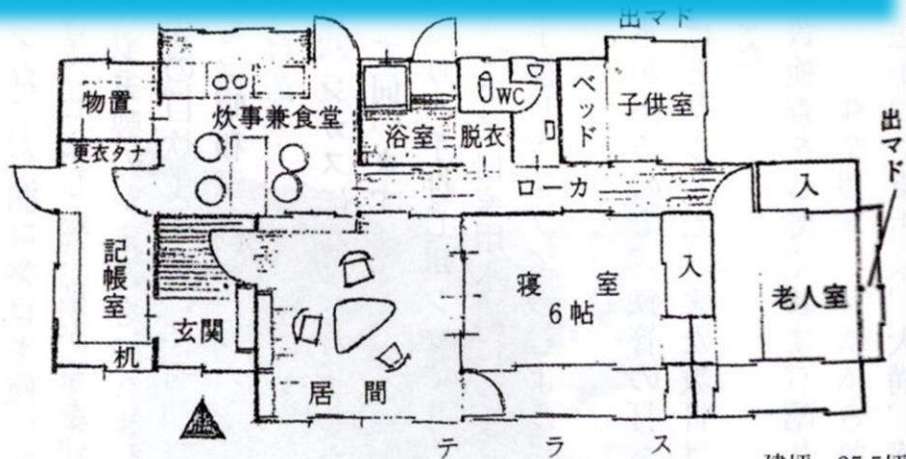


田の字型間取りの母屋

「住まい」について

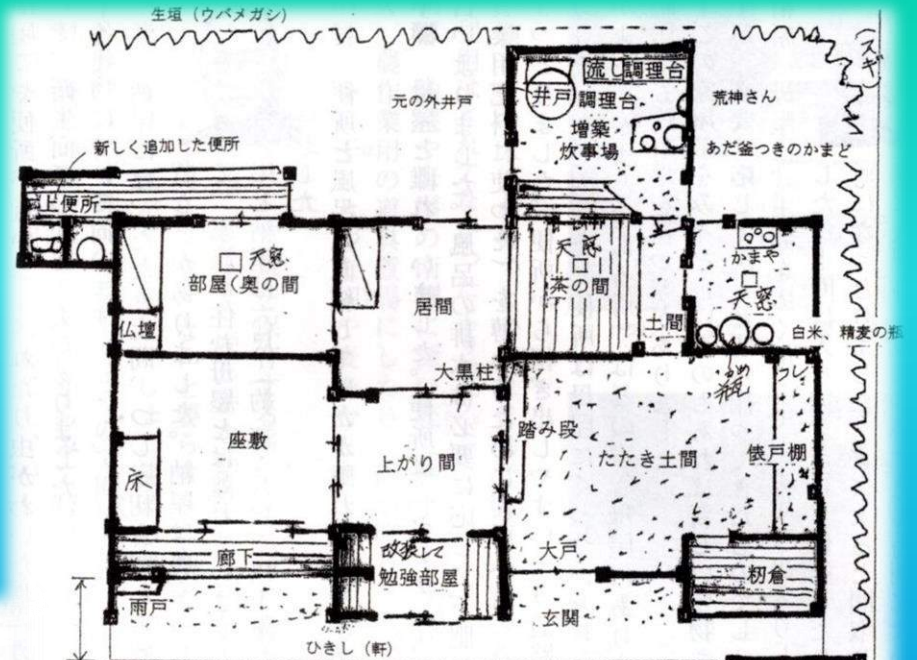
農家の間取り

県住宅課による 農村住宅参考図（S35年）



建坪 25.5坪
昭和35年10月配布

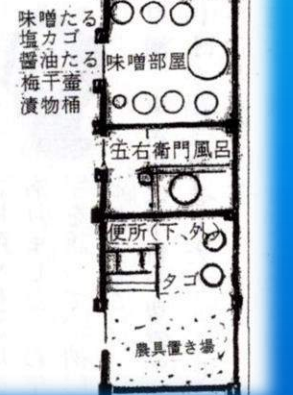
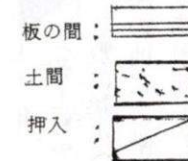
図 愛媛県土木部建築課による農村住宅参考図
（『愛媛、その住まいと暮らし』より）



母屋

築 明治6~8年ごろ

外 (庭)



Ⅱ 北伊予の小字（ホノギ）

明治一五（一八八二）年、地名調査が全国的に行われ、『段別畝順帳』（野取図）に記載されている小字（ホノギ）が県に報告されている。

明治九（一八七六）年、北伊予九地区（藩政時代は村、のち大字）の戸長が愛媛縣廳令に提出した『段別畝順帳』では、徳丸二八、中川原一五、出作三八、神崎三八、鶴吉二二、横田七、大溝三、永田四五、東古泉二六の小字（ホノギ）がある。

昔は番地がないため田を間違えないように区別しなければならなかったため、耕作者が自分の土地へ杭を立て隣の田と区別し名前をつけた。これがホノギ（保乃木・樫乃木）の語れとされている。

明治に入ってこれを小字とし、これらの地名を明治時代になって土地台帳に記し現在に至っている。

この小字（ホノギ）の名称（小字の由来・語れ）は、寺社、木利、人名、塚敷・殿蔵、開発及び制度、条里制、地形、古墳、城に関するものなどに大別される。

『北伊予の小字（ホノギ）』では、『大字の起源や由来、小字（ホノギ）の由来や伝承、小字（ホノギ）図の三つに分けて記載した。

掲載にあたり、大字の起源・由来・伝承等は主に『愛媛県の地名』（平凡社）、『松前町誌』、『北伊予の伝承』などを参照し、慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』から一六四八

年の石高などを記した。また『段別畝順帳』の写真については、愛媛県立図書館所蔵のものを使用させてもらった。小字の由来や伝承等については不詳なものも多く今後の研究に待ちたい。

明治九年、島戸長が県に提出した『段別畝順帳』（野取図）



『野取図』の内容 田一筆ごとの記述内容



（大字神崎所蔵）



神崎村 第六番耕地字櫻木、
村屋分、登沢「野取図」

Ⅱ 北伊予の小字（ホノギ）

明治一五（一八八二）年、地名調査が全国的に行われ『段別畝順帳』（野取図）に記載されている小字（ホノギ）が県に報告されている。

明治九（一八七六）年、北伊予九地区（藩政時代は村、のち大字）の戸長が愛媛県権令に提出した『段別畝順帳』では、徳丸二八、中川原一五、出作三八、神崎三八、鶴吉二二、横田七、大溝三、永田四五、東古泉二六の小字（ホノギ）がある。

昔は番地がないため田を間違えないように区別しなければならなかったため、耕作者が自分の土地へ杭を立て隣の田と区別し名前をつけた。これがホノギ（保乃木・穂乃木）の謂われとされている。

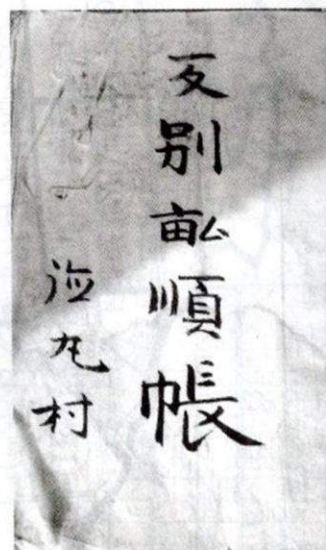
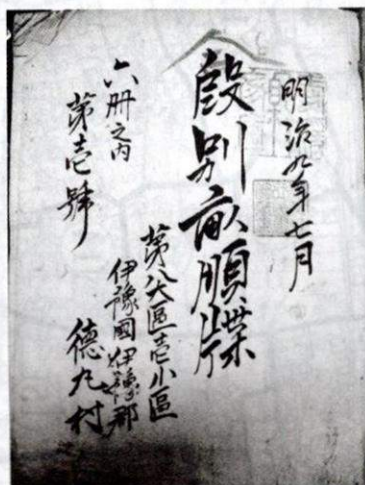
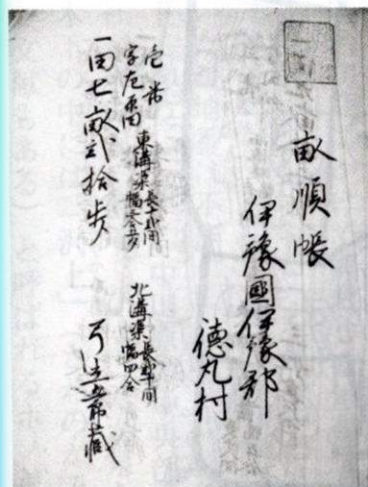
明治に入ってこれを小字とし、これらの地名を明治時代になって土地台帳に記し現在に至っている。

この小字（ホノギ）の名称（小字の由来・謂われ）は、寺社、水利、人名、屋敷・殿蔵、開発及び制度、条里制、地形、古墳、城に関するものなどに大別される。

「Ⅱ 北伊予の小字（ホノギ）」では、（一）大字の起源や由来、（二）小字（ホノギ）の由来や伝承、（三）小字（ホノギ）図の三つに分けて記載した。

掲載にあたり、大字の起源・由来・伝承等は主に『愛媛県の地名』（平凡社）、『松前町誌』、『北伊予の伝承』などを参照し、慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』から一六四八

徳丸村の段別畝順帳



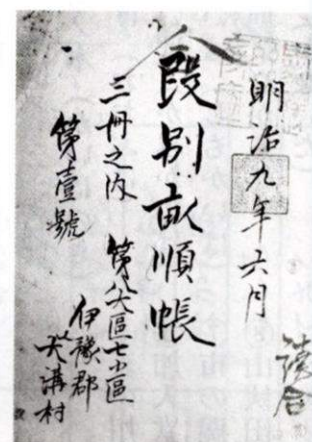
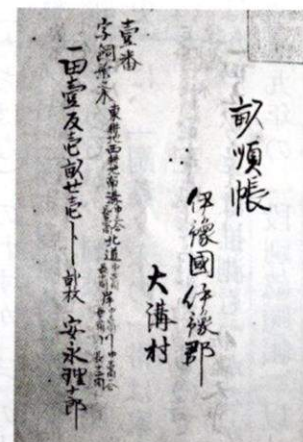
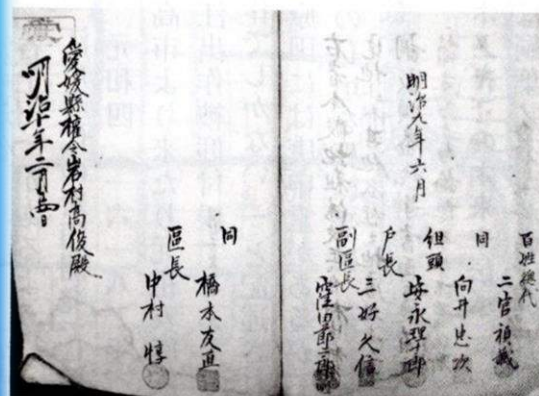
(大字徳丸所蔵)

反別畝順帳

徳丸地区

大溝地区

大溝村の段別畝順帳



一 徳丸の小字（ホノギ）

〔一〕大字の起源や由来

現松前町の東南端の地区。地域の東北を重信川が流れ、西は出作、北は中川原地区に接する。かつて重信川の河道の時期があったと思われるが詳細は不明である。早くから開発され、寛永一二（一六三五）年に松山藩松平氏就封以来、村名改変や分郷のなかった一つである。

この地には中世に「得丸保」という荘園が存在したが、成立事情は明らかではない。「惣那家文書」、「高忍日売神社文書」によればこの得丸が転じて徳丸になったとも考えられる。南北朝時代には徳丸の名が記録されており徳丸とは徳米から転じたとも考えられる。「この氏神高忍日売神社は古く、延喜式内社であり、徳丸はその荘園の一部であったから神社に対して米を取めていたので、その名が出たのであろうか？」（高忍日売神社宮司談）

慶安元年「伊予国知行高郷村数帳」（一六四八）の伊予郡の項に「高八一三石三斗九升三合、
升一合、畠六〇石一斗二合」とある藩領。

徳丸地区の由来については詳らかに三好憲之氏は「松前史談第五号」（「徳丸は地形的に重信川に沿った扇状防、河岸段丘のような高所はトコと化して徳の字に当てられたようである語の山の語源はマラであるが、マラはこのマルに日本では丸の字が当てら

徳丸地区のホノギ

なく集落にも用いられている。

そこで徳丸の場合、地形的には扇状地の扇端、ないし自然堤防状の敷高地を意味する古語のトクに徳の字を当てる韓国語に由来する。集落ないし村落を意味するマル（丸）をそれに取り入れて「徳丸」の地名が発生し、集落が発展したと推定しても無理はなからう。」と述べている。

〔二〕小字（ホノギ）の由来や伝承

徳丸のホノギは「段別畝順帳」によると二六ある。

なお、『角川日本地名大辞典』によると二八あるが、次の二か所が重複していると思われる。

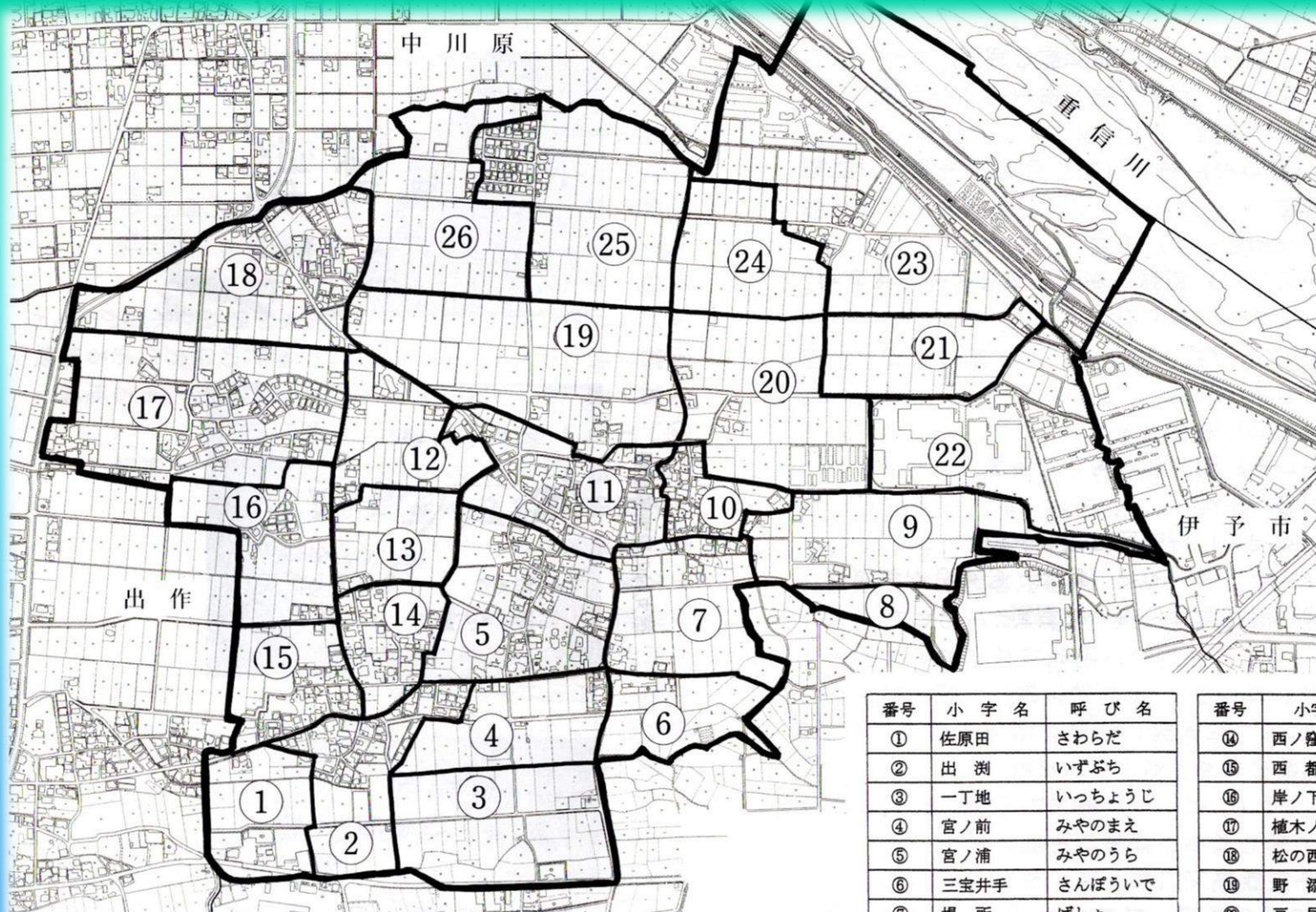
三島地（三島尻）

上久保（上窪）

番号は地図番号である。

- ① 佐原田（さわらだ）不詳
- ② 出 淵（いずぶち）低地で湿地帯であった地域
- ③ 一丁地（いっちょうじ）条里制に由来
- ④ 宮ノ前（みやのまえ）高忍日売神社の前にある地域
- ⑤ 宮ノ浦（みやのうら）高忍日売神社の後方にある地域
- ⑥ 三宝井出（さんぼういで）地下水が豊富な水源があった。
- ⑦ 場 所（ばしょ）不詳
- ⑧ 上久保（かみくぼ）低地で湿地帯であった地域
- ⑨ 燈明田（とうめいでん）神社の燈料の費用を供する田の地域
- ⑩ 恵美子（えびす）夷子神社跡の地域
- ⑪ 出 口（でぐち）不詳
- ⑫ 泉ノ元（いずみのもと）地下水が豊富な水源があった。

(三) 徳丸の小字（ホノギ） 図



徳丸地区のホノギ

番号	小 字 名	呼 び 名
①	佐原田	さわらだ
②	出 淵	いずぶち
③	一丁地	いっちょうじ
④	宮ノ前	みやのまえ
⑤	宮ノ浦	みやのうら
⑥	三宝井手	さんぼういで
⑦	場 所	ばしょ
⑧	上久保	かみくぼ
⑨	燈明田	とうめいでん
⑩	恵美子	えびす
⑪	出 口	でぐち
⑫	泉ノ元	いずみのもと
⑬	一ノ宮	いちのみや

番号	小字名	呼び名
⑭	西ノ窪	にしのかぼ
⑮	西 都	さいと
⑯	岸ノ下	きしのした
⑰	植木ノ元	うえきのもと
⑱	松の西	まつのにし
⑲	野 添	のぞえ
⑳	豆 尻	まめじり
㉑	三島地	みしまじ
㉒	五屋敷	ごやしき
㉓	北 野	きたの
㉔	四反地	したんじ
㉕	天 王	てんのう
㉖	諏 訪	すわ

二 中川原の小字（ホノギ）

(一) 大字の起源や由来

現松前町北東に位置する地区で、北城は重信川南岸に沿って東部と南部の一部は徳丸地区に接する。南西部は出作地区に接し、西部は大間地区境まで広がる。

重信川の氾濫によって砂礫の堆積した土地を開拓してできたものと考えられる。重信川（旧伊予川）の三支流の中間にできた村落で、隣接する徳丸地区に河原という集落があり、ここを中河原と呼ぶようになったとも言われている。江戸時代初期、既にその呼称は文書にあり、明治初年まで中河原と呼ばれていた。足立重信が慶長九（一六〇四）年に重信川を改修してからは、氾濫も少なくなり開拓が進み、石高が増えたようである。

中河原を中川原と記すことはあったが、寛永一二（一六三五）年、松山藩松平氏就封以来、村名は変更も分郷もない。

慶安元年「伊予国知行高郷村数帳」の中川原村高八〇〇石、うち田七五九石七とある。「天保郷帳」（一八三四年）では六合一となっており、近郷に比べ増高

(二) 小字（ホノギ）の由来や伝承

中川原の小字は「段別畝順帳」によ手の内（どてのうち）、須輪（すわ）、い）、沢上（さやかみ）、半三郎（はん

（つしわら）は、地図番号①から⑨の小字に含まれ、ここでは九つの小字についてのみ記した。番号は地図番号である。

①新開（しんがい） 東端は徳丸地区と接しており、近くの重信川の河川敷となっている旧運動場は、開発（かいほつ）と言って新開畑で野菜・桑等を栽培していた。

新開の中には更に「須輪」と呼ばれるホノギがあったようだが地番は不詳。これは徳丸地の須訪と接しており、広末へとつながっている。徳丸の河原地区には須訪神社が祀られていたのでこのように呼ばれていた。須輪や諏訪と記す文献も見られる。

②横枕（よこまくら） 水利の便のよいことを意味しており、水が比較的かかりやすい田を有する。集落の中央部を東西に走る一号线と呼ばれる町道、登道の北の重信川堤防から西へと広がっている地帯で、集落の中心までつながる地帯である。

③新田（しんで） 素鷲神社の北西一帯の地で、ここより西は昔、お鷹場（おたけ）といって松山藩の狩場で、殿様や武士たちが鷹を使って狩をしていた所だといわれている。大間地区まで雑木の茂った荒地であったが、江戸の終わりから明治初期にかけて開墾した地帯である。

新田の中には「半三郎」と呼ばれる人名を付けたホノギがあったようで、新田北部の重信川堤防のすぐ下に位置していたが地番は不詳。

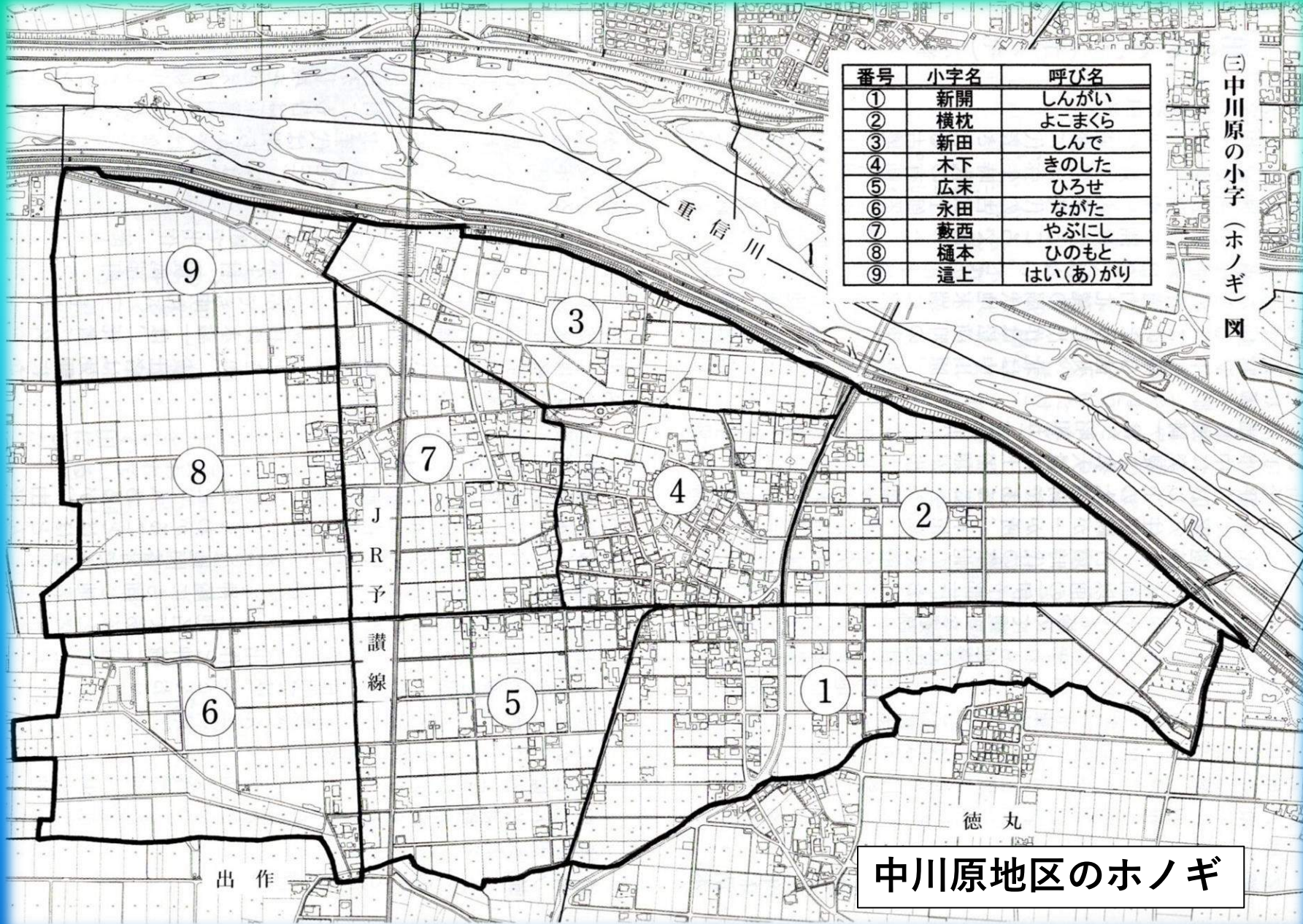
④木下（きのした） 中川原の中央部に位置しており、素鷲神社、宗金寺、墓地、ひよこたん泉などがある。

この木下の中には「沢上」（さわかみ・さいのかみと記された文献もある）と呼ばれるホノギがあったようだ

中川原地区のホノギ

(三) 中川原の小字 (ホノギ) 図

番号	小字名	呼び名
①	新開	しんがい
②	横枕	よこまくら
③	新田	しんで
④	木下	きのした
⑤	広末	ひろせ
⑥	永田	ながた
⑦	藪西	やぶにし
⑧	樋本	ひのもと
⑨	這上	はい(あ)がり



中川原地区のホノギ

二 出作の小字（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

出作には、出作遺跡に代表される古墳時代の大規模な祭祀遺跡があり、近くには弥生時代の有柄磨製石剣を出土した宝剣田遺跡や、古墳時代の古式土師器を出土した遺跡もあり、古くから開けたところであった。松前町内から出土した弥生遺跡は多くはない。その出土地域は徳丸、出作、神崎などの行道山北麓の扇状地末端に位置する地域に限られている。このように出作は松前町の東方にあり、南は伊予市宮ノ下、東は徳丸、北は中川原、西は神崎地区に接している。

「出作遺跡」は、昭和五二（一九七七）年に農業基盤整備の工事中に見え大量の土器類が出土した。遺跡は一万五千平方メートル以上の大遺跡であることが推定され、祭祀遺跡のほか、竪穴住居跡が一所、木棺墓一基が確認されている。

「出作遺跡」は、古墳時代の祭祀の変遷でなく、律令体制以前の「伊予郡」における明らかなる上でも極めて重要な遺跡とされている。この出作遺跡は、いずれも延喜式内社日売神社と神崎の伊予神社のちょうど中間にあり、JR北伊予駅の北東約七〇〇メートルにあり、集落の近くに開墾する原野がなくなる

耕地を求め、そこに作り小屋を造り開墾になる。収穫の時期に寝泊りだけしての地に定住するようになり新しい村ができ、この村は神崎出作村として、嘉永四（一

出作地区のホノギ

八幡宮の文書に記録されており、この地名の古さが知られている。出作は神崎荘民が莊境を越えて耕作したことと思われる。おそらく出作村にも昔は重信川が流れていた時期があると思われるが、実年代は明らかではない。しかし、寛文年間（一六六一～一六七三）には、出作村と改められている。

江戸時代には重信川からの分水問題で出作、徳丸、八倉、宮ノ下、上野の五か村は上流の麻生村（現砥部町）との間にしばしば論争を起した。なかでも明和八（一七七二）年の大干ばつに端を発した「明和の水論」は、死者二名を出し関係者は備中代官所に呼び出され、責任者は死罪になるという結果になった。

（二）小字（ホノギ）の由来や伝承

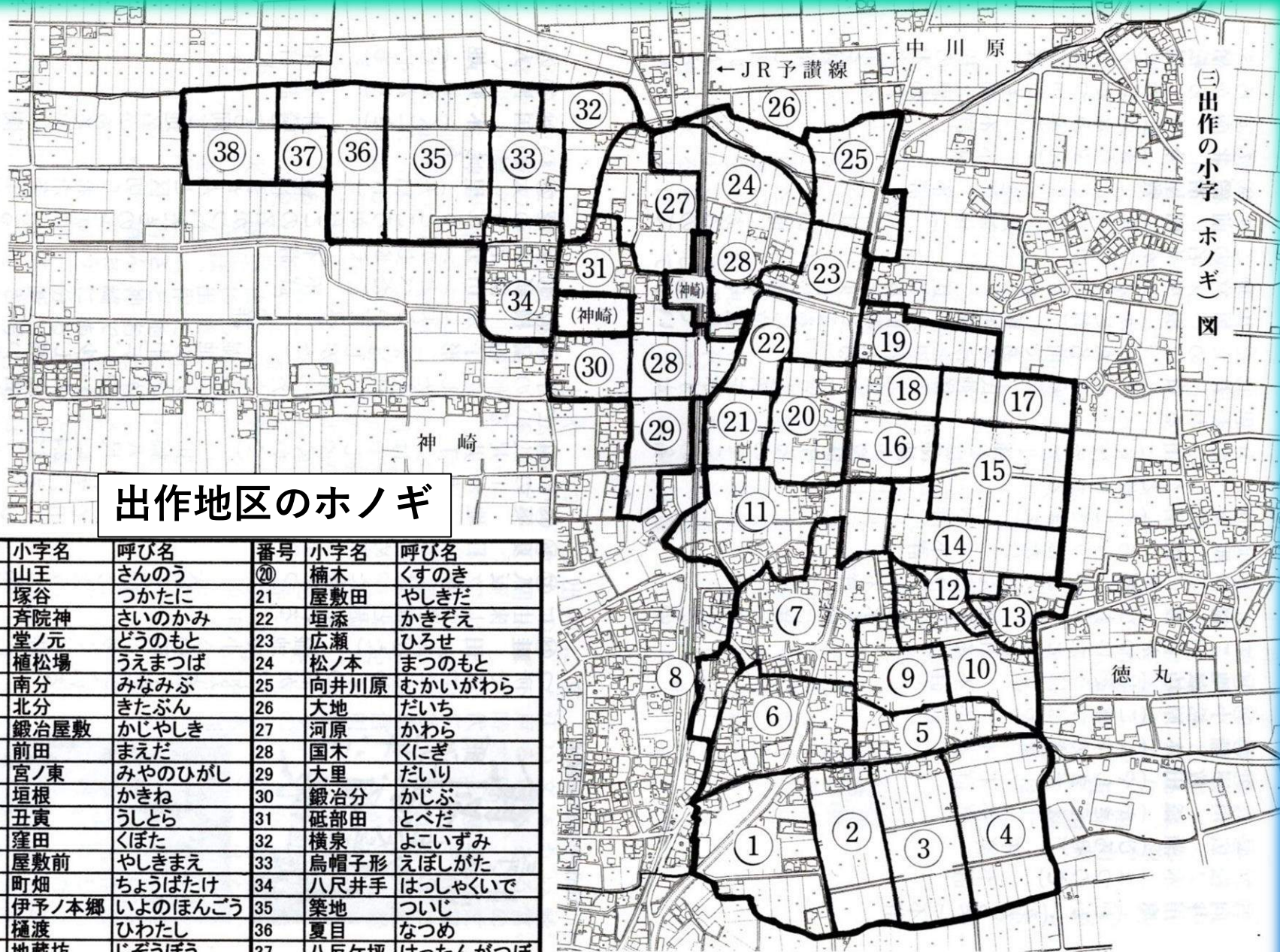
出作の小字は「段別欽順帳」によると三八あるが、由来や伝承について地元の古老に聞いてもわかることはほとんどなく、今後の研究が待たれる。番号は地図番号である。

① 山王（さんのう） 隣接する神崎にも同じ地名がある。山王神社があったことからきた地名であると考えられる。同じ地名のところが後に出作と神崎に分断されたものであると思われる。神崎では、「さんおう」という。この名がついたものである。

② 塚谷（つかたに） お塚さん（古墳）があったのでこの名がついたものである。

③ 斎院神（さいのかみ） 災いを防ぐ賽の神、財の神と思われる神様が祀られていたことからついた名前であると思われる。

④ 堂ノ元（どうのもと） 不詳



出作地区のホノギ

番号	小字名	呼び名	番号	小字名	呼び名
①	山王	さんのう	②⑩	楠木	くすのき
②	塚谷	つかたに	21	屋敷田	やしきだ
③	齊院神	さいのかみ	22	垣添	かきぞえ
④	堂ノ元	どうのもと	23	広瀬	ひろせ
⑤	植松場	うえまつば	24	松ノ本	まつのもと
⑥	南分	みなみぶ	25	向井川原	むかいがわら
⑦	北分	きたぶん	26	大地	だいち
⑧	鍛冶屋敷	かじやしき	27	河原	かわら
⑨	前田	まえだ	28	国木	くにぎ
⑩	宮ノ東	みやのひがし	29	大里	だいいり
⑪	垣根	かきね	30	鍛冶分	かじぶ
⑫	丑寅	うしとら	31	砥部田	とべだ
⑬	窪田	くぼた	32	横泉	よこいずみ
⑭	屋敷前	やしきまえ	33	烏帽子形	えぼしがた
⑮	町畑	ちょうばたけ	34	八尺井手	はっしゃくい
⑯	伊予ノ本郷	いよのほんごう	35	築地	ついで
⑰	樋渡	ひわたし	36	夏目	なつめ
⑱	地藏坊	じぞうぼう	37	八反ヶ坪	はったんがつぼ
⑲	小松原	こまつばら	38	畔田	あぜた

四 神崎の小字（ホノギ）

①大字の起源や由来

神崎地区は松山平野の南端、山麓を高速道路が走る行道山塊の扇状地扇端北部、松前町では東南部に位置する。地区西部を一〇四の等高線が走り、全地区の高低差が四〇以内とみられる平坦地である。

古代より人が住み、昭和二二（一九四七）年に中学校の北西八反地（小字ではない）から弥生後期の土器片などが出土している。地区の氏神伊予神社に関する故事が多く、一〇世紀の「延喜式神名帳」などにも記述があり、また、莊園の存在も知られている。「和名抄」には、「伊予郡六郷」に、「神前」（「かんざき」あるいは「かむさき」の読みあり）があり、現神崎を中心とした地域であるとともに、伊予郡で最も早く開けた地域とみられている。また、神崎の地名もそれに由来するものと考えられている。

中世以降においても、寺社に関する区が存在し多くの人々が生活していた期には松山藩で、「北神崎村」と称し、「伊予国知行高郷村数帳」に、「石高八、うち田七九石六斗五升一合、畠六五ある。後世「神崎村」に改称され、四年には「出作村」、「鶴吉村」との間で組み換えを行い、ほぼ現在の地積となる八九〇年の北伊予村成立の際「大字神崎

②小字（ホノギ）の由来や伝承

神崎の小字は「段別畝順帳」によると二八ある。番号は地図番号である。

①山王（さんおう） かつてこの地は、各地にある山王神社が鎮座し、山王原という山林、原野があったので、この名がついたのであろう。なお、出作地区にも「さん

のう」と称する同名の小字がある。

②庵ノ浦（あんのうら） かつてこの地の人家は、現在もここにある「榊正軒」なる庵の裏の方にあったので、それよりついた地名と思われる。

③蔵ノ元（くらのもと） かつて藩の収獲米を保管する蔵があり、蔵蔵と呼ばれていたことからついた名との伝承がある。

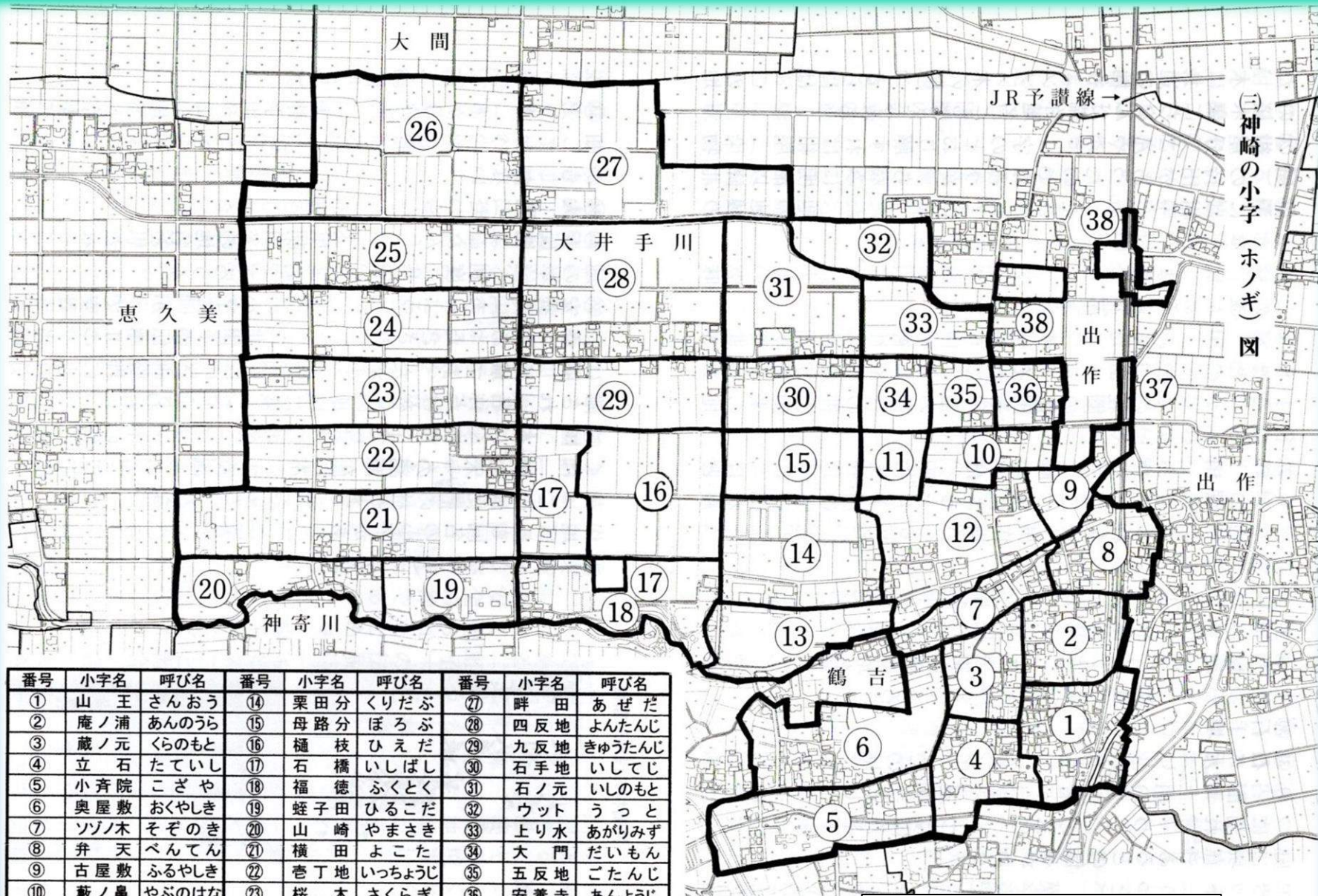
④立石（たていし） 現在、伊予神社の境内にある道祖神社が、かつてこの地の元郷道沿いの民家の間にあり、出産後の乳の出に御利益があるとして「ちちぶさん」と呼ばれていた。等身大の立石が御神体であるので、この名がついたと思われる。

⑤小斎院（こさや） 「斎院」のつく地名は各地にある。本来の字は「斎院」で、神に仕える者が身を清める場所との説があり、この地に鎮座する伊予神社に由来する地名と思われる。

⑥奥屋敷（おくやしき） 南に隣接する小斎院の伊予神社から見ると、北奥の屋敷地となるからであろうか。

⑦ソゾノ木（そぞのき） 漢字表記されていない古い地名と思われる。木は紀貫之の祖の系統につながる人たちが住んでいた可能性もあるとの説がある（北伊予の伝承

神崎地区のホノギ



(三) 神崎の小字 (ホノギ) 図

番号	小字名	呼び名	番号	小字名	呼び名	番号	小字名	呼び名
①	山 王	さんおう	⑭	栗田分	くりだぶ	⑲	畔 田	あぜだ
②	庵ノ浦	あんのうら	⑮	母路分	ぼろぶ	⑳	四反地	よんたんじ
③	蔵ノ元	くらのもと	⑯	樋 枝	ひえだ	㉑	九反地	きゅうたんじ
④	立 石	たていし	⑰	石 橋	いしばし	㉒	石手地	いしてじ
⑤	小齊院	こざや	⑱	福 徳	ふくとく	㉓	石ノ元	いしのもと
⑥	奥屋敷	おくやしき	⑲	蛭子田	ひるこだ	㉔	ウツト	う っ と
⑦	ソノノ木	そそのき	㉑	山 崎	やまさき	㉕	上り水	あがりみず
⑧	井 天	べんてん	㉒	横 田	よこた	㉖	大 門	だいもん
⑨	古屋敷	ふるやしき	㉓	寺丁地	いっちょうじ	㉗	五反地	ごたんじ
⑩	藪ノ鼻	やぶのはな	㉔	桜 木	さくらぎ	㉘	安養寺	あんようじ
⑪	道 添	みちぞい	㉕	紺屋分	こんやぶ	㉙	国 木	くめぎ
⑫	向 井	むかい	㉖	豆 尻	まめじり	㉚	実 安	さねやす
⑬	境 勝	さかいがち	㉗	宮 田	みやた			

神崎地区のホノギ

五 鶴吉の小子（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

鶴吉は中央を南北に一〇〇の等高線、東西に県道八倉松前線が走り、並行して長尾谷川が流れる。JR予讃線や大谷川付近を境にして南は伊予市に接する。谷上・行道山麓の扇状地扇端に続く旧重信川の氾濫原上に位置する。明治初期まで神取泉の南は大藪であり、泉より流れ出る川は当時深き身の丈に及んでいたといわれ（『伊予温故録』）、現在の長尾谷川がそれである。北部のオドロ（改修後は福徳泉）は水郷で、多くの魚が生息していた。神奇川はここを湧水源として神崎との境界になっている。

鶴吉は松山・大洲藩相給の村で、村高は慶安元年「伊予国知行高郷村数帳」（一六四八）では、「八三三石余（松山藩領分七四二石余、大洲藩領分八九石余）」である。幕府公簿は江戸時代を通じて釣吉村一村とするが、現地では松山藩領（本村・安井）を「釣吉村」、大洲藩領（本村・安井）を「釣吉村」と呼び二村に分けていた。「元禄」松山藩領を鶴吉村と改めると大洲藩領である。鶴吉村が大洲藩と松山藩の地として分けられたのである。明治の村をまとめて一村になった。

ツル（水流・津流）は、ツラ（連）のある低地にアシが生えた地を嘉字の意味に通じる。ちなみに、加佐も賀

鶴吉地区のホノギ

（二）小子（ホノギ）の由来や伝承

鶴吉の耕地は、明治一〇年の耕地整理後、一番耕地九番耕地に分けられ、小子（ホノギ）数は、康井を入れて二ある。しかし、『段別畝順帳』、『昭和三三年調製の鶴吉耕地図』では康井の記述はなく二一になっている。番号は地図番号である。

①宮ノ前（みやのまえ） 伊予神社の前にある地で、鶴吉の一番地がある。神社に関係のあるホノギ名

②檀木（かぶすのき） そこに檀の木があったからではないか。植物地名のうち、木にちなんだ地名は多い。

③草田（くさだ） 草屋（茅葺屋根）に必要な茅を植える田があったと言われる。元禄一五（一七〇二）年以前、草田池が造られていたから水利に関係あるホノギ名と言う説もある。

④辻（つじ） 人が交わる四辻。いろいろなことが起こり、伝説や信仰に関係があるのではない。

⑤正覚（しょうがく） 仏教に関係する用語。この地には正覚墓地が現存している。

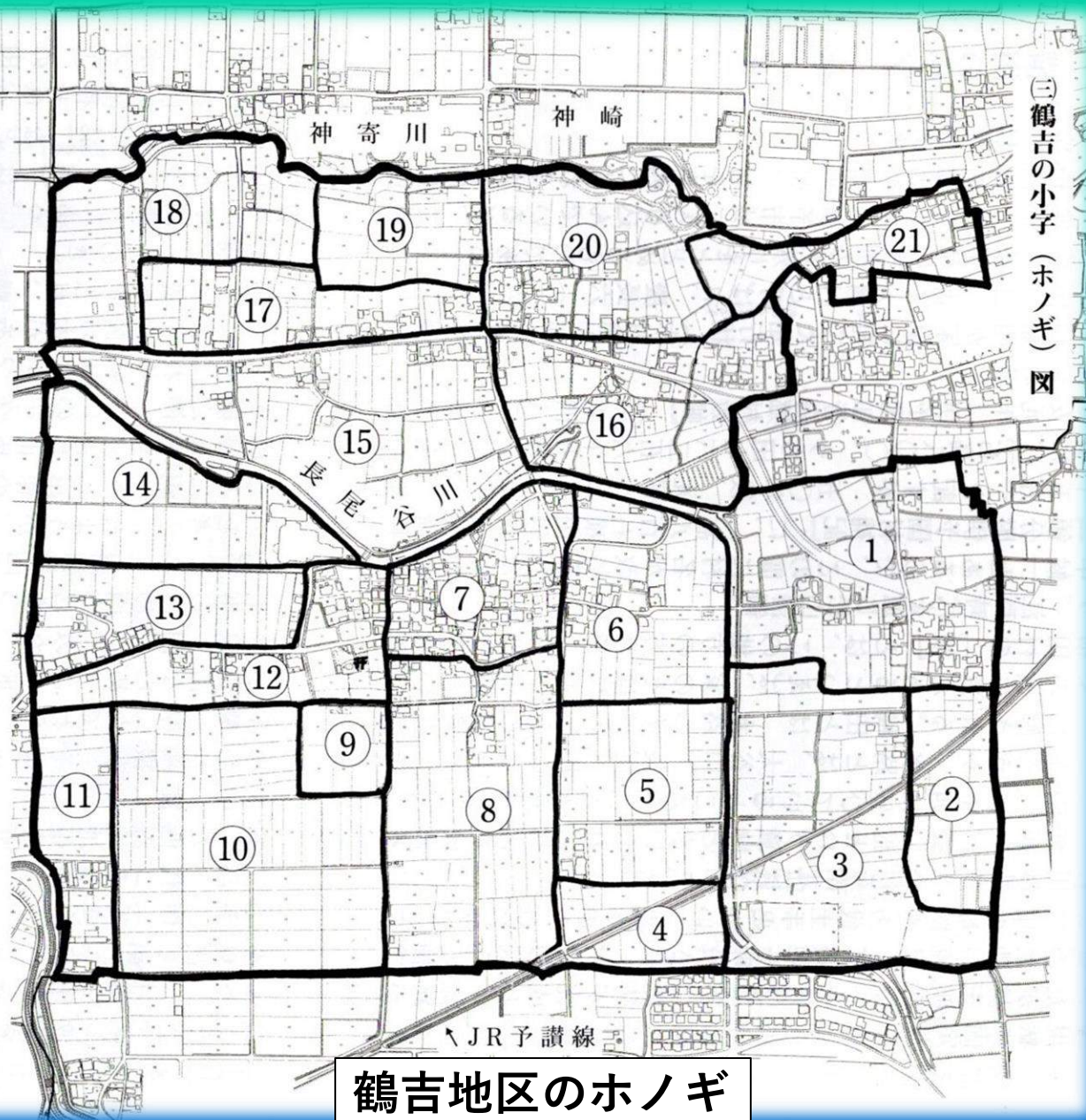
⑥康居（やすい） 不詳

⑦安井前（やすいまえ） 通称安井がよく分かる。安井前、康居、正覚、幸殿、神門田あたりで、鶴吉の中央部。北方は長尾谷川に接する低い地

⑧幸殿（このの） 仏教に関係する用語。ここに幸殿墓地がある。

⑨神門田（ぜもた） 仏教に関係する用語。神門前と言う古地名あり。寺に關すると思われる正覚・幸殿・神門田が西方へ並んで位置する。いずれも昔の晴光院が、延喜

番号	小字名	呼 び 名
①	宮ノ前	みやのまえ
②	橙 木	かぶすのき
③	草 田	くさだ
④	辻	つじ
⑤	正 覚	しょうがく
⑥	康 居	やすい
⑦	安井前	やすいまえ
⑧	幸 殿	こどの
⑨	禅 門 田	ぜもだ
⑩	有 枝	ありえだ
⑪	千 足	せんぞく
⑫	西 之 前	にしのみえ
⑬	加 佐 浦	かさうら
⑭	神 取	かんどり
⑮	新 開	しんがい
⑯	拂 川	はらいがわ
⑰	化粧田	けしょうでん
⑱	三 瀧	さんたき
⑲	北 浦	きたうら
⑳	福 徳	ふくとく
㉑	大 町	おおまち
㉒	康 井	やすい



(三) 鶴吉の小字(ホノギ)図

鶴吉地区のホノギ

六 横田の小字（ホノギ）

大字の起源や由来

現松前町南部の農耕地帯。村を東西に流れる大谷川以南はほぼ正方形をなして伊予市域に入り込んでいるが、これは古代の条里制の坪割の名残りととめるものである。

横田村は、古く大溝村と呼ばれ、慶長六（一六〇一）年に加藤嘉明が家臣に宛てた知行状（木村徳太郎氏所蔵文書）に見られる。

慶安元年「伊予国知行高郷村数帳」（一六四八）の伊予郡の項に、「石高八〇〇、うち田七六二石六斗五升、畠三七石三斗五升」と記すが、五〇年後、元禄一三（一七〇〇）年の「領分附伊予国村補記」に、「高八百石横田村右は大溝村と申候」とあるので、この間に村名が改められたものであろう。江戸時代を通じ松山藩領。

横田村の「横」とは、この地方の方言で「そば」を意味し家の横に道があるといえ、家のそばに道があるという

意味に解される。横田とは、水路の
はななろうか。水路とは、大谷川、

れに沿って東西に延びているところ
横（東西）に長い村という意味とも
大谷川は沖台と本村を南北に分けてい

大谷川の堤防を万代土手といひ、多量の土砂が流出して耕地を埋没さへあつたが、天明二（一七八二）年に堤ほほ現状に固定した。

〔小字の（ホノキ）の由来や伝承

横田在住の昭和七年から一〇年生まれの方々から伺ったことを『松前町誌』などと照合してまとめたが不詳もある。横田の小字（ホノギ）は『段別畝順帳』によると七つある。番号は地図番号である。

①楠（くすのき） 水利に關係のある地名で、池（楠池）平成元年二月、懸樋（かけひ）が発掘されている）があり、近くに大きな楠の木があった。その辺りに「くすのきさん」と呼ばれる祠（ほこり）はなかっただろうか。

②財之神（さいのかみ） 寺社に関係のある地名で、災い

の侵入をさえぎり止める神として、村の入り口や道の辻などに祀_{まつ}った。出作のホノギ「斎院神」と同じ性格のも
のと考えられようか。昭和五（一九三〇）年開通の国鉄
（現ＪＲ）予讃線松山・南郡中（現伊予市）間の鉄道敷設
工事のため南方にあったものを北方へ移動した。

③泉田（いずみた） 地形に關係のある地名で、湧き水
が豊富なため、この地に横田地区の住居が集中している。

④ 藝原（たでわら） 水利に關係のある地名で、大谷川堤防に隣接し、そばに藝原池がある。

⑤中 窪（なかくぼ） 地形に関係のある地名で、農耕に適した低湿地地帯を意味している。

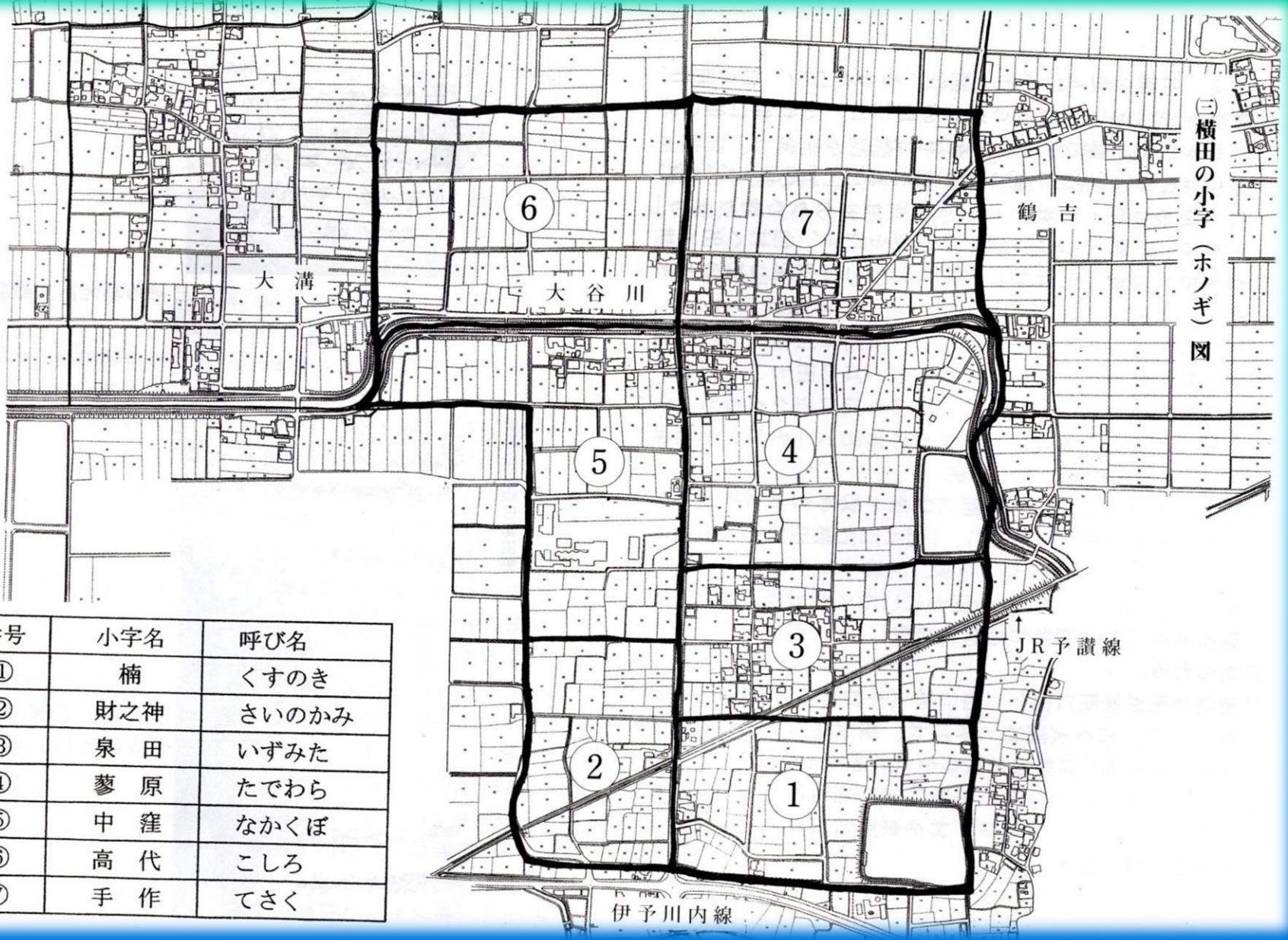
④高代（こしろ）不詳

⑦手 作(てさく) 『古文書用字用語大辞典』に、「[出作]を見出し語」「でづくり」で、「『てさく』とも」とある。また、『日本史用語辞典』には、出作を「『でづくり』、『てさく』、『しゅつきく』とも」とある。このことから、「手作」を「てづくり」Ⅱ「てさく」と考えられないだろう。

横田地区のホノギ

(三)横田の小字(ホノギ)図

番号	小字名	呼び名
①	楠	くすのき
②	財之神	さいのかみ
③	泉 田	いずみた
④	蓼 原	たでわら
⑤	中 窪	なかくぼ
⑥	高 代	こしろ
⑦	手 作	てさく



横田地区のホノギ

七 大溝の小字（ホノギ）

(一) 大字の起源や由来

現松前町の中南部の農耕地帯。東は鶴古、南は横田、南西は南黒田、西は東古泉、北は永田に接し、永田との境界に長尾谷川が流れている。

長尾谷川の流路に沿う一帯は重信川（古くは伊予川といひ、この付近を流れていたという）の旧河道で、戦国末期頃に流路を転じた跡と思われる流出土砂の堆積で河床が上昇して、いわゆる天井川をなしたもので、大溝の地名も凹地状の地形であったため付けられたものであろう。

慶安元年「伊予国知行高郷村数帳」（二六四八）には、黒田大溝村、元禄一三（一七〇〇）年には大溝村となつてゐるので、黒田村より分村したと思われる。慶安元年の村高帳には、「村高四五二石六斗五升三合、うち田四三二石三斗四升三合、畠二〇石三斗一升」と記され、江戸時代を通じ松山藩領である。

大溝には本村と原田がある。

原田の由来は、「松前町史」によると、古くは春田と書かれ、墾地を意味するもので、「治」「墾」「張」などに变化したもので、後に開田、春田より「原田」に転訛と記述されている。

一方「松前町大字大溝変革史」（平山）によると、原田の西と南は条里制の里の地の良田としてかなり古くから農地

（称）にも「谷上田」があるように、新田にかかわるものは全くなく、江戸時代の新田開発ではあり得ない。

さらに、元和四（一六一八）年、黒田庄屋の記録に「黒田村庄屋高市より来たり元祖安座成、尤来る者地八町余りにて此地江出作被仰付候」とあり、これと「ハルタ」を結合した創作ではない」と記述されている。

また、原田には庚申堂があるが、元和四年頃に正木（松前）古城の石垣を貰い受け、創建されたとの記述もあり、その頃にはすでに大溝村原田と言われていたと思われる。

(二) 小字（ホノギ）の由来や伝承

本村には飼葉ノ木（かいばのき）と叶田（かないだ）、原田には橘（たちばな）のわずか三つの小字があるのみであるが、通称ホノギと称する地名は実に四六もある。

これは推測であるが、飼葉ノ木に関しては「松前町大字大溝変革史」に、「飼葉ノ木の一帯は家畜の餌である雑木が群生していた」と記載されているので名付けられたのではないか。ほかのホノギは推測もつかなかった。

さらに、明治九年の「段別畝順帳」以前にホノギがあることが、「松前町大字大溝変革史」に記されていることが分かった。番号は地図番号である。

(1) 飼葉ノ木（かいばのき）

- ① 大ぶけ（おおぶけ）
- ② 上かいば（かみかいば）
- ③ 下かいば（しもかいば）
- ④ 永地（ながち）
- ⑤ 表の川原（おもてのかわら）
- ⑥ 加入堂（かにゆうどう）
- ⑦ 市の関（いちのせき）
- ⑧ 山伏田（やまぶしだ）の八
- (2) 叶田（かないだ）

横田地区のホノギ

番号	小字(ホノギ)	呼び名	(ホノギ)通称
(3)	橋	たちばな	③⑩ 井手添 いでぞい
			③⑪ 泉の裾 いずみのすそ
			③⑫ 穴田 あなだ
			③⑬ 年川 ねんがわ
			③⑭ 四反地 したんじ
			③⑮ 東橋 ひがしたちばな
			③⑯ 北土橋 きたつちあわせ
			③⑰ 南土橋 みなみつちあわせ
			③⑱ 原田地 はらだじ
			③⑲ 屋敷 やしき
			④⑩ 谷上田 たがみでん
			④⑪ 木綿坪 きわた
			④⑫ 永地 ながじ
			④⑬ 高下添 こげぞ
			④⑭ 北見作 きたみつくり
			④⑮ 南見作 みなみみつくり
			④⑯ 生泉田 しょうぶだ



(三)大溝の小字(ホノギ)図

番号	小字(ホノギ)	呼び名	(ホノギ)通称
(1)	飼葉ノ木	かいばのき	① 大ぶけ おおぶけ
			② 上かいば かみかいば
			③ 下かいば しもかいば
			④ 永地 ながち
			⑤ 表の川原 おもてのかわら
			⑥ 加入堂 かにゆうどう
			⑦ 市の関 いちのせき
			⑧ 山伏田 やまぶしだ
			⑨ 次郎株 じろうかぶ
			⑩ 南次郎株 みなみじろうかぶ
(2)	葉田	かないだ	⑪ 流田 ながじ
			⑫ 塚田 つかだ
			⑬ 竹の町 たけのまち
			⑭ 源七屋敷 げんしちやしき
			⑮ 屋敷 やしき
			⑯ 前田 まえだ
			⑰ 雁飛 がんどび
			⑱ 葉佐 はさ
			⑲ 八反地 はったんじ
			⑳ 蔵屋敷 くらやしき
			㉑ 三反地 さんだんじ
			㉒ 五反地 ごたんじ
			㉓ 北高城 きたこしろ
			㉔ 南高城 みなみこしろ
			㉕ 西屋敷 にしやしき
			㉖ 浮橋 うけやし
			㉗ 北葉田 きたかないだ
			㉘ 南葉田 みなみかないだ
			㉙ 横蔵 よこくら

八 永田のホノギ

〔一〕大字の起源や由来

現松前町の中郡、東に釣吉村、北に北江頸村、西に東古泉村、南に大溝村がある。江頸という村名は国近川が村の西方で入り江をなし、この地はその頸に当たるので付けられたものという。

正保年間（一六四四―四八）にこの村は分郷して岡田・永田の二村となったが、岡田村は昭和初年頃に江頸村（もとの北江頸村）に合併したので、幕府公簿は幕末まで南江頸村であるが、現実には永田村であった。

慶安元年「伊予国知高行郷村数帳」（一六四八）の伊予郡の項に、「南江頸村、高五九六石八斗四升二合、うち田五八七石二斗八升五合、畠九石五斗五升七合」とあって畑地が少ない。江戸時代を通じて松山藩領。

地元の中村文雄さんの「永田の地名考」によれば、「何れの資料にも不明が多い。『常山記談』、『続武將感状記』などに、『……黒田・大溝・永田村ノ百姓コ

人呼ヨセ……』とある。これは、慶長の三津、刈屋口の戦いの中に、永田村がこの戦いの褒美として、永田には「華蔵」には「庚申堂」の石垣が寄進されたといふ。松前町内には「ナガタ」のホノギを称するが、何れも「永田」と記し、「長田」河川の流れる形を表し、支流を伴う豊富「長尾谷川」（古くは、名子谷川・名子川や「上須丸川・下須丸川と北の「神寄川

永田地区のホノギ

田地に適した地域であることから「永田」の地名が起ったのではないだろうか。また、「永」には不老長寿・招福などの思想があると聞いた。岡田・永田地区内には、ともに飛び地が多数点在していた。」とある。

〔二〕小字（ホノギ）の由来や伝承

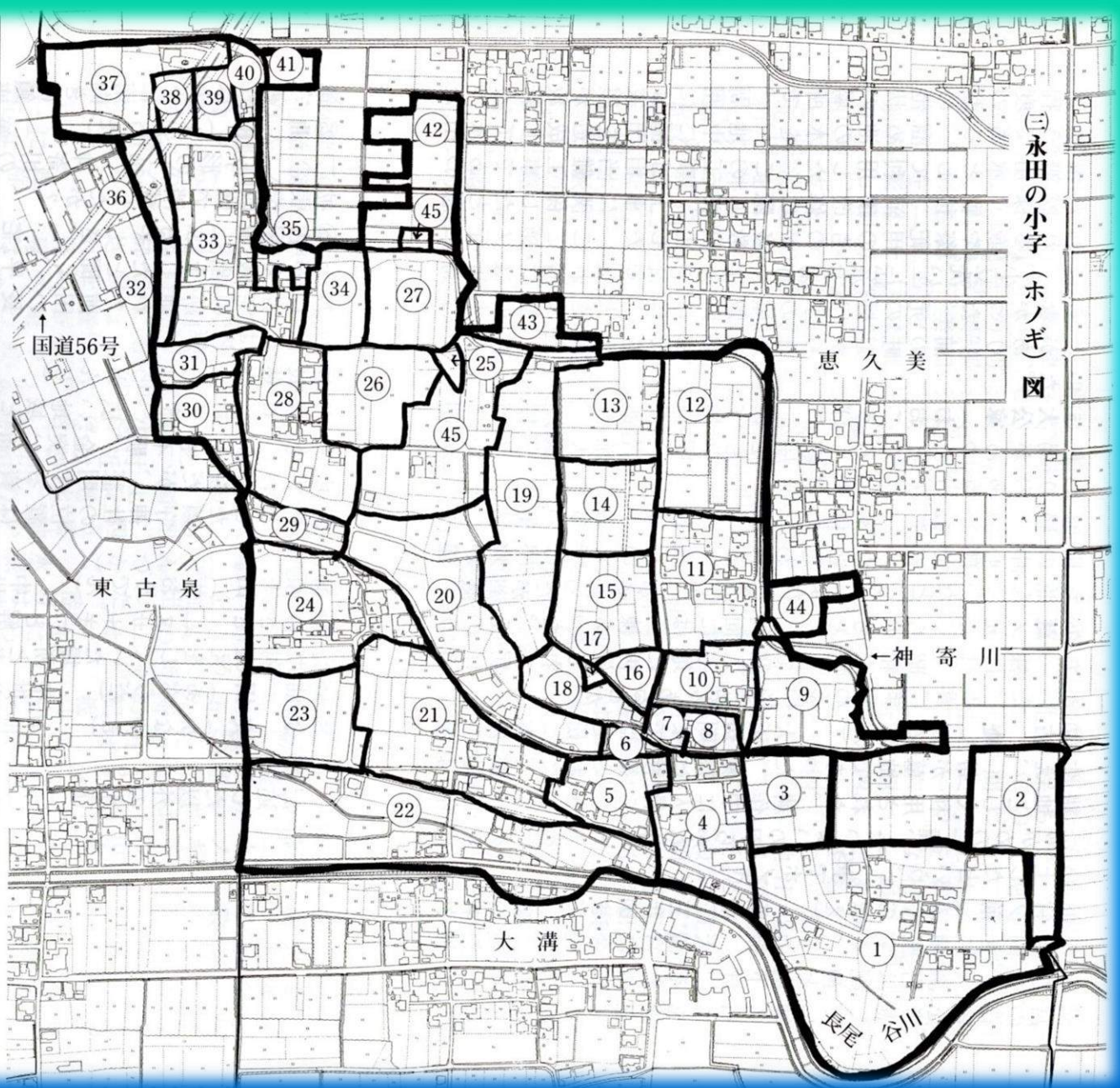
永田のホノギは、四五〇五〇？ある。『角川日本地名大辞典（38愛媛版）』によれば四五、愛媛県立図書館郷土資料室『段別畝願書』によれば、さらに「弓領、行元、郷地、青木、南青木」の五か所の記載がある。これはいずれも恵久美の飛び地のようなものである。

中村文雄さんの「ホノギについての伝承等」に掲載されているものを抽出した。番号は地図番号である。

① 銭 塚（ぜんづか） 水脈は存在するが、水利は不便。戦前三八、四四、四五番地からは須恵器が多数出土した。建設省（現、国土交通省）の調査による古い伊予川の河川図を見ると、付近は伊予川の右岸（北側）に当たり、自然堤防の一部分だった。古代の祭祀跡とも考えられる。維新前後は自家用の「綿」を栽培し製糸から織布まで行っていた。幼少の頃は布団や蚊帳は自家製だった。大正末期から昭和初期には養蚕用の「桑」を栽培していた。その後、干ばつ時に泉を造成。戦後、耕転機による農耕で、須恵器などは粉砕され発見は困難。宅地造成で住宅地化した。

④ 樋ノ口（ひのくち） 通称「樋ノ元」が存在するから、集落を樋ノ口と呼ぶようになったのか？藩政時には、樋ノ元の上は東西一〇〇〇一五〇以上、南北五〇〇七〇

番号	小 字 名	呼 び 名
①	銭 塚	ぜんづか
②	上須丸	かみずまる
③	下須丸	しもずまる
④	樋 口	ひのくち
⑤	大公家	おおこうげ
⑥	松ノ窪	まつのかぼ
⑦	樋口宮ノ浦	ひのくちみやのうら
⑧	樋 口	ひのくち
⑨	井手ノ浦	いでのうら
⑩	松ノ浦	まつのうら
⑪	七反地	しちたんじ
⑫	局	つぼね
⑬	岸ノ上	きしのうら
⑭	横 枕	よこまくら
⑮	鍛冶分	かじぶ
⑯	蔵ノ元	くらのもと
⑰	古 庵	ふるあん
⑱	宮ノ浦	みやのうら
⑲	錆 田	さびだ
⑳	深 田	ふかた
㉑	同免	どうめ
㉒	松ノ隣	まつのとなり
㉓	三人百姓	さんにんひやくしょう
㉔	長 通	ながどおり
㉕	曲 田	まがりだ
㉖	表 田	おもてだ
㉗	橋ノ本	はしのもと
㉘	古屋敷	ふるやしき
㉙	甚九分	じんくろうぶ
㉚	宋心分	そうしんぶ
㉛	芋漕川	おこぎがわ
㉜	西ノ窪	にしのくぼ
㉝	高 見	たかみ
㉞	地蔵元	じぞうのもと
㉟	浦木戸	うらきど
㊱	門神西窪	かどのかみにしのくぼ
㊲	長蓮寺	ちようれんじ
㊳	頭王田	ずおうでん
㊴	夢 原	たでわら
㊵	ヌサキ	ぬさき
㊶	生歩田	しょうぶでん
㊷	深ノ上	ふかのうえ
㊸	油 田	あぶらだ
㊹	福 徳	ふくとく
㊺	金 突	かなつき



永田地区のホノギ

九 東古泉の小子（ホノギ）

（一）大字の起源や由来と「いなや」の由来について

現松前町の北伊予校区の最西部に位置する。古泉という地名の由来は古く「玉生八幡宮御鎮座伝記」に、「神功皇后が朝鮮を征する時、道後の湯に浴してこの地を通り、泉水の湧くのを見て感ずるところがあり、神に誓い、帛布を浸して遠征の勝敗を占ったところ、白色たちまち変じて紺色の光沢を現したので吉兆を喜び「濃染の里」と名付けた。」とあり、「後説リテ古泉と云フ」（愛媛県の地名）とある。

元禄の初め、筒井の百姓勘五郎が正木（松前）城の東南方にあるよく肥えた水の便のよい土地を見つけ、友と共に、田に稲納屋を建てて出作りした。このような百姓が増えて、田には所々に稲納屋が建てられるようになった。当時の人々はこの土地を「いな屋」と呼ぶようになった。この「いなや」は、元文三（一七三八）年に古泉から独立して、古泉の東にあるので東古泉というようになった（「東古泉村御田地坪水帳」）。

東古泉村は、江戸時代を通じて松山予国知行高郷村数帳（一六四八）の（現、松前町筒井・浜・東古泉・西古九一石一斗六合、うち田一七五八五二石二斗三升二合）で松山平野屈指の西古泉村と分郷した元文三年当時の政四（一七九二）年には、三七〇石九反九畝一步となっており、以後明治ま

（二）小子（ホノギ）の由来や伝承

東古泉のホノギは二六ある。その由来は「松前町誌」をもとに古老の方々から聞き取りをした。番号は地図番号である。

①茂賀利田（もがりだ） 東古泉の西端で、旧重信川（当時の伊予川）の河口付近であった頃、河原が生い茂り、舟の行き来の妨げになるので、刈り取られて肥料にも利用したと思われる。藻刈田のあて字と思われる。

②壱丁地（いちちようじ） 田の長さが長く一町（約一〇〇畝）あったとか。条里制にちなむ小子と思われる。

③志多見田（したみだ）

不詳

④四ツ黒（よつぐろ） 瀧姫伝説に由来する。京都の公卿清原朝臣忠武の妹瀧姫が身分違いの愛を遂げようとして罪に問われ、流刑になり侍女と松前の浜に漂着した。瀧姫は、五〇余歳で病没し、侍女三名も相次いで病死した。人々はいたく瀧姫らに同情し、東古泉に四つの塚を造り厚く埋葬した。

東古泉の百姓市兵衛というものが同地の原野を開墾して農を営む傍ら厚く瀧姫を信仰し、安永年間（一七七二～一七八〇）四か所の塚の遺骨を一か所に合葬して「四ツグロ大権現」を建立し崇めた。グロは塚の意。

⑤中萱田（なかかやだ） 筒井地区の浜萱田にたいして中萱田でないか。また中洲に茅が生い茂っているところを開墾したのでなかろうか。

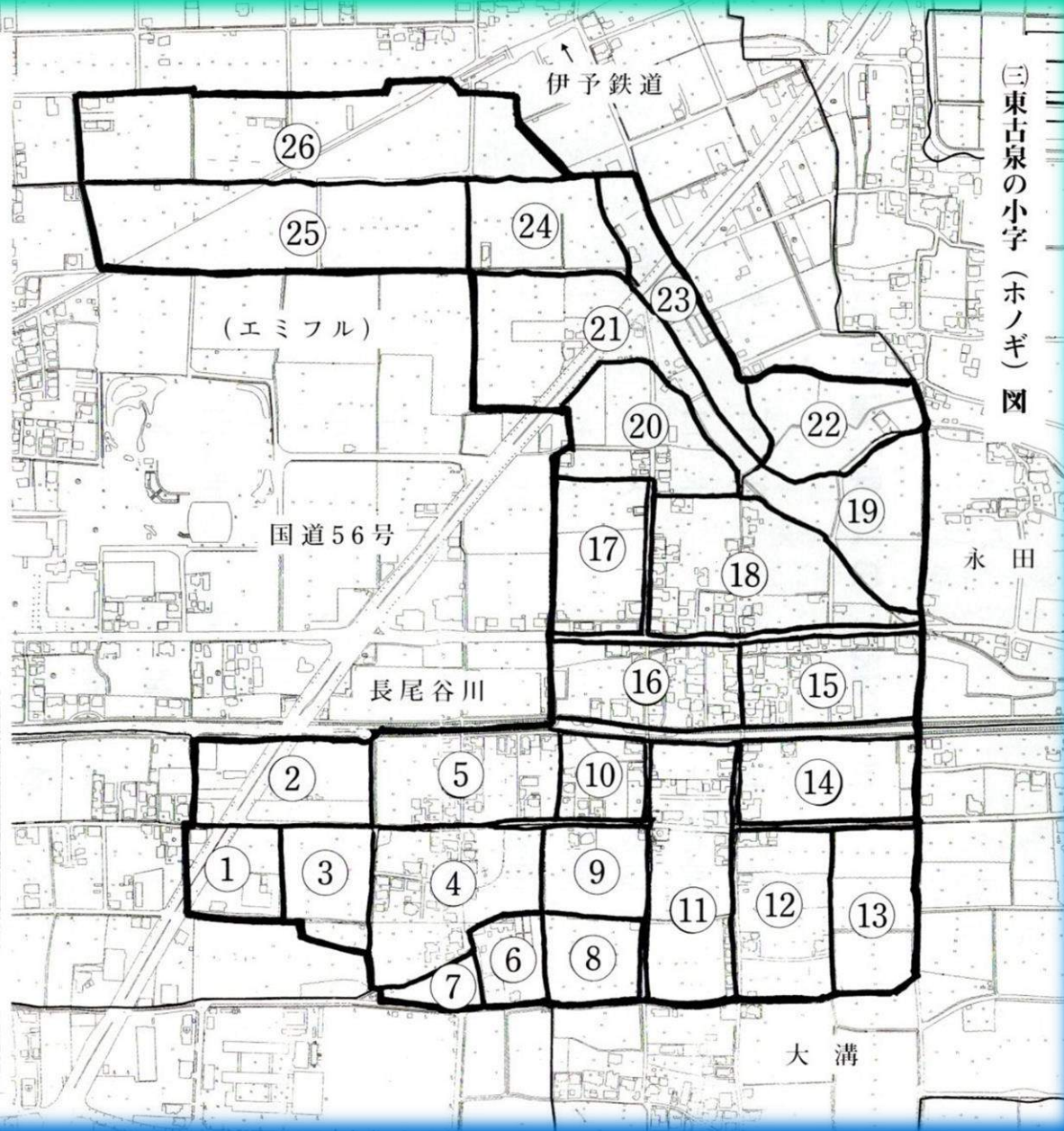
⑥相の関（あいのかき） 不詳

⑦泉ノ向井（いずみのむかい） 水利に関係する地名

⑧二ノ関（にのかき） 水利に関係する地名で一ノ関から始まっている。

東古泉地区のホノギ

番 号	小 字 名	呼 び 名
1	茂賀利田	も が り だ
2	壱丁地	いっ ち ょ う じ
3	志多見田	し た み だ
4	四ッ黒	よ つ ぐ ろ
5	中萱田	な か か や だ
6	相ノ関	あ い の せ き
7	泉の向井	い ず み の む か い
8	二ノ関	に の せ き
9	才 淵	さ い ぶ ち
10	穴 田	あ な だ
11	一 関	い ち の せ き
12	濱 田	は ま だ
13	五反地	ご た ん じ
14	浮 橋	う け は し
15	神 取	か ん ど り
16	上 又	う わ ま た
17	極 楽	ご く ら く
18	恵 竈	え が ま
19	吸 物	す い も の
20	高 樋	た か ひ
21	源助分	げ ん す け ぶ
22	枝 松	え だ ま つ
23	大地窪	お じ の く ぼ
24	文五郎分	ぶ ん ご ろ ぶ
25	登り内	の ぼ り う ち
26	東 浦	ひ が し う ら



(三)東古泉の小字(ホノギ)図

東古泉地区のホノギ

「北伊予の伝承 第11集」編集委員

委員長	神崎	高石	勸三
副委員長	出作	水口	憲邦
副委員長	鶴吉	大政	ヒトミ
副委員長	出作	小松	安男
副委員長	大溝	田中	春雄
委員	徳丸	木下	祥景
委員	徳丸	田中	常和
委員	中川原	藤政	博男
委員	中川原	池内	和隆
委員	神崎	相原	直志
委員	鶴吉	徳本	之彦
委員	横田	浅井	勝規
委員	永田	稲垣	一
委員	東古泉	萩野	二
委員	東古泉		

(事務局) 東公民館 館長 得能 廣明
主事 上田 彩乃

第11集
編集委員のみなさん
(15名)

2012年(平成24年)4月17日 火曜日

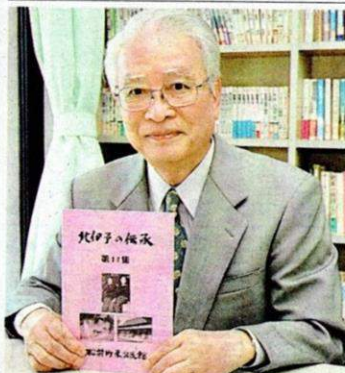
松前・北伊予地区

消えゆく風習
語り継ぎたい

住民が冊子刊行

戦前から高度成長期にかけての松前町北伊予地区住民の暮らしや風習などを住民がまとめた「北伊予の伝承」第11集(B5判 61頁)がこのほど完成した。編集委員長の高石勤さん(72)は「今でないと聞けなくなる話もある。消えゆくものをきちんと残さなければ」と話している。

冊のペースで町東公民館が出版。第11集は、70、90代の住民14人が座談会形式で生活などを振り返る1部と、地区の小字の由来などをまとめた2部で構成。編集委員15人が10カ月かけて作製した。住民が撮影した当時の写真なども活用、座談会で出た方言はそのまま掲載した。戦時中の暮らしでは、晴れ着と米を交換していたことや、「切符」で買った衣料品をモンペなどに何度も作り直した経験などを紹介。「ひもじい思いをしなかった」と話す元



「若い世代に語り継いでほしい」と話す高石さん

軍人の男性もいれば、「『欲しがりません勝つまでは』と苦しい思いをした」と打ち明ける女性もいた。水道やガスの普及による生活変化にも触れ、井戸の水質の良さとして水道整備に地域差があることを再確認した。

2部では、明治時代の「野取図」を基に農家や古老を取材し、地区の9の大字を区切る257の小字について記述。諏訪神社があった「諏訪」や、松の苗を栽培していた「植松」など、地元で現在

も使われている地名の由来をひもといた。高石さんによると、座談会の1カ月後に亡くなった出席者もあり、由来が分からなくなった小字もあった。高石さんは「高齢者にな

読んでほしい、内容を孫ら若い世代に語り継いでほしい」と話している。第11集は地区の全約2400戸や図書館、公民館などに配布した。(竹下世成)

『北伊予の伝承』

発行 松前町東公民館
〒791-3161
愛媛県伊予郡
TEL 08
責任者 高石 勤

H24年4月17日付
「愛媛新聞」記事

北伊予の伝承

第12集



松前町東公民館

第12集

発行 平成26年3月

66ページ

編集委員長 高石 勤

編集委員 14名

館長 西坂 洋一

西坂

[illegible]

発行に当たって

目

I 座談会 通った学校の思い出とくらし

一 戦前の学校とくらし	1
(一) 尋常小学校の頃から国民学校まで	2
(二) 国民学校の頃	6
二 戦後の学校とくらし	16
(一) 戦後の混乱期	17
(二) 高度経済成長期から現在まで	26

II 北伊予の幹線道路沿いの家並みの移り変わり

一 北伊予地区の主要道路について…………… 35

二 各地区の家並みの移り変わり

(一) 中川原…………… 37

(二) 徳丸…………… 41

(三) 出作…………… 44

(四) 神崎…………… 47

(五) 鶴吉…………… 51

(六) 永田…………… 54

(七) 東古泉…………… 57

(八) 横田…………… 60

(九) 大溝…………… 63

編集委員…………… 66

I 座談会 通った学校の思い出とくらし

長い伝統に育まれ北伊予の学校に通った懐かしい日々の思い出と当時のくらしを絡^{から}ませて、激動の昭和を生き抜いた各地区の有志の皆さんにお話いただくため、酷暑の七月一四日、東公民館で座談会を行いました。「戦前の学校とくらし」では尋常小学校から国民学校までを一〇名の方に、「戦後の学校とくらし」では、戦後の復興と六・三制による新制学校への移行や中学の分離など一二名の方に語っていただき、二つのグループに分かれて実施したものをまとめたものです。

一 戦前の学校とくらし

出席者の皆様

- | | |
|-------|----------------|
| 1 鶴吉 | 濟川 裕 (大正一二年生) |
| 2 出作 | 土居 和臣 (大正一三年生) |
| 3 永田 | 中村 文雄 (大正一四年生) |
| 4 神崎 | 合田ミユキ (昭和三年生) |
| 5 鶴吉 | 相原 隆志 (昭和三年生) |
| 6 東古泉 | 松田清太郎 (昭和六年生) |
| 7 中川原 | 高須賀郁夫 (昭和八年生) |
| 8 出作 | 山本 勅子 (昭和八年生) |
| 9 横田 | 野垣マサノ (昭和九年生) |
| 10 大溝 | 高市 賢一 (昭和一〇年生) |
| 司会 | 大政 邦和 (昭和一六年生) |
| 記録 | 仙波 康宏 (昭和一二年生) |
| | 水口 勉 (昭和二二年生) |
| | 澤田 忠夫 (昭和二五年生) |





座談会 あっという間の3時間



司会の二人



座談会出席の皆様 (敬称略)

仙波 高市 大政 澤田 水口 山本 (後7
 合田 相原 野垣 濟川 土居 中村 高須賀 (7



写真1 熱心に話し合いが行われた座談会



写真2 司会と記録の方々

出席者の皆様

12	前半	記録	司会	大政	博	(昭和二五年生)
11	東古泉	萩野	雅久	(昭和三七年生)		
10	鶴吉	久津那由紀	(昭和三六年生)			
9	大溝	高市	裕二	(昭和三六年生)		
8	永田	中村	満夫	(昭和三五年生)		
7	出作	米家	郁美	(昭和二八年生)		
6	神崎	池内	和男	(昭和三三年生)		
5	横田	岩崎	淳一	(昭和三三年生)		
4	徳丸	宇都宮	房子	(昭和二一年生)		
3	東古泉	稲垣	昂規	(昭和一七年生)		
2	徳丸	渡部喜代隆	(昭和一四年生)			
1	神崎	窪田	百子	(昭和一二年生)		
	中川原	藤田	妙美	(昭和一一年生)		



写真4 小学校運動場での奉祝記念



写真3 講堂で行われた村葬



写真12 全校行間体操 (昭和13年頃)

I 戦前の学校とくらし



写真11 あしなが

授業時間表

土	金	木	水	火	月	曜
算	理	讀	修	算	修	時
讀	算	算	讀	讀	算	一
書	讀	書	算	書	讀	二
體	綴	體	綴	理	珠	三
五	蘭	唱	画	体	苗	四
八	富	米	米	米	米	五
六	米	米	米	米	米	六
六	米	米	米	米	米	時
七	米	米	米	米	米	

図8 時間表 (4年濟川要さん〈裕さんの実弟〉提供)



写真18 学習帳 (3年濟川裕さん提供)



写真17 夏休み帳 (3年濟川裕さん提供)

夏休みの友／算術学習帳

授業時間割表

二 戦後の学校とくらし

このグループでは、終戦後、北伊予小・中学校へ通った思い出を中心に当時のくらしについて、一二名の方々からお話を伺いました。さらに司会・記録にあたる四名も座談会に加わりました。



座談会出席の皆様 (敬称略)

高市	萩野	藤田(常)	大政	久津那	米家	高石	小松	(後列)
稲垣	池内	岩崎	藤田(妙)	窪田	渡部	宇都宮		(前列)

北伊予小学校々舎平面図



写真3 運動場から見た小学校校舎
(昭和20年代)

その時は、科書でし頃、飛行機まかれ、した。戦前がら通学、ましい時代子沢山で同た。空襲警児童は運動「飛行機が声で、地区



写真16 中学生の野球大会と農舎
農舎の右側付近が現在の小学校正門付近

31302928272625 24 232221 20 1918 17 161514131211 109 87654321

[illegible][illegible]

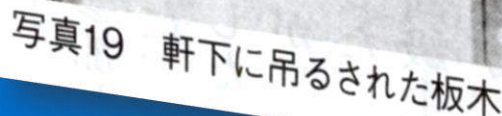
写真22 北伊予村総出で行った運動会のプログラム(昭和29年)
プログラムは薄い用紙のため、厚紙にはり首からぶら下げていた。

プログラム (八時三十分放映開始)

舞臺の好季節と相成りました。昔々、舞臺の事と舞臺は申
 上げます。さて来る九月二十六日(日曜日)「雨天后」延秋大遊園會
 を本校々庭に於て開催致します。すから萬國舞臺合せ御来顧下さ
 います。舞臺内申上げます。

昭和廿九年九月廿四日

北伊予小学校校長 小西田 猛雄



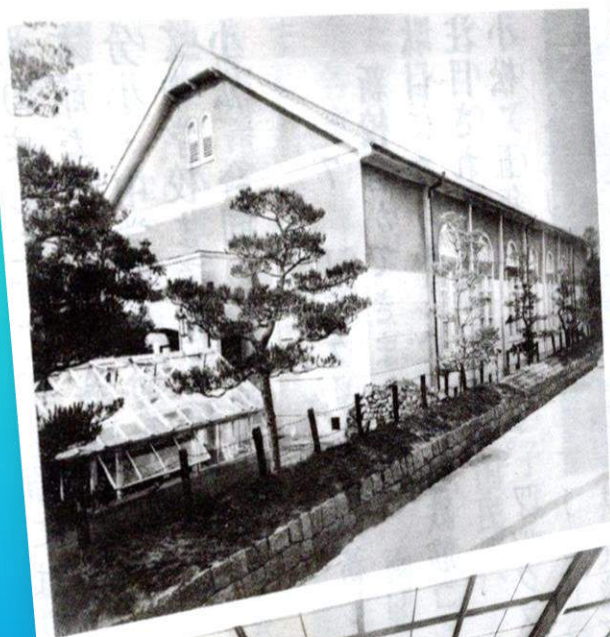


写真15 立派な小学校の講堂（外観と内部）



写真6 北伊予小学校正門（昭和20年代）



写真7 半円形の石段の玄関

高石 戦後間もない頃の校舎の配置は、大正二年に新築された当時とほぼ同じであると写真を見て思

懐かしの小学校 正門前／講堂

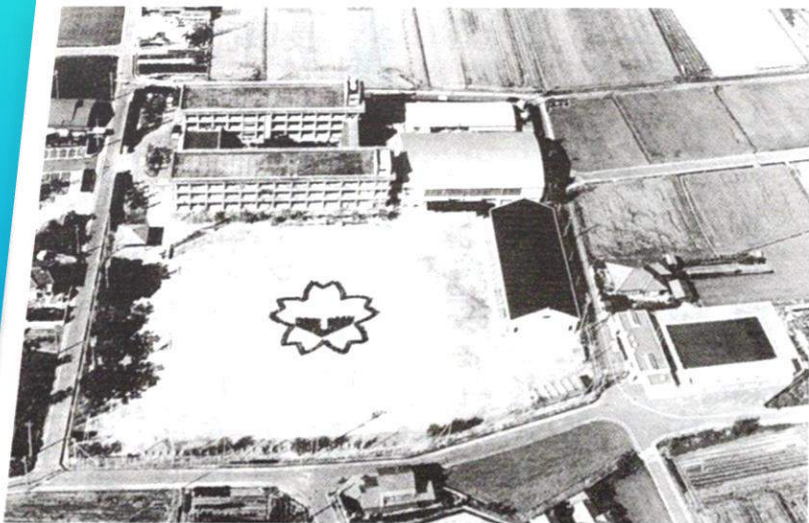


写真21 分離した北伊予中学校全景（平成7年）



写真20 中学校分離新設用地（点線部分・昭和48年）

分離した中学校と分離新設用地

Ⅱ 北伊予の幹線道路沿いの家並みの移り変わり

一 北伊予地区の主要道路について

昭和三〇年頃と現在の北伊予地区の幹線道路(往還^{おうかん})沿いの家並みの移り変わりを各地区ごとに調べた。

明治三六(一九〇三)年測図の地形図(図1)を見ると、現在の道路と大きく異なり、幹線道路の改修が交通体系や生業^{なりわい}と大きく関わっていることが分かる。特に地区内を東西に貫く一般県道「八倉松前線」と南北に貫く主要地方道「松山伊予線」の改修が大きい。

松前町は昭和三〇年三月、旧松前町・北伊予村・岡田村の三か町村が合併して誕生した。現在の人口二万人余りの町である。北伊予地区は町の東部に位置し、水稻や蔬菜栽培^{そさい}の盛んな農村地帯である。地区内には昭和五(一九三〇)年に開通した予讃線が走っている。

明治九(一八七六)年には、全国の道路を国道・県道・里道に区分し、国道は幅七間(二一・六^トメ)と決めた。町内には昭和四〇年三月に一般国道となった五六号(旧大洲街道)が貫通し、北伊予地区に関係する一般県道は「八倉松前線」(旧松前街道・子聖道、バイパス開通前の町内延長五〇五五^トメ)。この地区内を東西に貫通する幹線道路は、早くから幅八尺(約二・四^トメ)であったが、大正一三(一九二四)年に改修工事が始まり、昭和四(一九二九)年に県道「原町松前線」として竣工^{しゅんこう}した。現在永田地区には、旧道に昔の八尺道の面影が残り、一部はバス路線にもなっていた。現在神崎地区の密集地を避けたバイパスが開通し、「松山伊予線」と直結した。

その他、「砥部伊予松山線」(同四三五〇^トメ)、「北伊予停車場

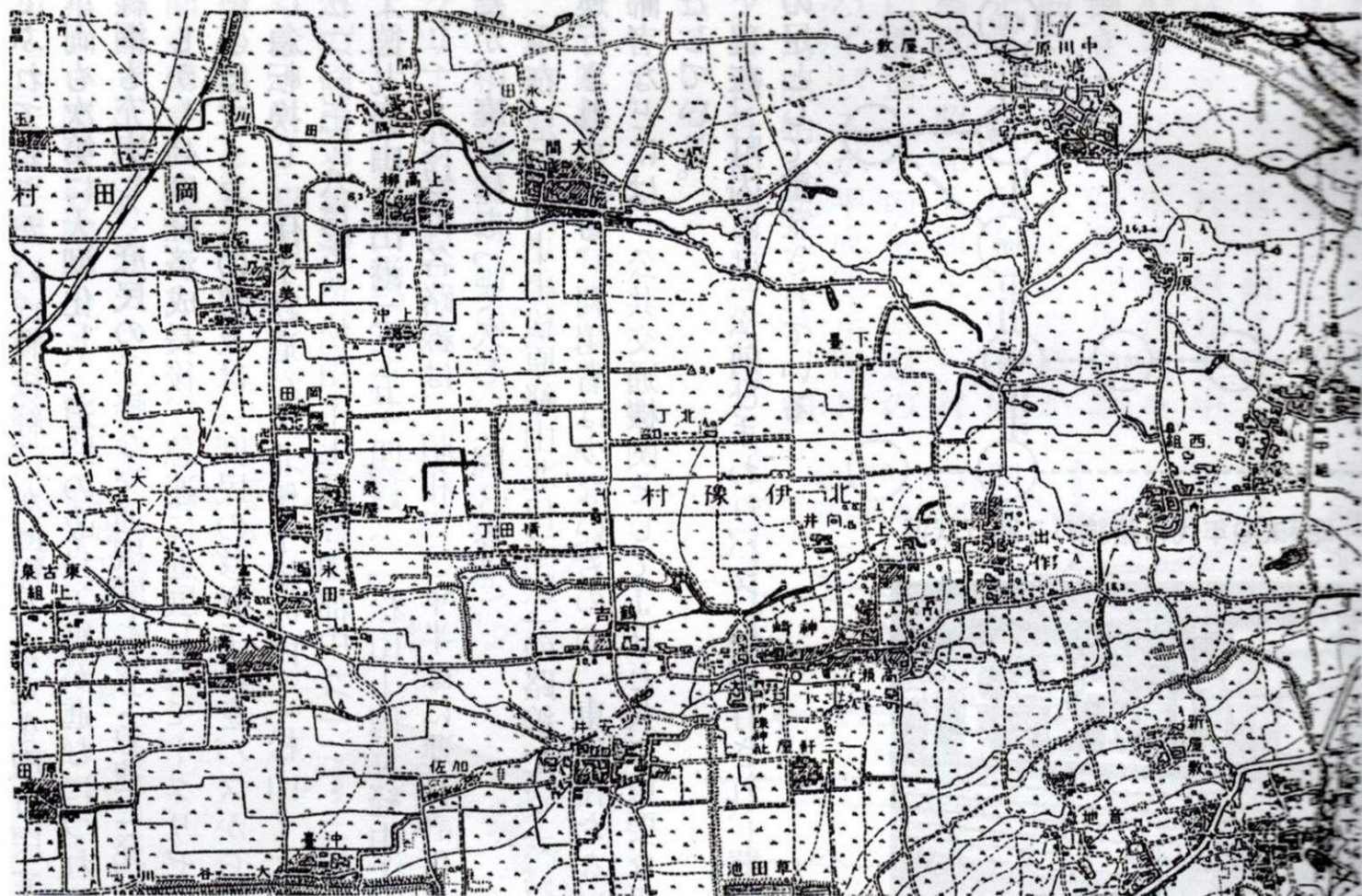
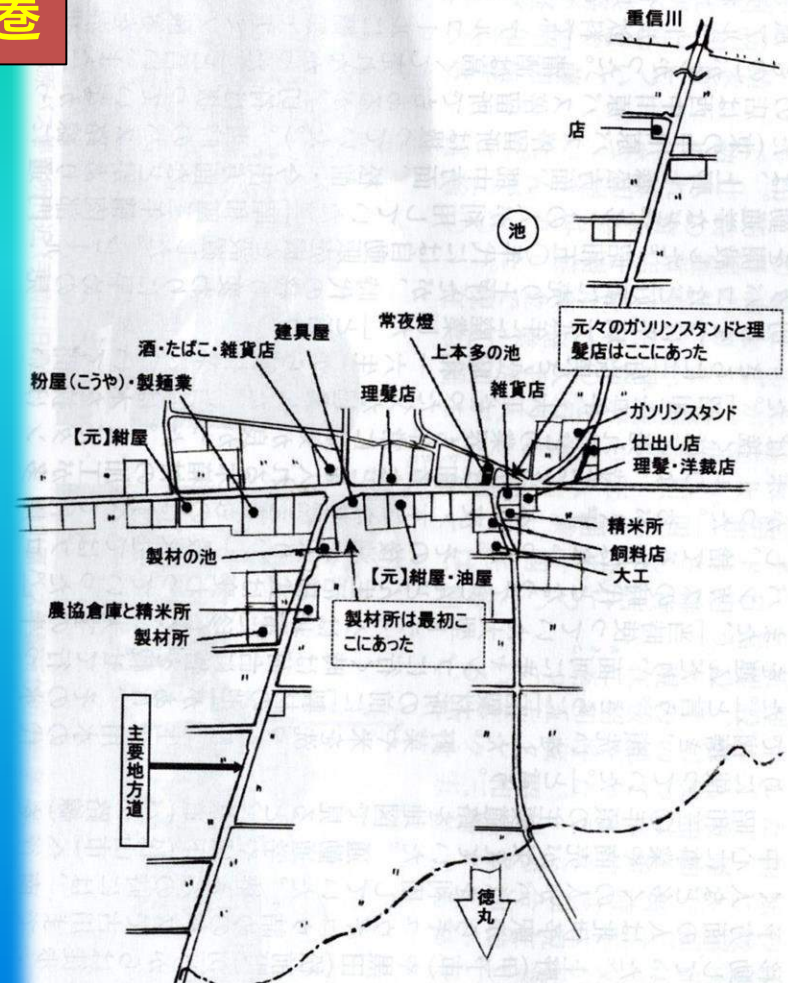
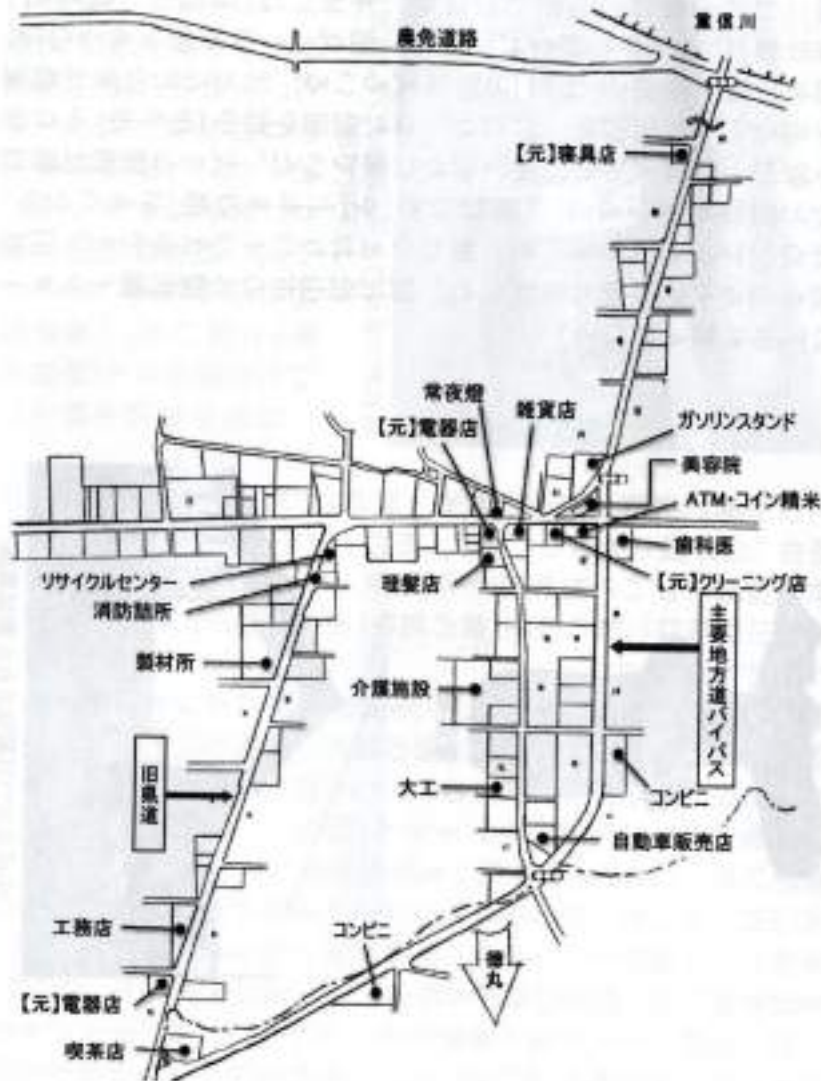


図1 北伊予地区を中心とする2万分の1地形図
 (明治36年測図 同38年印刷発行 大日本帝国陸地測量部 原図を65%縮小)

線(同七八頁)があり、町内の中川原から伊予市上野に至る主要
 地方道「松山伊予線」(バイパス開通前の同二三六二・一二頁)があ

中川原地区の変遷

平成25年の家並み



いずれの地区も昭和30年ころと
平成25年の家並み



中川原地区



常夜燈



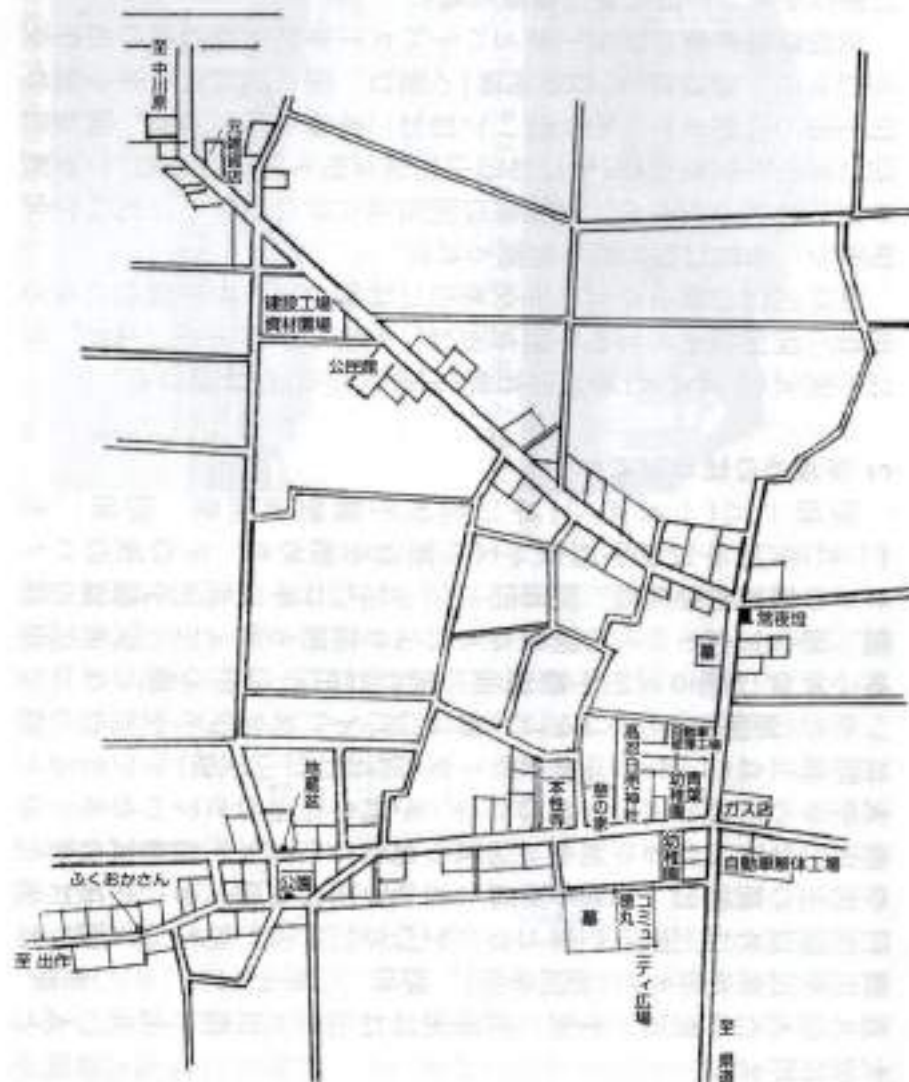
平成8年11月解体された農協倉庫



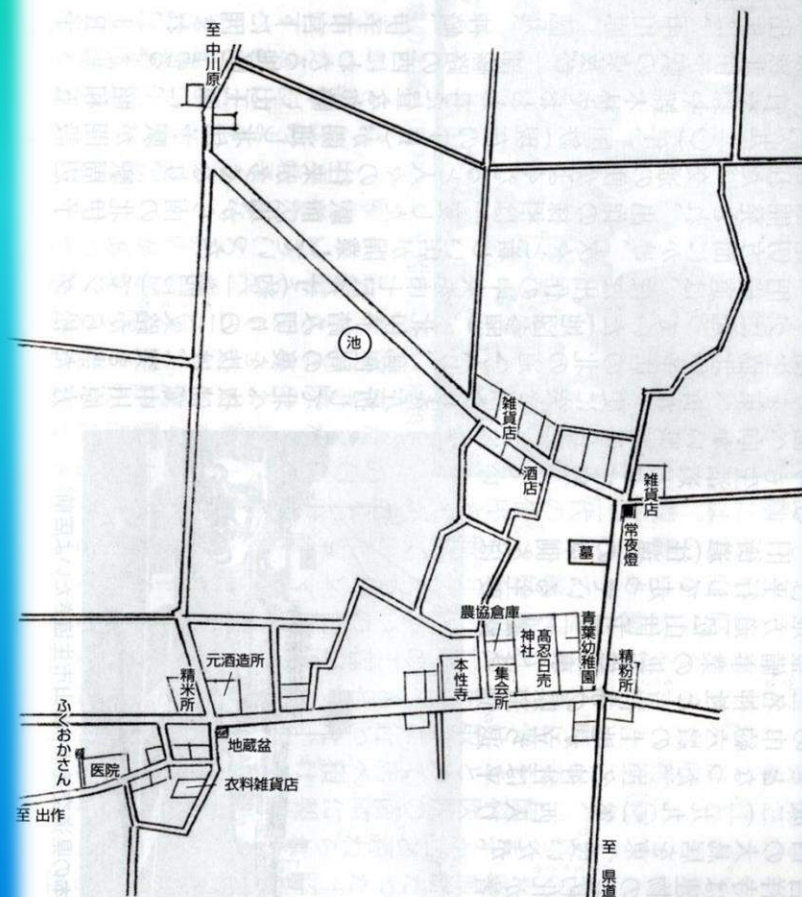
タバコを販売していた店頭と町合併祝賀の横断幕
(昭和30年)

徳丸地区の変遷

平成25年の家並み



昭和30年頃の家並み



徳丸地区



新しい幹線道路(左)と旧道の分岐点



常夜燈前の幹線道路



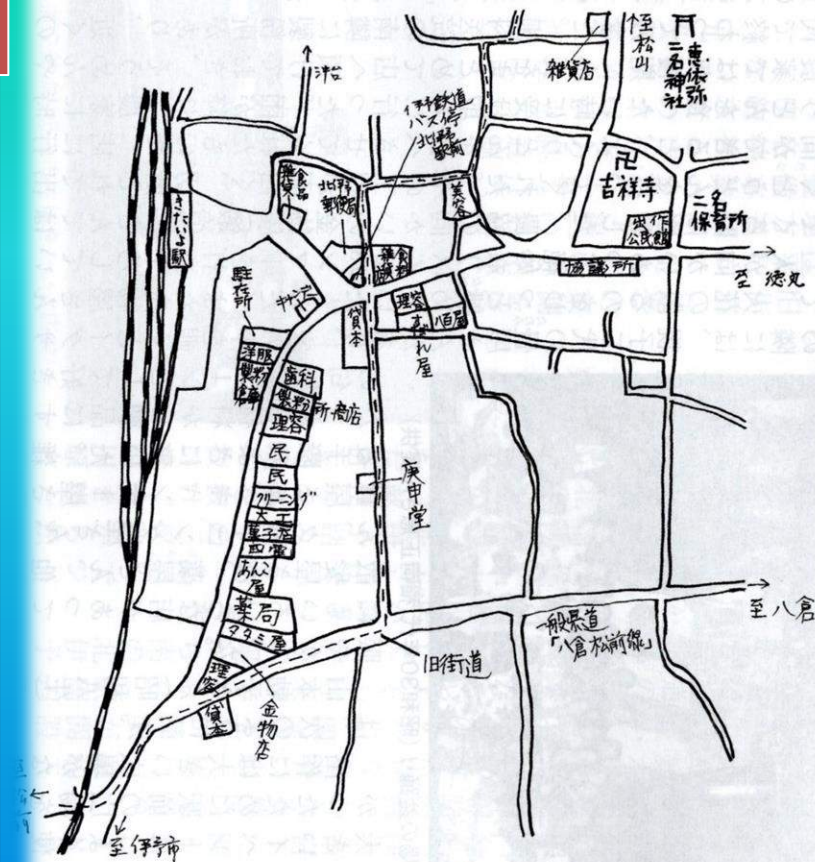
高忍日売神社前の幹線道路

出作地区の変遷

平成25年の家並み



昭和30年頃の家並み





昭和30年代の北伊予郵便局（野村雅章さん提供）



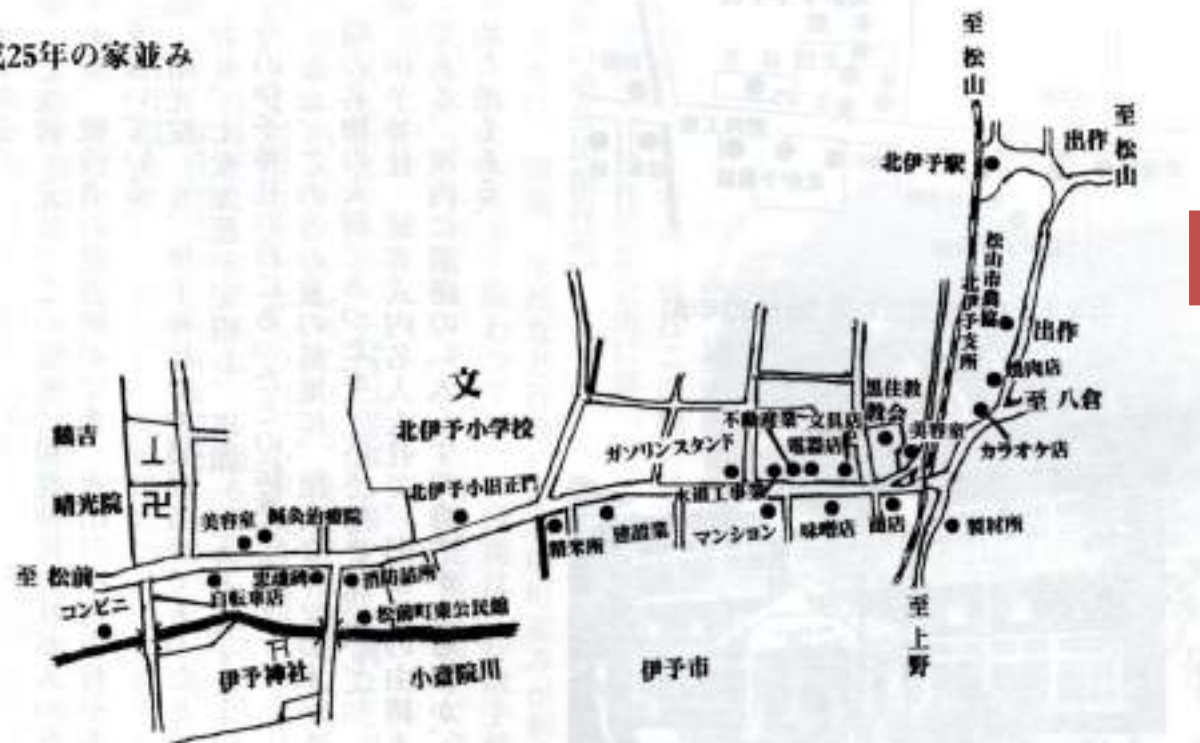
現在の北伊予郵便局と北伊予駅前バス停の伊予鉄バス



2本の県道交差点（松山市生協きたいよ店前）

出作地区

成25年の家並み



神崎地区の変遷

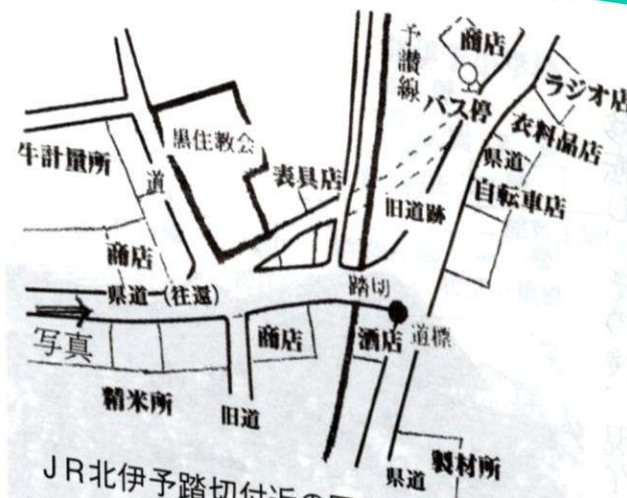




旧北伊予村役場付近の図 (昭和30年頃)



昭和13年新築された旧北伊予村役場
(現在 松前町東公民館が建つ)



JR北伊予踏切付近の図 (昭和30年頃)

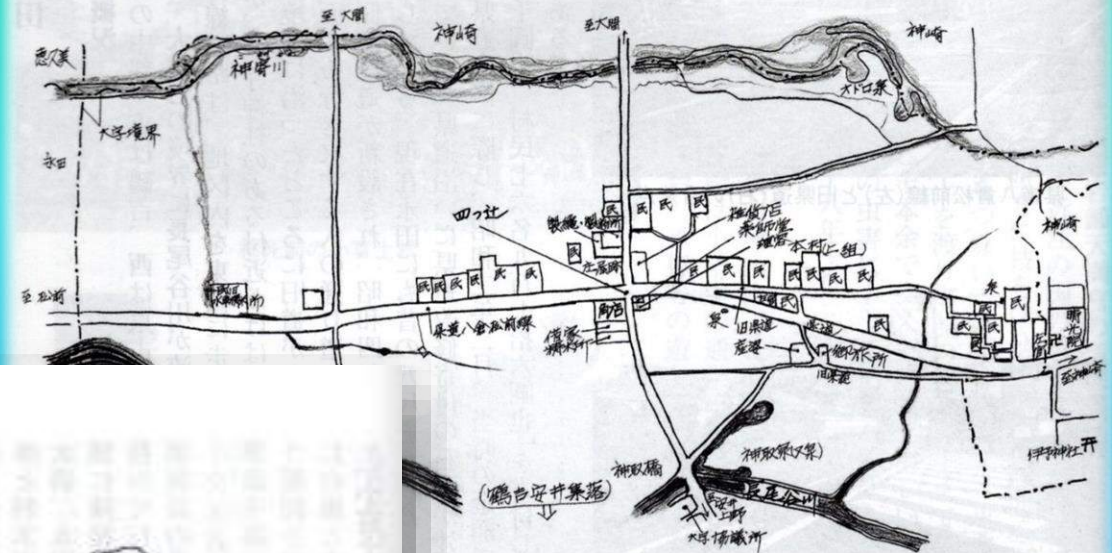


現在の踏切付近の旧街道(左)と旧県道(右)

神崎地区

昭和30年頃の家並み

鶴吉地区の変遷



平成25年の家並み





再建された角店と薬師堂付近 (昭和29年)



現在の県道八倉松前線 (右) と旧県道 (往還)



鶴吉地区の要部 (明治36年測図)



現在の地図 (平成25年)

鶴吉地区



県道八倉松前線(左)と旧県道(右)の合流点



2本の県道が交差する永田交差点



枯死前の小富士松

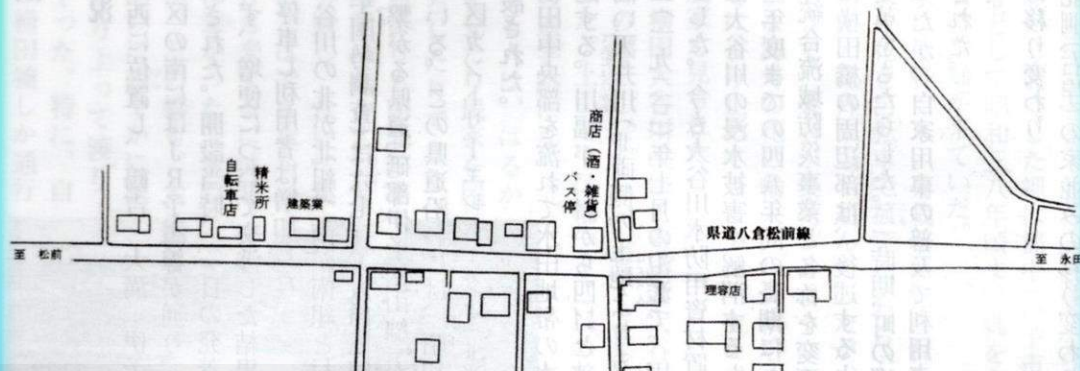


鎮守神社本殿と舞殿

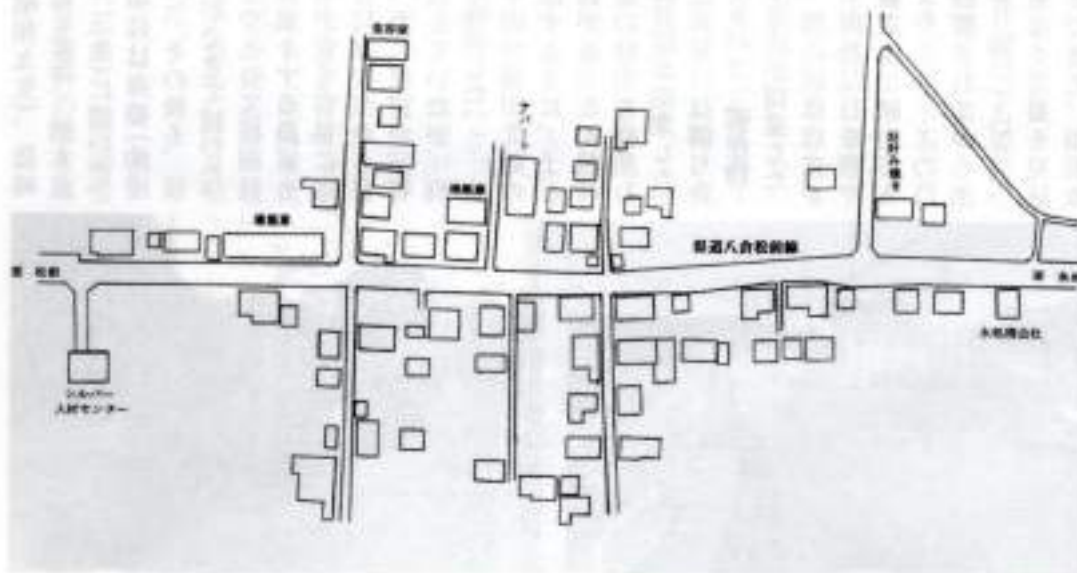
永田地区

東古泉地区の変遷

昭和30年頃の家並み



平成25年の家並み





「エミフルMASAKI」と国道56号

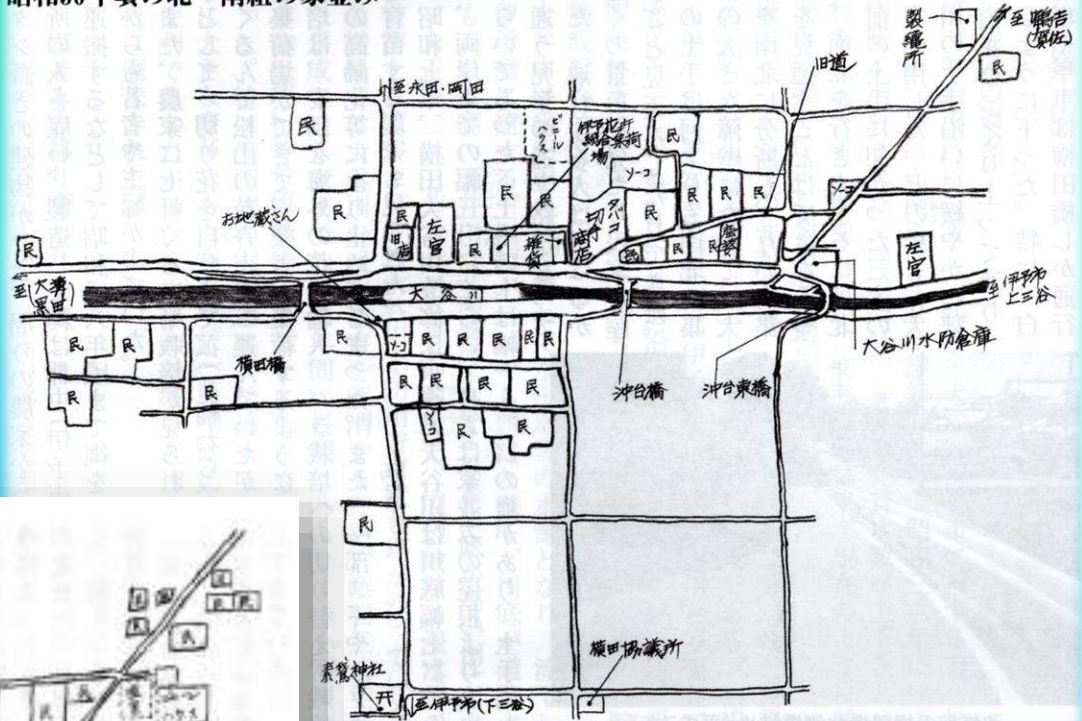


県道八倉松前線の渋滞 (東古泉地区)



東古泉地区

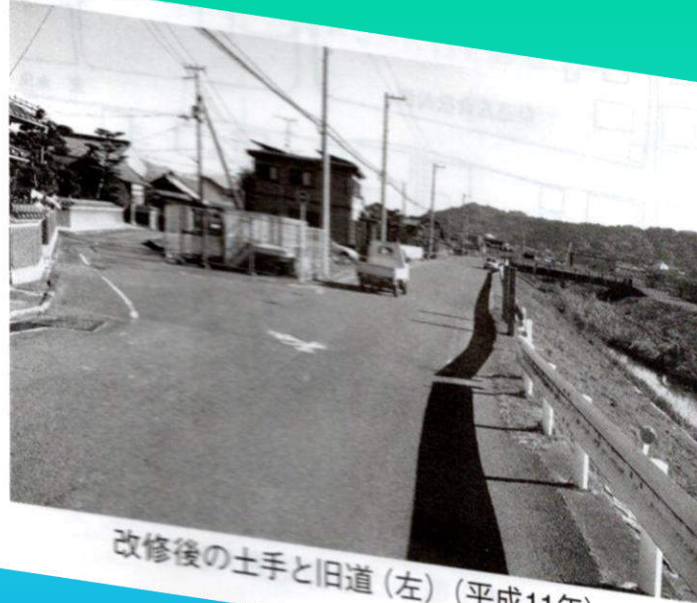
昭和30年頃の北・南組の家並み



平成25年の北・南組の家並み



横田地区の変遷



改修後の土手と旧道 (左) (平成11年)



大谷川改修前の土手 (平成9年)

横田地区



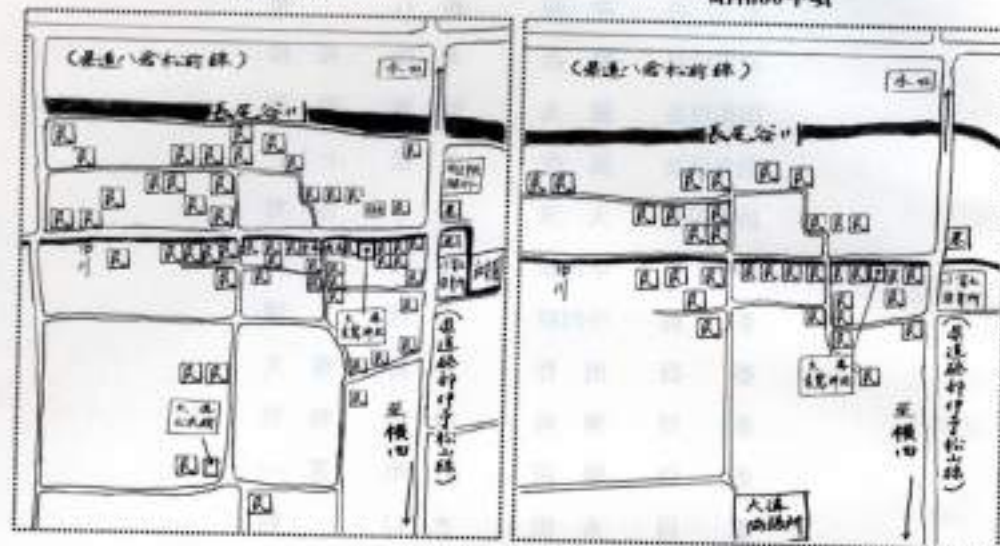
改修後の横田橋北寄り (平成11年)



大谷川 横田橋の工事 (平成10年)

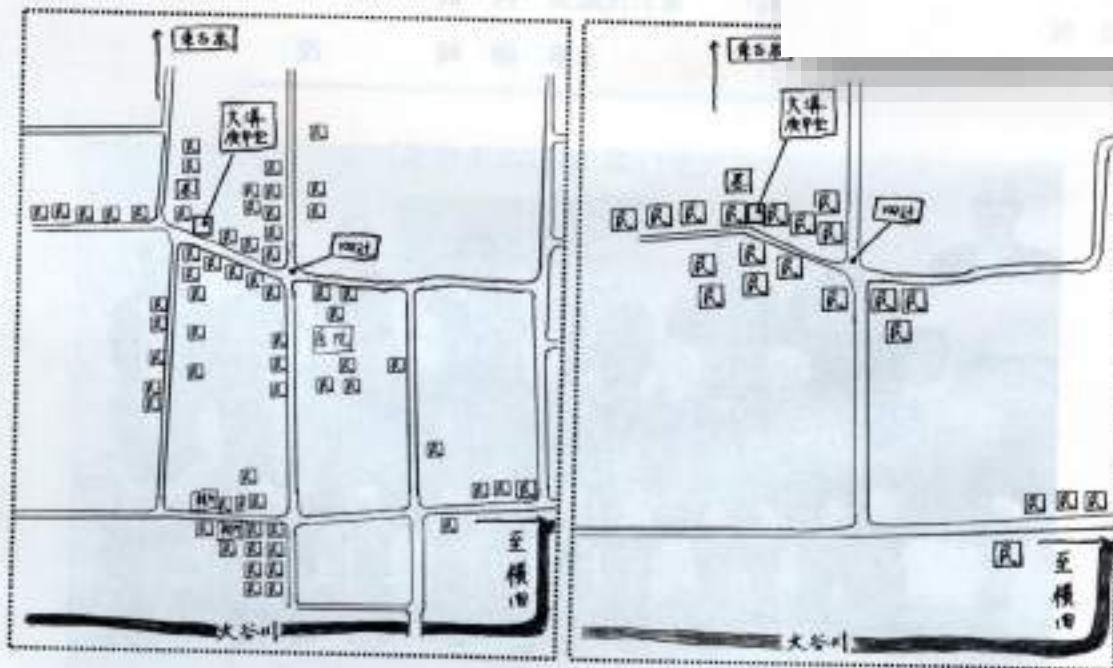
平成25年

昭和30年頃



原田の家並み

平成25年



大溝地区の変遷



現在の本村 (左から中川・中川通り)

大溝地区



庚申堂のエノキの大樹とフジの蔓 (原田)
つる

『北伊予の伝承 第12集』編集委員

委員長	神崎	高石	勤
副委員長	鶴吉	大政	邦和
副委員長	徳丸	仙波	康宏
副委員長	出作	小松	ヒトミ
副委員長	大溝	田中	安男
委員	中川原	藤田	常和
委員	中川原	大政	博
委員	出作	神野	尊久
委員	神崎	池内	和男
委員	横田	野垣	芳一
委員	永田	水口	勉
委員	永田	澤田	忠夫
委員	東古泉	稲垣	昂規
委員	東古泉	早瀬	明
(事務局)	東公民館長	西坂	洋一
	主事	藤崎	茂

第12集 編集委員
のみなさん（14名）

北伊予の記憶 後世に

松前・町東公民館「伝承」第12集発刊

地域の伝承や文化などを語り継ぎ、1988年から発行を続け、第12集が刊行された北伊予の伝承



北伊予の伝承は、衣まきまな切り口で、こペースで発行している。食住や年中行事など、10年は2年に1回の。

家並みの変遷など聞き書き

松前町北伊予地区の記憶を記録として後世に伝えようと、1988年から「北伊予の伝承」の制作を続けている松前町神崎の町東公民館がこのほど、第12集を発刊した。学校の思い出や幹線道路沿いの家並みの変遷をテーマに編集委員の住民14人が聞き書きを中心にまとめた。

学校の思い出と暮らしをテーマにした座談会では、戦時中の国民学校の様子について「勉強よりも勤労作業。食べるものがないから運動場にサツマイモを植えていた」などと振り返る声が上がった。戦後の混乱期の学校の様子や中学校の校舎移転など、戦後から現在に至るまでの変遷も語り合いを通じて紹介している。

幹線道路沿いの家並みの移り変わりは、55年と2013年との違いを地区内9エリア別に地図で表示。マイカー普及や郊外型スーパー進出で個人商店が減り、宅地化が進むなどの変化が記されている。

A4判66ページで、北伊予地区約3千世帯に全戸配布。小中学校や町内の公共施設などにも配った。編集委員長の高石勲さん(74)は「できる限り住民の生の声を残そうと、編集委員で聞き書き調査に努めた。地域の伝承を形として残す取り組みを今後も続けたい」と話している。

(杉本賢司)

平成26年4月1日付

「愛媛新聞」記事

北伊予の伝承

第13集



龍前所東公民館

第13集

発行 平成28年3月

66ページ

編集委員長 高石 勤

編集委員 12名

館長 門田 博

「北伊予の伝承」第二集の発行にあたって

昭和六三年に創刊された「北伊予の伝承」第一集をお届けいたしました。はじめとしまして、これまで地域に伝わる「北伊予の伝承」は、各地区の有志の方々の苦心のたまひであり、第一集の北伊予の「年中行事」や「作業唄」などの

から推測された編集委員を中心に、今なお北伊予各地で行われている「御祈禱」を題材に、

本誌の発行に移り変わりを迎える中、座談会に御出席いただき、貴重な体験をお話いただき、各地区の有志の方々の苦心のたまひであり、第一集の北伊予の「年中行事」や「作業唄」などの

平成二八年三月

方、貴重な資料や写真、執筆者の御提供、座談会に御出席いただき、貴重な体験をお話いただき、各地区の有志の方々の苦心のたまひであり、第一集の北伊予の「年中行事」や「作業唄」などの

松前町東公民館長 門田 博

目

I 座談会

「戦後七〇年北伊予のくらしを辿る」

— 明日への希望を抱いた昭和二〇年代 —

一 戦時中のくらし	3
二 終戦後間もないころのくらし	16
三 昭和二〇年代後半のくらし	28

II 御祈祷

御祈祷とは	39
各地区の御祈祷	

一 徳丸	40
二 中川原	42
三 出作	44
四 神崎	48
五 鶴吉	51
六 横田	55
七 大溝	58
八 東古泉	62
編集委員	66

I
座談会

「戦後七〇年北伊予のくらしを辿る」

― 明日への希望を抱いた昭和二〇年代 ―

今年は、戦後七〇年の節目の年に当たります。戦争体験者や遺族の方、学徒動員に駆り出された皆さんも高齢になられ、「今」を逃しては、お聞きする機会を逸する恐れがあります。

そこで編集委員会では、北伊予各地区から有志の皆さんにお集まりいただき、猛暑の七月一二日東公民館において「戦時中」、「終戦後間もないころ」、「昭和二〇年代後半」それぞれのくらしをテーマとして座談会を行いました。これからの内容は座談会でのお話をまとめたものです。

座談会出席の皆さん（敬称略）

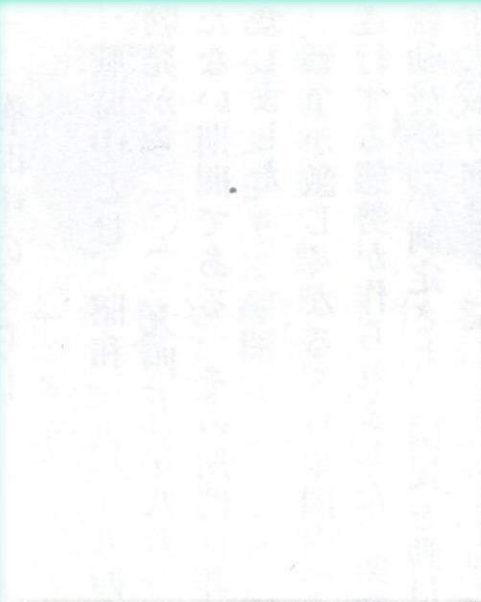
1	戦争体験者	鶴吉	松田 英一
2	戦争体験者	徳丸	八東 兼福
3	遺族	永田	藤野 玉男
4	引揚者	神崎	武市 公子
5	疎開定住者	出作	神野 英隆
6	疎開定住者	徳丸	田中 孝
7	勤労働員（男）	大溝	升田 守（後日取材）
8	学徒動員（女）	大溝	二宮 弘子（後日取材）
9	学徒動員（男）	神崎	高石 明男（紙上参加）
10	農家	神崎	水口 孝雄
11	農家	徳丸	伊賀上勢子
12	農家	横田	篠崎まゆみ
13	農家	永田	渡部 朝明
14	農家	東古泉	三好 健二
15	非農家	鶴吉	西影 順一
16	非農家	東古泉	丸山 和子
17	非農家	神崎	深沼 静良

司会は高石・仙波、記録は澤田・伊藤・済川、写真は田中の各編集委員が担当しました。



座談会出席の皆さん（敬称略）

丸山	西影	深沼	三好	渡部	篠崎	水口	升田	二宮	(後列)
神野	田中	武市	藤野	伊賀上	松田	八束			(前列)



座談会スナツプ

一 戦時中の暮らし

一 戦時中の暮らし

戦時中とは、昭和一六（一九四一）年一二月の太平洋戦争勃発から二〇（一九四五）年八月一五日の敗戦までの四年に満たない期間である。その期間は非常事態の連続で、世相も一変しました。

戦争が激しくなると日本国内では国の総力を挙げて戦争を遂行する態勢が作られました。昭和二三（一九三八）年に「国家総動員法」が制定され、国民を動員して物資と労働力を軍需生産に振り向けました。

また「欲

しがりません勝つまでは」、「贅沢は敵だ」の合言葉のもと、全て国家統制の抑圧された窮乏生活を余儀なくされ、食糧や衣類などの生活物資は切符制による配給（注一）となりました。



写真1 戦時中の子ども
（松山市平和資料館をつくる市民の会「第12回平和展」より）

戦況の劣勢の中、昭和一九年には旧制中学校・女学校などにも「学徒動員法」が施行され、生徒たちは授業を停止し軍需工場へ動員され、また開墾や農作業のため勤労動員されました。さらに空襲に備えた防空訓練や軍事教練も行われました。まず、「戦時中の暮らし」では、皆さんが体験されたり聞かれたりした窮乏時代の暮らしについて、お話をいただきたいと思っています。

（二） 勤労働員や学徒動員について

勤労働員や学徒動員を体験された升田守さん、二宮弘子さんのお二人は座談会当日、都合で欠席されましたので、後日大溝公民館でお聞きしたものをここに掲載します。

また旧制中学三年の時、新居浜に学徒動員された神崎の高石明男さんにも紙上参加していただきました。

司会 まず、升田さん、二宮さん、生年月日と年齢や学徒動員などについてお話してください。

升田 大溝の升田守です。



生年月日

は昭和四

（一九二

九）年一

一月一二

日です。今年八五歳です。私は自分の人生をノートに記録しています。

小学校の一年生が昭和一一（一九二六）年、六年生の時に太平洋戦争が始まりました。その後北伊豫尋常小学校高等科を卒



写真4 災害地へ勤労働員した北豫中学生
（高石明男氏提供）



図1 満州（現在の中国東北部）の地図
（『まぼろしの国・満州』より）

が、中国人との関わりはありま
せんでした。冬は凍った池でス
ケート遊びをした記憶がありま
す。軍の官舎は二重窓で床暖房
のベチカ（暖炉の一種。石、レ
ンガ、粘土などで造った壁面からの放射熱で暖房するもの）が



写真10 村葬が行われた講堂
（『遺勲と追想』より）

私とすぐ下の
の官舎です。
転々と居所が
が生まれた
、鞍山、終
生活しました



写真9 軍人の父と長男を抱く母
（昭和12年 高石明男氏提供）

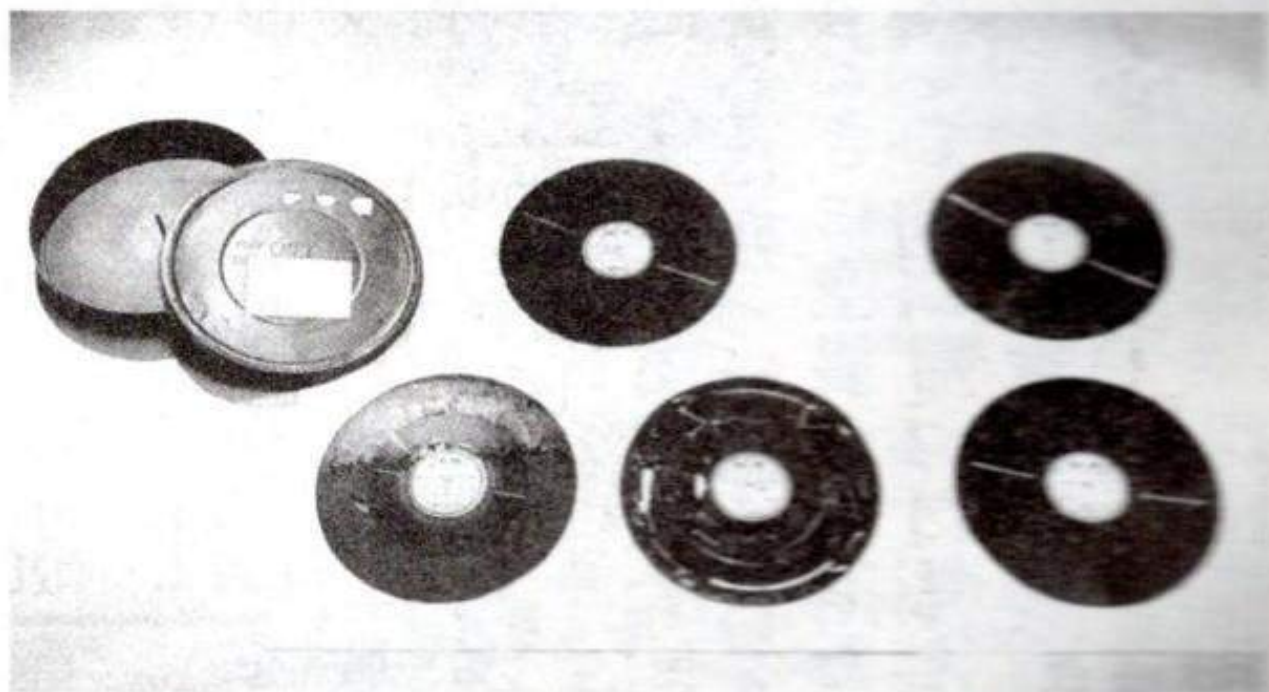


写真20 昭和天皇がラジオで終戦の詔書を読み上げた玉音放送の原盤（原盤の2枚組と3枚組、それが入っていた缶）

二 終戦後 間もないころの暮らし

二 終戦後 間もないころの暮らし

終戦後 間もないころとは、昭和二〇（一九四五）年八月十五日の敗戦の詔書から二五（一九五〇）年まで約五年間を指します。

敗戦の虚脱状態の中、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）による一連の民主化政策が実施され、価値観が大きく転換しました。

人びとは、極度のインフレと食糧難に苦しみながらも配給と代用品などで物資不足を補い、不自由なくらしの中でも、明日への希望を抱き、励まし合い、死にもの狂いで必死に生きた時代です。

それでは、これから「終戦後 間もないころの暮らし」についてお聞きしたいと思います。

（一） 玉音放送を聞いての心境について

司会 最初に、皆さんは昭和二〇年八月一五日の戦争終結の天皇の「玉音放送」（注①）を何歳の時どこで聞かれ、その敗戦というショッキングな事態をどう受け止めましたか。その時の心境を一言ずつお願いします。

八束 終戦の玉音放送は、軍隊と申しますか所属部隊の移動中に聞きました。とぎれとぎれの玉音放送を聞いた覚えがございます。これで今までのような苦勞が終わったなと思う一方、連合軍が進駐してきてどんなになるかなあという心配もありました。

松田 私はこの折には南京にいましたが、原爆が落ちたなら、もう日本は全滅し誰も生きていないだろうということで、この中隊の行きつく所に住もうじやないかと考えたものでし

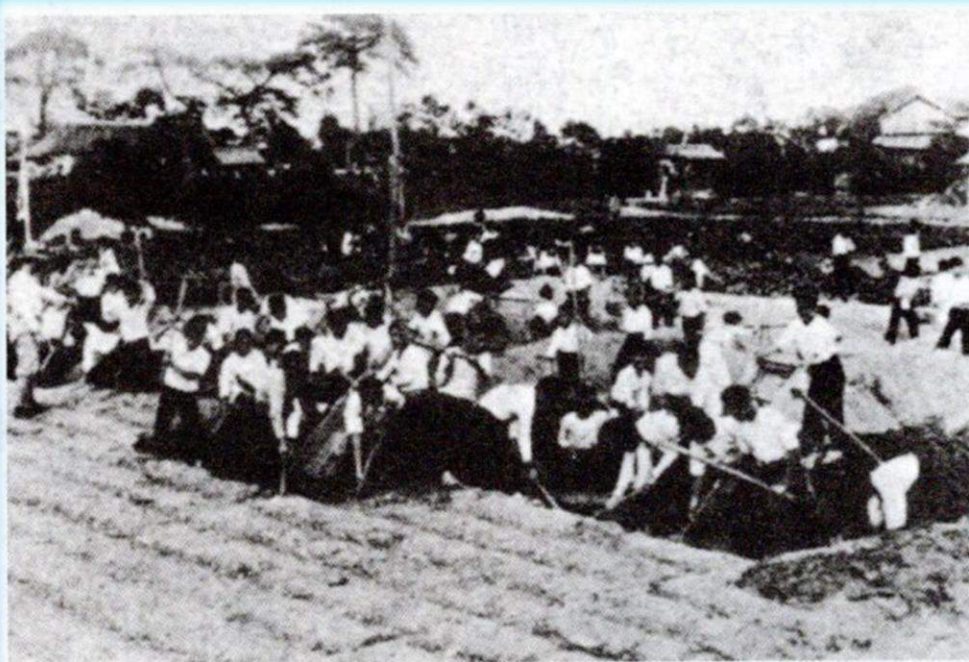


写真40 山王原での農作業に励む生徒たち
(昭和10年ごろ 『北伊予の伝承第12集』より)



写真35 サトウキビの収穫
(松前・新川 『目で見える伊予・上浮穴の100年』より)

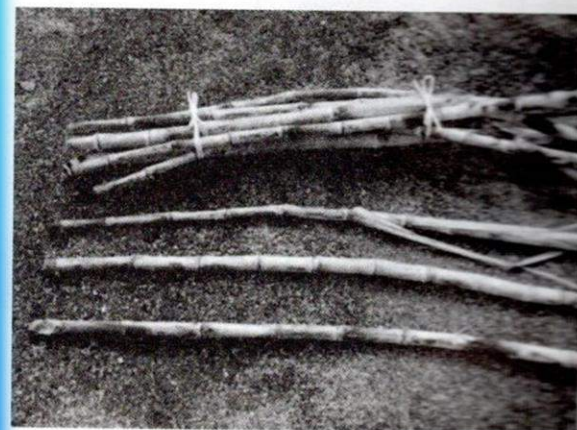


写真36 サトウキビ

三 昭和20年後半の暮らし

三 昭和二〇年代後半の暮らし

昭和二六（一九五二）年にサンフランシスコ平和条約（注13）が調印され、日本は六年ぶりに国際社会への復帰を果たしました。

一方、昭和二五（一九五〇）年には朝鮮戦争（注14）が勃発しました。この戦争によりアメリカからの緊急調達（特需）がなされ、敗戦後の瀕死の日本の経済は急速に回復し、はからずも戦後日本の経済発展の原点となりました。

この時期は、配給制度も統制解除に向かい、人びとの関心は「食べるものから着るもの」へと移り始め、貧しさの中にも、わずかばかりのゆとりが見え始め、右肩上がりの成長の時期を迎えます。

これから「昭和二〇年代後半の暮らし」についてお聞きします。

（二）日用品の統制解除について

司会 昭和二〇年代後半は、終戦直後の食糧難とインフレに悩まされ必死に生きた時代から、やや生活にゆとりができるようになった時代と言えると思います。

具体的には、昭和二五（一九五〇）年ころから味噌とか醤油といった日常品の統制が解除され（注15）、「食べるものから着るもの」へという時代になったと思います。その当時の暮らし向きについて述べてもらいたいと思います。

丸山 小学生の頃ですが、配給制があったでしょう。私は東古泉でしたので学校が遠いからということで靴の配給がありました。靴の配給は履き古したものと交換ということでした。私たちは兄弟がおったから交換品があつてよかったですけど。

II
御祈禱

御祈禱は、組祈禱ともいい神職か住職を迎え組中安全、家内安全、五穀豊稔を祈願し、組中の行事の決定や役員を選出し懇親会を行う新春の年中行事である。ところによれば「お日待ち」、「氏神講」といわれるが、ほぼ同じ行事である。表1のごとく北伊予九地区のうち八地区が御祈禱を行い、主に正月の寺祈禱と夏の宮祈禱がある。

現在、宮および寺祈禱の両用で行っている地区は、中川原、出作、鶴吉の三地区のみ。住職による寺祈禱のみで行う地区は、徳丸、神崎、横田、大溝、東古泉の五地区である。理由は不明だが、古くから永田地区は北伊予地区内で唯一、御祈禱が行われていない。

表1 現在の北伊予地区の御祈禱

大字	宮祈禱	寺祈禱
徳丸	—	○
中川原	○夏	○正月
出作	○正月	○1組
神崎	—	○
鶴吉	○夏冬	○正月
横田	—	○
大溝	—	○
永田	—	—
東古泉	—	○

このように同じ北伊予地区内でも大字により祈禱の方法や内容が異なるのは、藩政時代独立した「村」として自治活動や年中行事を行ってきたことによると考えられる。

今回、北伊予の伝承編集委員会では、各地区の御祈禱の経緯や現状についてまとめ、改めて北伊予地区の伝統行事である御祈禱を見つめ直したいと考えた。

かつて、広く行われていた「お日待ち」は、組中安全、家内



写真1 神職による御祈祷（出作地区）



写真2 住職による御祈祷（神崎地区）

安全、五穀豊穰を祈願し、前日から宿（個人の家）に組の住民が集まり、夜通し寝ずに話したり、酒を飲んだりして時を過ごし、日の出を待って祈祷した行事である。江戸時代にできたといわれ、農作業、慶弔行事など、すべて講中（組）単位で行われていた組中仲間のコミュニケーションを図る大切な場であった。「お日待ち」が終わると「四方札」（境札、関札）と呼ばれる四枚の御札を村（組）の東西南北（境・関）に悪病等が入り込まないように立てた。四方札とは、北（多聞天）、東（持国天）、西（広目天）、南（増長天）を守護する四枚の御札である。名称は様々だが、現在も各地区で行われている。

時が流れ、住宅事情、職業や価値観の多様化、信教の自由など、住民の生活様式や意識の変化に応じて、元来の御祈祷の内容から大きく変容してきた。とくに実施日、場所、贈など、共同体としての色彩が薄れ簡素化が進行している。近隣関係が希薄化しつつある今こそ、コミュニティ作りの場として御祈祷の重要性を見つめ直す時かもしれない。

なお、各地区の概況で記した世帯数や人口などは、区長から提供された平成二七年度当初の資料を使用した。

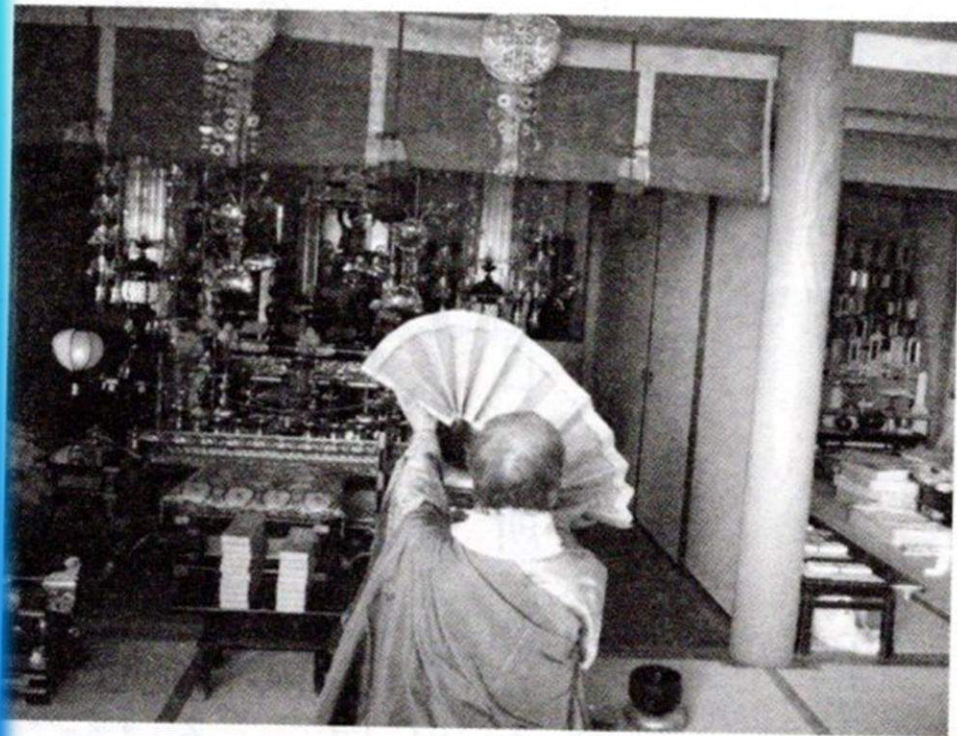


写真4 本性寺住職による転読

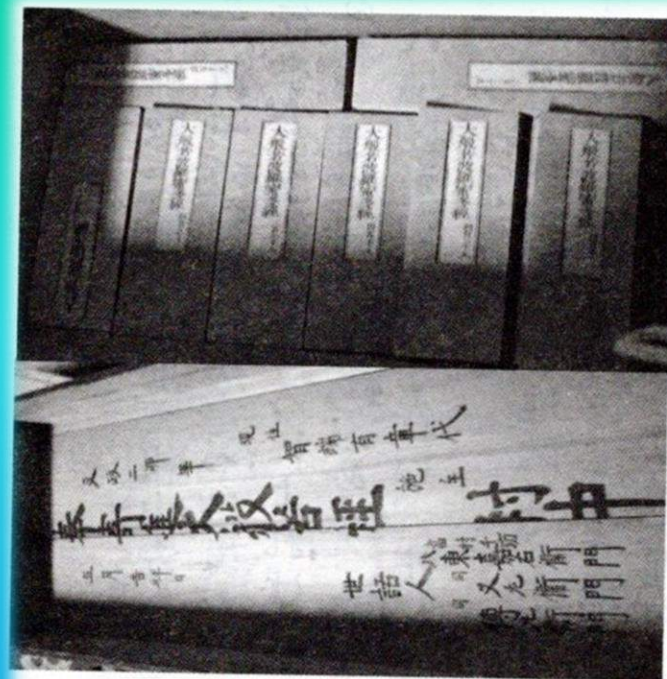
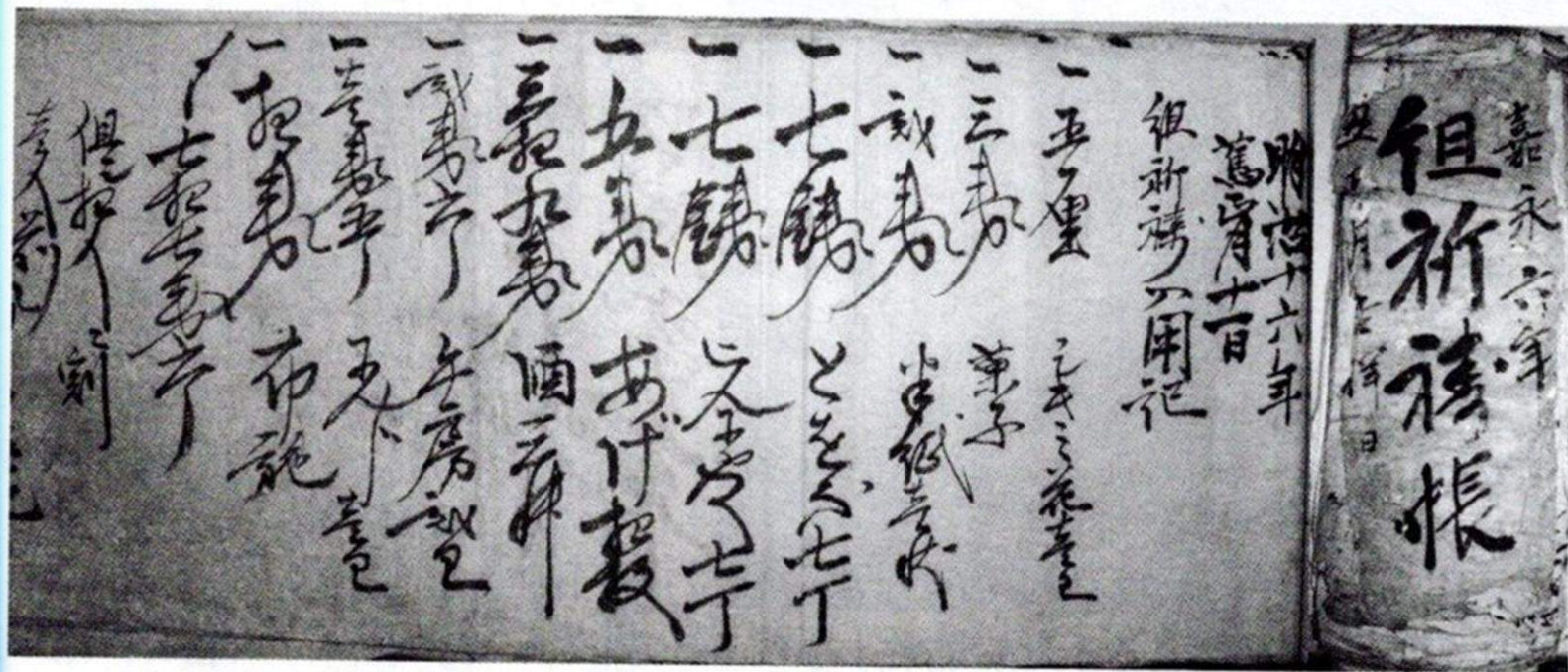


写真3 「大般若波羅蜜多經」百巻

徳丸地区
「大般若波羅蜜多經」と
住職による転読



中川原地区にある北伊予地区で最古の「入用記」

五 鶴 吉

(一) 地区の概況

地区の中央部を南東から西に長尾谷川^{ナガオノガハ}が流れ、川の北側を本村地区三組(上・中・下)、南側を安井地区三組(東・中・西)、地区東側を三軒屋、西側を賀佐と呼ぶ。地区東側の神崎地区に晴光院と伊豫神社があり地区の多くの人が檀家、氏子となっている。平成二十七年四月の世帯数二二八戸、人口八七一人、農家数八五、組数八である。

(二) 御祈禱の今昔

今から一五〇数年前まで本村の三組と安井の三組、賀佐は正月祈禱と夏祈禱を行っていた。現在、両方の実施は本村上組のみ。御祈禱を実施しない組は三軒屋一組、ほか六組は正月祈禱のみである。多くの組が年一回の御祈禱に変わったのは、当番や各戸の負担軽減のためといわれている。また本村地区では子どもたちによる虫祈禱(夏祈禱)が行われている。

(三) 御祈禱時の行事

新年の御祈禱は正月明けの休日に行われる。これは一月末の大字総会までに、「組会」を開き各組の役員を選出するためである。その後、御祈禱、懇親会を行う。

表2 鶴吉御祈禱の現状

組名	御祈禱		御祈禱方式		御祈禱場所		懇親会		備考
	正月	夏	神式	仏式	宿元	公民館	宿元	公民館	
三軒屋	○	○	○	○	○	○	○	○	御祈禱は無い。新年会のみ
本村	上組	○	○	○	○	○	○	○	
	中組	○	○	○	○	○	○	○	
	下組	○	○	○	○	△	○	△	△公民館使用もあり 小学生による御祈禱
		—	虫祈禱	○	お薬師堂	—	—	—	
安井	東組	○	○	○	○	○	○	○	
	中組	○	○	○	○	○	○	○	
	西組	○	○	○	○	○	○	○	
賀佐	○	○	○	○	○	○	○	○	

(注) 本村下組は昭和40年前後に下組と中組に分割



写真26 伊豫神社神職による御祈禱(賀佐)



写真27 伊豫神社歳旦祭の御札(右)と六枚組の齋御守

鶴吉地区のご祈禱

経」十巻を一巻ずつ手に取って前後左右に振るようにして転読する。

「大般若経」十巻の転読が終わると、次に「大般若理趣分経」を転読し、そのあと参列者一同の家内安全、無病息災を願って一人一人の肩に「大般若理趣分経」を頂かせてくださる。

3 巡行

御祈祷が終わると経本の入った唐櫃からびつを担ぎ、鉦かねをならしなから、お供えしたご飯のお重や御札をもって、数人がかりで組内各戸を回っていく。



写真35 巡行（北組）



写真36 唐櫃をくぐる（村組）

家に着くと唐櫃を持ち上げ、家の人是一人一人その下を潜り（往復）礼拝をする。持ってきたご飯を小分けして回る。

4 慰労会

仏事の御祈祷行事が終わると、組内の新年会を兼ねた慰労会が行われる。

慰労会は、組中の会を兼ねる北組、南組はその年の組長が

横田地区のご祈祷風景

七 大 溝

(一) 地区の概況

松前町の中南部の農村地帯で、明治二三(一八九〇)年市町村制が実施されるに当たり大溝本村(以下本村)と原田地区(以下原田)が統合され大字大溝が発足した。

現在の戸数は一三三で農家は三三、人口は三九八人で六〇歳以上の割合は四一割である。組数は五で、本村は二組(上組・下組)、原田は三組(東組・西組・南組)である。

(二) 御祈禱の歴史

大溝の御祈禱の歴史をみると、安政四(一八五七)年から続いている。本村北組(注)には「大溝村北組年始祈禱諸入用記」があり、安政五年から一六〇年間、脈々と綴られた記録である。その他の組は、北組のように総ては綴られていなかった。



写真37 安政5年からの
「緒入用記」
(北組)

北組の「諸入用記」から安政四年、慶應四年、大正一五年、昭和二一年の御祈禱の参加者、賄の内容、当時の買物単価等を紹介する。解読できない安政四年、慶應四年、大正一五年については、伊予高等学校袖山俊夫教諭の指導を受けた。

(注) 御祈禱の際の本村における組分けは、日常の組分けとは異なり、中川を挟んで南側を南組、北側を北組という。

大溝地区のご祈禱 現在の使用されている「諸入用記」

巳歳	卯歳宿元	辰歳宿元	巳歳	祈禱調ノ物	酒	大半紙	小半紙	燈油	筆	豆腐	牛房	燈布	椎茸	白はし式膳	しきミ	昆布	かた炭	瓦け式つ	油あげ	燈しん	酢	仁じん	三匂	香匂	宿元	源八
常蔵	半左衛門				五合	壺状	壺状	壺合	壺本	五丁	壺本	代三文	代拾貳文	代貳文	貳枚	壺把	代三文	壺本	法印様御布施	御小僧布施						

写真38 安政4(1857)年の記録

「大溝村北組年始祈禱諸入用記」は、安政四（一八五七）年から始まり現在まで脈々と記録され、組で保管されてきた。

巳歳^{みとし}の「祈禱調ノ物」（調達した品物）をみると、仏式で行う祈禱準備の物品や買物の明細が記されている。また、末尾には法印様には三匂^{もんめ}、小僧には一匂を僧侶へのお布施^{ふせ}としたことや宿元も明記されている。

昭和二十一年 買物	
一、八円貳拾錢	酒 壹升
一、壹円	布 施
一、壹円五拾錢	豆腐 拵賃
一、七円五拾錢	イリコ 五十匁
一、四拾八円	魚 六百目
一、五円	砂糖
一、五拾錢	白紙 五枚
一、貳円	炭 伐
一、五拾錢	酢 代
一、七拾四円貳拾錢	内 五円入
連名	
栗原 米次郎	
田中 修	
田中 四郎	
栗原 健介	
阿部 勝太郎	
渡部 西五郎	
栗原 進	
栗原 吉弘	
栗原 茂	
一人前 八円五拾錢	
半口 四円貳拾五錢	
宿元 阿部 勝太郎	

写真41 昭和21(1945)年の記録

名称は現在と同じ「買物」となり、単価は「円」になっている。
 終戦直後の物価高騰期で高額となっている。中でも魚(六〇〇目)
 四八円、酒(一升) 八円二〇銭は目を引く。連名の六人は一人前として
 八円五〇銭を出し、三人は半日であることから半口の半額としている。
 物不足と物価高騰期の御祈祷を実施する苦勞が偲しのばれる。

(五) 御祈禱の記録

御祈禱の資料として残っているのは、南組に「入用帳」として残る明治二六（一八九三）年からのものが最も古く、一年分は半紙を二つに折りにして三枚程度をコヨリで綴じた簡単な記録である。内容は宿元名、出席者、お布施や食料費等の費用明細を記入、そのほかに地区の状況、感想等を記入している年もある。



写真48 明治26年からの「御祈禱入用帳」



写真49 明治26年「入用帳」の表紙と記載内容

1 お布施の金額
お布施の記録は、明治二六年五銭、明治四〇年一〇銭、大正

九年二〇銭、昭和一八年七〇銭、昭和二二年一円、昭和二三年二五円、昭和二八年百円、昭和三八年二百円、昭和四九年八百円、昭和五九年 四千元（賄い料含む）となっている。

平成八年からは、お布施五千円、賄料二千円となり現在も同額である。米価格は、大正八年には、白米一升四六銭、麦一升二六銭、昭和一五年には、玄米一俵四二円六〇銭、麦一俵一二円との記述がある。



写真50 明治26年「入用帳」の記載内容

東古泉地区のご祈禱「入用帳」

第13集 編集委員の みなさん（12名）

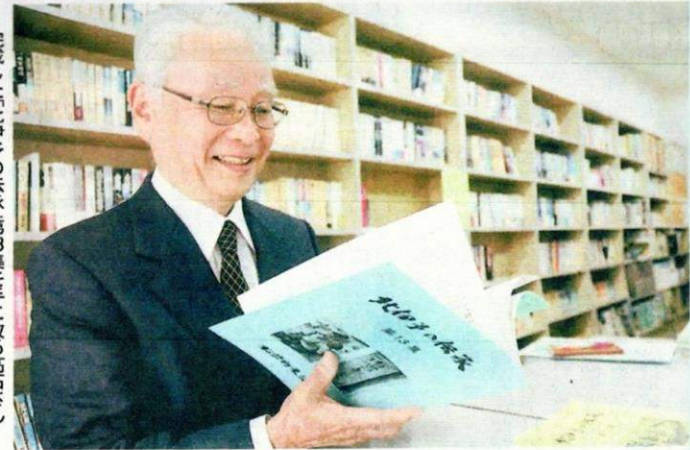


編集委員と事務局の皆さん

「北伊予の伝承 第13集」編集委員

委員長	神崎	高石	勤
副委員長	徳丸	仙波	康宏
副委員長	出作	小松	ヒトミ
副委員長	大溝	田中	安男
副委員長	永田	澤田	忠夫
委員	徳丸	伊藤	芳幸
委員	神崎	深沼	静良
委員	鶴吉	久津那	博誠
委員	鶴吉	済川	康徳
委員	横田	松田	明
委員	東古泉	早瀬	頼夫
委員	東古泉	竹田	博
(事務局)	東公民館長	門田	信次郎
	主事	巻幡	

完成した「北伊予の伝承」第13集を手に取る高石さん



町の記憶 次世代へ

松前・町東公民館「北伊予の伝承」13集

戦争体験や年中行事紹介

松前町北伊予地区の歴史を1988年から「北伊予の伝承」として記録している同町神崎の町東公民館が、このほど、第13集を発刊した。昨年、戦後70年を機に編集委員の住民が聞き取った戦中戦後の体験談をまとめたほか、地区で古くから続く年中行事「祈禱(きとつ)」の特徴や変遷を調査した。

昨年7月に公民館で開いた座談会には、元軍人や疎開経験者、旧満州(中国東北)からの引き揚げ者らが出席。編集委員12人は当時の写真を集め、追加取材したり住民の手記を引用したりして、戦時中から昭和20年代後半までを三つの時期に分けて編さんした。

1945年に国鉄北伊予駅が爆撃された際の「風邪が自宅まで休んでいると、突然東の方から爆音と

バリバリバリという機銃の音に、これが戦争かと驚いたこの証言や、戦後に「NHKのど自慢で町出身の明星石光司さんが日本一になった」という逸話など、地元の印象的な記憶を聞き書きしている。

「祈禱の章では、北伊予8地区で神職や住職を迎え、組中安全や五穀豊穡(ほづじょう)などを祈願する年中行事の開催時期や手法を地区ごとにまとめた。ご祈禱で使う物品や食材など

を記した江戸期から続く「入用記」の写真も添えた。A4判66面で2700部作成。同地区で全戸配布し、小中学校などにも置く予定にしている。編集委員長の

高石勲さん(76)は話し手の言葉遣いを可能な限り残すよう重視したと振り返り「話しただけではあまいになりそうな歴史を文字や写真、図表にして次の世代に残していきたい」と話した。(正岡万弥)

平成28年4月9日付
「愛媛新聞」記事



広報「まさき」の記事

北伊予の伝承

第14集



松前町東公民館

第14集(最終集)

発行 平成30年3月

68ページ

編集委員長 高石 勤

編集委員 13名

館長 北野 美由季

た、
古
各
一
機
で
に
現
た
一
北
を
お
面
て

ましましに、きりさつたて

[illegible]

卷之四

I 座談会

「戦後七〇年 北伊予のくらしを辿る その二」

― 昭和三〇年代から平成初期までのくらし ―

一 ひたすら駆けた時代から低成長期までのくらし ……

二 昭和六〇年代から平成一〇年余りの間の「低

成長からバブル崩壊までのくらし」 ……

II 季節を彩る北伊予の祭礼 ―まつり―

松前町行政区画の変遷と神社の祭礼について ……

- 一 徳丸 ……
- 二 中川原 ……
- 三 出作 ……
- 四 神崎 ……
- 五 鶴吉 ……
- 六 横田 ……
- 七 大溝 ……
- 八 永田 ……
- 九 東古泉 ……

○ 記憶を記録に ―『北伊予の伝承』三〇年の軌跡―

○ 『北伊予の伝承』歴代編集委員 ……

○ 『北伊予の伝承 第一四集』編集委員 ……

I 座談会

「戦後七〇年 北伊予のくらしを辿る・その二・」

― 昭和三〇年代から平成初期までのくらし ―



出席者の皆さん（敬称略）

（後列） （前列）

徳丸 東古泉

八東直司 稲垣 貢

中川原 徳丸

加藤典子 渡部喜代隆

神崎 神崎

小田原延男 鎌倉和子

大溝 鶴吉

栗原和裕 村上紀美子

永田 中川原

郷田淳子 三好悦男

出作 出作

三谷純子 神野英昭

鶴吉 横田

大政 直 巻幡美恵子

司会 高石勤・深沼静良

一 ひたすら駆けた時代から低成長期までのくらし

今回の内容は、昭和三〇年頃から五〇年代にかけて「ひたすら駆けた時代から低成長期までのくらし」と、昭和六〇年代から平成〇年余り間の「低成長期からバブル崩壊後までのくらし」です。

一 ひたすら駆けた時代から低成長期までのくらし

この時代は、昭和三〇年頃から四〇年代中頃の戦後日本の奇跡と

言われた高度経済成長期にあたる「戦後の混乱がようやく落ち着き、ひたすら駆けた時代」と、昭和四〇年代後半から五〇年代にかけて右肩上がり経済成長とオイルショック（石油危機）に見られた成長神話の陰りの「経済成長が急激に進み、右手に繁栄、左手に公害の頃」の時代についてお聞きします。



写真1 座談会に出席された皆さんと編集委員

(二) 装いについて

司会 それでは、これから第一部（前半）の話し合いに移ります。

昭和三〇年頃から昭和五〇年代頃までの生活文化の基本であります衣食住について具体的なお話を伺います。まず最初に「衣、装い」についてお願いします。なお、前回の『北伊予の伝承第一三集』とのつながりがありますので、昭和二〇年代のお話からお願いします。

鎌倉 私は昭和三二（一九五七）年に高校を卒業した者です。今言われたのよりは少し前、つまり私が小学生時代のこととなりますが、その頃ブルはなかったで川で泳ぎよりでした。その時シミーズ（女子用のワンピース式の下着）、若い人はそう言っても知らんでしょうけどシミーズを着ていました。水着はなかったんです。中学校の真北の川で泳ぎました。男子は裸はだかみたいなのをしておりました。胸が少し大きくなるころになると濡れたら透きとおって恥はづかずかしいんで濡れたシミーズを摘つままんて体から痒かゆかしたりしていました。

私は農家の生まれなもんで終戦後はモンベですわね。裕福な家の子はちゃんとズボンとかスカートとかをはかしてまろとったと思うんですが。わが家は農家だったもんですからモンベをほんとによくはいていました。

昭和三〇年より少し前になりますが、高校のときはもう制服があったし、中学校はセーラー服やったです。私は三人姉妹の一番下だったから姉のお下お下がり



2 モンベをはく女学生
伊予の伝承第11集より)

(四) 食について

司会 次に衣食住の「食」について伺います。冷蔵庫がなかった時の生活、あるいは薪を使った羽釜での炊飯、薪の入手法や薪割りの思い出などについてもお願いします。また魚にくらべあまり食べなかった肉類についてお聞かせください。

三好 製材をしておった関係から燃料のことをいうと、戦後プロパンガスができるまでは木材を製材した後のコワ板(コツバ、木の切れ端)とオガ屑が燃料として使われていました。神崎にパン屋さんがおられました。オガ屑を取りに来てそれでパンを焼いていましたし、お風呂屋さんも使っていました。一般の家庭でもご飯を薪で炊いていました。だから木材は捨てる所がなかったんですね。プロパンガスができる前

は全部売れてよかったことを覚えています。渡部 その当時は薪を割って、薪で



写真3 羽釜(はがま)



写真4 くど(かまど)

(『北伊予の伝承第11集』より)

（五）住まいについて

司会 それでは衣食住の「住」、住まいにまいります。三世代同居、大家族の住宅から軽便な一戸建住宅に変わってまいります。間取りも来客を意識した造りから、個人や家族を中心とした造りになりました。それから農家だったら牛を飼う駄屋どやがあり、もちろん納屋なやがあつたわけです。風呂や便所は別棟にもありました。そのあたりのことをお願いします。

三好 住宅というテーマとはちよつと違う内容になるかもしれないんですが、木材がよかつた時は当然和風の日本瓦を葺ふいた土壁つちかべを付けた大工さんが建てる在来工法だったんですね。現在はご承知のようにプレハブ形式の一戸建ての効率のよい家になったんですけど、そこで強調しておきたいのは、今、山の方は大変なんです。ご承知のように戦後天皇陛下へいみをお迎えして植樹祭というのをずっと毎年やってきたんですね。この地域も昭和四一（一九六六）年に三坂峠の登り口のところ（久谷地区）で植樹祭をしました。そして「木を植え、木を植え」言うて、その時の木が現在は伐採時期になつとるんですねえ。そしたら今建築の質がガラッと変わったもんですから日本の木材の一部は今の日本の建築には適しません。それで今山の方の生産者の方はもう伐採時期に入つたものの、ほとんど収入にならなくなっています。

住まいについて

（七）牛について

司会 続いて農業に関連して牛について伺います。北伊予の場合、どの農家でも牛を飼っておりました。耕作はいつごろから耕運機に変わっていったのでしょうか。また田植えとか稲刈りなど農作業もグループで、あるいは家族で、親戚で集まって行っていたのが機械化が進んだためになりました。夏場農閑期の牛は、山間部に預ける「預け牛」（あげ牛）の習慣がありました。これについてもお聞かせください。

三好 私のところは製材業を営んでいましたのでトラックがありました。当時、地域の牛を農繁期が済みましたら中山とか面河の方へ預けるんで運んでおりました。それともう一つは地域で結婚がございましたら、今は結婚されましたら家具なんかは、当然家具店が運びますが、当時は嫁入り道具は家から運んでおりましたので、私のところのトラックで嫁入り道具を運んだことがございます。

加藤 私は二九（一九五四）年生まれなんですけども、ほんとに幼い時には牛がいました。牛小屋もあってほんとに臭か



写真 12 牛による耕作



写真 13 夏場の預け牛（佐礼谷）
（『村上節太郎がとらえた昭和
愛媛』から）

牛について

二 昭和60年代から平成10年余りの間 「低成長からバブル崩壊後までの暮らし」

二 昭和六〇年代から平成一〇年余りの間の「低成長からバブル崩壊後までの暮らし」

昭和六〇（一九八五）年以降の財テクブームで資金が土地や株式に集中し、バブル（水泡）と呼ばれる実態経済を伴わない資産価値の上昇が起こり、株式が史上最高値を記録し未曾有の好況を迎えます。しかし、平成改元（一九八九）から一〇年余りの間にバブルが崩壊し、一転して平成不況期を迎えます。

司会 これからは低成長期からバブル崩壊までの暮らし、すなわち昭和六〇年代から平成一〇年頃までの「豊かさを問いつつ直す時代からバブル経済の崩壊後まで」についてお話ししていただきたいと思えます。年代・職種・仕事の内容・役職等によって違いはあろうかと思いますが、自分たちにどんな影響があったのかバブル期の思い出についてお願いします。

（一）バブル期の思い出

三好 私は不動産の免許を持っています。多少不動産をやっていました。が、ちょうど坊ちゃんスタジアムがある松山の中央公園ができる頃でしょうか、あの頃が土地価格のピークでバブル期でした。土地を売った関係者たちが代替地として重信川を渡って北伊予側へ土地を求めて買いに来たんです。どうしても欲しいと言うので最後に値ように買った人が、国近川の源流、泉の所の農地を坪（三・三平方計）十数万円で買ったのが私の記憶では最高額でした。その時の中川原の分譲地が坪四二、三万円で売りよりしました。現在、農地は坪一万円

Ⅱ 季節を彩る北伊予の祭礼・まつり・

松前町行政区画の変遷と神社の祭礼について

明治二二（一八八九）年の町村制施行で松前村、岡田村、北伊予村の三か村が生まれ、昭和三〇（一九五五）年の合併で現在の松前町が誕生した。

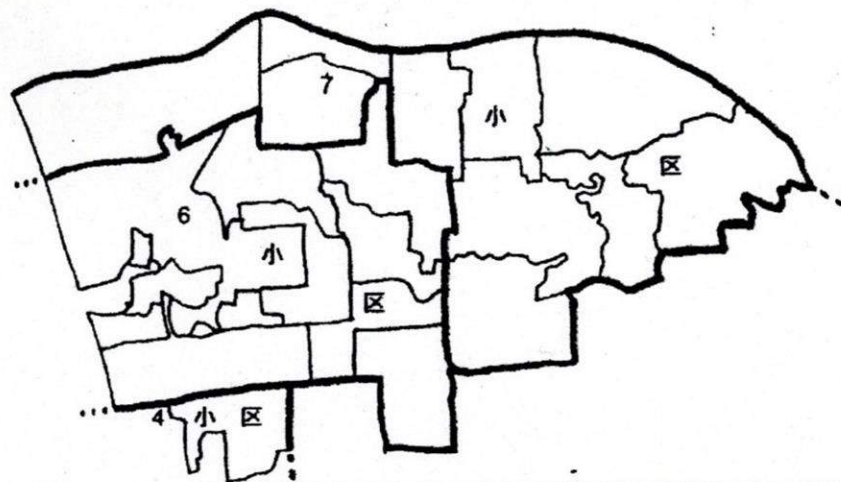


図 1 明治 6 年 神 山 県 第 11 大 区 ・
愛 媛 県 第 19 大 区 の 小 区 画

明治初期、行政区画

の呼称を従来の固有名詞で呼ばず、数詞（番号）で表す「大区小区制」が実施され、大区に区

長、小区に戸長が置かれ行政を担当した。松

前の三か村は、明治六

年（同年二月、太政官布

告で石鉄県と神山県は

愛媛県となる）旧神山

県の第「一」大区は愛媛

県第「二」大区となった。

明治一一年急進的な諸

改革に対する根強い反対を受けて「大区小区制」は廃止され、郡役所のもと新しい村の区画が作られた（図 1）。

松山藩時代の神社（明治4年）

表2 明治6年(1873)神山県時代の神社

第11大区第6小区

社格	神社名	氏子数	村名	神職	備考
1 郷社	玉生八幡大神	999戸	西古泉村	祠官 高市慶敬	
2 村社	貴布禰大明神	219戸	黒田村	祠掌 榊山春延	貼紙「高市真佐美」
3 村社	素鷲社	無之	東古泉村	同人	
4 村社	八幡社	無之	筒井村	同人	
5 村社	蛭子社	無之	濱村	同人	
6 村社	素鷲社	無之	大溝村	同人	
7 村社	素鷲社	無之	横田村	同人	
8 村社	鎮守社	無之	永田村	同人	
9 村社	頭王靈社	無之	恵久美村	同人	

第11大区第7小区

社格	神社名	氏子数	村名	神職	備考
10 郷社	伊豫神社	169戸	神崎村	祠官 高市通福	貼紙「武智清夫」
11 郷社	高忍日賣神社	269戸	徳丸村	祠官 同人	貼紙「高市盛久」
12 村社	稲荷大明神	240戸	西高柳村	祠掌 武智盛文	
13 村社	若宮社	無之	昌農内村	同人	
14 村社	素鷲社	無之	上高柳村	同人	
15 村社	神明神	無之	北川原村	同人	
16 村社	稲荷社	無之	鶴吉村	同人	
17 村社	素鷲社	無之	大間村	同人	
18 村社	素鷲社	無之	中川原村	同人	
19 村社	恵依八幡大神	59戸	出作村	同人	貼紙「高市盛高」

明治6年 神山県「縣郷村社調藤」による。

表1 明治4年(1871)松山藩時代の神社

神社名 末社名	村名	祭日	神主名	旧号等
稲荷大明神	高柳村西分	9/25→8/15	神主 榊山春範	高柳大明神 流宮五社大明神
神明神	北川原村	8/8	榊山春範	
若宮社	庄之内村こと 昌農内村	6/10	榊山春範	
素鷲社	高柳村上分	6/9	榊山春範	祇園牛頭天王
玉生八幡大神	松前村こと古 泉村西分	8/15	神主 武智盛就 祝部 高市美直 祝部 高市慶敬 禰宜 高市盛至	上野村→ 昌農内村→ 当村
素鷲社	南江頭村こと 岡田村	9/1	武智盛就	祇園牛頭天王
頭王靈社	北江頭村こと 恵久美村	9/1	武智盛就	
八幡社	松前村こと筒 井村	9/12	神主 高市美直	
素鷲社	松前村こと古 泉村東分	6/13	武智盛就 高市美直	祇園牛頭天王
素鷲社	横田村	6/15	高市慶敬	祇園牛頭天王
素鷲社	黒田大溝村こ と大溝村	6/9	高市慶敬	祇園牛頭天王
鎮守社	南江頭村こと 永田村	3/27	高市慶敬	
蛭子社	松前村こと濱 村	6/25	高市慶敬 高市盛至	
貴布禰大明神	黒田村之内黒 田村	9/20→8/15	神主 高市盛房	
伊豫神社	北神崎村こと 神崎村	8/22→8/15	神主 高市通福 祝部 高市豊茂 高市通福 高市豊茂	
稲荷社	釣吉村之内鶴 吉村	9/8		
恵依八幡大神	神崎出作村こ と出作村	9/18→8/15	神主 武智盛高	恵依彌二名本宮 正八幡宮
高忍日賣神社	徳丸村	9/13→8/15	神主 後藤正辰	
素鷲社	大間村	6/9	後藤正辰	祇園牛頭天王
素鷲社	中川原村	6/13	後藤正辰	祇園牛頭天王

明治4年「伊豫國伊豫郡大小神社明細帳」による

夏祭りには、各地区により異なるが、茅の輪ちがやをくぐって無病息災を祈る輪越わごしを行い、一部の地区では境内で演芸大会を行い出店も出る。徳丸では八月二日「虫干祭」を行い、村芝居は遠来からの観客も多い。

また秋祭りは、一〇月一四・五日の二日間行われる。前日は宵宮よいみやで、夕方氏神さまからご神火をもらって各家々のご神燈に火を点けて回る高張たかはりを行う地区もある。一四日は土地の生活を脅かす悪霊あくりよう払いや五穀豊穡に感謝する獅子舞が各地区で行われる。一五日は神輿みこしの巡行と一部の地区では獅子舞も行われる。神輿は家々を巡行し神職はらがお祓いをする。徳丸・中川原・神崎三地区では大・小神輿二体が巡行する（表3）。近年大神輿はかき手不足からウィークデーの開催が危ぶまれる地区もあり今後の課題である。

表3 北伊予の秋祭りの出し物(平成29年)

	大神輿	子神輿	獅子舞	高張
徳丸	○	○	○	○
中川原	○	○	○	○
出作		○	○	○
神崎	○	○	○	
鶴吉		○		
横田		○	○	
大溝		○	○	○
永田		○	○	○
東古泉		○	○	○

なお、各地区の祭りの記述で引用した文献は、原文のまま掲載した。また、各地区の概況で記した人口等の資料は、松前町が公表しているものを使用した。

各地区の「まつり」について

(三) 虫干祭

徳丸の夏祭りは、虫干祭である。毎年八月二日に行われる賑やかな祭りである。

日本人は、古来より災厄は、心や体に付いた「けがれ」によってもたらされるものとして、日頃より心を清浄に保ち体に付く様々な「けがれ」を落とすことが必要であり、そこで「禊」や「祓」を行うのである。それは、古事記や日本書紀に、イザナギノミコトが死者の国である黄泉国から逃げ帰る禊をしたという話からも分かる。神社では年の前半、つまり元日から六月三〇日と、後半の七月一日から大晦日に分け、六月三〇日と大晦日に大祓式を執り行うのである。このうち、特に六月三〇日には茅で輪を作り（茅ノ輪）、それをくぐることで、心身のけがれを断ち切り、無事に夏を越せるのである。ここから一般に「夏越祭」とか「輪越祭」と呼ばれる。

虫干祭当日、午前一〇時より祭典が厳かに執り行われる。祭典の中で、拝殿祓所の前で神職・総代に「ひな形」が配られ、それで体をなでて息を吹きかけ、それを持って茅ノ輪くぐりの神事が行われる。宮司に従って一列になり和歌を唱えながら茅ノ輪を左右左右とく

前において「大え、「けがれ」

かつてはこの

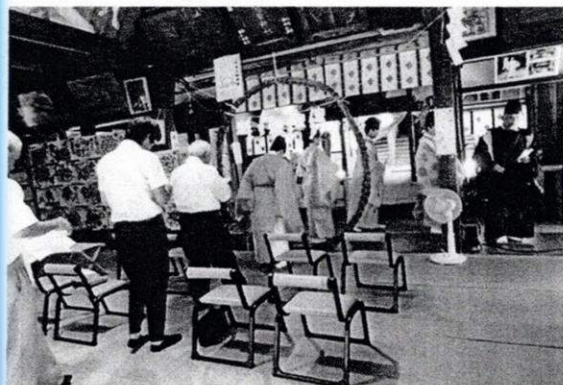


写真2 虫干祭神事

(平成29年8月2日)



写真3 奉納村芝居

(平成20年8月2日)



写真9 秋祭り 昔の中川原橋の前で（昭和18年）

（加藤賢司さん提供）

まつり スナップ

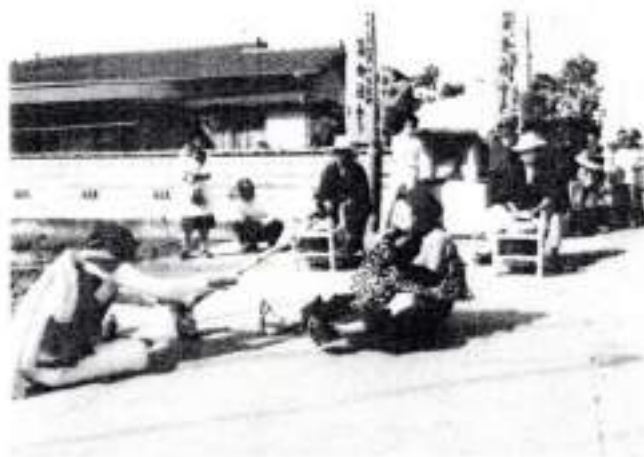


写真9 復活元年 太鼓は和服
（獅子保存会提供 昭和50年）



写真8 復活元年演じた後で記念撮影
（獅子保存会提供 昭和50年）

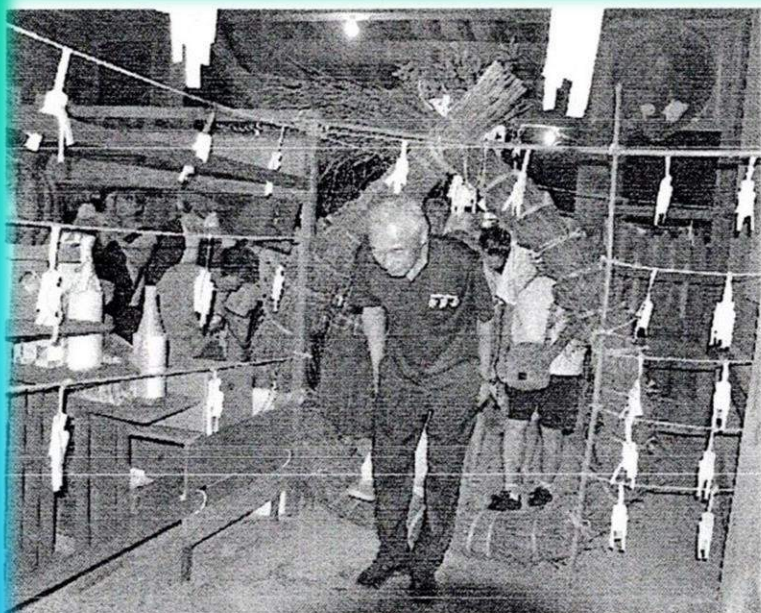


写真 4 玉生神社の輪越
(平成 29 年 8 月 1 日)



写真 11 「おくま」をする住民
(平成 22 年秋祭り)

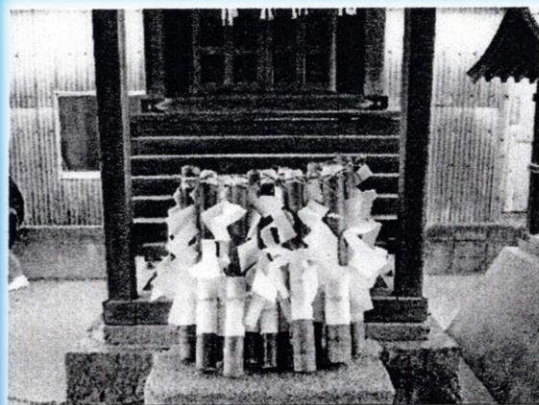


写真 4 子ども相撲の御幣
(平成 29 年 4 月)

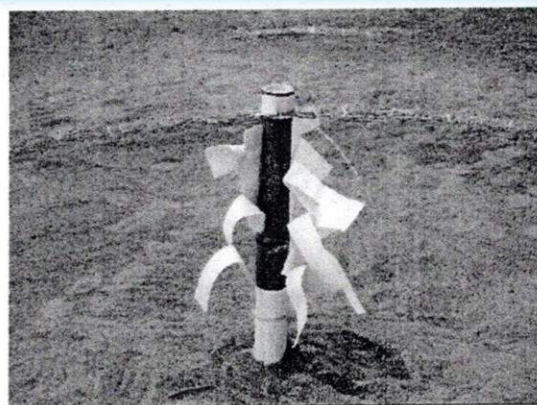


写真 3 子ども相撲の土俵
(平成 29 年 4 月)

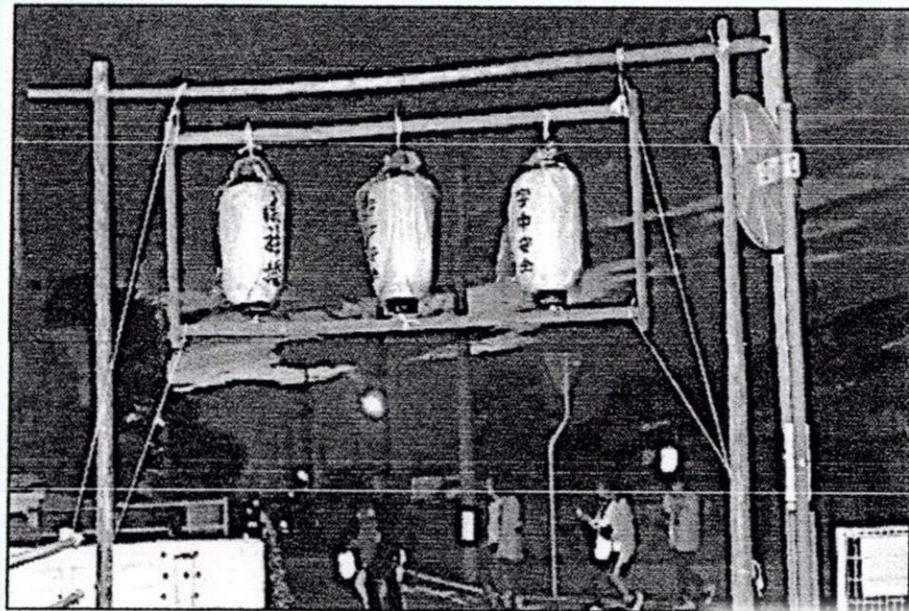


写真 6 御神燈前を提灯行列する
本村の子どもたち
(平成 29 年 10 月 14 日)

大溝地区のまつり スナップ

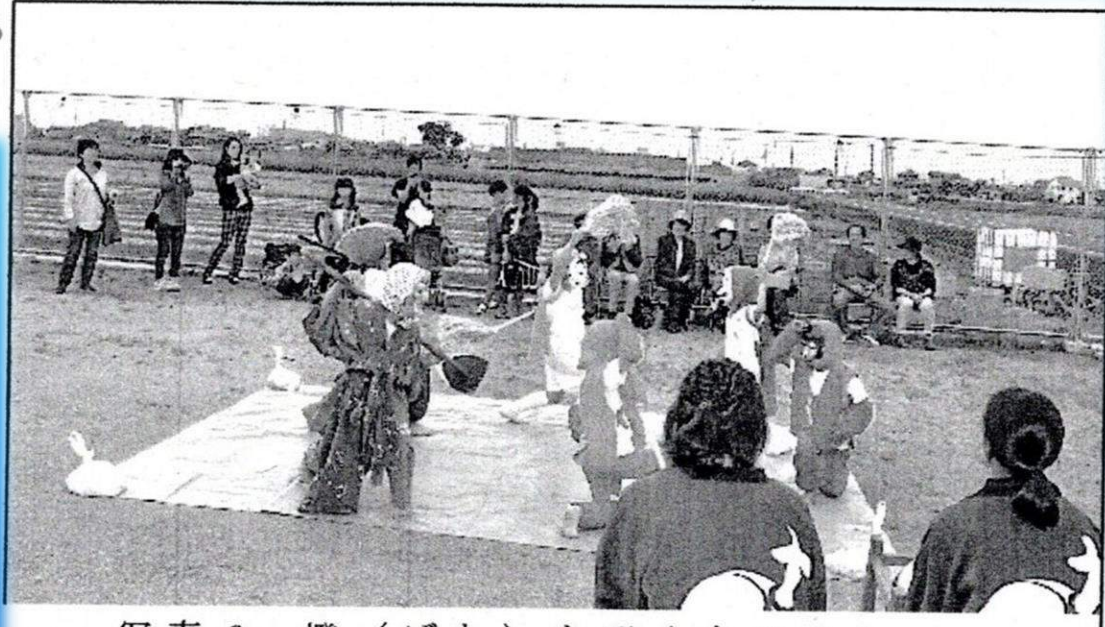


写真 9 撥（ばち）を叩く女の子と
「入れ歯」を踊る男の子
(平成 29 年 10 月 14 日)



写真7 青年団による獅子舞
(小笠原盈善さん所蔵昭和28年ころ)

青年団による芝居 (永田地区)



写真3 村芝居の出演者
(昭和22年)



写真4 村芝居の一場面(昭和27年)
(小笠原盈善氏提供)

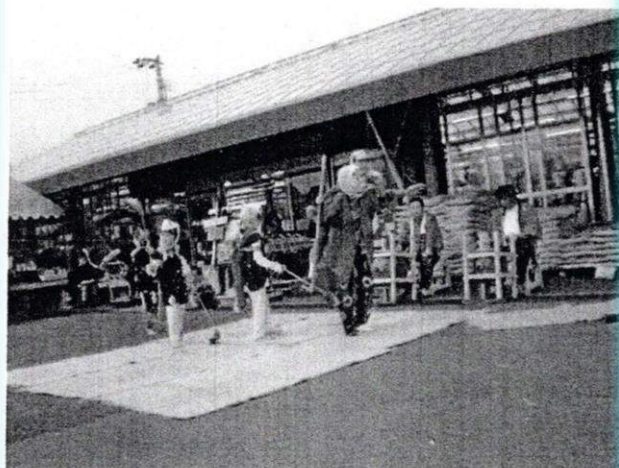


写真 8 「いれは」を演ずる



写真 9 獅子の舞い比べ



写真 10 玉生神社への宮上げ



写真 11 雨の中の子ども神輿の巡行

東古泉地区のまつり

北伊予の生活文化 —『北伊予の伝承』30年の軌跡—

はじめに

昭和30年(1955)3月、旧松前町、北伊予村、岡田村の1町2村が合併し新生「松前町」が誕生した。それぞれ旧町村に文化広報活動の拠点として西・東・北3つの公民館が設置された。

東公民館がある北伊予地区は、平成29年4月現在の世帯数は3075、町全体の23.1%、7538人(同24.5%)の人口を有し、豊かな水と肥沃な土地に恵まれた農村地域である。

長年、東公民館から発行されている『北伊予の伝承』は、住民に親しまれ、その伝承は若い世代に受け継がれている。ここで、すでに発行された『北伊予の伝承』からその一部を紹介したい。

1 『北伊予の伝承』とは

(1) 伝承活動発足の経緯

東公民館事業の1つに『北伊予の伝承』の発行がある。昭和63年(1988)に創刊されて以来、平成30年(2018)に発行された第14集まで30年の歳月が過ぎた。

第2集「発行にあたって」の館長のことは、「東公民館では先に松前町誌に載っていない話を収録した『北伊予の伝承』を発刊し、さらに「北伊予の歴史を語る(ふるさとを考える)会」が結成されましたが、会員の高齢化に伴い立ち退きとなりました。これを憂え、その意志を継承し『北伊予の伝承・第2集』の発行をしてはとの地域の要望により準備委員会が発足しました。町での予算化も進み、大字毎に推薦された方々によって編集委員会を結成、会合を重ね、編集方針や内容の具体化、資料の収集と整理・編集・校正を行い、未熟ながらも第2集発行(平成7年3月)の運びとなりました」とある。

その翌年には第3集が発行されたが、それ以降は隔年となり現在14集を発行している。

同じ町内の他の公民館でもほぼ同様の事業がなされていたが、長年にわたり現在まで継続発行しているのは東公民館だけである。

専門的な記載内容や分析ではないが、地域と密着して生きた生活文化の伝承であると自負している。

(2) 第1集から第7集までの主な内容

北伊予地区は9地区(大字)となり、それぞれ



写真1 『北伊予の伝承』第1集

数名の編集委員を選出し、地道に編集活動を行ってきた。

昭和63年(1988)3月発行の第1集(創刊号)は、北伊予9地区の年中行事・作楽・わらべ唄などが主たる内容で、それぞれの行事の由来や歴史をまとめている。(編集委員長 仙波

文治、館長 大黒宣俊、委員数24、B5版54ページ)

第2集は、各地区の神社・仏閣・行事等、特色のあるものにポイントを置いている。創刊から7年の空白があるが、先出のように地域の要望に応え難いものも乗り越え、編集委員会を立ち上げ、第2集の発行にこぎつけた努力を讃えたい。(平成7年(1993)3月発行、編集委員長 野本勉、館長 高市徳、委員数24、B5版50ページ)

次いで、翌年に発行された第3集は、各地区ごとの大字や社寺の由来など興味深い資料になっている。巻末の各大字の年中行事や民俗調査の一覧は、詳細な項目で生活文化の伝承活動に役立つ貴重なものである。(平成8年3月発行、編集委員長 河川裕、館長 高市徳、委員数22、B5版41ページ)

第4集は、北伊予地区の祭・池や祭礼の輪の2本立て。さらに各地区ごとの生活文化などの伝承をまとめている。とくに巻末の参考資料の中で古地図は

『北伊予の伝承』30年の
軌跡から
北伊予の生活文化を
まとめたもの

貴重である。(平成10年3月発行、編集委員長 中村文雄、館長 伊達嘉和、委員数26、B5版43ページ)

第5集は、ちょうど昭和2000年に当たり、太平洋戦争にまつわる記録を中心に「戦争」をテーマとし、他に子どもの遊び、生活、農業など当時の生活文化が明確に再現され、平成12年(2000)3月に発行している。この

第5集は町内の各小中学校でも教材としてよく活用されたという。(平成12年3月発行、編集委員長 中村文雄、館長 水口憲三、委員数20、B5版60ページ)

第6集は、昭和20年(1945)から30数年までの戦後の貧しい生活から高度成長期の初めころまでを特集している。体験者の手記なども挿入し、現在の豊かな生活ができる基礎をつくった先人の苦労や努力を学ぶ資料となっている。(平成14年3月発行、編集委員長 田中義一、館長 水口憲三、委員数22、63ページ)

第7集は、従来のテーマと異なり、各地区ごとに明治から現在までの北伊予にゆかりのある人物(故人)を取り上げている。とくに人選や記述内容等、編集委員は大変苦慮した様子が窺えるが、参考資料を基に関係者からの聞き取りなどから執筆している。(平成16年3月発行、編集委員長 水口憲三、館長 吉田健勝、委員数26、B5版29ページ)

2 第8集以降の『北伊予の伝承』

(1) 編集方針の変更

私は高校教員退職後、県生涯学習センター嘱託研究員として5年間勤務した。その間愛媛の地域学(最初の前半は郷土文化の学術整理、後半は記憶でたどる原風景として愛媛の衣・食・住とくらしの学術整理)の一端を担い“聞き書き”を中心にまとめる発表する機会を得ていた。

『北伊予の伝承』には第8集の平成17年度から編集委員の一員に加えていただき企画・編集に携っ

た。編集委員の了解のもと編集方針として、北伊予の生活文化にまつわる原風景を記憶にとどめるため、住民の生の声を聞き取り、それを“聞き書き”するという手法をとること。もう1つは、テーマを最大2つに絞り、将来を見通し一貫性のある内容で編集するということで賛同を得た。この方針は第9集から現実のものとして生かされていく。

(2) 各集の主な内容

(ア) 『北伊予の伝承』第8集

「ふるさと北伊予のくらし」では、水とくらし、伝統的なくらしが残っていた戦後の「あこのころのくらし」として、装い・食・住まいをまとめた。

「水とくらし」では、中川原・徳川地区の水とくらしは興味深い。

農業とくらしでは米づくりが中心をなす。

また「あこのころのくらし」では、戦後貧しいながらも生きてきた北伊予の人たちのくらしの一端を衣・食・住からまとめた。中でも戦後の粗末な装いでは、衣料切符・カーキ色の国民服やもんぺ、食では、かまど・箱膳やおなぐさみ、住まいでは、かやぶき屋根・建前の行事など当時のくらしを克明に記述している。(平成18年3月発行、編集委員長 水口憲三、館長 吉田健勝、委員数21、B5版27ページ)

(イ) 『北伊予の伝承』第9集

今回は「年中行事」を取り上げ、高度経済成長期までの期間について、聞き取り調査を中心に地域の生の声を掲載している。現在、年中行事も年々簡素化・衰微しているのが実情で、このままでは現状維

北伊予の伝承



北伊予の伝承 第5集

写真2 『北伊予の伝承』第5集

北伊予の伝承

Ⅷ



北伊予の伝承 第8集

写真3 『北伊予の伝承』第8集



写真4 もんぺ姿の女学生

持が困難で、廃れ消失する懸念すらある。



写真5「北伊予の伝承」第9集

この第9集から新たな編集方針のもと本格的に始動した。また元編集委員長中村文雄氏の版画集『年中行事絵図』から転載した作品は、本文を一段と引き立たせ、大きな効果を生んでいる。

正月の行事では、正月の準備・大正月の行事・小正月の行事の項目のもと、しめ飾りや餅つき、若水・屠蘇・雑煮・おたなさん、御祈持・七草・小正月など富沢山の内容である。

春から夏の行事では、春まつり・おなぐさみ・虫祈持・輪廻しなど地区によって違いが見受けられる。

夏の行事では、精進煮・玉蘭盆・大念仏・百人燈など、これまた地区により実施内容の違いが大きい。

さらに秋から冬の行事では、秋祭り・獅子舞と仁輪加・亥の子・など多彩な内容である。(平成20年3月発行、編集委員長 水口憲三、館長 古田健勝、委員数21、B5版 41ページ)

(ウ)『北伊予の伝承』第10集



写真6「北伊予の伝承」第10集

第10集では、「人の一生(人生儀礼)」をテーマに取り上げている。人は出産からお宮参りや七五三、成人式や結婚、そして長寿の年祝いと生まれてから亡くなるまで、さまざまな人生儀礼(儀式・祝い)を経験する。

産育、結婚、厄払い・年祝い、葬祭に分け、聞き取りを中心に生の声を聞き書きし、薄れていく地域文化の記録保存と次代への伝承を願い編集した。

産育では、妊娠と出産前・出産・成長過程の儀礼に分け、結婚では、結婚成立まで・成立後の儀礼・結婚後の嫁と実家との関係。厄年・年祝いでは、厄

落とし・年祝い、葬祭では、仏教の葬儀・神道の儀・年忌供養に分け、貴重な体験や経験をもとにした聞き書きを中心にまとめている。



写真7 家でのお宮参り

中でも、出産での産婆さん、お見合いや家で行った結婚式、厄落とし、葬祭における組内の役割、土葬など、社会構造や人々の意識の変化に伴う北伊予の生活文化をリアルに表現している。

その節目ごとに古来より執り行われてきた儀式だが、時代の移ろいとともに入りの意識や社会構造の変化に伴い簡素化され、次第に忘れられつつある。今こそ記録にとどめ後世に残さねばならない。(平成22年3月発行、編集委員長 水口憲三、館長 義藤英文、委員数18、B5版 51ページ)

(エ)『北伊予の伝承』第11集

第11集は、激動の昭和を生きてきた人々の高度経済成長期以前の「くらしと生活文化」に焦点をあて、これら貴重な古来の生活文化遺産を後世に残していくため、各地区から高齢者のみなさんに集まっていただき、その原風景を座談会を通して聞き書きした。

さらに、北伊予地区の小学(ホノギ)についてまとめた。まず小学の位置を明示し、その小学の起源や由来、伝承などを調査し貴重な資料ができた。

まず「記憶でたどる北伊予のくらし」では、装



写真8「北伊予の伝承」第11集

い・食・住まいの小グループでくらしと生活や文化について座談会を行った。強いては再生した洋服・国民服や標準服・衣料切符やもんぺなど、食では、かまど・箆簀・駄菓子屋・さとうきびなど、住まいでは、田の字型の間取り・わら葺屋根・母屋と便所など古来からの生活が垣間見られ興味が尽きない。



図1 徳丸地区の「ホノ」区域

一方、小字（ホノ）では、全国的に地名調査が行われ、明治15年(1882)の『辰野勘順調』(野政図)に記載されている小字が果に報告されている。

北伊予の小字では、大字の起源・由来・伝承などを記し、慶安元年(1648)の『伊予国知行高郷村数帳』から石高などを記している。

旧町村単位で小字について調べ、図示したのは県内では貴重な資料であると県立図書館からお褒めの言葉をいただいた。なお、北伊予地区内の小字数は、徳丸28、中川原15、出作38、神崎38、鶴吉22、横田7、大津3、永田45、東古泉26ある。(平成24年3月発行、編集委員長 高石勲、館長 得能広明、委員数15、B5版 61ページ)

(オ)『北伊予の伝承』第12集

第12集から従来の体裁よりやや大きいA4版に変更し、文字も大きく読みやすくし、2本立てのテーマで構成する内容とした。

まず、その1つは「通った学校の思い出とくらし」、戦前から現在までの学校の思い出は、戦前のグルー

北伊予の伝承

第12集



北伊予の伝承

写真9 『北伊予の伝承』第12集

プと戦後のグループの2つに分け、その当時の学校の思い出とくらしについて座談会の内容をまとめた。

2つ目は、「北伊予の幹線道路沿いの家並みの移り変わりをテーマに、経済成長期の昭和30年頃か

ら現在までの家並の変化を各地区ごとに聞き書きを中心にまとめたものである。作業を通して現在の北伊予の家並みと人々のくらしぶりが、この60余年の社会の進展に伴う幹線道路の変遷と深い関係があるということが見えてきた。

座談会の戦前のグループでは、「勉強より勤労奉仕作業、食べるものがないから運動場にサツマイモを植えた」、「小学校の正門や講堂が懐かしい」と振り返り、戦後のグループは「戦後の直した学校の様子や中学校の校舎移転」など、くらしに関連した話し合いがなされた。

一方、家並みの変遷では、昭和30年頃と平成25年との違いを地区別に図示した。マイカーの普及や郊外型スーパーの進出で個人商店が減り、住宅化



写真10 北伊予小学校の旧正門



写真11 北伊予小学校の新講堂

が進むなど社会の変化が人々の生活にどのような変化をもたらしたのか。

薄れゆく生活の記憶を記録としてどう後世に伝えるかが我々に大きな課題として託されている。

(平成28年3月発行、編集委員長 高石勉、館長 西坂洋一、委員数14、A4版 68ページ)

(女)『北伊予の伝承』第13集



写真13 『北伊予の伝承』第13集

第13集は、これまで何回となく取り上げてきた戦争がテーマ。

戦後70年という節目の年を契機に、戦争がもたらした苦しい体験や悲惨な記憶を風化させることなく後世に伝えねばという思いで1つのテーマに戦争を取り

上げ、「戦後70年北伊予のくらしを辿る」として座談会を開催した。

また古くから先人から受け継がれ、今なお北伊予各地で行なわれている新春の行事「御祈禱」(組祈禱)をもう1つのテーマとしてまとめたものである。

まず、座談会では、サブタイトルを「明日への希望を抱いた昭和20年代」とし、戦時中・戦後間もないころ・昭和20年代後半のくらしをテーマとし話し合いを行った。出席者は戦争体験者、遺族、引揚者、疎開定住者、農労・学徒動員経験者、農家や井農家など17名のみなさん。中でも中国大陸で戦争の体験者や引揚者の筆舌に言い表せない想像を絶する体験談、ほとんど授業を受けることなく軍需工場へ学徒動員され青春を捧げた悔しい体験談、地元の国賊(現)北伊予駅の爆撃など、直接体験・経験した生死をかけた内容ばかり。

また、結中安全・家内安全・無病息災を祈願する新春の行事「御祈禱」をもう1つのテーマとした。

北伊予8地区(永田は実施せず)それぞれの地区別や実施内容を記載した「入用記(組)」などの資料や古老からの聞き取りも入れまとめたものである。

とくに注目される「祈禱帳」「入用記」として、中川原地区の嘉永6年(1853)「組祈禱帳」と大溝地区の安政5年(1858)「年始祈禱入用記」があり、御祈禱の起源や参加者・祈の内容・当時の買物の相場



写真13 左「組祈禱帳」(中川原地区)、右「年始祈禱入用記」(大溝地区)

などを知る貴重な資料である。さらに驚くのは、大溝地区の「組入用記」は、安政5年から現在に至るまで160年間延々と記録されている。

(平成28年3

月発行、編集委員長 高石勉、館長 門田博、委員数12、A4版 68ページ)

(キ)最後の『北伊予の伝承』第14集



写真14 神輿巡行とお供米(神輿)



写真15 2頭立ての獅子舞

第13集の「戦後70年北伊予のくらしを辿る」に引き続き、その2として「昭和30年

代から平成初期までの北くらし」の座談会を開催した。

また、四季折々彩る北伊予の祭り・まつりを各地区ごとに春の子ども相撲、夏の輪談、秋の神

4 記憶を言葉に

先人たちが語り継ぎ、残してくれた北伊予地区の生活文化遺産を後世に伝える『北伊予の伝承』が、



写真16「北伊予の伝承」第14集

30年もの間、小さな公民館が現在まで継続し発行してきたことは稀有なことであり驚きである。

先の時代を生き抜いて来られた方々は、今や高齢になり聞き取りは時間との闘いである。貴重な体験や慣習・伝承を今こそ記録に残さねば水

泡に帰し後継の憂いを残す。

今や消えようとしている言葉では伝えられないものの“記憶”を“記録”という“形”にする。それを私たち編集委員は『北伊予の伝承』という形で残してきた。聴き伝えより正確に形は心に残り、言葉よりもしっかりと脳裏に刻まれ、正確に後世に受け継がれると信ずるからである。

これら長年の活動は、偏に町当局の長年にわたる温かいご理解ご支援と地域住民のみなさまの後押し、編集委員の熱い郷土愛に支えられた賜物である。

「聞き書き」を主体とした手法は、最近よく見受けられるが、私たちの長年にわたる地域に密着した地道な活動は、他にあまり類を見ない生活文化の継承だと自負している。

発行された冊子は毎回北伊予地区全世帯に配布し地区のみなさまに郷土理解の冊子として愛読されてきた。また学校では地域理解の郷土学習の教材として活用されている。

今回の第14集をもって冊子としての『北伊予の伝承』は終刊するが、今後は映像（静止画像のパワーポイントや動画のDVD）を中心に、従来まとめた伝承の中から映像化可能なテーマを見出し、新たな資料づくりを地域を愛する有志のみなさんと新たにスタートさせたいと考慮中である。

終わりに際し、改めて町当局や町民のみなさまの長年にわたるご協力・ご支援に感謝いたします。

(前編集委員長 高石 勲)

(敬称略)

	第1集編集委員 (昭和63年～)		第2集編集委員 (平成6年4月～ 平成7年3月)		第3集編集委員 (平成7年4月～ 平成9年3月)		第4集編集委員 (平成9年4月～ 平成11年3月)		第5集編集委員 (平成11年4月～ 平成13年3月)	
	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所
1	仙波 文治	徳丸	○仙波 文治	徳丸	○田中 義和	徳丸	田中 義和	徳丸	田中 義和	徳丸
2	弓立 忠良	徳丸	仙波 貢	徳丸	後藤 正宜	徳丸	関谷 茂夫	徳丸	八束 兼福	徳丸
3	門屋 利則	徳丸	後藤 正宜	徳丸	加納 信光	中川原	木下 貴	徳丸	山本 庫市	中川原
4	本田 吉幸	徳丸	田中 義和	徳丸	山本 庫市	中川原	八束 兼福	徳丸	本多 俊夫	中川原
5	山本 庫市	中川原	加納 信光	中川原	○西村 博明	出 作	○山本 庫市	中川原	本田 一馬	中川原
6	加藤 善一	中川原	本田 力	中川原	高市 慶久	出 作	本田 智	中川原	○神野 弘良	出 作
7	加藤富貴雄	中川原	高市 慶久	出 作	河野 好雄	神 崎	本多 俊夫	中川原	西村 博明	出 作
8	山本 磯秀	中川原	西村 博明	出 作	野本 勉	神 崎	西村 博明	出 作	水口 義一	神 崎
9	井上八十一	出 作	弓達 茂夫	出 作	山口 稲男	神 崎	高市 慶久	出 作	河野 好雄	神 崎
10	西村 栄	出 作	○野本 勉	神 崎	◎済川 裕	鶴 吉	水口 義一	神 崎	山口 稲男	神 崎
11	広田恒三郎	出 作	河野 好雄	神 崎	松田 茂	鶴 吉	河野 好雄	神 崎	○相原 隆志	鶴 吉
12	神野 悦男	出 作	山口 稲男	神 崎	相原 隆志	鶴 吉	山口 稲男	神 崎	松田 茂	鶴 吉
13	徳永 秀夫	神 崎	○相原 隆志	鶴 吉	篠崎 繁一	横 田	○相原 隆志	鶴 吉	済川 裕	鶴 吉
14	水口 豊	神 崎	久津那安男	鶴 吉	金子 欣市	横 田	松田 茂	鶴 吉	日野 佳孝	横 田
15	小笠原 覚	神 崎	済川 裕	鶴 吉	山崎 健三	横 田	常盤 卓雄	鶴 吉	○田中 義一	大 溝
16	水口 誓雄	神 崎	篠崎 繁一	横 田	栗原 進	大 溝	山崎 健三	横 田	◎中村 文雄	永 田
17	久津那安男	鶴 吉	日野 佳孝	横 田	○中村 文雄	永 田	金子 欣市	横 田	中村 忠夫	永 田
18	町田司雨三	鶴 吉	栗原 忠明	大 溝	澤田 明利	永 田	高市 喜慶	大 溝	澤田 正輝	永 田
19	村上 元良	鶴 吉	高市 喜慶	大 溝	中村 忠夫	永 田	栗原 弘	大 溝	竹田 秀明	東古泉
20	松田 茂	鶴 吉	○中村 文雄	永 田	稲垣 孝明	東古泉	田中 義一	大 溝	稲垣 光夫	東古泉
21	松田 勝	横 田	澤田 明利	永 田	竹田 秀明	東古泉	◎中村 文雄	永 田		
22	篠崎 清	横 田	稲垣 孝明	東古泉	稲垣 光夫	東古泉	澤田 正輝	永 田		
23	橋本 彰	大 溝	早瀬 秋利	東古泉			中村 忠夫	永 田		
24	向井 光夫	大 溝	三好 節夫	東古泉			○稲垣 光夫	東古泉		
25	栗原 芳樹	大 溝					稲垣 孝明	東古泉		
26	福島 莊司	永 田					竹田 秀明	東古泉		
27	渡部 善弘	永 田								
28	三好 春夫	東古泉								
29	萩野 彦一	東古泉								
30	豊田 忠義	東古泉								

歴代の編集委員

第1集から5集
の編集委員の
みなさん

『北伊予の伝承』 歴代編集委員(2)

◎ 委員長 ○ 副委員長

(敬称略)

	第6集編集委員 (平成13年4月～ 平成15年3月)		第7集編集委員 (平成15年4月～ 平成17年3月)		第8集編集委員 (平成17年4月～ 平成19年3月)		第9集編集委員 (平成19年4月～ 平成21年3月)		第10集編集委員 (平成21年4月～ 平成23年3月)	
	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所
1	田中 義和	徳 丸	田中 孝	徳 丸	田中 孝	徳 丸	田中 孝	徳 丸	仙波 康宏	徳 丸
2	○本多 俊夫	中川原	渡部喜代隆	徳 丸	渡部喜代隆	徳 丸	渡部喜代隆	徳 丸	八束 和秀	徳 丸
3	山本 庫市	中川原	永井 嘉郎	徳 丸	山本 庫市	中川原	加藤 招賞	中川原	大政 邦夫	中川原
4	加藤 修	中川原	伊藤 靖高	徳 丸	本田 眞一	中川原	本田 眞一	中川原	本田 昭一	中川原
5	○神野 弘良	出 作	本多 俊夫	中川原	◎水口 憲三	出 作	◎水口 憲三	出 作	◎水口 憲三	出 作
6	神野 昌孝	出 作	山本 庫市	中川原	○神野 弘良	出 作	○小松 ヒトミ	出 作	○小松 ヒトミ	出 作
7	西村 博明	出 作	加藤 修	中川原	○高石 勤	神 崎	○高石 勤	神 崎	○高石 勤	神 崎
8	水口 義一	神 崎	◎水口 憲三	出 作	山口 稲男	神 崎	野本 和伯	神 崎	○野本 和伯	神 崎
9	河野 好雄	神 崎	○神野 弘良	出 作	野本 和伯	神 崎	鎌倉 啓典	神 崎	鎌倉 啓典	神 崎
10	山口 稲男	神 崎	○山口 稲男	神 崎	○相原 隆志	鶴 吉	○相原 隆志	鶴 吉	○大政 邦和	鶴 吉
11	友澤 篤子	神 崎	河野 好雄	神 崎	濟川 裕	鶴 吉	濟川 裕	鶴 吉	濟川 裕	鶴 吉
12	○相原 隆志	鶴 吉	野本 和伯	神 崎	伊賀上洋子	鶴 吉	大政 邦和	鶴 吉	加野 清一	横 田
13	松田 茂	鶴 吉	友澤 篤子	神 崎	大政 邦和	鶴 吉	松田 雅子	鶴 吉	岩崎 利雄	横 田
14	濟川 裕	鶴 吉	○相原 隆志	鶴 吉	日野 勇	横 田	金子 忠行	横 田	田中 安男	大 溝
15	伊賀上洋子	鶴 吉	松田 茂	鶴 吉	○田中 義一	大 溝	日野 勇	横 田	淺井 勝彦	永 田
16	徳本 忠司	横 田	濟川 裕	鶴 吉	升田 守	大 溝	岩崎 利雄	横 田	藤野 玉男	永 田
17	松田 一正	横 田	伊賀上洋子	鶴 吉	二宮 静喜	永 田	二宮 静喜	永 田	萩野 正三	東古泉
18	◎田中 義一	大 溝	日野 勇	横 田	夏井 武	永 田	渡部 朝明	永 田	稲垣 昂規	東古泉
19	○中村 文雄	永 田	松田 敏明	横 田	渡部 朝明	永 田	藤野 玉男	永 田		
20	澤田 正輝	永 田	○田中 義一	大 溝	三好 健二	東古泉	○三好 安明	東古泉		
21	早瀬 辰郎	東古泉	升田 守	大 溝	三好 安明	東古泉	三好 健二	東古泉		
22	早瀬 義明	東古泉	中村 晋	永 田						
23			渡部 朝明	永 田						
24			夏井 武	永 田						
25			早瀬 辰郎	東古泉						
26			早瀬 義明	東古泉						

第6集から10集
の編集委員の
みなさん

第11集から14集の 編集委員の みなさん

編集委員数は延べ 284名

多くのみなさんが 携わって頂きました。

	第11集編集委員 (平成23年4月～ 平成25年3月)		第12集編集委員 (平成25年4月～ 平成27年3月)		第13集編集委員 (平成27年4月～ 平成29年3月)		第14集編集委員 (平成29年4月～ 平成31年3月)	
	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所
1	木下 春雄	徳 丸	○仙波 康宏	徳 丸	○仙波 康宏	徳 丸	後藤 正宜	徳 丸
2	田中 祥景	徳 丸	藤田 常和	中川原	伊藤 芳幸	徳 丸	本田 和男	徳 丸
3	藤田 常和	中川原	大政 博	中川原	○小松 ヒトミ	出 作	弓達 武範	中川原
4	大政 博	中川原	○小松 ヒトミ	出 作	◎高石 勤	神 崎	加藤 朝春	中川原
5	○水口 憲三	出 作	神野 尊久	出 作	深沼 静良	神 崎	○小松 ヒトミ	出 作
6	○小松 ヒトミ	出 作	◎高石 勤	神 崎	済川 誠	鶴 吉	◎高石 勤	神 崎
7	◎高石 勤	神 崎	池内 和男	神 崎	久津那 博	鶴 吉	○深沼 静良	神 崎
8	池内 和男	神 崎	○大政 邦和	鶴 吉	松田 康徳	横 田	○済川 誠	鶴 吉
9	相原 隆志	鶴 吉	野垣 芳一	横 田	○田中 安男	大 溝	篠崎 厚夫	横 田
10	○大政 邦和	鶴 吉	○田中 安男	大 溝	○澤田 忠夫	永 田	○田中 安男	大 溝
11	徳本 直之	横 田	澤田 忠夫	永 田	早瀬 明	東古泉	福島 正志	永 田
12	○田中 安男	大 溝	水口 勉	永 田	竹田 頼夫	東古泉	水口 勉	永 田
13	浅井 勝彦	永 田	稲垣 昂規	東古泉			三好 常夫	東古泉
14	稲垣 昂規	東古泉	早瀬 明	東古泉				
15	萩野 一二	東古泉						
16								
17								
18								
19								
20								
21								
22								
23								
24								
25								
26								

2018年(平成30年)2月1日

木曜日

愛媛

愛媛

愛媛

愛媛

愛媛

ワイドえひめ

WIDE EHIME

松前町北伊予地域の暮らしや風習などを住民がまとめ、郷土教育にも使われた「北伊予の伝承」が、3月発行の第14集で30年の歴史に終止符を打つ。公民館の事業として続いてきたが、編集に携わる人の確保が難航。話を聞かせてもらう住民も高齢化で対象者が少なくなっていた。

地域の風習まとめ30年



「北伊予の伝承」に幕

「北伊予の伝承」は1988年発行。当初は町誌などを基に編集していたが、第8集(2006年)からは方針を改め「記憶を記録に残す」とし、住民に話を聞く「聞き書

き」にした。第11集(12年)以降は、住民がかつての生活などを話し合う座談会と、北伊予9地区の年中行事にテーマを分け取材を重ねた。冊子は地元の小中学校

で郷土教育などにも使われ、住民に親しまれてきた。しかし、研究テーマはほぼ網羅した上、住民などでつくる編集委員は、ピーク時26人いたが第14集は13人。1920

郷土教育にも使用 今後は映像で記録へ

第8集から制作に携わる同町神崎の高石勲編集委員長(78)は「子どもたちには地域の先人の体験や慣習を伝えたい」と続けてきたが、30年間も発行できてよかった。熱心な後押しをくれた住民や委員にも感謝している。今後は映像などで記録を続けていきたいとしている。

(宇都宮理恵)

「北伊予の伝承」第14集の原本を手に、これまでの冊子を見る高石編集委員長

「30年代生まれの聞き書きの対象者も減っていた。第14集はA4判、68ページで2700部発行。座談会では50年代以降の牛耕や農業など日常の暮らしを取り上げ、9地区の行事では秋祭りや獅子舞など季節の祭礼に焦点を当てた。3月末以降に北伊予地区全世帯と公民施設などに配る予定だ。

平成30年2月1日付
「愛媛新聞」記事

平成30年3月6日付 「読売新聞」記事



高石勤さん
Takaishi Tautomu

松前の
魅力 伝え隊

近所の
まさき人



このコーナーは、広報担当者はなく町民の皆さんがカメラを持って、松前町の魅力を取材します。取材してくる人を募集中です。詳しくは、総務課広報情報係 ☎985-4132 に連絡を。





北伊予の
水

北伊予地区には、30年前から続く「北伊予の伝承」という冊子が現在に至っています。その内容は北伊予の暮らしや風習、生活文化の記録など、時代の経過とともに失われつつある行事や伝承を「記憶を記録」にの編集方針のもと、後世に伝えようとする意図が、地域の要望で7年後第2巻を、その翌年には第3巻を出し、これ以降は隔年となり現在、第14集を発行する運びとなりました。また、第11集（平成24年刊）からは、テーマを北伊予地区全体に関する部族と各地域に関する2本立てとし、各地域でこのたび、読者間で第14集をもつて発行となりました。新刊に画像を中心に記録を進めていきます。今までの冊子は、ふるさとライブラリーや役場で見ることができ、ぜひ読んで北伊予の魅力を再発見してください。

編集作業の様子 編集作業に参加した委員の皆さん 北伊予の伝承第1集表紙

（第3種郵便物認可）

読売新聞 平成30年3月6日



生活文化の記録活動を担う高石さん（松前町で）

行事や伝承 住民ら研究

松前町北伊予地区に伝わる生活文化の記録集「北伊予の伝承」が、3月発行の第14集で最後となる。住民らが30年にわたり、時代の経過とともに失われつつある行事や伝承を調べ、後世に伝えようとする冊子にまとめた。一通りのテーマをやり終えたことに加え、地区をよく知る古老が少なくなくなり、「記憶を記録」という編集方針を続けるのが難しくなったという。（石原敦之）

北伊予記録集 30年で幕

地区は約7500人が暮らす松前町東部の旧北伊予村で、山平野の肥沃な土地を利用した農業が盛んだ。記録集は町東公民館の事業として1988年に創刊された。各集落から推薦された毎回1030人の編集委員が集まり、「地名の由来や伝承」「ゆかりのある人物」「人生儀礼」「職争い」といったテーマを決めた。資料を集め、住民らに聞き取りをし、執筆や校正の作業も手がけた。第1集の後、委員の高齢化などで一度は立ち消えになったが、住民の要望もあり、7年後に第2集を出した。その後は隔年のペースで発行する。他の地区でも同様の記録集が発行されたが、現在も続けるのは北伊予地区だけという。最後となる第14集は、前号に続いて座談会「戦後70年 北伊予」

松前 古老減 編集続行難しく

「北伊予の伝承」第14集の編集委員長を務めた松前町神崎、高石勤さん（78）は、県立高校で地理を教える退職後に第8集から編集に加わった。地名の由来をまとめた第11集では、集落の古老と田のあぜ道や川沿いを歩き、区割りを示す地図を製作した。地図は拡大コピーして集会所に掲示され、多くの住民に「ええもを作ってくれた」と感謝された。第13集の「御折衝」の調査では、神事の出費を記す台帳が古

予のくらしをなす」を中心に、一方、大正や昭和初期を知る住民が次々と亡くなり、編集に携わる希望者が少ないことも背景にあるという。編集委員らは今後、これまで蓄積した記録の活用を重点に移す。冊子の情報に新たな画像や音声を加え、インターネットで発信することなどを検討する。

「調査 驚きの連続」

「北伊予の伝承」第14集の編集委員長を務めた松前町神崎、高石勤さん（78）は、県立高校で地理を教える退職後に第8集から編集に加わった。地名の由来をまとめた第11集では、集落の古老と田のあぜ道や川沿いを歩き、区割りを示す地図を製作した。地図は拡大コピーして集会所に掲示され、多くの住民に「ええもを作ってくれた」と感謝された。第13集の「御折衝」の調査では、神事の出費を記す台帳が古

広報「まさき」3月号記事

『北伊予の伝承 第14集』編集委員

委員長	神崎	高石	勲
副委員長	出作	小松	ヒトミ
副委員長	神崎	深沼	静良
副委員長	鶴古	浅川	城
副委員長	大溝	田中	安男
委員	徳丸	佐藤	正宣
委員	徳丸	本田	和男
委員	中川原	弓達	武範
委員	中川原	加藤	朝香
委員	横田	福崎	厚夫
委員	永田	福島	正志
委員	永田	水口	勉
委員	東古泉	三好	常夫
(事務局)	東公民館長	北野	美由季
主事	大西	淳博	



第14集（最終集）
編集委員のみなさん
（13名）

終りに

小さな公民館が地域のみなさんの力を結集し、このような形で30年という長きにわたり『北伊予の伝承』を発刊続けられたことに、改めて松前町をはじめ関係者のみなさまに敬意を表したい。

内容は稚拙でも、地域のみなさんの貴重な「生の声」を聞き書きし、冊子という形で残し、後世に伝承されることを誇りに思う。

戦後70年を経た現在、太平洋戦争当事者は鬼籍に入られるなど今やその体験はほとんど聞けなくなった。また、明日も知れぬ戦中・戦後未曾有の混乱期の生活を語れる「生き証人」も数少なくなっている。

時代は急速に進み記憶は薄らぐ。
今こそ「記憶を記録に」残さねばならない。薄れゆく
記憶を形にして後世に残さねば後顧の憂いを残す。記
録として残すことは今 生きている者の責務である。

今回で『北伊予の伝承』は幕となるが、今後映像とい
う記憶媒体で記憶に留める活動を計画している。

惜しみなく全面的なご協力を頂いた編集関係者はもとより、北伊予地区住民のみなさまに衷心より感謝し、お礼を述べたい。

『北伊予の伝承』で
改めて古里のよさ・すばらしさを再発見し「北伊予に生まれよかった。暮らせてよかった」と、より一層思いを深くし、子や孫に伝えていただければ望外の幸せである。
(編集子)



北伊予の生活文化

『北伊予の伝承』
30年の軌跡

終